

K y u s h u

I n s t i t u t e o f

T e c h n o l o g y

平成22年度

現状と課題

九州工業大学大学院工学研究院・工学府・工学部自己点検・評価報告書

九州工業大学大学院工学研究院部局評価委員会

目 次

1	はじめに	1
2	工学部・工学府・工学研究科の教育	
2. 1	2010年度卒業生アンケート（工学部）	2
2. 2	2010年度修了生アンケート（工学府・工学研究科）	38
2. 3	教育達成度評価アンケート：雇用主（2008年3月以前卒業生）	64
2. 4	教育達成度評価アンケート：雇用主（2008年3月以前修了生）	71
2. 5	教育達成度評価アンケート：卒業生（2008年3月以前卒業生）	77
2. 6	教育達成度評価アンケート：修了生（2008年3月以前修了生）	84
3	大学院工学研究院・工学府・工学部の管理運営	
3. 1	大学院工学研究院・工学府・工学部の組織図	91
3. 2	各種委員会活動の点検・評価	92
3. 2. 1	大学院工学研究院部局評価委員会	92
3. 2. 2	工学部教務委員会	93
3. 2. 3	工学部学生委員会	97
3. 2. 4	工学部入学試験委員会	99
3. 2. 5	大学院工学府・工学部教育方法等開発委員会	103
3. 2. 6	大学院工学府・工学部安全環境委員会	106
3. 2. 7	大学院工学研究院情報化推進委員会	107
3. 2. 8	大学院工学府広報委員会	111
3. 2. 9	工学部広報委員会	112
3. 2. 10	大学院工学府学務委員会	114
3. 2. 11	大学院工学府入学試験委員会	118
3. 3	教員組織	120
3. 3. 1	教員の配置	120
3. 4	事務組織	122
4	大学院工学研究院・工学府・工学部の財政	
4. 1	運営費交付金配分状況	123
4. 2	科学研究費補助金の採択状況	125
4. 3	外部資金導入状況	126
4. 3. 1	寄附金（奨学寄附金）	126

4. 3. 2	民間等との共同研究	126
4. 3. 3	受託研究	127
4. 3. 4	寄附講座	127
4. 3. 5	寄附金の利息	128
5	大学院工学研究院・工学府・工学部と社会とのつながり	
5. 1	地域貢献活動	129
5. 1. 1	大学公開	129
5. 1. 2	公開講座等	130
5. 1. 3	北九州市民カレッジへの協力	133
5. 1. 4	出前講義	134
5. 1. 5	情報公開	139
5. 2	学生の国際交流	140
5. 2. 1	外国人留学生（国籍別・課程別・費用別）在籍状況一覧表	141
5. 2. 2	外国人留学生（学科別・専攻別）在学状況一覧	141
5. 2. 3	学生の海外派遣	142
6	おわりに	143

1. はじめに

このたび、平成22年度版九州工業大学大学院工学研究院・工学府・工学部自己点検・評価報告書「現状と課題」を発刊する運びとなりました。「現状と課題」は大学が法人化される前から、継続的に発行されてきており、そこに記載されている、各種アンケートの分析結果、各種委員会の活動報告、管理運営に関する情報は、時間割、学生便覧、シラバスとともに、工学研究院・工学府・工学部の活動を評価する貴重な資料となっています。

工学部・工学研究科は平成20年度に工学研究院・工学府・工学部に改組されましたが、現状と評価結果を記録することは組織の改善を継続的に行ってゆく上で重要なことであり、今後も引き続き発行を続けてゆく予定です。最近の「現状と課題」の評価の主体は教育システムの評価に関するもので、修了・卒業を控えた学生、修了・卒業した学生、修了生・卒業生を受け入れた企業に対するアンケートを実施し、これらの分析を行っています。このように多くのアンケートがあり、多くの方々に負担をお願いしていますが、教育システムの改善への必要性をご理解頂き、ご協力頂いた各位には深く感謝します。

教育システムを改善するためには、分析をした結果を各種委員会や教員にフィードバックし、具体的なアクションに結びつける、改善のループを回すことが重要です。「現状と課題」を発行し、これを改善ループの回転に役立てることが、アンケートにご協力頂いた皆様への期待に応えることと思い努力をしてゆきます。

本冊子は6章から構成されています。

第2章「工学部・工学研究科の教育」では、平成23年1月に実施した卒業生・修了生に対するアンケート、同6月に実施した卒業生・修了生を採用頂いた企業に対するアンケート、そして、平成20年3月以前に卒業・修了した本学同窓生に対するアンケートの結果について、過去4年間のデータと比較し述べています。卒業・修了後3年を経過した本学同窓生を対象としたアンケート、企業に対するアンケートは必ずしも十分とは言えないかもしれませんが、法人評価の観点からは貴重な情報と考えています。全体としては、大きな変化は現れていませんが、教育システムは大きな慣性をもっており、急に悪くもならない代わりに、急に改善することもできませんので、小さな変化をみのがさず常に改善の努力を継続することが重要と考えています。

第3章「大学院工学研究院・工学府・工学部の管理運営」では、平成21年度の大学院工学研究院・工学府・工学部組織および各種委員会の活動等について記載しています。

第4章「大学院工学研究院・工学府・工学部の財政」では、外部資金の獲得状況、民間との共同研究等について記載しています。

第5章「大学院工学研究院・工学府・工学部と社会のつながり」では、公開講座、出前講義、国際交流等について記載しています。

第3章から第5章に記載されているデータは、工学研究院・工学府・工学部の活動をよくまとめており、組織の活動を知る上で重要な資料と考えています。

平成18年度版より、閲覧の利便性などを考慮して本報告書を工学部のホームページに掲載しております。これにより、学内外に九州工業大学大学院工学研究院・工学府・工学部の内容を公表し、社会に開かれた大学としての役割を果たしたいと考えています。

最後となりますが、平成22年度版「現状と課題」は多くの教育職員および事務職員の皆さまの協力により纏められました。この「現状と課題」が当部局の現状の達成状況を見つめ、更なる改善への糧となることを願っております。

平成24年2月吉日

桑原 伸夫（大学院工学研究院部局評価委員会委員長）

2 工学部・工学府・工学研究科の教育

2. 1 2010年度卒業生アンケート（工学部）

※アンケート実施年月日 平成23年 1月27日

※アンケート回収率

学年	配付枚数	回収枚数（回答率）
4年生（卒業予定者）	573枚	465枚（81.1%）

[1]所属する学科・コース名を書いて下さい。

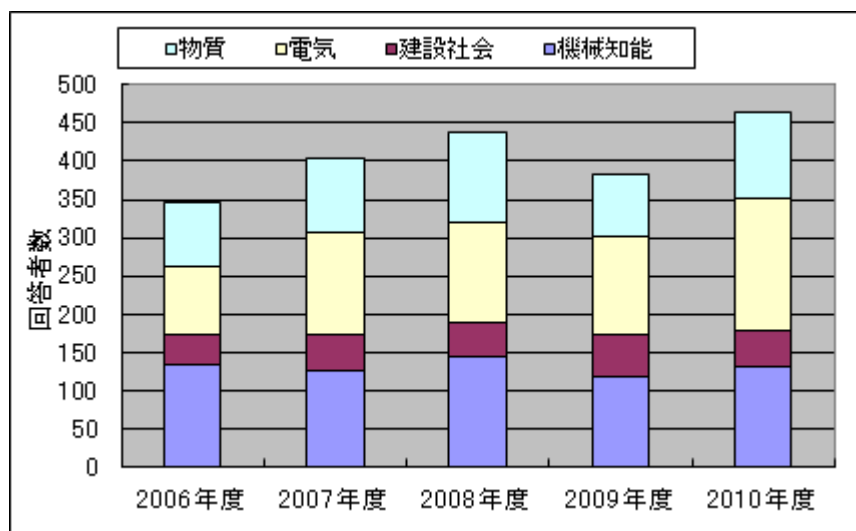
機械知能工学科（132名）

建設社会工学科（46名）

電気工学科（173名）

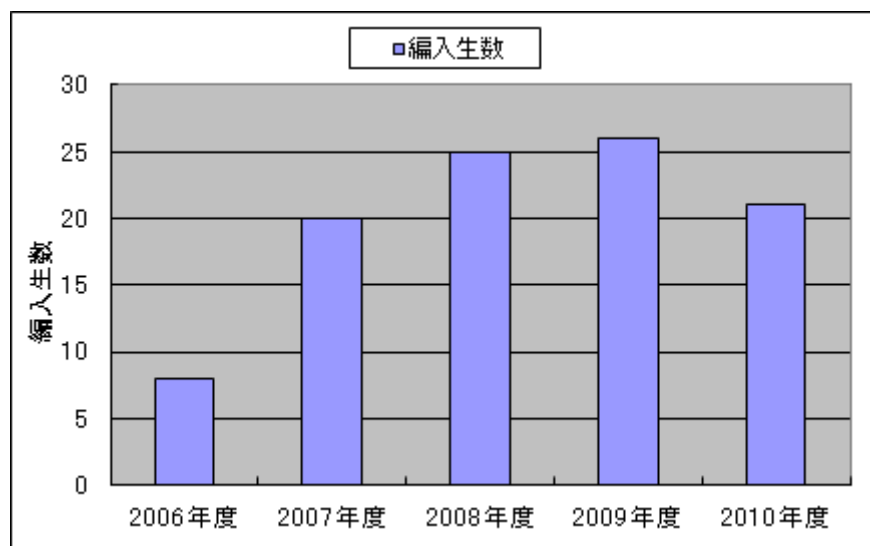
物質工学科（114名）

昨年と比較して、回答者数が全体的に増加した。この水準を維持できれば良いと考えられる。



[1-1] 3年次編入の人は [] に○を入れて下さい。 [21名]

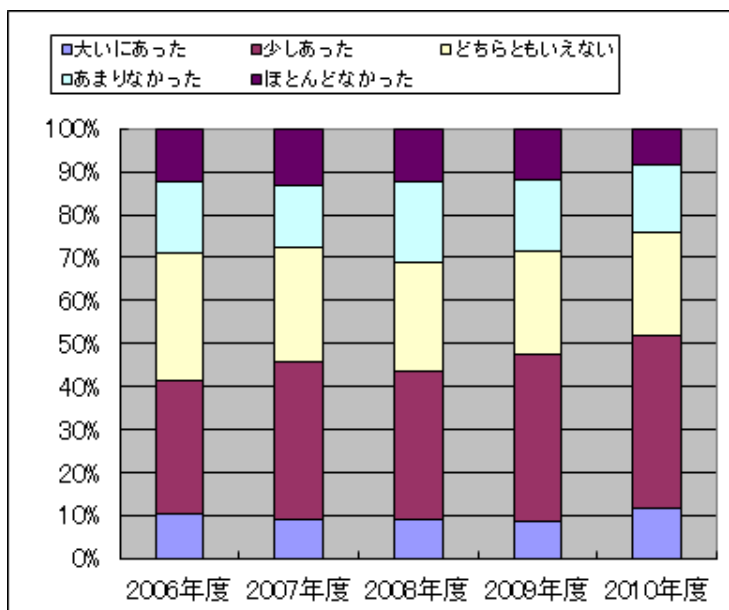
近年は、ほとんどの学生が回答している。今後もこの水準を維持できればよいと考えられる。



[2]大学教育があなたの成長（自己形成）に及ぼした効果についてお尋ねします。

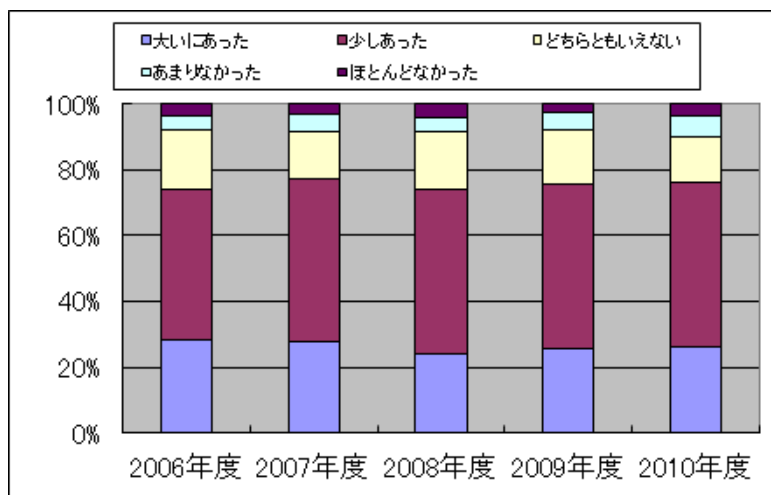
[2-1]人間科学科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。（法学、経済学、社会学、哲学、倫理学、歴史学、語学、保健体育学、文学、教育学等）

効果があった（大いにあった＋少しあった）と回答した割合が増加し 50%を超えている。このことより、人間科学科目において、持続的な教育改善が行われているものと判断される。



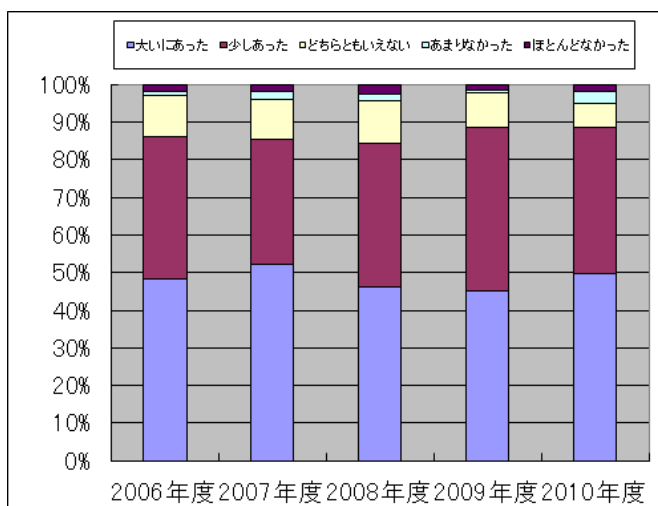
[2-2]工学基礎科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。（数学、物理学、化学、情報関連基礎科目）

効果がなかった（ほとんどなかった＋あまりなかった）と回答した割合が 10%以下に維持されている。一方、効果があった（大いにあった＋少しあった）と回答した割合は 75%以上と高い水準を維持している。これらのことより、工学基礎科目において、質のよい教育が維持されているものと判断される。



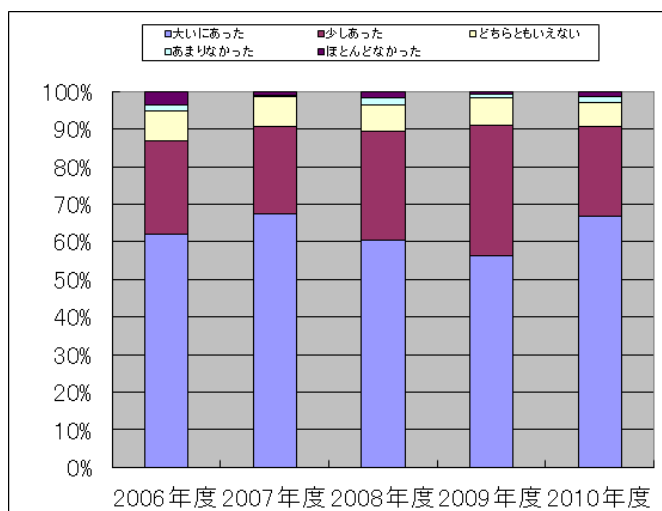
[2-3]工学専門科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。

昨年度ならびに本年度において効果があった（大いにあった＋少しあった）と回答した学生の割合は、90%近くに達している。このことより、工学専門科目教育が学生の自己形成に大いに役立っているものと判断される。



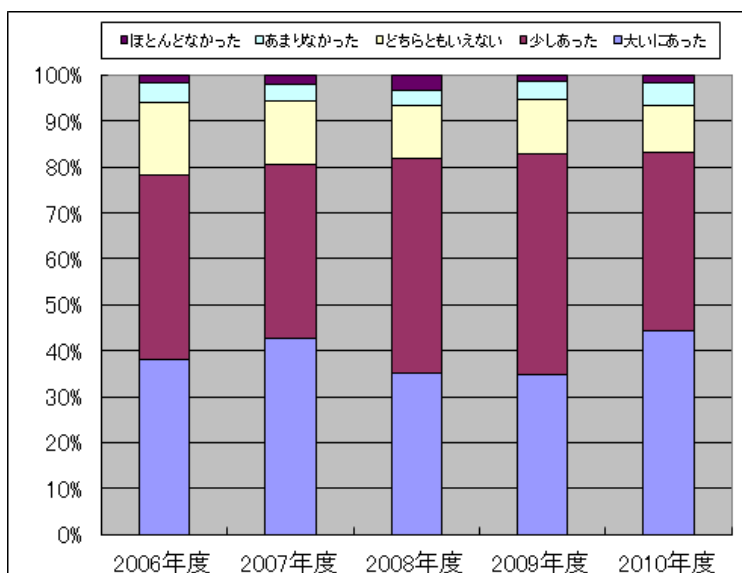
[2-4]卒業研究はあなたの自己形成に効果がありましたか。

昨年度ならびに本年度において、効果があった（大いにあった＋少しあった）と回答した学生の割合は90%を越えており、非常に高い水準が維持されている。このことより、卒業研究が学生の自己形成に大いに役立っているものと判断される。



[2-5]実験・実習・演習・製図はあなたの自己形成に効果がありましたか。

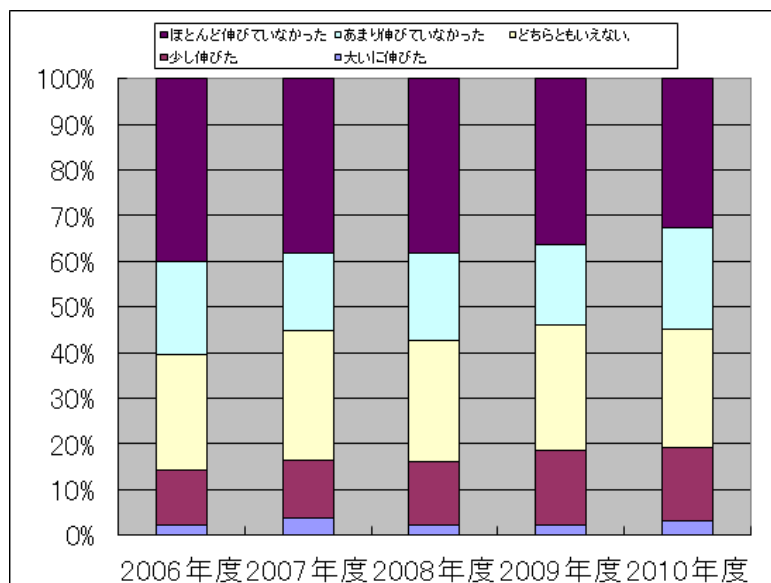
効果があった（大いにあった＋少しあった）と回答した学生の割合が毎年度増加し、かつ、非常に高い水準に維持されている。今後もこの水準を維持できればよいと考えられる。



[3]英語力についてお尋ねします。

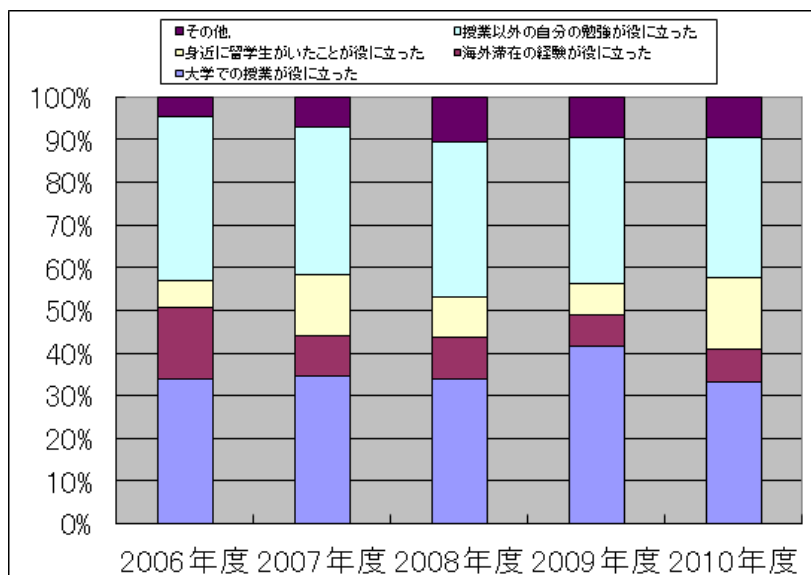
[3-1]大学の4年間であなたの英語力は伸びましたか。

英語力が伸びた（大いに伸びた＋少し伸びた）と回答している学生が年々増加し、伸びていないと回答する学生の割合は減少している。以上のことから、英語教育に関して持続的な教育改善が行われているものと考えられる。しかし、伸びていないと回答する学生の割合が依然かなり高い状況であり、今後、英語教育環境のさらなる改善が望まれる。



[3-2][3-1]でA（大いに伸びた）またはB（少し伸びた）と答えた方：その理由は何ですか。（複数回答可）

英語力が伸びた理由についての回答では、毎年度、大学での授業が役に立った割合と授業以外の自分の勉強が役に立った割合を加えた割合が約70%である。大学での授業が役に立ったと回答する学生の割合は横ばいであり、英語教育に関する改善を検討する必要があるものと考えられる。しかし、英語力を伸ばすには、授業だけでなく、自習をもっと促す必要もあると考えられる。



E（その他） [具体的に：

- ・ 能力の維持には役立った。
- ・ 学生フォーミュラが自分を育ててくれました
- ・ 外国人と英語で話す機会があった。

- ・ 研究室でのゼミ
- ・ 趣味と英語を関連付けることで、自ら積極的に取り組むことができた。
- ・ 外人と接する機会が多かった。
- ・ 村田先生の授業で、とても刺激され英語への勉強意欲がかなり増した。
- ・ 卒業論文
- ・ 卒業研究のために英文のレポートを読んだことで…
- ・ Cと関連するが国際交流サークルで留学生と家族のような関係になれたこと！
- ・ 留学を行ったから
- ・ 教職に必要そうだったから。
- ・ 研究室が英語に力を入れていた。

[3-3][3-1]でD（あまり伸びていない）またはE（ほとんど伸びていない）と答えた方：その理由は何ですか。

英語力が伸びていない理由として、高校までのように英語に関する授業時間数が多くないことや、自習意欲の低下、低学年でしか英語科目がないことを理由として挙げる学生が多い。附属図書館にて所蔵する英語教育教材の周知の徹底や、3年次以上での英語科目の配置や英語自習意欲の向上法などの検討が必要と考えられる。

- ・ 英語に触れる機会がなかった
- ・ 勉強量が少なかった。
- ・ 必須の授業が1年の頃しかなかったため
- ・ 英語を使う機会が少なかったから、TOEICの勉強くらい
- ・ 二年次以降は英語に関する科目が少ない。
- ・ 1年生のみ必修として取りあつかわれているため。また、内容が基本的なことしかやっていないため。
- ・ 学校で英語に触れる機会が少ない
- ・ 英語を勉強する環境が少ない。
- ・ 英語の講義が1年間しかなく、その後も、やることがほとんどないため。
- ・ 個人で勉強していなかった。
- ・ 英語に関わる機会がなかった
- ・ 授業を覚えていない
- ・ 英語の勉強をしなかったから
- ・ 授業数が少ないのと、英語に接する機会が少なかったから。
- ・ 英語にほとんど触れてないから。
- ・ 英語を実際に使用する機会がない。
- ・ 中学・高校時代より英語を学ぶ時間がなかったから。
- ・ まず、英語を勉強する時間が無く、その結果、TOEICの点数も伸びなかった。
- ・ 英語にふれる機会が少なくなったと思うから。
- ・ 興味がないから
- ・ あまり詳しくなかった。
- ・ 大学の授業での英語は高校で勉強したものを思い出す程度だったから。
- ・ 英語の授業をとっていないため
- ・ 英語を学ぶ機会が少ない
- ・ 英語の単位が簡単にとれる為
- ・ 自発的に英語をすることがあまりなかった。
- ・ 英語に触れる機会がほとんどなかったため
- ・ 英語に触れる時間の減少から。
- ・ 英語力が上がるような授業がなかった
- ・ 大学受験時がピークだった
- ・ もとから英語が苦手なため

- ・ 英語にふれなかった
- ・ 実際に使う機会がない
- ・ 3、4年でやらなかったから、語い力の低下
- ・ 英語を勉強する時間が高校の時と比べ、かなり減った。また使う機会がなかった。
- ・ 英語に触れる機会が少なくなった。大学のサポートもあまりない
- ・ 勉強量が足りなかった
- ・ 英語にふれないから。
- ・ きちんと取り組む時間・機会がなかった。授業では不十分
- ・ 英語にふれる機会が少ない
- ・ 何のためにやっているか分からなかった。
- ・ 英語にふれる機会が少ない。
- ・ 他の科目に集中してしまい、あまり勉強しなかった
- ・ 英語が苦手な人が多いこの大学では、授業の多い1、2年生のときに他の科目と平行して勉強しても伸びないと思う。
- ・ 興味を持てなかった
- ・ 学習過程が4年間通してなかったから
- ・ 2年以降、英語にふれる機会が少なくなったため。
- ・ 勉強しなかったから
- ・ 勉強しなかったから
- ・ 英語に触れる機会が極端に減ったから。
- ・ 英語に関して大学自体が力を入れてなさすぎ。
- ・ 勉強する機会を設けなかったから
- ・ 授業が簡単。
- ・ 1年の時だけだったから。
- ・ 授業以外あまり英語にふれる機会がなかった。
- ・ 内容のレベルが低い。
- ・ 英語を自分から行動を起こさない限り使うことが無かったため。
- ・ 授業以外の勉強をしていなかったから。
- ・ TOEICの成績は変らなかった
- ・ しなかったから
- ・ 勉強時間が減ったから。
- ・ 英語に関わる機会がへったから
- ・ 英語に触れる機会が少なかった。また、実用的でない。
- ・ 英語にふれる機会が少なかった
- ・ 授業で伸びる気がしない。
- ・ 英語の講義が少ない
- ・ 勉強をしていなかったから
- ・ あまり勉強していなかった
- ・ 2年生から英語の勉強をしていなかったから
- ・ 編入生は英語の授業がほとんどないため
- ・ 使う機会が無かった
- ・ 授業で簡単なものしかないから
- ・ 専門＞英語という考があった。3、4年で授業がほとんどないため。
- ・ 1年時にしか英語の授業が無かったから。
- ・ 英語の学習時間が短くなった。(高校時より)
- ・ TOEICのスコアが良くなかった。
- ・ 英語の勉強時間をあまり取っていなかったから
- ・ 単位を取る勉強であって、英語力を伸ばそうと頑張っていないから。
- ・ 授業が少ない
- ・ 勉強しなかった
- ・ 興味を持てなかったため。
- ・ 授業があまり数が無かったから
- ・ 1年生以来勉強していないから
- ・ 1回生でしかする機会がなかったため
- ・ 特になし

- ・ 授業以外で英語を使う機会がなかったため。
- ・ 単語を多少なりとも覚えたが、それを使用してのコミュニケーション能力は育っていないと思ったため。
- ・ 分かりません。
- ・ 1年生のときにか英語をうけなかったの。
- ・ 勉強しなかったため
- ・ 高校の時の英語力からの変化が感じられなかった
- ・ 自分自身に英語を学習する意欲がなかった
- ・ 英語を使う機会がなかった
- ・ 授業では大学1年時しかやっておらず、2年時以降は自主的にあまり勉強していなかったの。
- ・ 英語とふれ合っていないため。
- ・ あまり勉強しなかったから
- ・ 英語に触れる機会がほとんどなかったため
- ・ 自主的に勉強していないから
- ・ 英語で会話ができなかった。
- ・ 興味がない。
- ・ 喋らないと低下する
- ・ 日常的に学ばなかった
- ・ 英語をほとんど取らなかった。
- ・ 英語がいないカリキュラム
- ・ 1年生の時以外英語をりしゅうしなかった
- ・ 授業内容が高校でやるのとそんなに変わらないのが多いから。
- ・ 英語を使う機会があまりなかった。
- ・ 勉強不足だった
- ・ 授業以外で英語にふれなかったから。
- ・ 英語の授業だけでは勉強時間が足りなかったため
- ・ 勉強する機会があまりないので。
- ・ 継続性がないため
- ・ 英語にふれる時間がほとんどなかったから。
- ・ 授業そのものが少なかった。
- ・ 大学に入ってから、英語をほとんど勉強していなかったから
- ・ 意欲が足りなかった
- ・ 能力が上がるようなものではなかったから。
- ・ あまり勉強しなかったから。
- ・ 授業での英語学習が少なかったから。
- ・ 英語を自主的に勉強するということがなかったため
- ・ 英語ができない。
- ・ 1・2年でしかやらなかったから。
- ・ 授業に問題あり
- ・ 1、2年のみの授業だったので、残りの2年間で触れることがなかった。必修にして4年間授業をすればもう少し伸びると思われる。
- ・ 時間が少ないから
- ・ 伸びる要素がなかった。
- ・ 元々できていなかったから。
- ・ 何もとり組んでいないから
- ・ 自主学習が足りなかったから
- ・ 持続的に勉強していなかった
- ・ 継続的に英語の勉強をしないから単語・文法を忘れてしまうから。
- ・ 英語は学ぶ課目が少なかった為自主的に学ぶ意識を持ち、自ら学ばなければならなかったが、それを行わなかったため。
- ・ 大学の英語の授業が少なかった
- ・ 3年のときから英語の授業がなくなって英語に触れる機会がなくなったから。
- ・ 自分で意欲的に勉強しなかったため。
- ・ 不明
- ・ 授業のレベルが低すぎる。

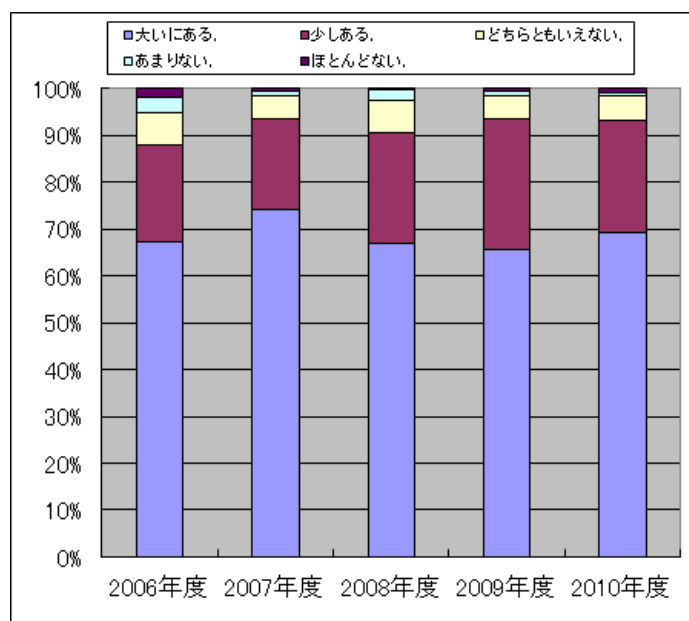
- ・ 3、4年では英語をほとんど勉強していないから
- ・ 中・高等教育ではほぼ毎日授業があったが、それがなくなって、語彙が伸びなかった。
- ・ 英語を使用する機会がなく、実用性に欠ける為
- ・ 1年生でしか授業がなく、授業でしかやってなかったから
- ・ 英語に触れる機会が少なくなったから
- ・ 英単語が身につかなかった
- ・ TOEICの点数が伸びなかった。
- ・ 高校の時の方が英語を勉強していたから
- ・ 自らの努力が足らなかった
- ・ 3年次からは英語に解れていない。
- ・ 苦手意識があり、TOEICがあまりよくなかった
- ・ 授業でしか英語を使用していないから
- ・ 勉強をしなかった。
- ・ 授業量が少ないことだと思います。
- ・ あまりやってない。
- ・ 高校の授業とあまり変らなかったから。
- ・ 勉強をしていないため
- ・ 英語を必要とする場面がない。
- ・ 個人的に学ばなかったのもあるが、大学と英語力は結びつかない
- ・ 自分から進んで勉強していないから
- ・ 英語の学習をほとんどしなかったから。
- ・ 一年の時と4年の時しか必修でなく、間があきすぎている。
- ・ 高校レベル
- ・ 大学での授業以外で英語を使わなかった。
- ・ 英語に興味がない。
- ・ そのばしのぎだったため
- ・ 2年以降で英語をやらなかったため
- ・ 時間数、また期間が少なかった。
- ・ あまり勉強していない。
- ・ 英語の勉強時間が少なかった。
- ・ 2年次、3年次にほとんど英語に触れなかったこと。
- ・ 取り組んでいない
- ・ 英語自体ほとんどふれなかった為
- ・ 触れる機会が高校時に比べ少なくなり、忘れてしまったから。
- ・ あまり英語に触れなかった
- ・ 英語の学習に力を入れてなかった。
- ・ 高校の時の方が、難しかった
- ・ 勉強する時間(英語の)が大幅に減ったから。
- ・ 2、3、4年で英語をやらなかったから
- ・ 1、2年生でまとめすぎていると思う。
- ・ 授業の種類が少なかった。
- ・ 期会が少なかった
- ・ ない
- ・ 自分の努力が足りなかったから。
- ・ 高校時に比べて、授業で学ぶ機会が少なく、自習的に勉強もしなかったため。
- ・ TOEICの点が変わらなかったの。
- ・ 英語に触れる機会が少なかったため
- ・ 2年、3年でほとんど英語を勉強しなかった
- ・ 英語の授業が少なかったから。
- ・ 英語の勉強時間が減ったから
- ・ 授業があまりよろしくなかった。
- ・ 英語に力を入れてないから
- ・ 普段の生活の中であまり英語にふれあう機会がなかったため
- ・ 英語についての時間が充分でない。自分で独学で進める方が上達する。

- ・ 高校に比べて、毎日英語に触れられないため
- ・ 英語の授業が少ない
- ・ 高校の時代の方が英語力があつた
- ・ 授業は高校の授業のようだった。英語がわからなくてもどうにかなりそうな授業だった。
- ・ 3、4年で英語の授業が減つたため
- ・ 授業内容が不十分だったから、学習意欲がわかなかつた。
- ・ 英語を使用する時がほとんどない。
- ・ 研究室に配属されるまで、英語にふれる機会がほとんどなかった。
- ・ 英語を学ぶ機会をあまりもたなかつたため
- ・ 授業のカリキュラムに問題があると思われる。TOEICにそくした授業でも多かれ少なかれ本当の英語力がつくと思います。
- ・ 3、4年次において英語に触れる機会が減少したため。
- ・ 英語が少ない
- ・ 授業以外の学習時間が少なかった。
- ・ 自分から英語にふれなかつたから。
- ・ 授業を1年のときにしかとってないから
- ・ 2年までで英語の授業がなくなるから。
- ・ 英語力を必要としないから。
- ・ 高校の時よりも英語の授業がないから
- ・ 英語にふれる機会がほとんどなかったため、語彙力に関して言えば低下した。
- ・ 勉強しなかつたから
- ・ 英語にふれる機会が少なかった。教科書が簡単。自分も積極的に学ばなかつた。
- ・ 高校時代の方が英語ができたと思うから。
- ・ 授業が少なく、英語に触れる機会が減つたから。必要性も感じれず、勉強しなかつたから。
- ・ 高校時代に比べて英語に触れる機会が減つた
- ・ 英語の授業が少ない。
- ・ 授業という形でしか英語と関わらなかつたため。
- ・ 伸びた実感がないから
- ・ 英語にあまり係わらなかつたから。
- ・ あまり興味がなく意欲がなかつたから
- ・ 英語の必修講義が2年からなくなったから
- ・ まったく手をつけていないから
- ・ 語学は大学の初期に単位が取れるから。4年間ずっと英語の勉強、するわけじゃない。
- ・ 英語は講義のときしか勉強しなかつたから
- ・ 学部1年でしか授業を受けていないため。
- ・ 英語の勉強をほとんどしていなかつたから
- ・ 英語に解れている時間が少なくなつたから。
- ・ 1、年の時しかほとんどしていなかつたため。
- ・ 大学側は英語の必要性を知らない。
- ・ 英語の授業は高校の復習みたいな内容だったので
- ・ 英語の授業に力が入っていないから
- ・ 英語の必要性を感じなかつたので、特に勉強しなかつた。
- ・ 2～4年生では、授業をほとんど取らなかつたため。
- ・ 講義が少なく、積極的に学ばなかつたため
- ・ 大学に入り、高校ほど英語に接する機会がなくなつてしまつたため。英語を話す機会が増えたが、論文など読む方では専門分野に偏つてしまつたように思う。
- ・ 1年で英語学習が終了したため。
- ・ 1年のときと、4年の英語文献以外、英語に触れる機会がなかつたから。
- ・ 英語関連の講義が少ない。
- ・ 勉強する機会がないから
- ・ 入学以前よりも勉強をしなくなつてしまつた。
- ・ 1年生の時しか勉強する機会がなかつたため
- ・ 英語に触れることが少なくなつたから。

[4] 卒業研究についてお尋ねします。

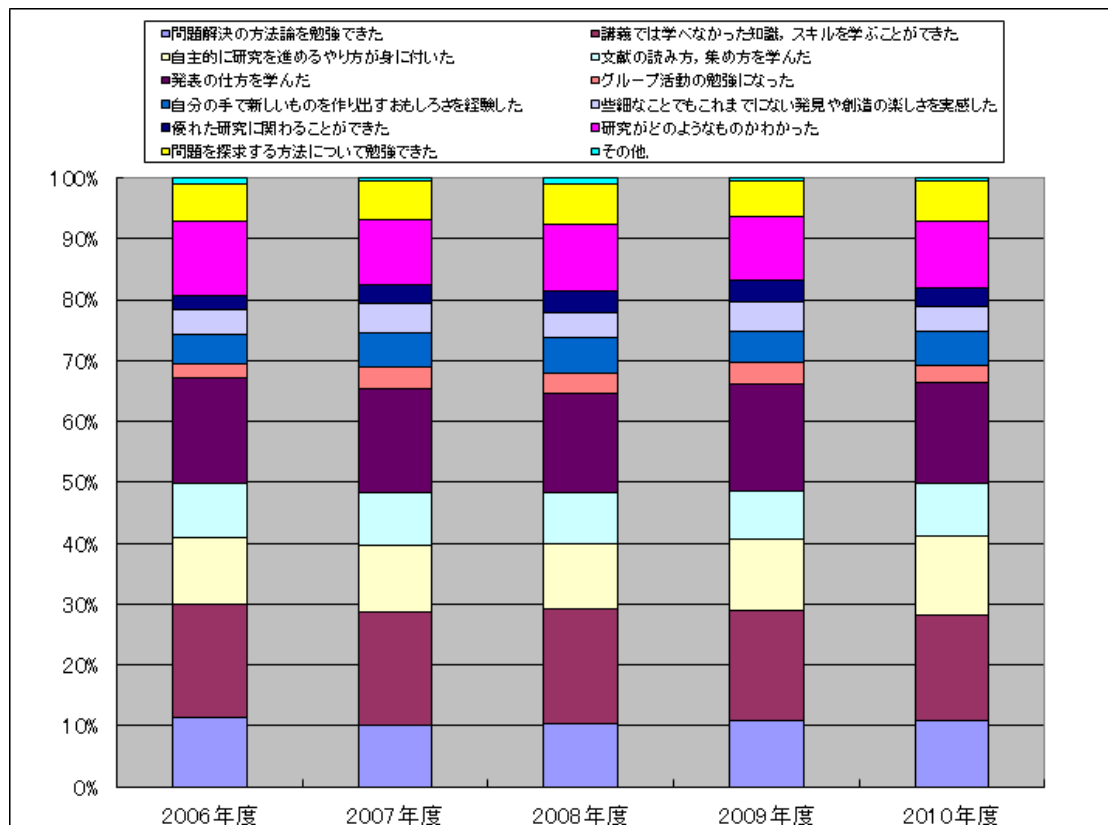
[4-1] 卒業研究の意義はあると思いますか。

卒業研究の意義について、ある（大いにある＋ある）と回答した学生の割合は、近年約90%を超えている状況である。今後もこの水準を維持できれば良いものとする。



[4-2][4-1]でA（大いにある）またはB（少しある）と答えた方：その理由は何ですか。（複数回答可）

卒業研究に関し意義がある（大いにある＋ある）と回答した理由には、研究の仕方や問題解決方法が学べた、発表の仕方が学べた等、授業では学べなかった知識・手法に関するものが多かった。このことから、卒業研究を行う意義が高いことが確認できる。



L (その他) [具体的に：]

- ・ 研究の全体像を考えるにあたって、注意すべきことを学んだ。実験を行うときの危機管理の大切さ。
- ・ 論文を通じて正しい文章を書くことができた。
- ・ 研究生生活を通して、将来に対して、本当に自分が学びたいこと、学ぶべきことを知ることができた。
- ・ 講義で学んだ知識をさらに深めることができた。
- ・ 企業との共同研究ができたから
- ・ ゼミは、論文に基づいて、理論的に発表練習するよい機会だと思う
- ・ きついということを学んだ

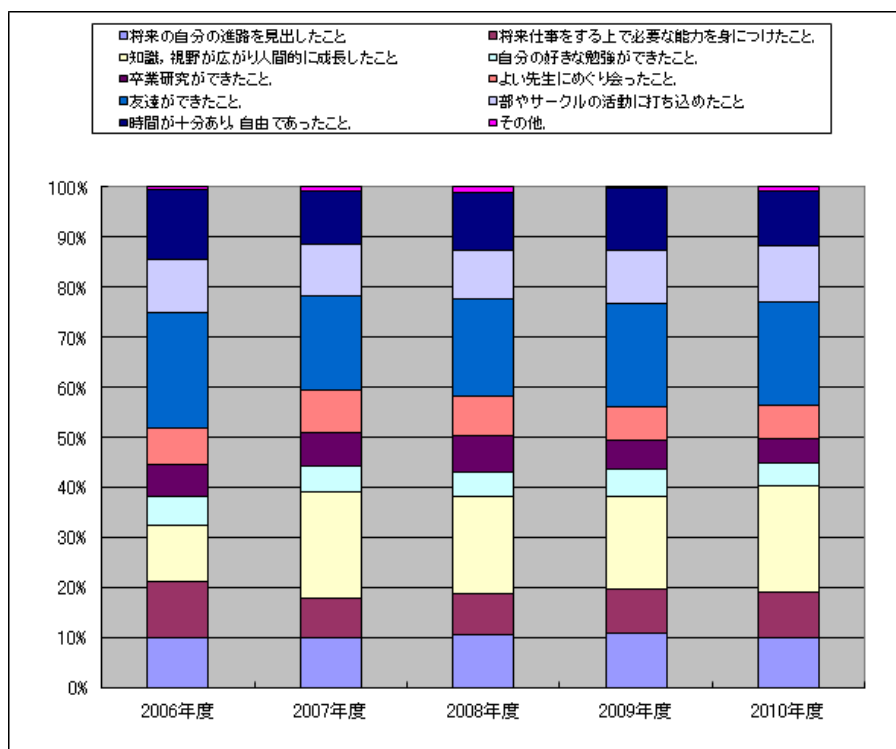
[4-3] [4-1] で卒業研究の意義がD (あまりない) またはE (ほとんどない) と答えた方：その理由は何ですか。

卒業研究の意義がない (あまりない+ほとんどない) と回答した学生が僅かながらいる。自分自身の希望していた研究テーマではない等の理由により、卒業研究を行う意欲が非常に低くなっていることが原因のように思われる。研究室配属方法の改善等でこの問題に対応可能かどうかの検討を行う必要があるように思われる。

- ・ 卒業のための研究だから
- ・ 建前で書いてる気がする。
- ・ めんどくさい。
- ・ 自分で卒研の内容を選んでないから。
- ・ 大学院での研究のための基礎造りと認識しているため。
- ・ 学部卒でたった1年しかないのに1人で全てをやらせるのは無謀！4年生はM1、M2の手伝い程度から始めてほしい。
- ・ 仕事で役立たない
- ・ 研究者としての考え方を身につけられなかった。今後の進路に使う知識でなかった。

[5] 大学生活を振り返って、どのようなことがよかったと思いますか。(複数回答可)

例年と同様に、知識や視野の広がり、友人が出来たことなど、多面的にバランスのある回答となっている。全般的に、大学生活が有意義であったと感じている証しであるように思われる。



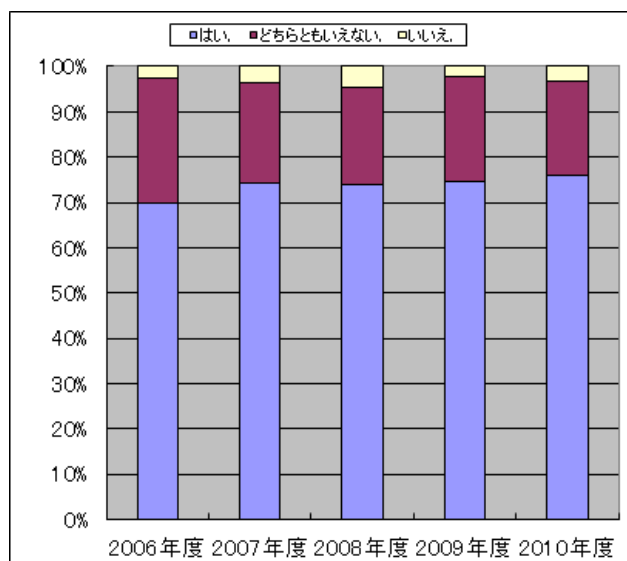
J（その他）〔具体的に： 〕

- ・ 社会の理不尽さの一部分でも知り得たこと。教授とはいえ、人間性をとまなわない者もあり、全ての「先生」を信じるのは間違いであると知れたこと。
- ・ 本当に自分がやりたいことが見つかった
- ・ 研究室に配属されて、それまでの座学中心の学習で得た知識が、実際の研究の中の事柄とむすびつき、より理解が深まった
- ・ よい研究室と先輩に恵まれた。
- ・ 金の大事さを知った。
- ・ バイトでいろんな職業の人と出会えた
- ・ やりたいことに取り組めた。
- ・ 人脈が広がった。
- ・ 幅広くイイ経験ができたと思う
- ・ 自己分析
- ・ 自他の良い点、悪い点を冷静に見つめられるようになった。
- ・ 海外に旅行に行くなど、自主的になったこと。一人暮らしをすることで、自立できるようになったこと。

[6]入学した学科についてお尋ねします。

[6-1]現在の学科に入学してよかったと思いますか。

入学した学科については、良かったと思わない学生の割合は、例年と同様、数%と非常に低い。一方、現在の学科に入学してよかったと思う学生の割合が年々増加している。第一希望で入学していない学生が含まれていることを考慮すれば、非常に良い結果が得られているものと考えられる。



[6-2][6-1]でC(いいえ)と答えた方：その理由は何ですか。

入学した学科について良かったと思わない理由では、もともとその学科に興味がなかったといった理由が多いようである。入試やコース配属方法などをより弾力的に運用することでの対応も考えられるが、それにも限度があるもの考える。

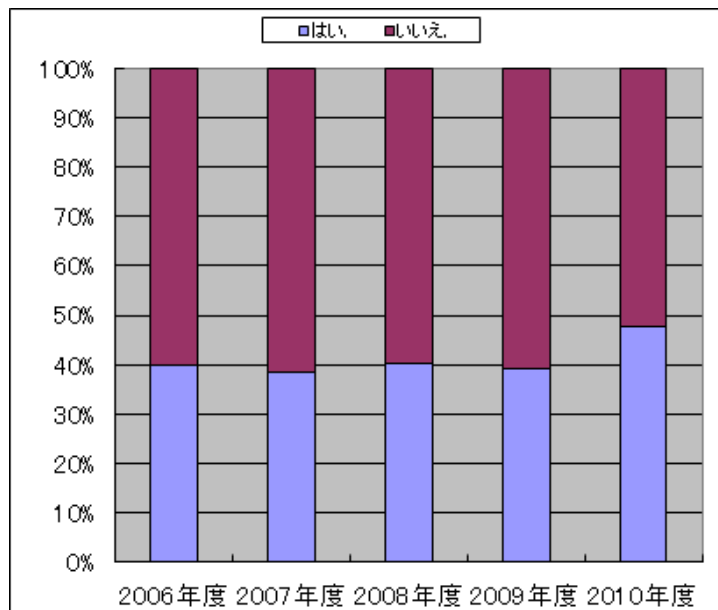
- ・ 雰囲気が保守的だったから。
- ・ 今もっとも勉強したい学問と違うから。
- ・ 建築学コースが入学の次年度より設立された為。
- ・ 興味のあることを学習できた
- ・ 大学が楽しくない。
- ・ 薬学部に行きたかった

- ・ 就職が悪い。
- ・ 自分が希望している職種が違う学科であるため
- ・ 求人が悪い
- ・ 父親にだまされた
- ・ きつい
- ・ 就職が厳しいから。(推薦)。
- ・ 就職先が悪いから
- ・ 他の学科のことが良く分からないので、応化が良いとは言いきれない

[7]入学時の目標の達成についてお尋ねします。

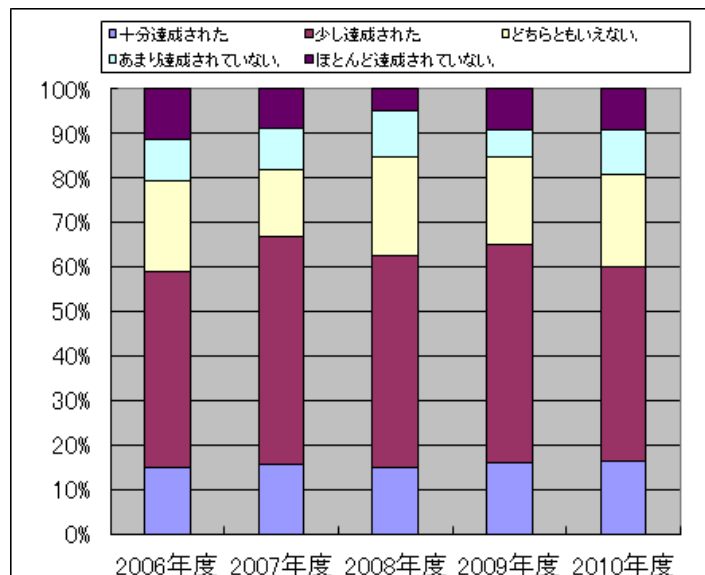
[7-1]あなたは入学の時に大学で達成したい目標がありましたか。

昨年度まで入学時に目標を持てていない学生が約60%で、全くと言っていいほど年度ごとの変化がない状況であったが、今年度は目標を持てていない学生の割合が減少した。広報活動などを通して、大学入学時に目標を持つことの有用性が啓蒙できた可能性も含めて原因を調べる必要があるものとする。



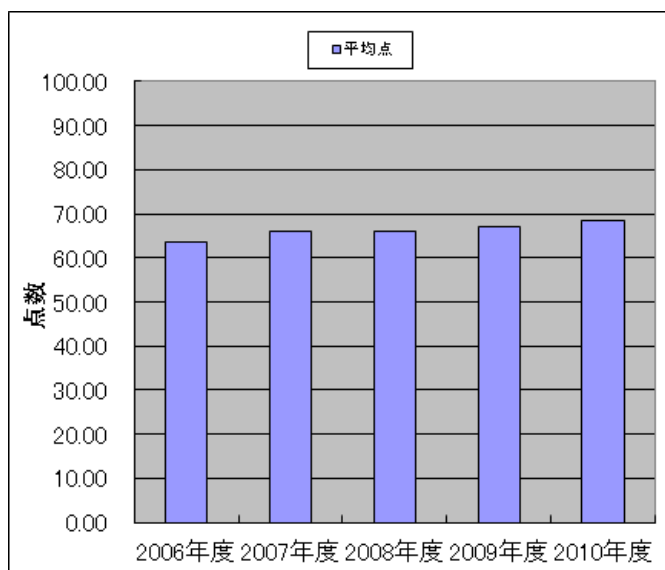
[7-2][7-1]でA（はい）と答えただ方、それは現在どの程度達成されていますか。

達成された（十分達成された＋少し達成された）と感じている学生の割合が約60%で例年推移している。この割合を増加させるための努力を継続的に行う必要があるものとする。



[8]在学中の学生生活の満足度に対して100点満点で点を付けるとすれば何点と思いますか。

満足度は、毎年度、微増している。大学全体として努力している成果が現れているものと考えられる。今後も継続的な努力が望まれる。

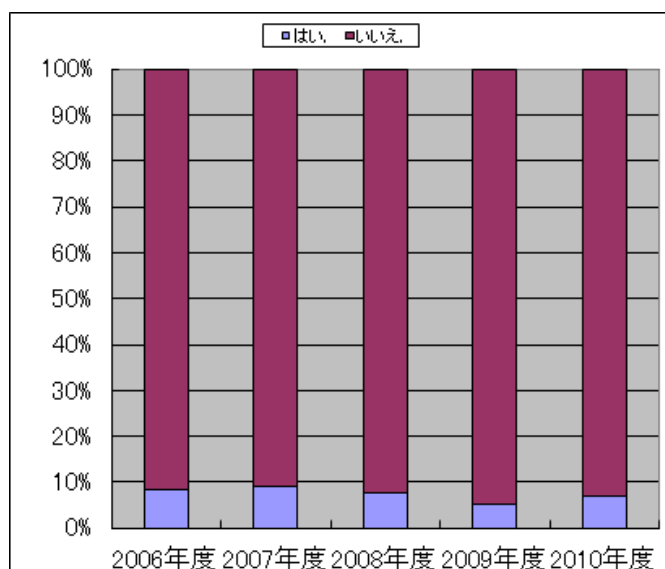


[9]卒業により取得予定の資格についてお答え下さい。

(本学の教育目標に適合しない資格(自動車免許等)は除外します。)

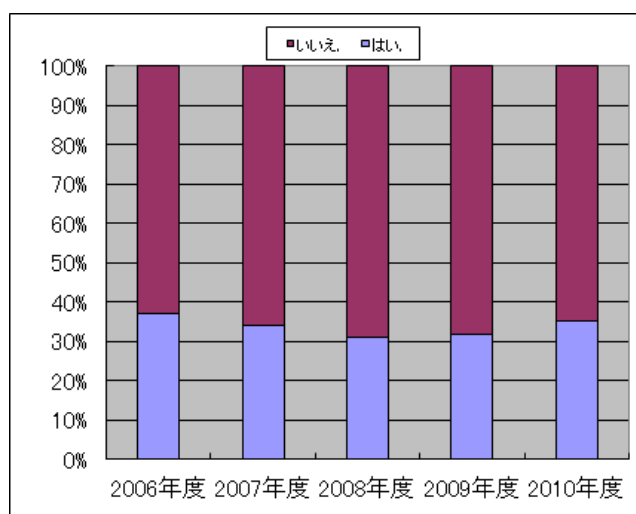
[9-1]あなたは教員免許取得を目標としていましたか。

2007年度をピークに教員免許の取得の希望者割合が減少しているが5%程度の学生が教員免許取得希望を持っていることは認識しておくべきである。



[9-2]教員免許(数学)が可能でしたら、あなたは取得を希望しましたか。

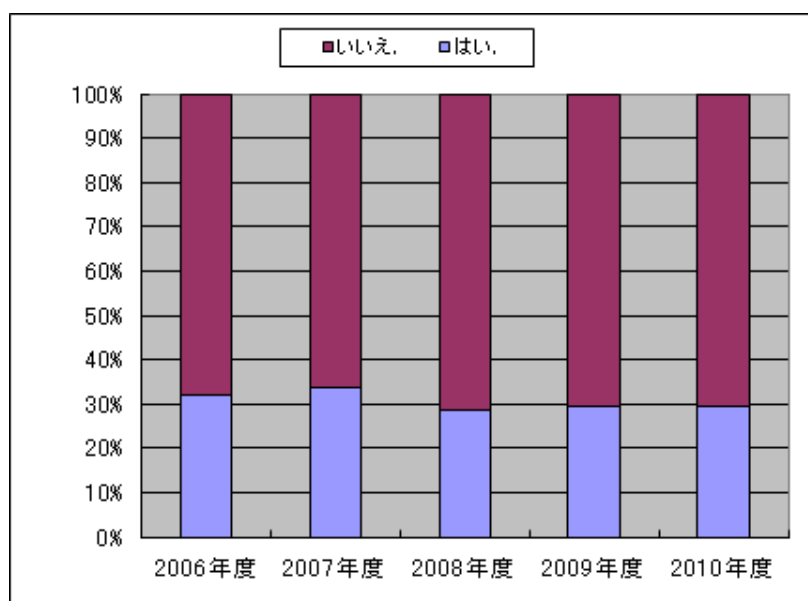
数学教員免許取得希望が毎年度30%以上である。工学部として、数学教員免許取得が可能なカリキュラム導入の検討が必要となると考えられる。



[9-3]あなたは卒業後資格(教員免許を除く)を取得する予定ですか。

卒業後の資格取得を予定している学生は、毎年度、30%程度である。

資格取得が就職先において必要となりそうな場合には取得を考えているものと予想される。就職先と無関係に取得したいのかどうかのアンケートを行う必要があると考えられる。



[9-4] [9-3]でA（はい）と答えた方：どのような資格を取得する予定ですか。

多種多様な資格の取得を考えているようである。

- ・ 仕事に必要なもの。
- ・ 弁理士、エネルギー管理士、技術士
- ・ 機械技術士
- ・ 技術士
- ・ 基本情報処理技術者、MOS
- ・ 危険物扱い等。
- ・ 危険物取扱。
- ・ 無線技師。
- ・ 危険物etc...
- ・ 自動車整備士
- ・ 具体的にはないが、資格は色々持っていた方がいいと思うし、役に立つと思うからできるだけ取得したいと思っている。
- ・ TOEIC。
- ・ たまがけなど
- ・ 危険物取扱
- ・ 技術士
- ・ 電気工事士Ⅱ種。
- ・ 仕事で必要なもの
- ・ レーダー級海上特殊無線技士
- ・ 電験
- ・ 情報処理関連
- ・ 第三種電気主任技術者
- ・ 基本情報処理技術者
- ・ 決めてない

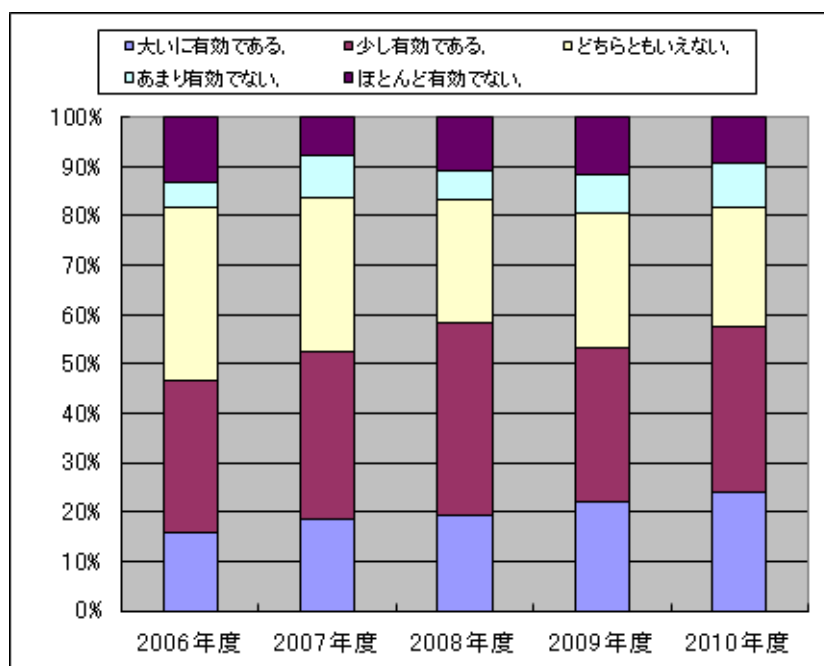
- ・ 情報処理等
- ・ 技術師、施行管理技師等
- ・ 技術士
- ・ 会社から要求されたもの(具体的には知らない)
- ・ 仕事に関係するもの
- ・ 技術士
- ・ 簿記等
- ・ 宅地建物取引主任者、2級建築士
- ・ 技術士など
- ・ 技術士、語学関係(国連英検等)
- ・ 経済
- ・ 一級建築士、土止め支保工作業主任者、測量士
- ・ 技術士、土木施工管理技士
- ・ 技術士
- ・ 宅建
- ・ 一級建築士。
- ・ 技術士
- ・ 電験1種、英検1級など
- ・ 電験2種。
- ・ 電験二種
- ・ 就職してから必要とされるもの。
- ・ 電験三種
- ・ 電気主任技術者
- ・ 電検。
- ・ 電験
- ・ 電験
- ・ 電検3種
- ・ 電気主任技術士
- ・ 電気主任技術者
- ・ 電験三種
- ・ 電気主任技術者
- ・ 電気主任技術者
- ・ 電気・電子に関連した資格
- ・ 電気主任技術者、電気施工管理技士等…
- ・ 電験三種。
- ・ 情報処理
- ・ 会社が必要とする資格
- ・ 電検など
- ・ 国家公務員。
- ・ 電気工事士、電験3種、2種、基本情報

- ・ 電験
- ・ 危険物取扱
- ・ 電検
- ・ 電気主任技術者
- ・ 電験
- ・ 電験等
- ・ 電気主任技術者
- ・ 第3種電気主任技術者
- ・ 電気主任
- ・ 電気主任技術者
- ・ 電気主任技術者
- ・ 無線関係
- ・ 第1種陸上無線、電気主任技術者
- ・ TOEIC
- ・ 理系でとりやすいもの。
- ・ 弁理士
- ・ 第一級陸上無線技術士
- ・ 第一級陸上無線技術士、第三級海上特殊無線技術士。
- ・ 一陸特、三海特
- ・ 取れるものがあれば
- ・ 基本情報処理
- ・ 情報処理関連
- ・ 無線
- ・ 基本情報技術者試験
- ・ 情報処理系
- ・ エンベデッドシステムスペシャリスト
- ・ 応用情報技術者
- ・ 仕事に必要なもの
- ・ 第1級陸上無線技術士
- ・ 応用情報技術者
- ・ 第一種陸上無線技術士
- ・ 情報処理応用
- ・ 電気主任技術者。
- ・ 陸上無線など
- ・ 未定
- ・ 公害防止管理者
- ・ 危険物甲種
- ・ 土木系、建築系の資格
- ・ 危険物取扱
- ・ 危険物

- ・ 危険物取扱者
- ・ 危険物取り扱い
- ・ 法律関係
- ・ TOEIC
- ・ MOS
- ・ 必要になった資格
- ・ 自動車免許
- ・ 危険物取扱
- ・ 取得したいと考えているだけで、具体案はない。しいて言うなら剣道3段
- ・ 情報処理関係の資格
- ・ 宅建
- ・ 危険物
- ・ まだ具体的には、決めてません。
- ・ 簿記、公認会計士
- ・ 書道
- ・ 未定
- ・ 企業で必要があればその時に。

[9-5][9-3]でA（はい）と答えた方：大学の授業は資格取得に有効ですか。

資格取得に大学の授業が『大いに有効である』と考える学生の割合が徐々に増加している。一方、有効でない（あまり有効でない＋ほとんど有効でない）と考える学生の割合は約20％程度で推移している。現状を維持するための努力が必要であるものと考えられる。



[9-6][9-5]でD（あまり有効でない）またはE（ほとんど有効でない）と答えた方：その理由は何ですか。

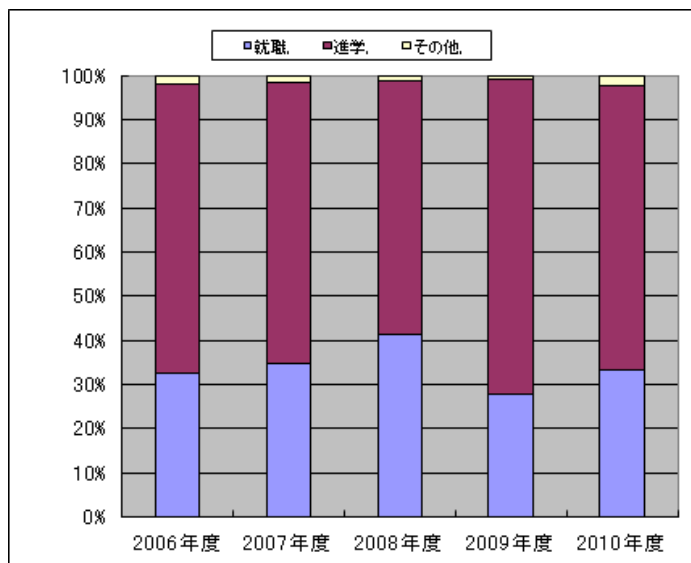
学生の想定する取得資格に大きな幅があり、専門分野と異なる資格の取得も考えているようである。他専門分野の科目を多く受講できるようにするなどの工夫が必要かもしれない。

- ・ 専門科目には大いに有効であるが、法などの独学による所が大きい。
- ・ 工学科目にかたよっているから。
- ・ 講義がない。
- ・ 授業とは無関係に自分で考えて行動するしかない
- ・ いや、まあ…
- ・ 電気工事だから
- ・ 分野が異なる資格だから
- ・ これから取ろうとしている資格に直接はあまり関連していない。
- ・ 専門的な知識はあまり学べなかった
- ・ 分野違い。
- ・ 内容が大学の授業内容と関係ないから
- ・ 分野が異なる為。
- ・ 分野が違う
- ・ そのようにカリキュラムが組まれていないから。
- ・ 専門でないから
- ・ 実際に就職が決まらないと必要な資格がわからないから
- ・ 資格に必要な学科がかぶっていないことが多かったから。
- ・ 科目が異なる
- ・ テストがおわるとすぐ忘れてしまう。
- ・ 資格試験に直接結びつかないことが多い。
- ・ まだ未定のため。
- ・ あんまり関係ないから
- ・ 専門が違う
- ・ 分野が違うので
- ・ 工学に関係のないことだから
- ・ 専門授業ではないため。
- ・ 授業内容だけで資格が取得できるとは思えない
- ・ 家の都合で取得する資格だから
- ・ 分野が違うから
- ・ 専門知識の取得は、あるが、資格のために講義を受けている訳ではないから。

[10]卒業後の進路についてお尋ねします。

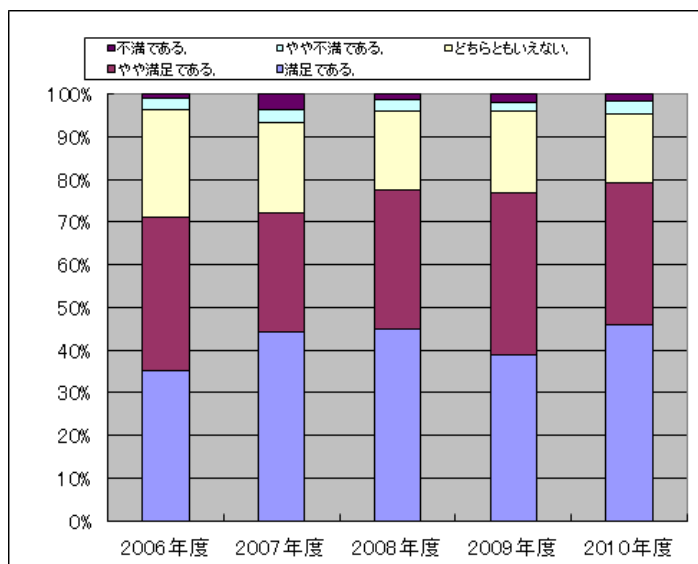
[10-1]あなたは卒業後就職しますか、進学しますか。

若干の変動は見られるものの、例年、60%以上が大学院に進学する傾向にある。



[10-2]あなたは卒業後の進路に満足していますか。

「満足である」または「やや満足である」とした回答が 70%以上あり、2008 年度以降は 80%近くまで増加している。高い満足度を保っている。



[10-3][10-2]でD（やや不満である）またはE（不満である）と答えた方：その理由は何ですか。

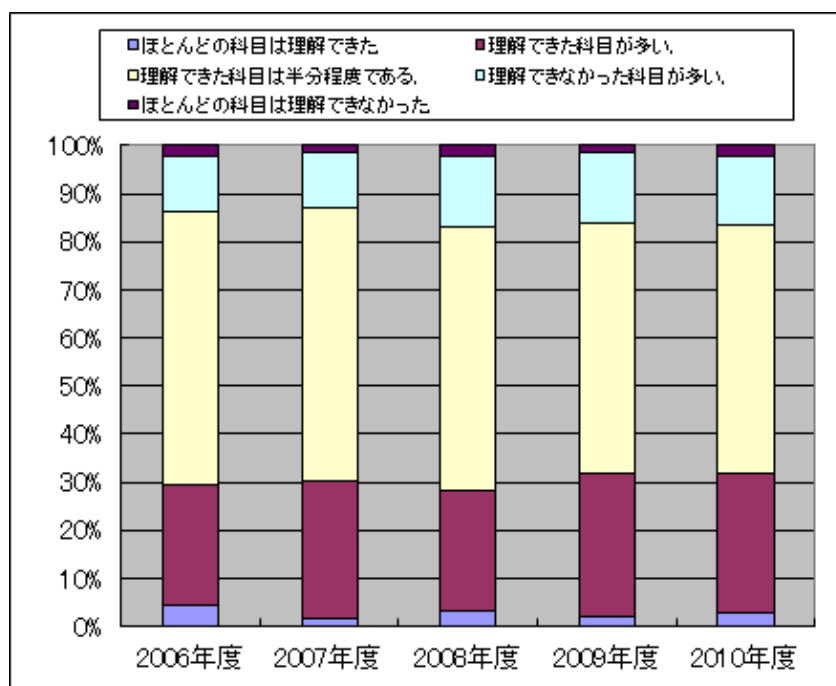
様々な思いが見られるが、自分の希望通りにいかなかったことへの不満が比較的多い。

- ・ 希望するところに行くことができなかったから。
- ・ 研究室という空間が嫌になった。
- ・ 就活に取りかかれる時期が遅すぎる。
- ・ 今になって、就職の方がよかったのかな？と考えている。
- ・ 大学で用意されたルールにただ乗ってしまったという感があるから
- ・ 研究がきつい
- ・ 院に進めなかったこと。
- ・ 就職すればよかったと考えている。
- ・ 大学で学んだことと関係がない。
- ・ 大学が好きではないから
- ・ 大学院に入学出来ないため。

- ・ 第一希望の研究室ではないから
- ・ 本当にやりたいことができるかわからない
- ・ 未定
- ・ やりたいことじゃないため
- ・ 就職したかったから

[11]これまでに受講した科目の理解度はどの程度ですか。

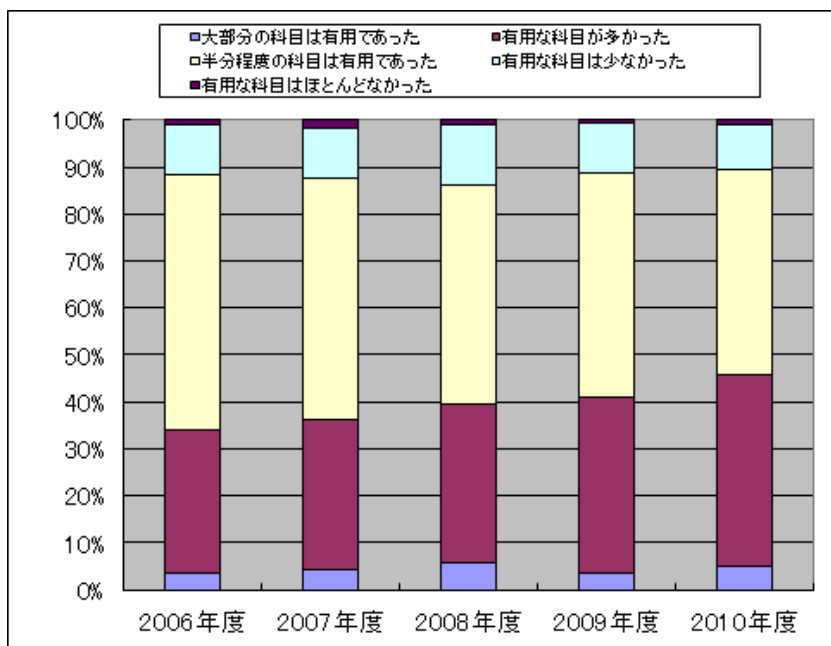
「ほとんどの科目は理解できなかった」または「理解できなかった科目が多い」とした回答が、2008年度以降、15%近くを推移し、以前より増加している。今後の動向を観察する必要がある。



[12]履修価値のあった科目の割合についてお尋ねします。

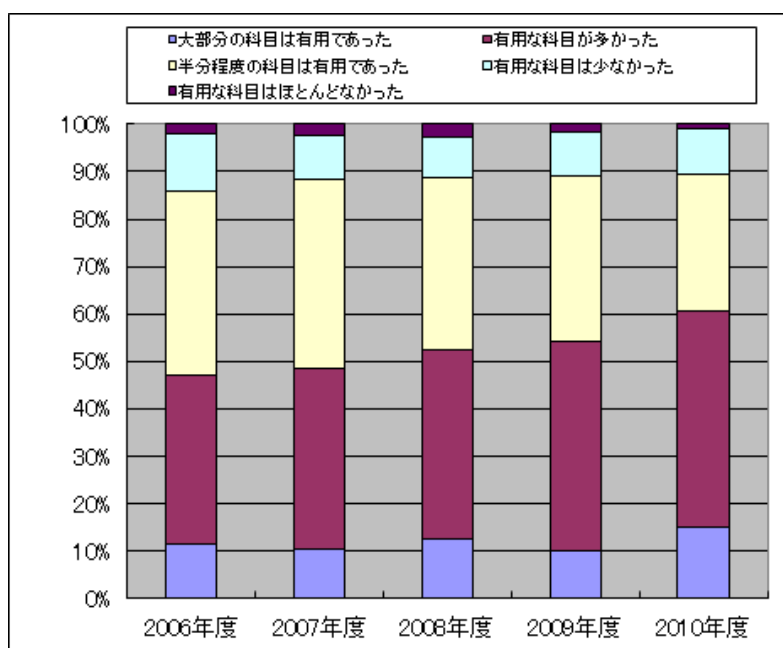
[12-1]受講した講義科目（演習科目を含む）の中で、自分自身の成長のために有用であり、履修価値があった科目の割合はどの程度ですか。

「有用な科目はほとんどなかった」または「有用な科目は少なかった」とする回答が2008年度の約15%をピークに減少傾向にある。一方、「有用な科目が多かった」または「大部分の科目は有用であった」とする回答は漸次増加し、2010年度には約45%に達している。改善傾向が認められる。



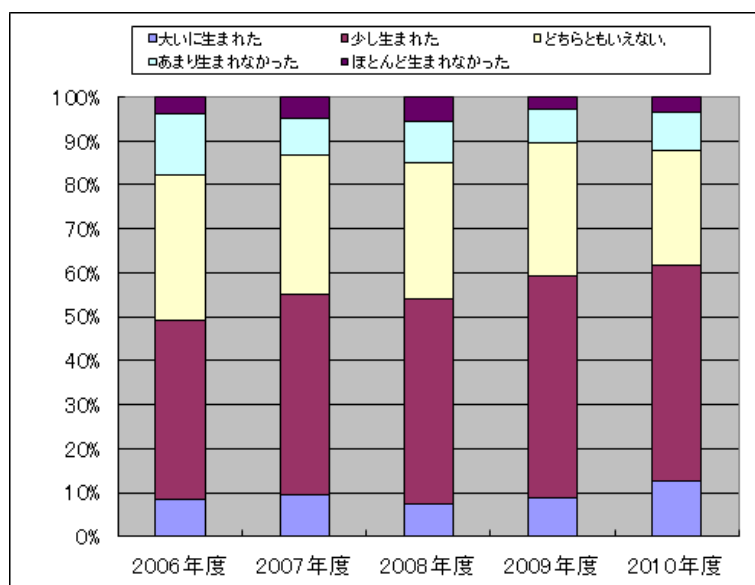
[12-2]受講した実験・実習科目の中で、自分自身の成長のために有用であり、履修価値があった科目の割合はどの程度ですか。

「有用な科目はほとんどなかった」または「有用な科目は少なかった」とする回答は 2006 年度に約 15%あったが、その後は減少し、2010 年度には約 10%になっている。一方、「有用な科目が多かった」または「大部分の科目は有用であった」とする回答は増加傾向にあり、2010 年度には 60%を超えている改善傾向が認められる。



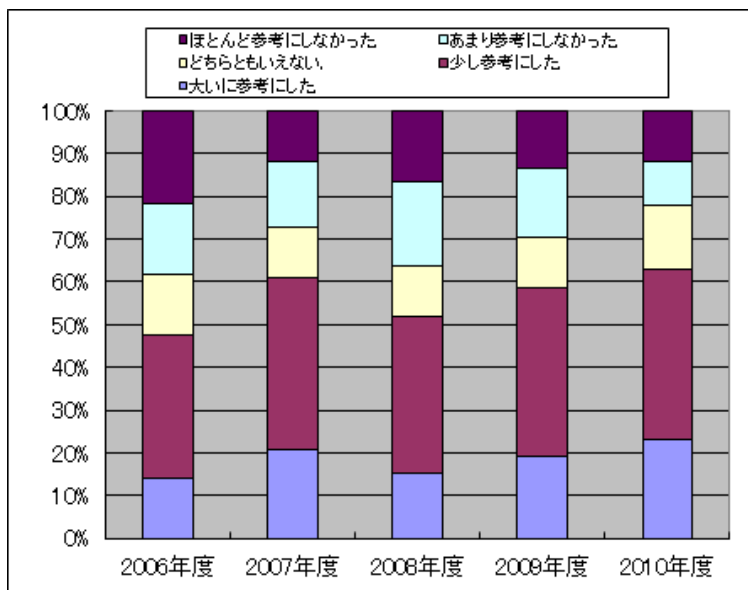
[13]大学における教育により、将来への自信や意欲が生まれましたか。

多少の増減はあるが、「ほとんど生まれなかった」または「あまり生まれなかった」とする回答は減少し、「大いに生まれた」または「少し生まれた」とする回答は増加する傾向が見られる。



[14]講義科目を選択する際に、シラバスを参考にしましたか。

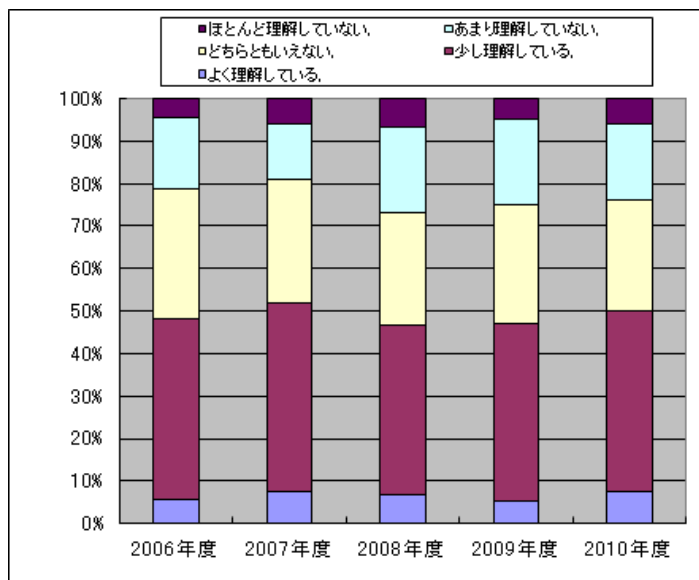
変動が見られるが、「ほとんど参考にしなかった」または「あまり参考にしなかった」とする回答は2008年度以降、減少傾向にあり、2010年度には20%を若干上回る程度になっている。「少し参考にした」または「大いに参考にした」とする回答は2008年度以降、増加傾向にあり、2010年度には60%を超えている。2008年度以降、改善傾向が認められる。



[15]カリキュラムについてお尋ねします。

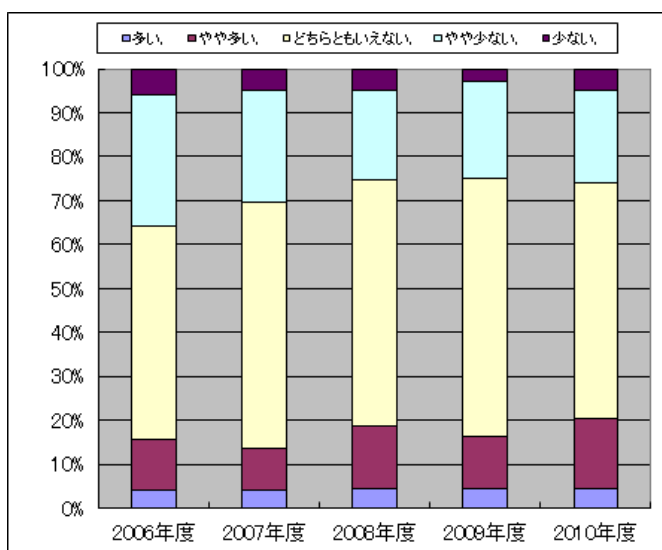
[15-1]カリキュラムの中で、科目間のつながりを理解していますか。

変動が見られるものの、「ほとんど理解していない」または「あまり理解していない」とする回答は約20～30%、「少し理解している」または「よく理解している」とする回答は50%前後を推移している。2008年度以降、わずかながら前者は減少し、後者は増加する傾向にある。



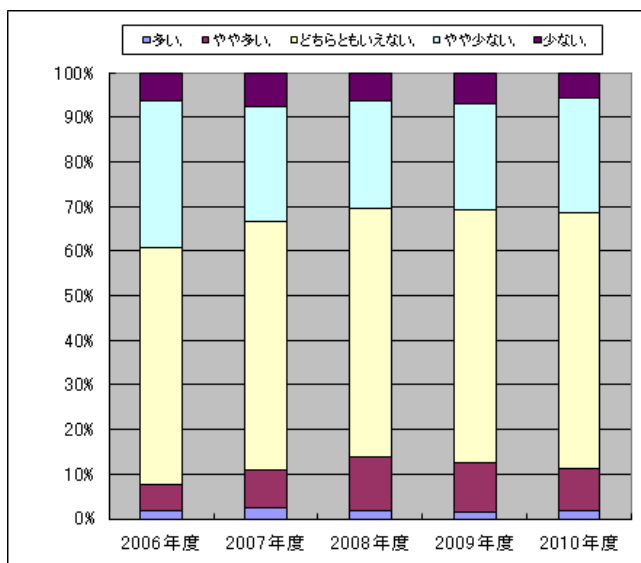
[15-2]カリキュラムの中で、実験・実習科目の比重は多いと感ずますか、少ないと感ずますか。

「少ない」または「やや少ない」とする回答は2006年度には約35%であったが、それ以降は減少し、2008年度以降は約25%となっている。「やや多い」または「多い」とする回答は2008年度以降若干増加しており、20%弱となっている。



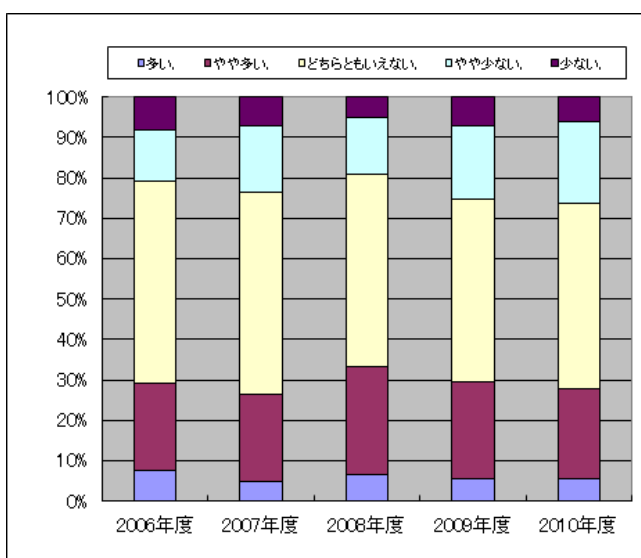
[15-3]カリキュラムの中で、演習時間の比重は多いと感じますか、少ないと感じますか。

「少ない」または「やや少ない」とする回答は 2006 年度の約 40%から減少し、2008 年度以降は例年約 30%となっている。「多い」または「やや多い」とする回答は 10%前後で変動している。「どちらともいえない」が例年 50%以上を占めている。



[16]受講した科目全般について、教育への熱意があった担当教員の割合はどの程度ですか。

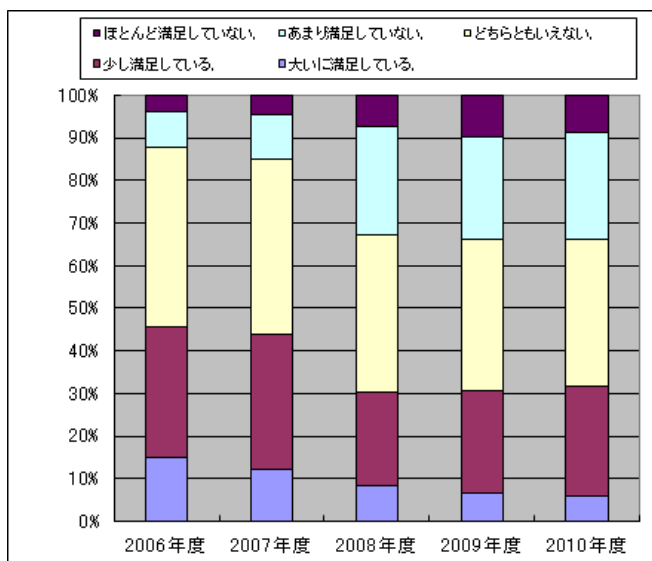
2008 年度に、「多い」または「やや多い」とする回答が 30%を超え、「やや少ない」または「少ない」とする回答が 20%を下回った。その後、前者は減少し、後者は増加する傾向が見られる。今後の動向を観察する必要がある。



[17]成績評価についてお尋ねします。

[17-1]成績評価（秀・優・良・可・不合格・未履修）に満足していますか。

2008 年度に、「大いに満足」または「少し満足」とする回答が約 30%に減少し、その後、ほとんど変化していない。一方、「あまり満足していない」または「ほとんど満足していない」とする回答は 2008 年度に 30%を超え、その後の変化は見られない。今後の動向を観察する必要がある。



[17-2][17-1]でD（あまり満足していない）またはE（ほとんど満足していない）と答えた方：その理由は何ですか。

種々の理由が挙げられている。自己反省的な内容が多い。

- ・ 適当に行動しすぎた。
- ・ GPAによる評価では実態に合う成績とはいえない
- ・ 常に余裕がなかったから。（単位など）
- ・ 整図における関連性がなく、また、写さなければ合格しない授業など意味不明である。
- ・ 努力が足りなかった
- ・ 自分が悪い
- ・ 留年したため
- ・ 結果が悪かったので
- ・ 低かった。院ではもっとGPAを上げたい。
- ・ もう少し頑張れたと思うから。
- ・ もっとできたはず！！
- ・ もう少し、がんばればいい結果が残せたと思うから
- ・ 理解できない科目があり、未履修になり留年したから
- ・ 履修していた当時は、全力で勉強していたが、理解できずに終えた科目が少なからずあった。その後、院試の勉強で再度学習した時には、十分理解できた。そのため、一度目で、十分理解できていたら、もう少し成長が良かったように思え、少々後悔がある。
- ・ 良い成績ではないから
- ・ もっと普段から勉強していれば、試験前にあわてないで済んで、良い結果が得れたと思うから
- ・ もっと勉強しておけばよかった。
- ・ カンニングしてる人たちに負けるのはありえない。
- ・ 先生によっては、再試の方が点が高くなる場合がある
- ・ 真面目に勉強していなかった。
- ・ べんきょうしなかった
- ・ 学習不足だったため
- ・ 自らの努力不足
- ・ 成績が悪いから
- ・ 成績の出し方に差がある。
- ・ いい成績をとれていないから。
- ・ 取る科目が多く、集中しなかったため成績が良くなかった。
- ・ 成績良くないから。
- ・ 1年次に良くない結果を残したものがGPA等にひびいている。
- ・ 2年～3年の時にゆるみすぎた
- ・ 1、2年時の勉強が少なく知識があいまいだったから
- ・ 望み通りの成績を取れなかった。
- ・ 良が多かった
- ・ 理解できても、それをあまり研究等にいかせてない。勉強不足。
- ・ 1年、2年で遊びすぎた

- ・ 成績が良くなかったから
- ・ 可が多い。
- ・ 低い
- ・ 勉強不足
- ・ GPAがあまり良くない。工学専門とかが悪いと自信をなくす
- ・ もう少し、勉強の方法を工夫できていれば、さらに良い成績が取得できたのではないかと考えるから。
- ・ 自分が勉強していなかったため、良い成績がとれなかったから
- ・ 欠席が多かった。
- ・ もう少し勉強にはげんどけばよかったと感じる
- ・ もっとできたと思うから
- ・ 成績が良くなかった。
- ・ 成績で研究室を決めるが、成績が『研究の力』のすべてではないと思う。
- ・ 可ばかり
- ・ 自分からやる意欲がたりなかった。
- ・ 怠慢すぎた。
- ・ 問題が一部分適切でなかった
- ・ GPAという制度に対して良い印象をもてない
- ・ さぼりすぎたから。
- ・ だらけて、勉強していなかったため。
- ・ 2年次にバイトなどに時間を割きすぎた為
- ・ 試験の比重が大きい。
- ・ 二年生後半以降、学業についていけなかった。
- ・ 人文科目での、人による、評価基準の違い
- ・ もう少し、がんばれたと思うから。
- ・ 良と可の数が多かった。
- ・ もう少し授業をちゃんと聞いて、勉強すれば良かったと思う。
- ・ 勉強の仕方を身につけるまで時間がかかったから。
- ・ 悪い
- ・ 成績が悪かったから
- ・ もっと出来たと思っているから。
- ・ あまりにも成績が良くなかったから
- ・ 成績不振による希望した研究室へ行けなかったこと。
- ・ GPAが低いから
- ・ 勉強不足
- ・ もう少し勉強すればよかった
- ・ テストの点数と出席日数えの比重
- ・ 成績が低かったため
- ・ 2年生後期の成績がひどかったから
- ・ テストの割合が1年生の時多く、1年生の時にGPAがほとんど決まってしまったから。
- ・ 努力不足と、不正の取り締まりがあまい。

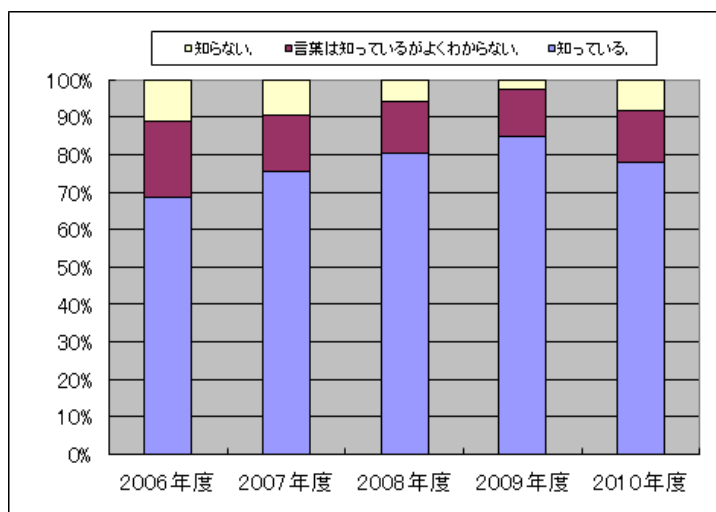
- ・ もっと勉強すればよかったと後悔してるから。
- ・ ほとんど勉強していないため、成績が悪いから。
- ・ 単位は取れたが成績が悪かった。
- ・ その時なりに勉強したつもりだったが、まだまだ勉強不足だったから。
- ・ もう少しがんばれた。
- ・ 1、2年の頃にもう少し向上心を持って取り組めばよかった。
- ・ 悪かったから。
- ・ もう少し良い成績が取れたと後悔してるから
- ・ ダメだった。
- ・ 大学2年次に遊び過ぎたため。
- ・ 自分の興味がある教科とない教科の点数がちがいきすぎたから
- ・ GPAを意識せず、単位が取ればよいと考えていたため、GPAが低かった
- ・ あまりよくなかった。
- ・ 成績が悪かったからです。
- ・ 悪いから
- ・ 現時点でのGPAの低さ
- ・ 可、良が多すぎた。不可も多すぎた。
- ・ 勉強不足
- ・ 留年した。
- ・ 悪かったから
- ・ あまり成績が良くないので
- ・ ギリギリの成績で単位を取得したものが多いから
- ・ あまり成績が上がらなかったから
- ・ 自己責任
- ・ 点数が悪い。GPAの意義がわからない
- ・ 履修した科目の中には、不可や再履修になったものがいくつかあったため。
- ・ 点数が悪いため。
- ・ 部の活動に没頭していたため。
- ・ おろそかにした部分があるから
- ・ 全体的に成績が低かった為
- ・ あまりテストを頑張らなかったため
- ・ あまり良くない
- ・ 学習時間が少なく、成績が悪いから
- ・ 大学1年の頃から真面目にすればよかった
- ・ もっと勉強すべきだった。
- ・ もう少し勉強すればよかった
- ・ 自主的にあまり勉強をしなかった。
- ・ 勉強不足による成績
- ・ 自分の怠惰の証左であるから
- ・ 自分の思ったものと一致していない

- ・ 目標を下回った
- ・ 1年次にサボりすぎた。3年次は良かった。
- ・ 思うような成績がとれなかった。
- ・ 人間科学科目を真面目に取り組みたかった。
- ・ 主にGPAが悪い。
- ・ 成績がよくないから
- ・ 一年の時の勉強に対する取りくみがよくなかったため
- ・ GPAが低い
- ・ バイト、部活等で、あまり勉強していなかったため、再テスト再履習が多かった。
- ・ 研究室に入って、学力(基礎)の重要性を知ったから
- ・ スケジュール管理が当日に上手くできず、勉強が効率よくできなかったため
- ・ 成績が目標に届かなかったため
- ・ 自身の勉強に対する甘い考えを思い知らされた。
- ・ 満足したら、それ以上の成長はできない
- ・ 勉強不足による満足のいく成績がとれなかったこと
- ・ 一、二年の授業についていけず、成績が伸びなかった。
- ・ 大学での成績は情報収集力による。
- ・ 体調をくずし休みがちだったため
- ・ やればもっとできたと後悔しているから。
- ・ 一年生の頃にサボりすぎて、ほとんど可だから
- ・ もう少しがんばれたから。
- ・ 満足できる成績ではないので
- ・ たくさん落としてしまった。
- ・ 未履修の科目があったから
- ・ 勉強はしたのに単位に報われなかった
- ・ あまり勉強していなかったため、成績が悪い
- ・ 良くなかった。
- ・ 勉強以外に夢中になることがあったから。
- ・ もっと努力できる点があった。

[18] オフィスアワー（質問・相談時間）についてお尋ねします。

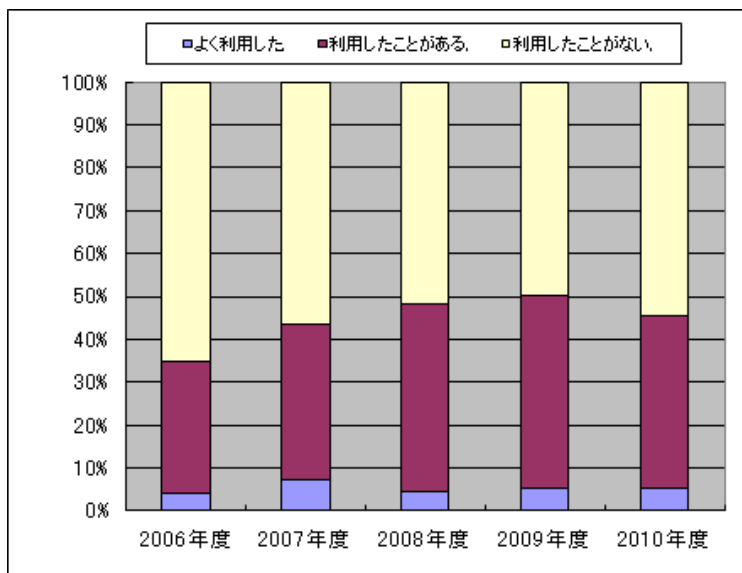
[18-1] オフィスアワーという制度を知っていますか。

2008 年度以降は「知っている」が例年約 80% となっており、かなり周知されている。しかしながら、「知らない」とする回答するが 10% 程度あり、改善の余地は残っている。



[18-2] オフィスアワーを利用して、教員に質問した経験がありますか。

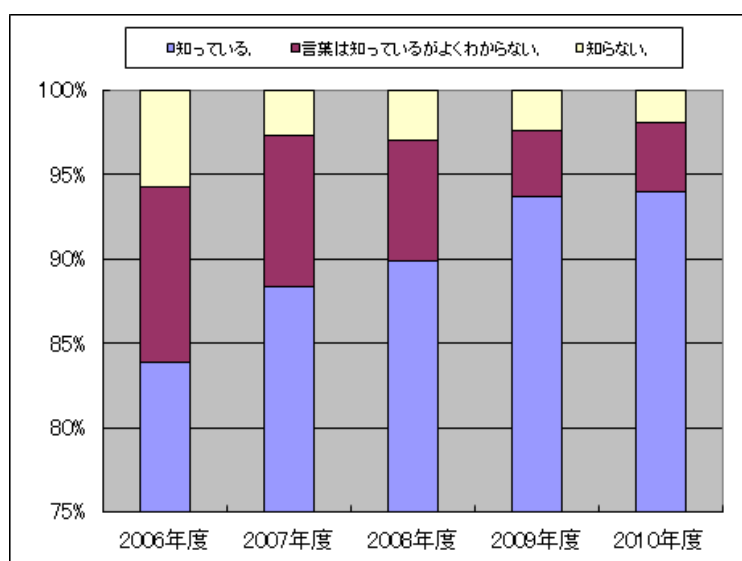
2007 年度に「よく利用した」または「利用したことがある」とする回答が 40% を超え、それ以降は 50% 弱で推移している。



[19] ティーチングアシスタント（T A）についてお尋ねします。

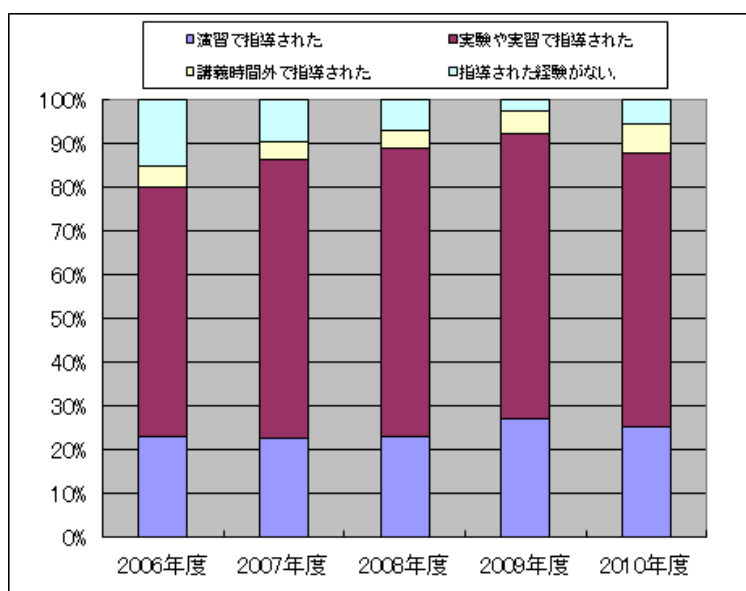
[19-1] ティーチングアシスタント（T A）という制度を知っていますか。

T A 制度を「知っている」とする回答は、2006 年度から徐々に増え、2009 年度以降は 95% 近くとなっている。T A 制度は定着していると考えられる。



[19-2]ティーチングアシスタント（TA）に指導してもらった経験がありますか。（複数回答可）

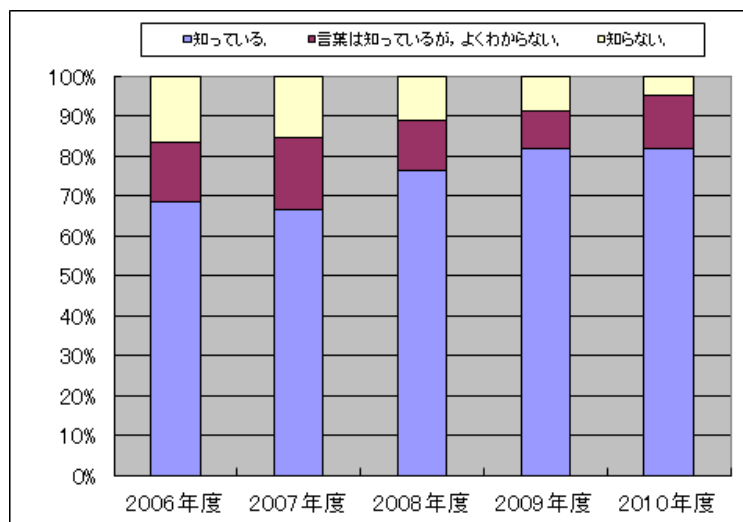
2008年度以降は、「演習」「実験・実習」「講義時間外」のいずれかで指導を受けたとする回答が90%を超えており、TA制度は定着している。



[20]指導教員制度についてお尋ねします。

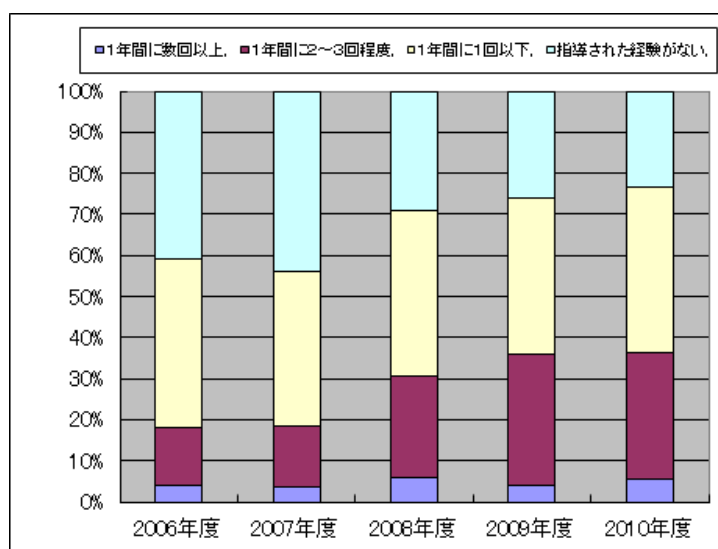
[20-1]指導教員制度を知っていますか。

「知っている」とする回答は、2007年度には70%を下回っていたが、それ以降は増加し、2009年度からは80%を超えている。一方で「知らない」、「言葉は知っているが、よくわからない」の回答が20%近くある。改善の余地がある。



[20-2]1年生から3年生の間に、指導教員から指導やガイダンスを受けた経験がありますか。（受けた経験のある方は、1年間の平均的な回数を答えて下さい。）

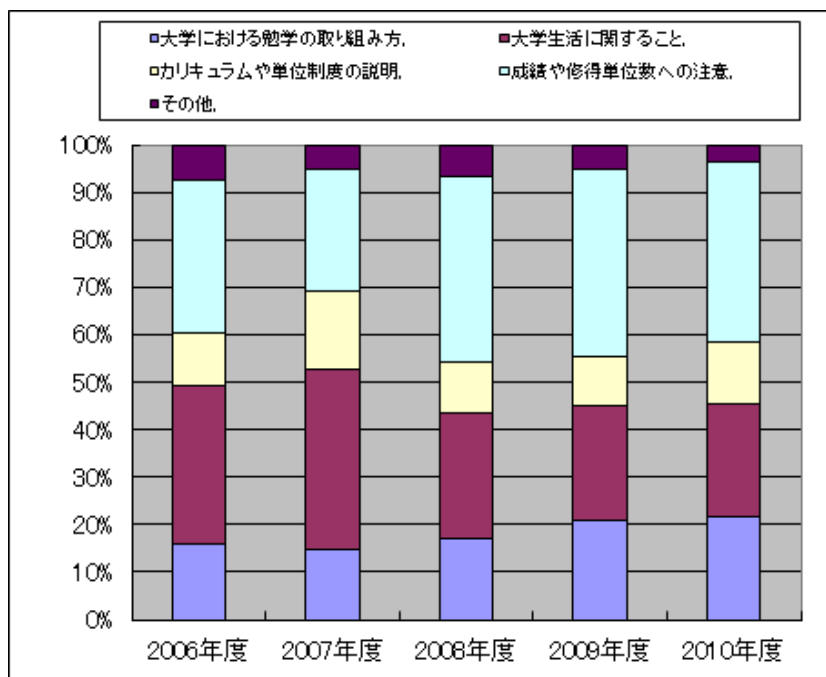
指導された経験を有する者は増え、経験の無い者は減少している。しかしながら、経験の無い者はまだ20%を超えており、改善の余地がある。



[20-3][20-2]でA（1年間に数回以上）、B（1年間に2〜3回程度）、C（1年間に1回以下）のいずれ

れかを答えた方：1年生から3年生の間に、指導教員から指導を受けた内容を答えて下さい。（複数回答可）

勉学の取り組み、生活全般、カリキュラム、単位、成績のいずれも話題になっている。「その他」としては、進路、就職に関するものが多い。



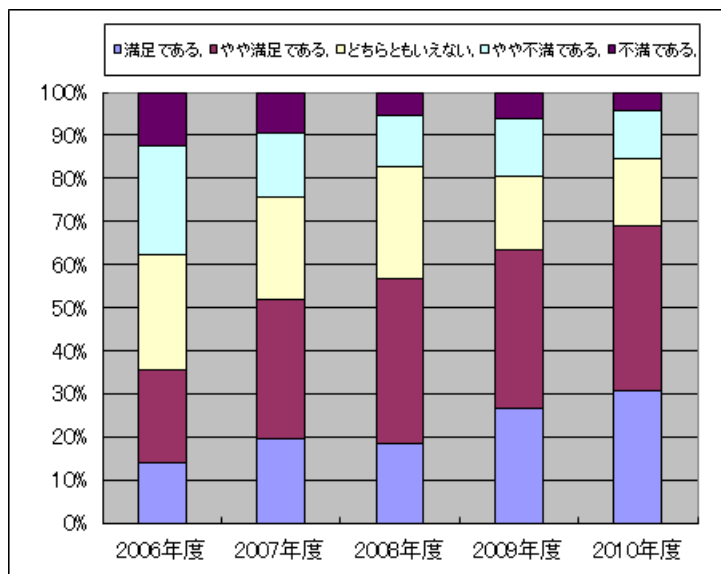
E（その他）[具体的に：]

- ・ 就職について。
- ・ 進学面談
- ・ バイト何やってる、サークル何やってるときか
- ・ 進路に関するアドバイス
- ・ 卒業後の進路について
- ・ 就職に関して
- ・ 進路相談
- ・ 就職活動について。
- ・ 年に1回、面談はあったが、特に指導はなし。
- ・ 就職・進学について
- ・ 進路、何がしたいのか等
- ・ 就職活動の話
- ・ 就職、進学について
- ・ 英語の重要性。
- ・ 人生
- ・ 進路や、順調かどうかなど
- ・ 進路について
- ・ 自己評価シートの提出
- ・ 進路について

[21]施設や設備等についてお尋ねします。

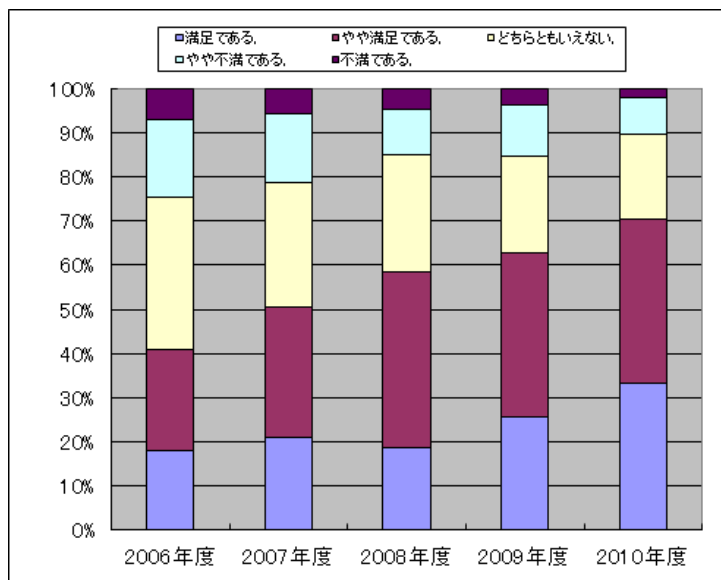
[21-1]教室の広さ、席数、明るさ等について、満足していますか。

2006 年度には「不満である」または「やや不満である」とする回答が 40%近くあったが、2008年度以降は20%以下に減少している。一方、「満足である」または「やや満足である」とする回答は漸次増加し、2010 年度には 70%近くに達している。学生の満足度は改善されてきている。



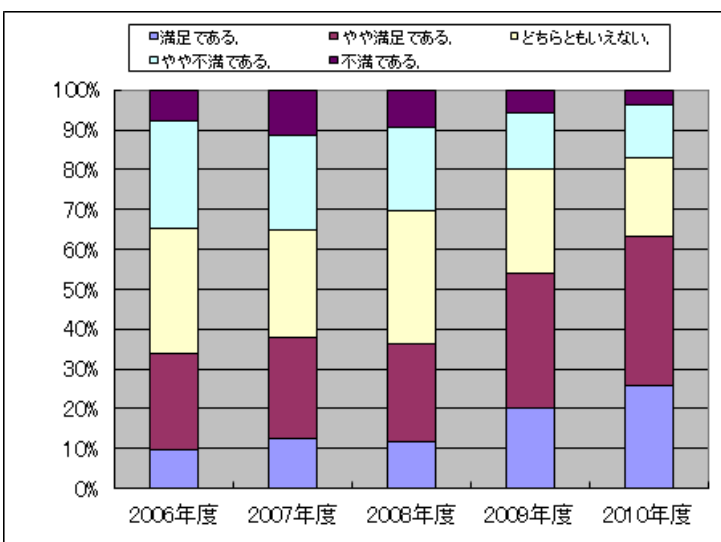
[21-2]必要な設備（マイク、OHP、プロジェクタ等）に満足していますか。

2006 年度は「満足である」または「やや満足である」とする回答が約 40%に過ぎなかった。その後、順調に増加し、2010 年度には 70%に達している。一方、「やや不満である」または「不満である」とする回答は減少し、2010 年度には 10%となっている。学生の満足度は改善されてきている。



[21-3] 1年生から3年生の間に利用した実験室・実習室の広さ、明るさ等について、満足していますか。

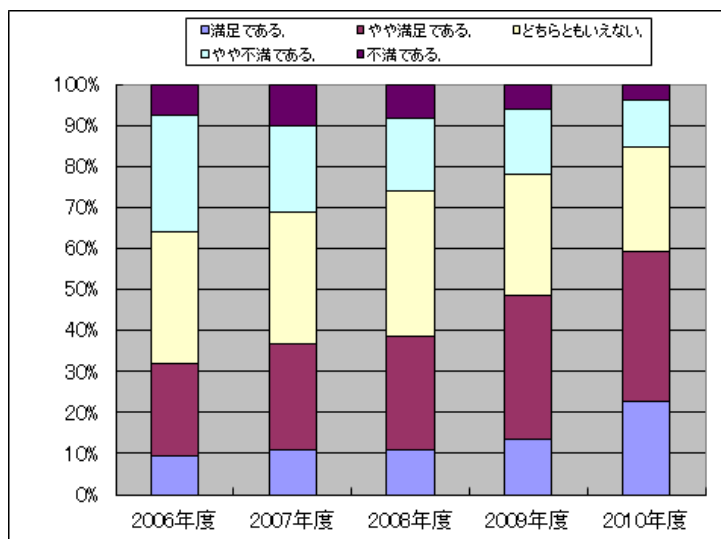
2006 年度に「満足である」または「やや満足である」とする回答は約 35%であった。多少の増減が見られるものの、順調に増加しており、2010 年度には 65%近くにまで達している。一方、「やや不満である」または「不



満足である」とする回答は2010年度には20%を下回っている。学生の満足度に改善が見られる。

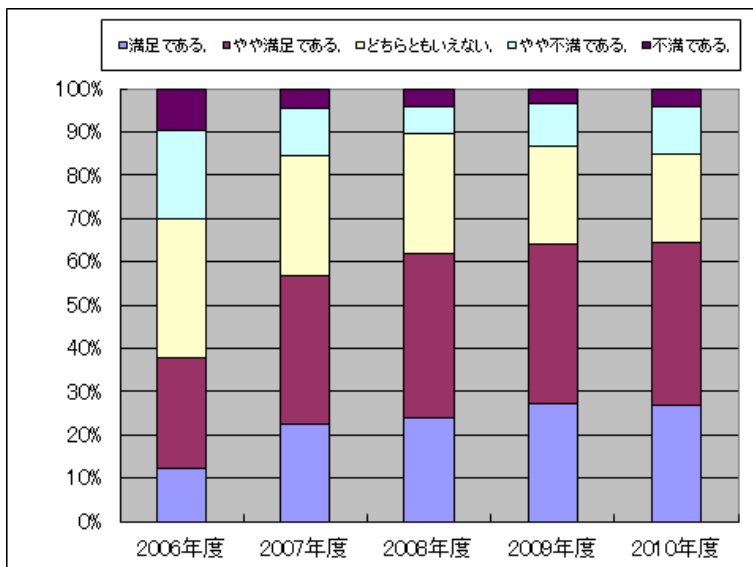
[21-4] 1年生から3年生の間に利用した実験・実習に必要な設備・装置について、満足していますか。

2006年度には「満足である」「やや満足である」とする回答は30%程度に過ぎなかったが、その後、順調に増加して2010年度は約60%に達している。一方、「やや不満である」「不満である」は約15%にまで減少してきている。学生の満足度は改善している。



[22-1] 情報機器（コンピュータ端末等）の整備状況について満足していますか。

昨年と比べて「満足である」「やや満足である」の比率が伸び悩んでおり、改善の努力が必要である。



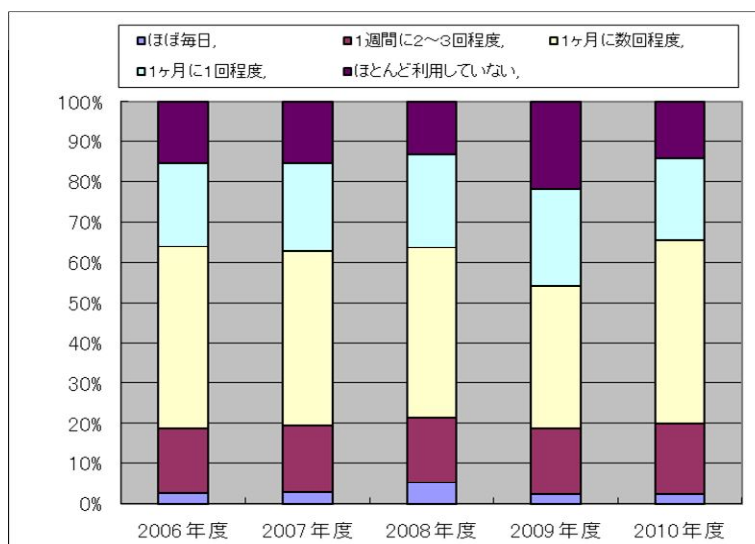
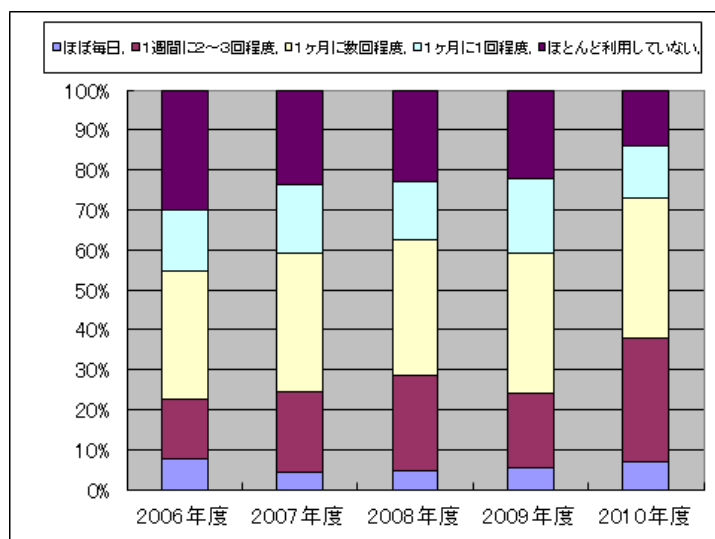
[22-2] 1年生から3年生の間に、講義以外でネットワークや情報サービス（ソフトウェア、教材を含む）を、どの程度利用しましたか。

昨年に比べて、「1週間に2～3回程度」が増加している。これが一時的なものかどうか推移を注意する必要がある。ITに関しては現行レベルを考えると機器の充実よりも情報ネットワークの重要性を理解させるためのカリキュラムを充実させることが重要である。

[23]図書館についてお尋ねします。

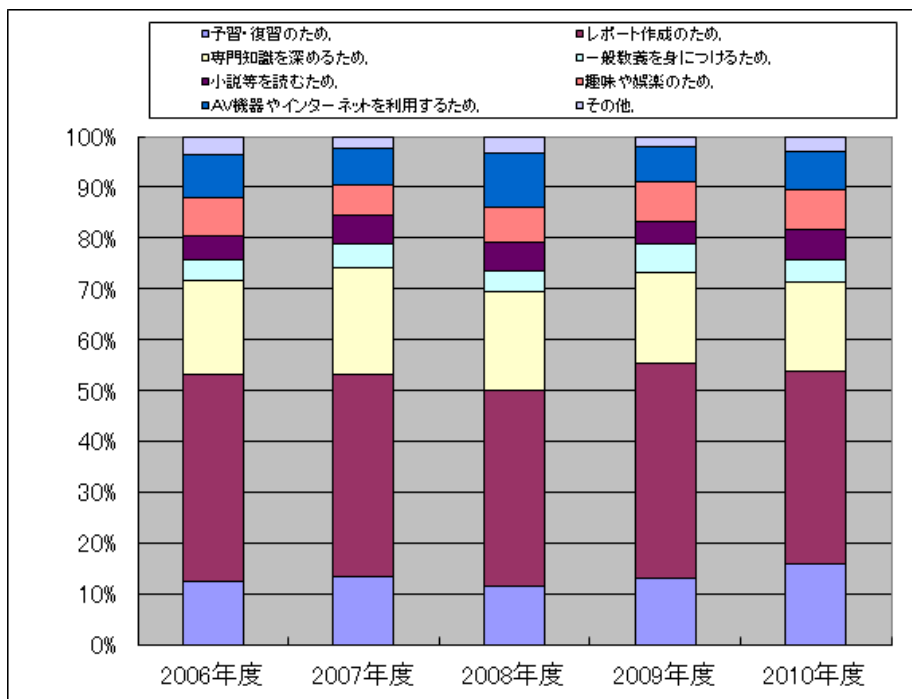
[23-1]図書館を利用している頻度はどの程度ですか。

これまで増加傾向にあった昨年に比べて、「1ヶ月に1回以下しか利用しない学生」が減少し、増加傾向に歯止めがかかった。今後とも図書館の利用を講義などで促す努力が必要であろう。インターネットのウィキペディアなどでは得られない情報が図書館には詰まっていることを教えるべきである。



[23-2]図書館を利用する主な理由を答えて下さい。(複数回答可)

昨年度と似た傾向である。ここ数年、予習、復習のための利用の比率が序々に増えてきている。図書館の利用形態としては正しい利用法が序々に増えていることは好ましい傾向である。しかし、依然小説等を読むための利用が最も比率が高く、余暇として図書館を利用していることがうかがわれる。図書館本来の目的と合致するかどうかは議論の対象となるところもあるかもしれないが、現在では IT 情報を駆使できる能力は学生のような若者にとって非常に価値があると思われ、この点は大学側も真剣に努力すべきと思われる。



H (その他) [具体的に：

]

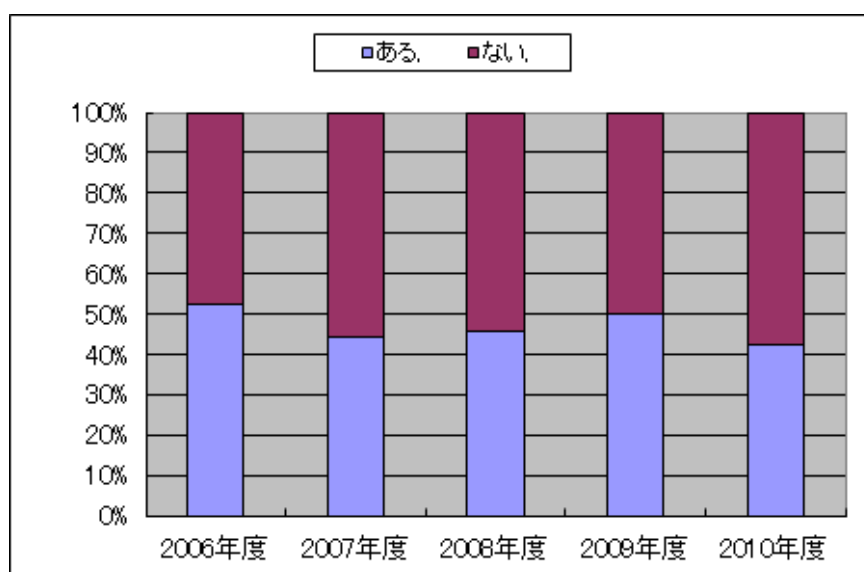
- ・ 新聞の閲覧
- ・ 試験勉強
- ・ レンタルDVD
- ・ 講義で4Fを使っていた。
- ・ 新聞を読むため
- ・ テスト前
- ・ 試験勉強
- ・ 文献を探がすため、新聞を読むため(雑誌等含む)
- ・ テスト勉強
- ・ 西日本スポーツを読む。
- ・ 本をかりるため
- ・ 試験勉強
- ・ 試験前
- ・ テスト勉強
- ・ テスト勉強
- ・ テスト勉強
- ・ テスト勉強

- ・ テスト
- ・ テスト勉強
- ・ テスト勉強のため
- ・ テスト勉強
- ・ 成績確認のため。
- ・ テスト勉強
- ・ テスト勉強
- ・ 専門書を借りるため。
- ・ テスト勉強
- ・ 文献収集

[24]工場見学やインターンシップ（工場実習）についてお尋ねします。

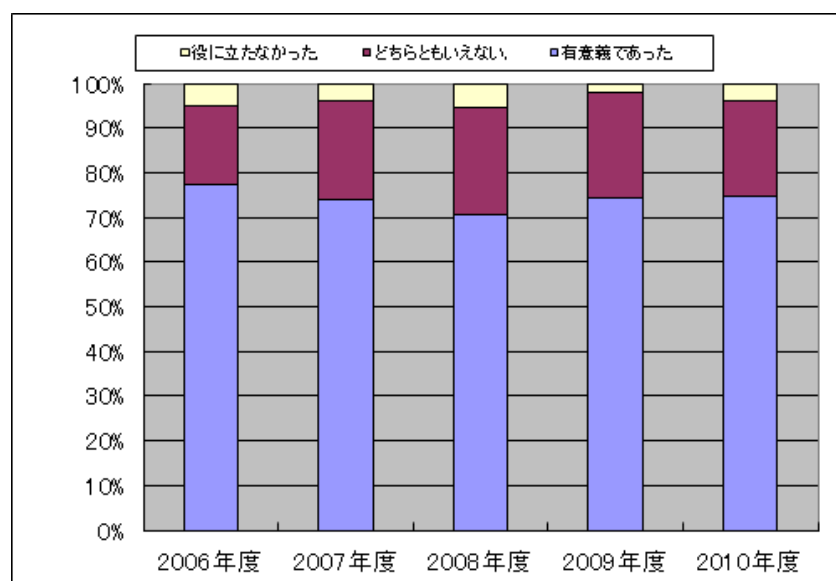
[24-1]工場見学やインターンシップに参加した経験がありますか。

ここ数年インターンシップ参加者は 40%～50%の範囲で横ばい状態である。就職前に現場の内容や雰囲気を知ることには重要であり、半数以上の卒業生が経験していないという事実は無視できないものと思われる。大学側もさらなる改善へ向けた努力が必要である。



[24-2][24-1]でA（ある）と答えた方。工場見学やインターンシップに参加した経験が、自分自身の成長のために有意義であり、履修した価値がありましたか。

ここ 5 年間では大きな変化はなく、70%のインターンシップ経験者が有意義と答えている。インターンシップ参加者が増大するよう今後も努力が必要である。



2. 2 2011年度修了生アンケート（工学府・工学研究科）

※アンケート実施年月日 平成23年 1月27日

※アンケート回収率

課程	配付枚数	回収枚数（回答率）
博士前期課程	341枚	273枚（80.0%）
博士後期課程	11枚	9枚（81.8%）

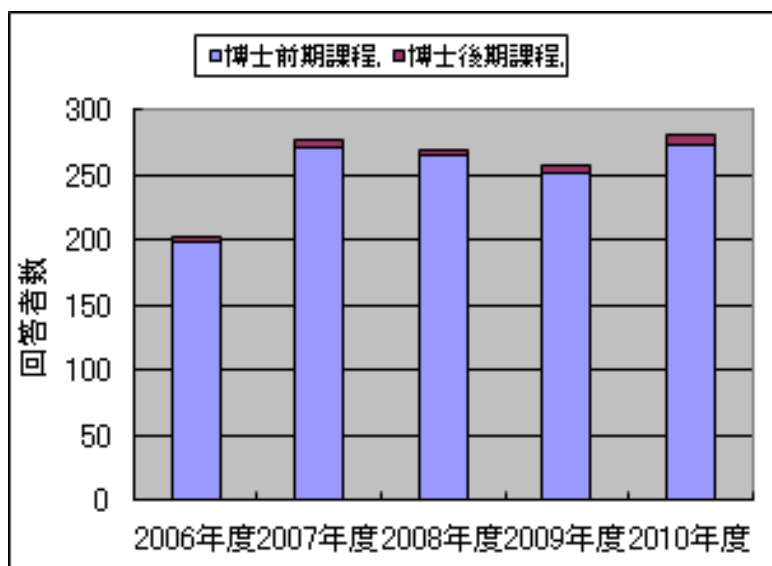
[1]あなたの課程、専攻についてお答え下さい。

[1-1]あなたが修了される課程
は何ですか。

A（博士前期課程）273名

B（博士後期課程）9名

博士前期課程の回答者数は2007年度以降は80%前後であり、かなり高い回答率である。博士後期課程は母数が小さいから変動で一喜一憂することはない。アンケートの趣旨を理解してもらう努力は続ける必要がある。



[1-2]あなたが修了される専攻
は何ですか。

機械知能工学：92名

建設社会工学：17名

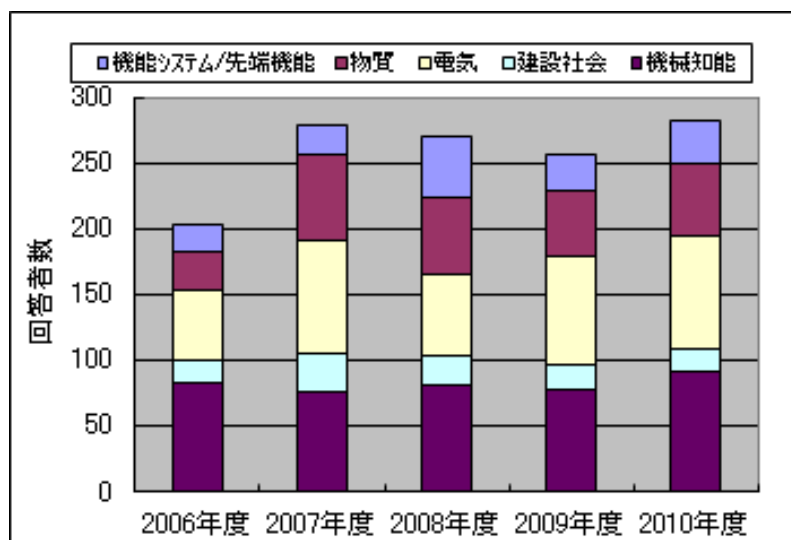
電気工学：86名

物質工学：54名

機能システム創成工学

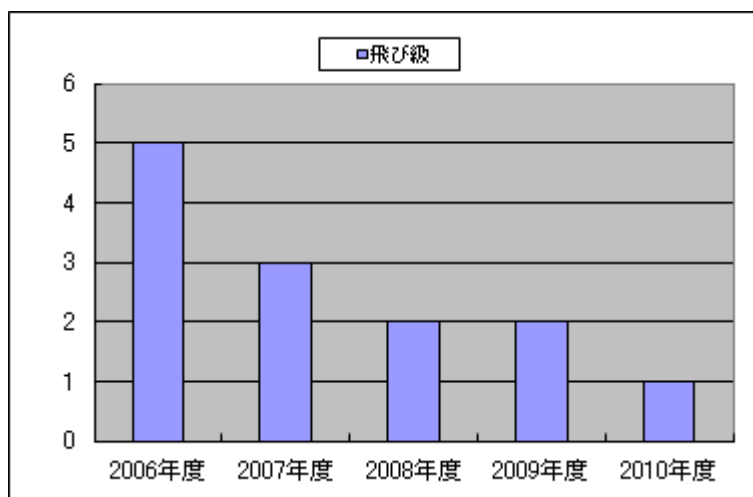
／先端機能システム工学

：33名



[1-3]飛び級入学の方は [] に
○を入れてください。 [1名]

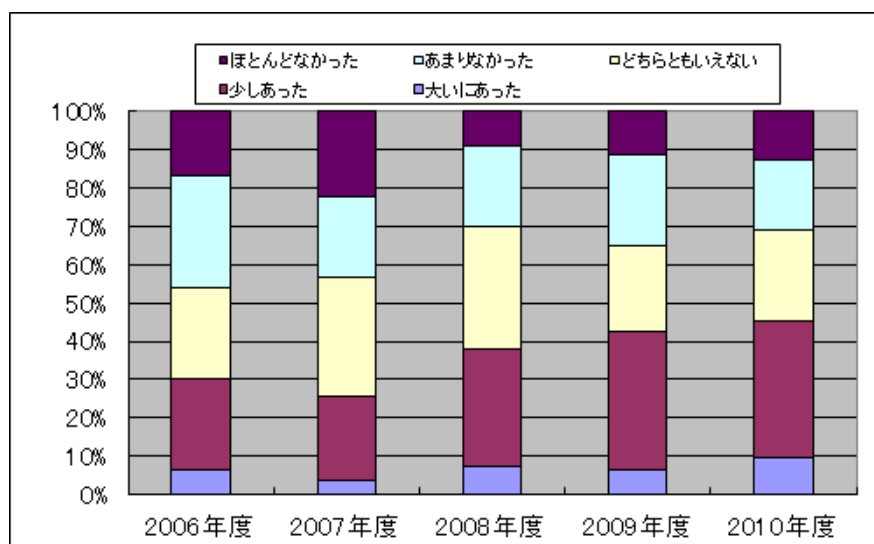
飛び級の入学者の数は1名
で、ここ数年は2～1名で推移
している。飛び級は多ければよ
いというものではないため、現
時点では、調査を継続的に実施
し、将来、飛び級にまつわる問
題を検討しなければならない時
の資料とすべきである。



[2]工学府・工学研究科における大学院教育があなたの成長（自己形成）に及ぼした効果についてお尋ねしま
す。

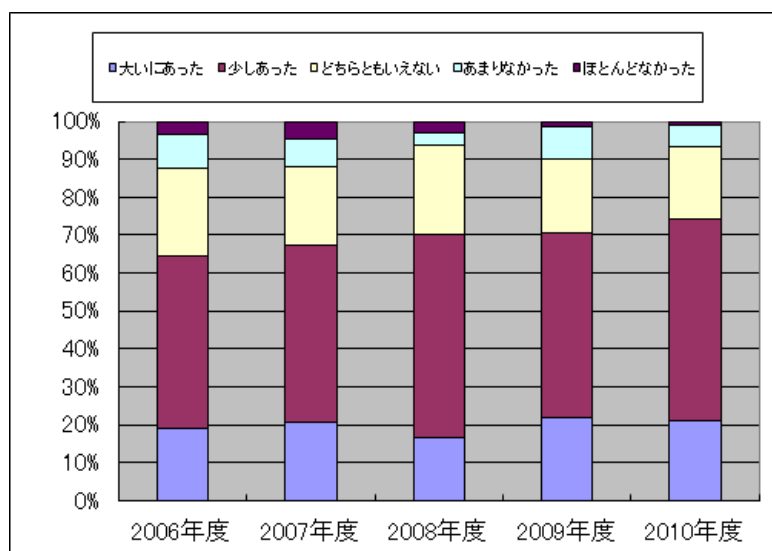
[2-1]外国語科目はあなたの自
己形成に効果がありましたか。
(受講生のみ)

「大いにあった」、「少しは
あった」が2007年度以降、序々で
はあるか増加している。これは
良い傾向であるが、主に減少
しているのは「どちらともいえ
ない」であり、ここ数年「あま
りなかった」、「ほとんどなか
った」の比率は変化していない。
外国語に対するモチベーション
の持ち方によって、差が出てい
ると考えられる。外国語科目は
他の「共通科目」、「専門科目」
比べて効果があったと回答した
比率が少なく、修了生が社会人
となった時に外国語でのコミュ
ニケーション能力が今後重要に
なって行くことを考慮すれば、
「あまりなかった」「ほとんど
なかった」の比率を小さくして
行く努力が必要である。



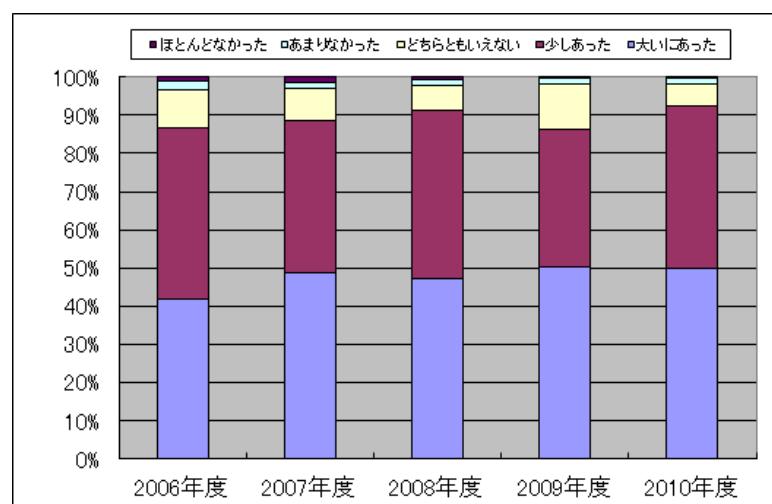
[2-2] 共通科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。

昨年度と同様の傾向を示し、共通科目の教育効果については、「少しはある」以上が70%の水準にあり、一定の効果を果たしていると思われる。また、「あまりない」「ほとんど無い」はあわせても5%で良好な状況にある。



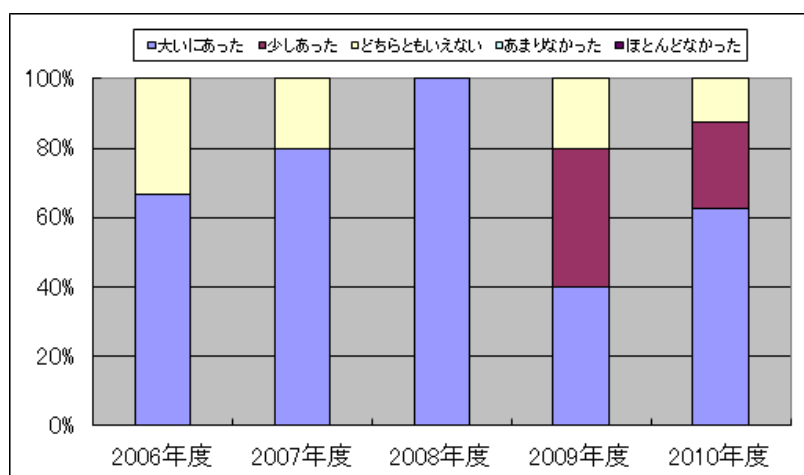
[2-3] 専門科目はあなたの自己形成に効果がありましたか。

安定した推移を示し、ここ5年間は大きな変化はない。「少しはある」以上が90%以上ということから専門科目の自己形成に対する高い影響力がうかがえ、良好な状況にある。



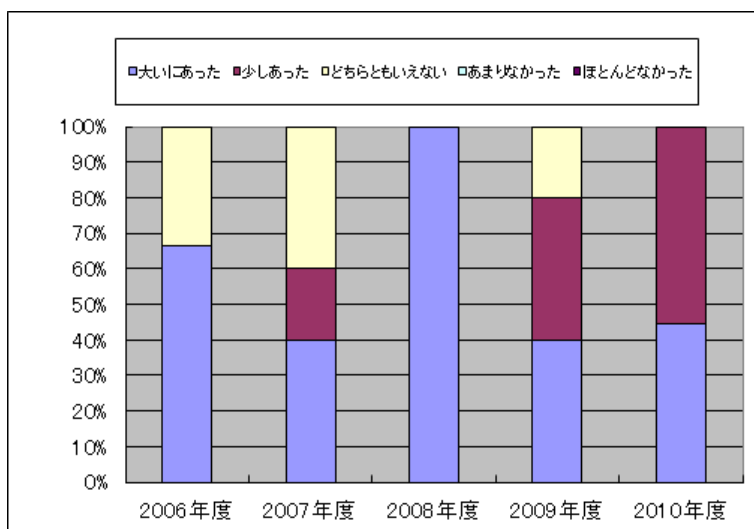
[2-4] 学外研修・特別演習はあなたの自己形成に効果ありましたか。(博士後期課程の方のみ)

博士後期課程の回答者は9名で6名が「大いにある」、2名が「少しあった」、1名が「どちらともいえない」と回答している。回答数が9名であることや、本人の自己努力によるところもあり一概にアンケート結果から議論すべきではない。博士後期課程の学生数が少ないことを考慮すれば、事前の準備をきちんとして、100%「大いにある」になるべきであろう。



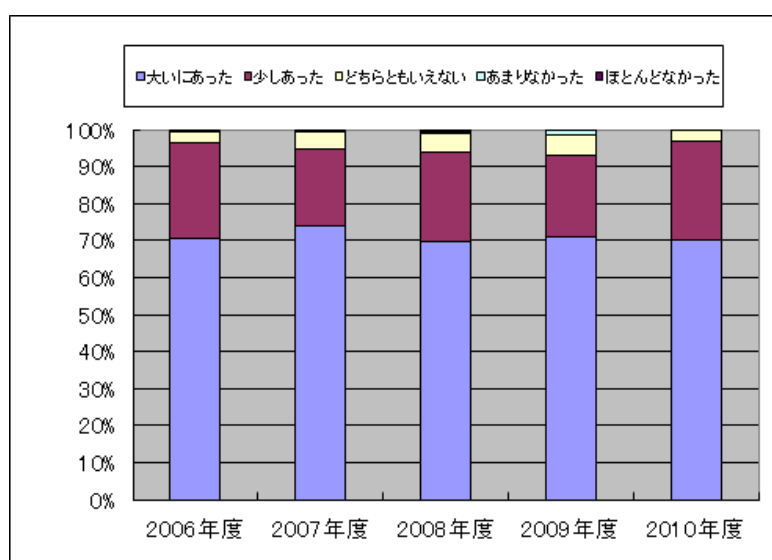
[2-5] プロジェクト研究はあなたの自己形成に効果がありましたか。(博士後期課程の方のみ)

博士後期課程の回答者は9名と少ないので統計データとしての有効性の判断には慎重を要する。



[2-6] 学位（修士・博士）論文のための取組みはあなたの自己形成に効果がありましたか。

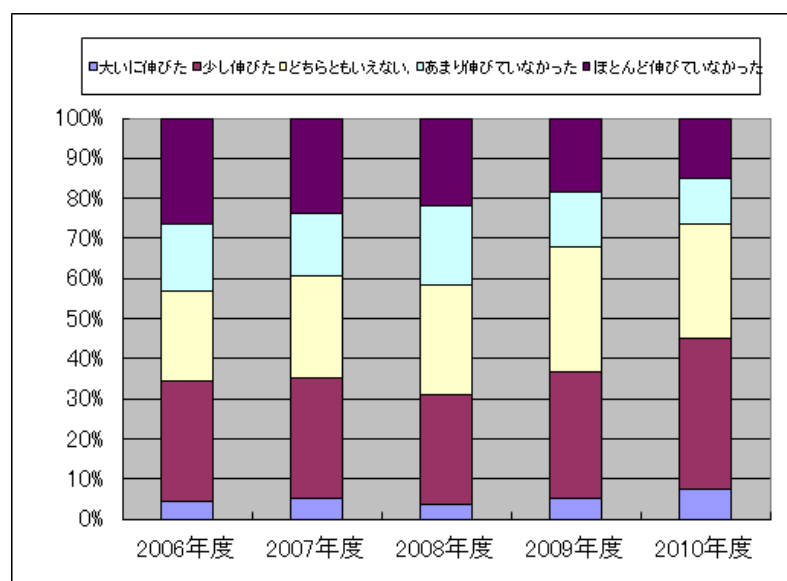
昨年度とほぼ同様であり、学位（修士・博士）論文取り組みの自己形成効果については、「大いにあった」と「少しあった」の合計が9割以上の水準を保持しており、一定の教育効果が肯定的に受け止められていると判断できる。



[3] 英語力についてお尋ねします。

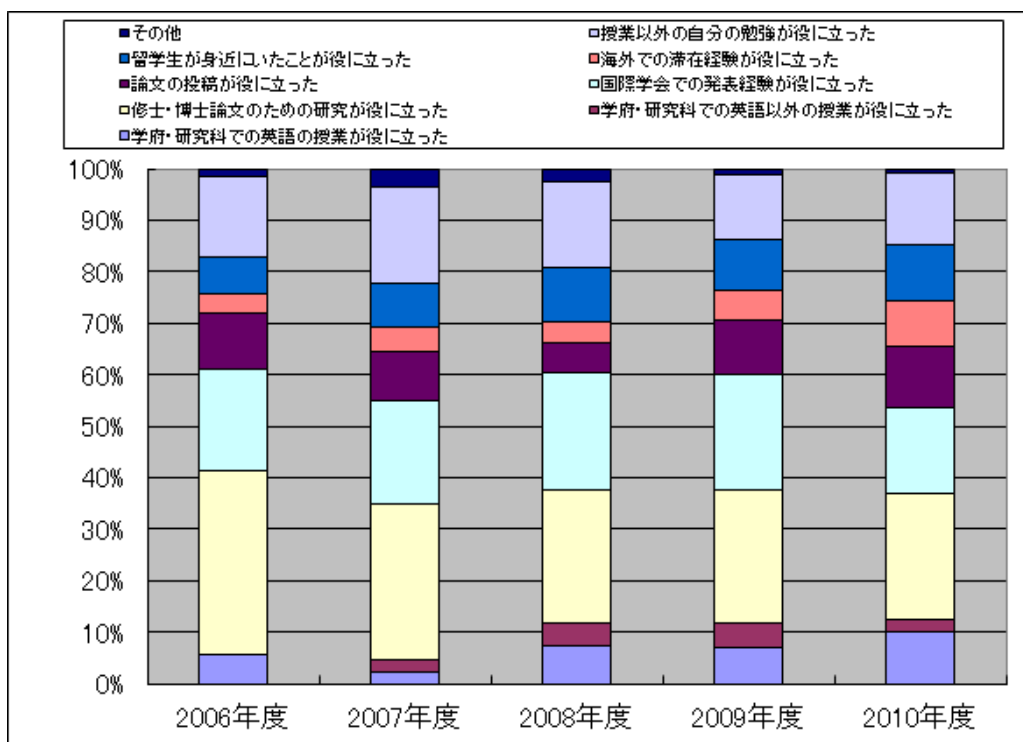
[3-1] 研究科の在学期間であなたの英語力は伸びましたか。

英語力が「ほとんど伸びていない」とする者と「あまり伸びていない」とする者の合計は30%強で2008年度以降減少傾向にある。一方、「大いに伸びた」、「少し伸びた」は増加傾向にあり、全体としては良い傾向を示している。外国語によるコミュニケーション能力が企業において重視される傾向は続くので、今後もこの傾向を維持する努力が必要である。



[3-2][3-1]でA（おおいに伸びた）またはB（少し伸びた）と回答された方：その理由は何ですか。（複数回答可）

ここ5年間で全体の比率に大きな変化はない。強いて言えば、「海外での滞在経験」「論文投稿」「英語の授業」が増加傾向にあり、「国際学会」が減少傾向にある。「国際会議」が減少傾向にある理由は原因が不明であり、調査を必要とする。ただ、英語にふれあう時間に比例して学生が語学力を向上させたと考えているように推察される。外国語によるコミュニケーション能力の必要性が高くなることを考慮すれば、今後も英語にふれあう機会を増やすことが必要と思われる。



I（その他）[具体的に：]

- ・ 研究室での勉強会。
- ・ 外国語論文を読む機会が多かった

[3-3][3-1]でD（あまり伸びていない）またはE（ほとんど伸びていない）と答えた方：その理由は何ですか。

社会に出てからの英語の必要性の認識不足、さらに英語に接する機会が少ないことなどから、英語学習に対する努力の不足を自分自身で感じている。何れにしても「英語力」を必要とする機会増大の方策が望まれる。

- ・ 院試の成績が悪かった
- ・ 語学をしなかった。
- ・ 継続して勉強しなかった。
- ・ 週1時間でのびるわけない。
- ・ 自主的に勉強に取り組まなかった
- ・ 自分から意欲的に取り組まなかったため。
- ・ 英語を学ぶ機会が少なかった
- ・ 勉強する機会が少なかった。
- ・ あまり英語を勉強しなかった。
- ・ 専門的な英語は身に付いたが一般的な英語は身に付かなかったから

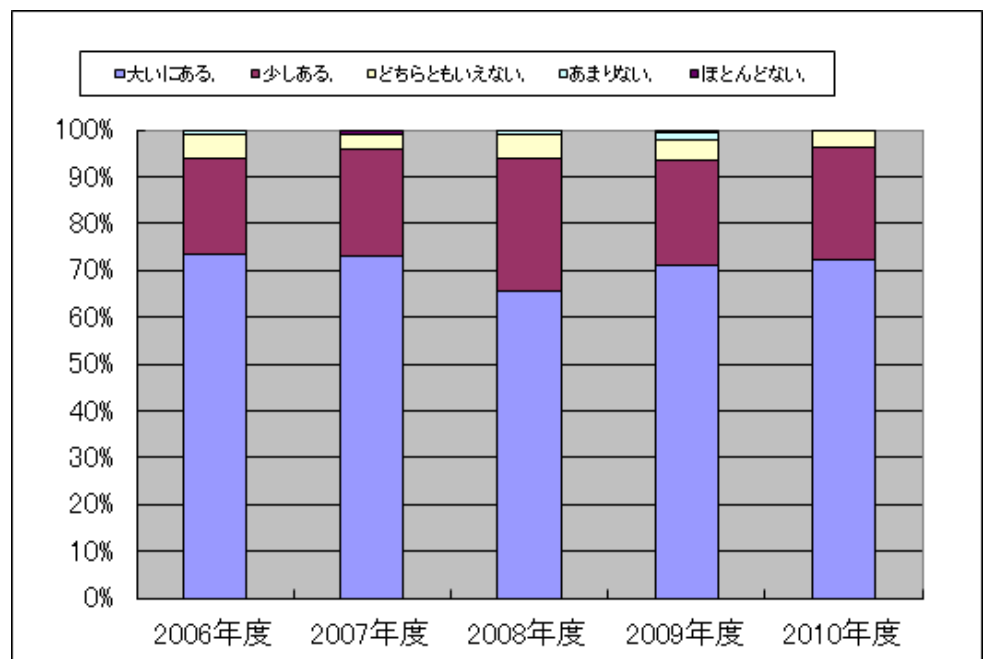
- ・ 英語を使う機会が少ない。研究など他の事で忙しい
- ・ 外国語科目以外にほぼ何もしていないから
- ・ 元々英語が苦手
- ・ TOEICを受けなかったから
- ・ あまり勉強してない
- ・ 英語を使う機会が無かった
- ・ 日常で使っていないから
- ・ 英語の授業がなかったのだ。
- ・ 英語を使う機会がない。英語科目は意味ない。意図が分からない。英語の論文を読んだだけで英語がしゃべれるなら苦労はしない。高校の英語みたいなのの方がよっぽどマシ
- ・ 英語の授業がほとんどないから
- ・ 英語を積極的に学ぼうとしなかった。
- ・ 授業が少ない
- ・ あまり英語の勉強をしなかった。
- ・ あまり勉強していなかった。
- ・ あまり勉強していなかったため。
- ・ あまり使わないから
- ・ 特に勉強していないので
- ・ 特に英語に触れる機会がなかった。
- ・ 全部
- ・ 英語を勉強しなかったため。
- ・ 英語の使用機会が短期的であったため
- ・ 勉強する取り組み不足。
- ・ 勉強不足。
- ・ 大学院ではあまり英語にふれる機会がなかった
- ・ 英語は反復が必要なので、講義中のみに英語を使用しても実力は伸びなかった
- ・ 英語に触れる機会が少なかったから
- ・ 何もしていないから
- ・ 継続性がなかった。きっかけにはなったが続けられなかったのは自分の責任。
- ・ 取り組みの時間を確保できなかった。
- ・ 英語にふれる機会が少なかった。
- ・ 授業をあまり取らなかったから。
- ・ やる気が無かった。
- ・ 英語を使うことが少なかった
- ・ 勉強するというより会話する授業も必要な気がしました。
- ・ 勉強していないから
- ・ その場しのぎの学習しか出来ていなかったから
- ・ 個人的にTOEICの学習をたまにするていどだった。
- ・ 生かされる英語の勉強ができていなかったため
- ・ 特になし
- ・ センスがないから

- ・ 伸ばす必要性を感じとれなかったから。→工学部にせっかく来ているのだから、英語に時間を費す事は大変もったいないことです。
- ・ 使わなかった為
- ・ 英語にふれる機会が少ない。
- ・ 英文を読むスピードに変化がなかったから
- ・ 英語の勉強に力を入れていないから
- ・ 英語教育が少な過ぎる。自分で論文を読んだり書いたりするしか英語力向上のチャンスがない。
- ・ 独学で行うしかなかったから。
- ・ 自分で勉強しなかったから。
- ・ 読解の授業しかなかったため。
- ・ 研究が忙しく英語を勉強する時間がない
- ・ 英語の勉強をしていないため
- ・ 継続的に勉強していなかったため
- ・ 英語の授業がほとんどなかった
- ・ 英語にふれる機会があまりなかった。
- ・ 授業を必修しかとらなかったから
- ・ 何もしていないから。
- ・ 英語を必要とする機会が少なかった
- ・ 英語の先生がよくなかった。
- ・ 個人的なやる気の問題
- ・ 意欲的に英語を学ぼうとしなかったから
- ・ 勉強していないから
- ・ 英語に触れていない期間が長かったから

[4]学位（修士・博士）論文のための取組みについてお尋ねします。

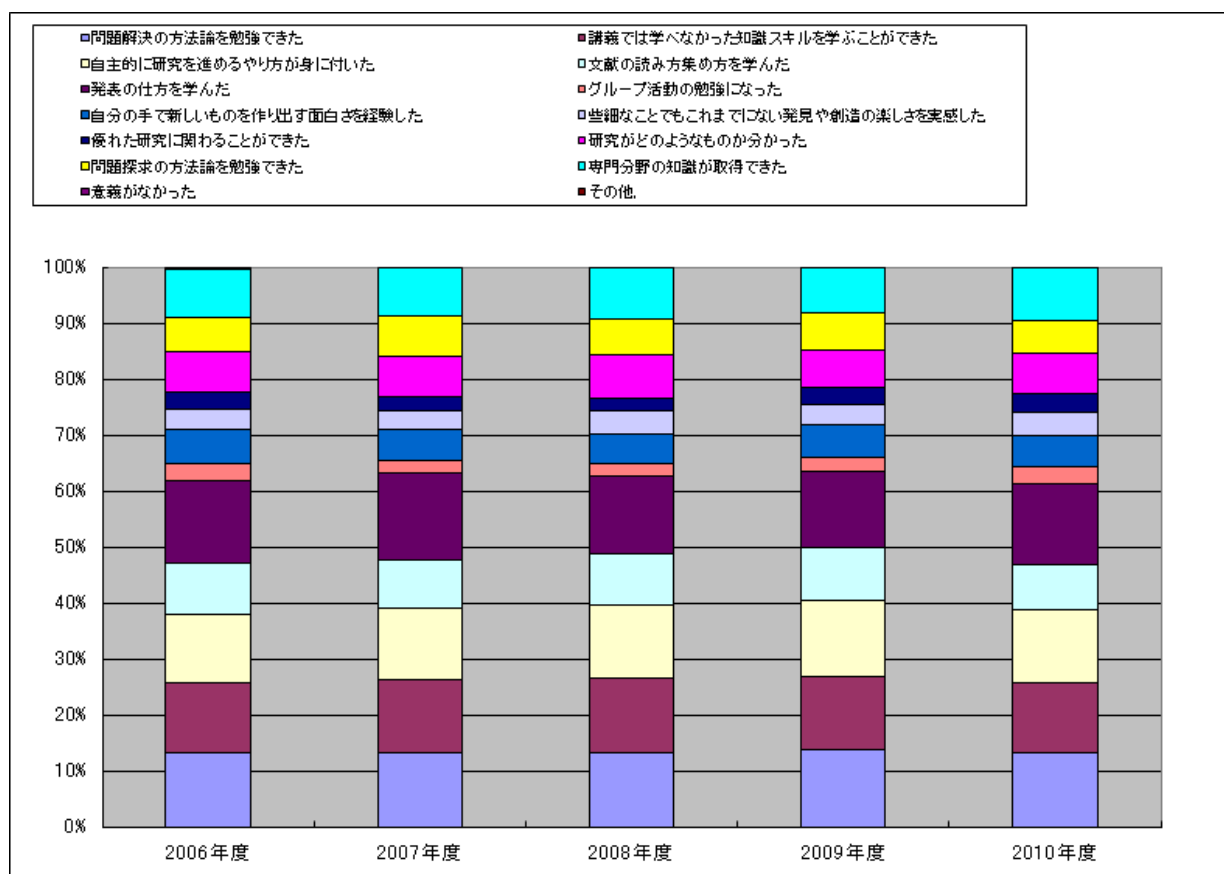
[4-1]学位論文の意義はあると思いますか。

ここ5年間、傾向はあまり変化しておらず、学位論文のための取組は大学院教育において重要と判断される。



[4-2][4-1]でA（大いにある）またはB（少しある）と答えた方：その理由は何ですか。（複数回答可）

ここ5年間比率に大きな変化はなく、課題解決の方法論、講義では学べない知識・スキルの取得、文献の読み方・集め方、発表の仕方が上位を占めており傾向は変化していない。



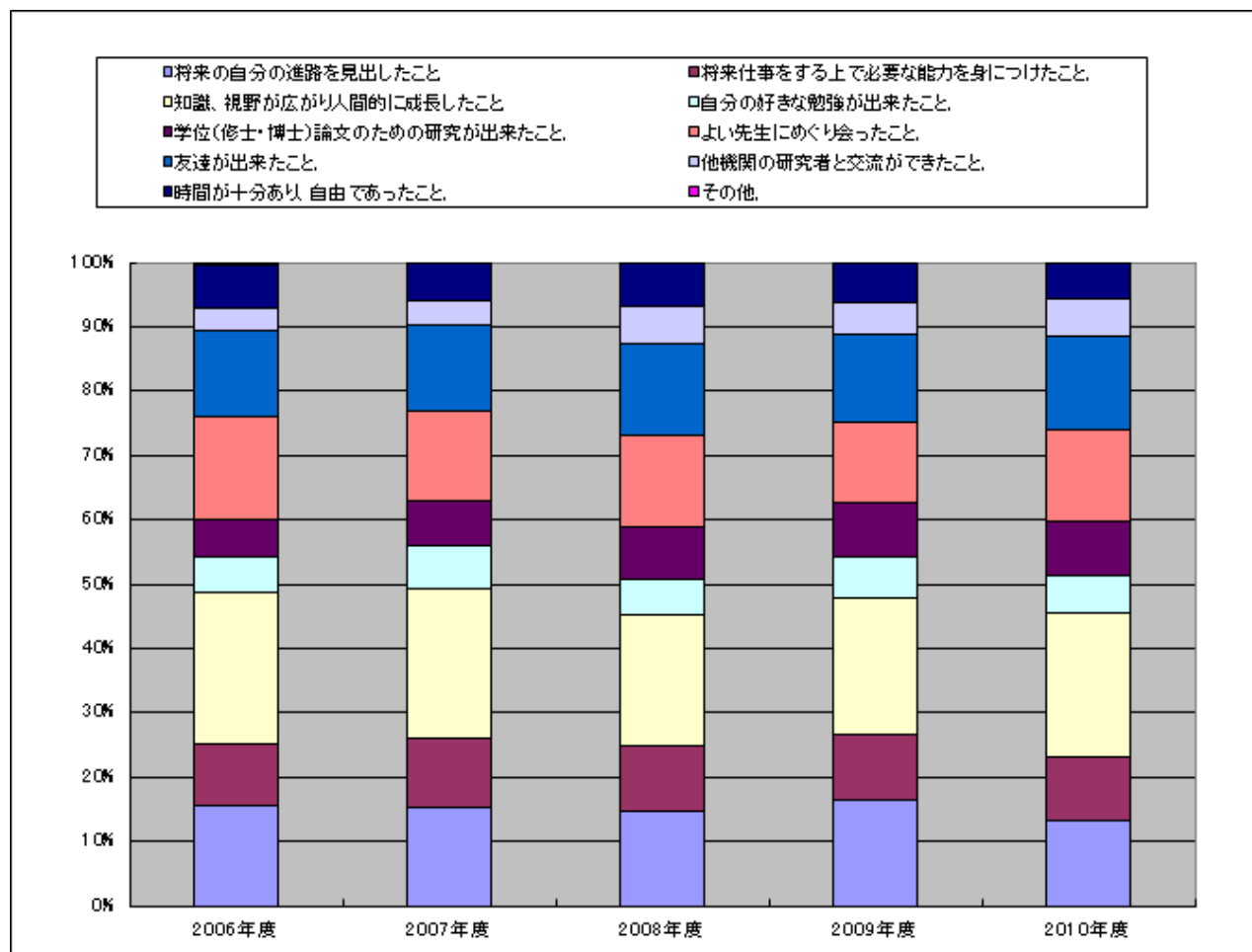
N（その他）〔具体的に： 〕

- ・ 後輩に対して、指示をどのように伝えたら理解するか
- ・ グループ活動により後輩の指導
- ・ 勉強してきた知識の使い方がわかった。

[4-3][4-1]でD（あまりない）またはE（ほとんどない）と答えた方：その理由は何ですか。（複数回答可）
（回答者なし）

[5] 学府・研究科生活を振り返って、どのようなことが良かったと思いますか。（複数回答可）

昨年度とほぼ同じで「将来の自分の進路を見いだした」と「知識・視野が広がり人間的に成長した」、「友達ができた」「良い先生に巡り合えた」などが割合的に多く、研究生活が人生の一つの大きなかなめになっていることが分かる。



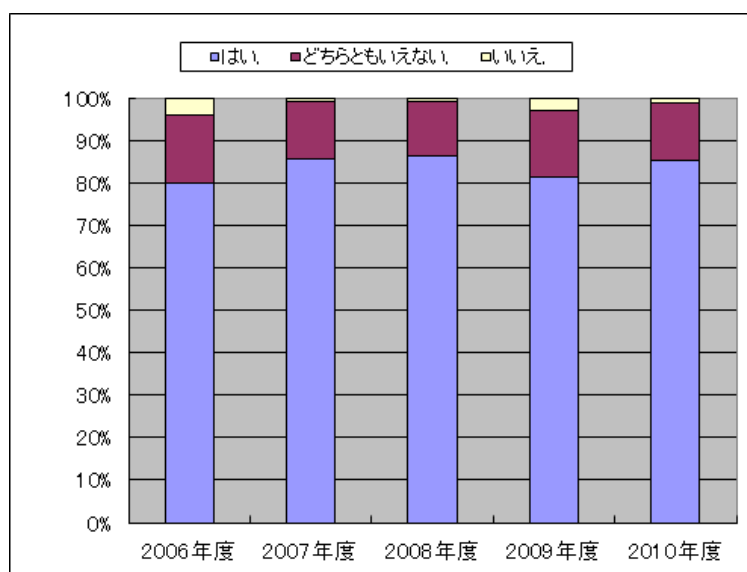
J (その他) [具体的に:]

- ・ 自分の問題点を再認識できた。

[6] 入学した専攻についてお尋ねします。

ここ5年間、「はい」が高い値をしており、院生の意識の高さが伺える。

[6-1] 現在の専攻に入学してよかったと思いますか。



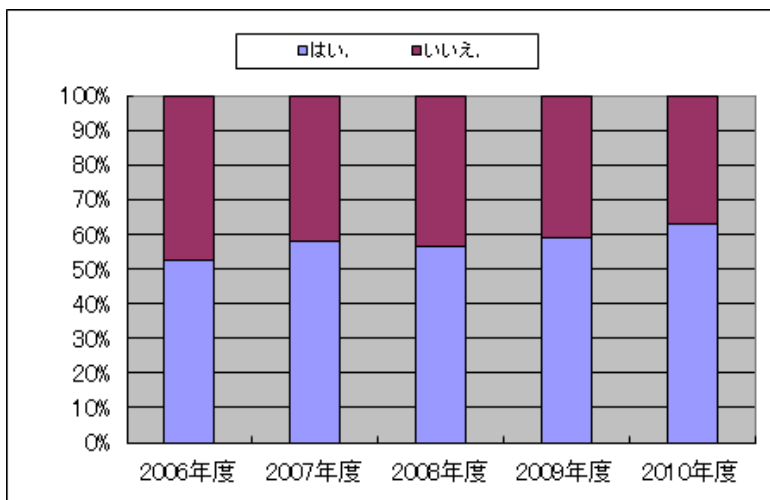
[6-2] [6-1] でC (いいえ) と答えた方: その理由は何ですか。

- ・ 就職と全くつながっていなかったから
- ・ 名前だけで中身の無い専攻。

[7]進学時の目標についてお尋ねします。

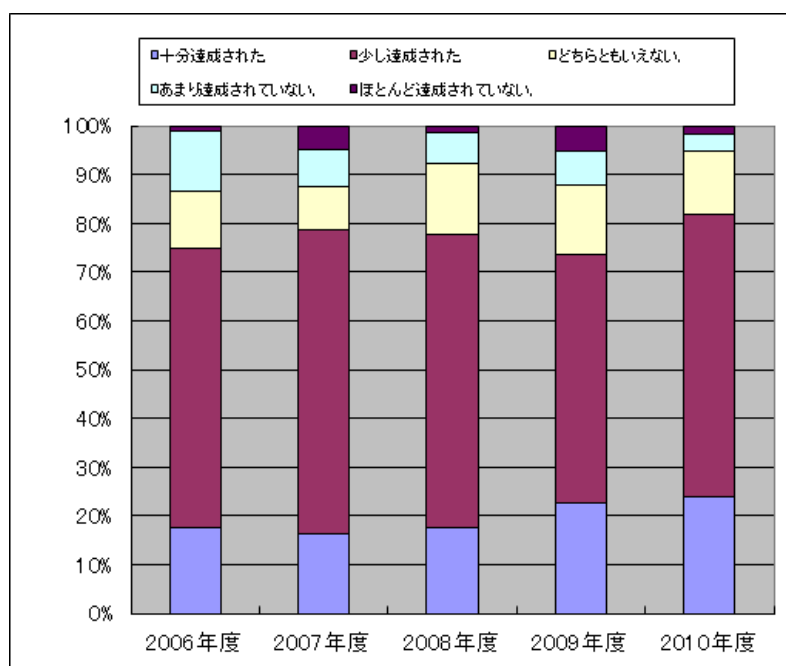
[7-1]あなたは進学の際に研究科で達成したい目標がありましたか。

昨年度と全く同じで目標を持って進学した院生の割合は60%近くある。もう少し比率が大きいたことが望ましいが、学生の資質の問題もあり、増加をさせる努力をしつつ、今後の推移を慎重に見守る必要がある。



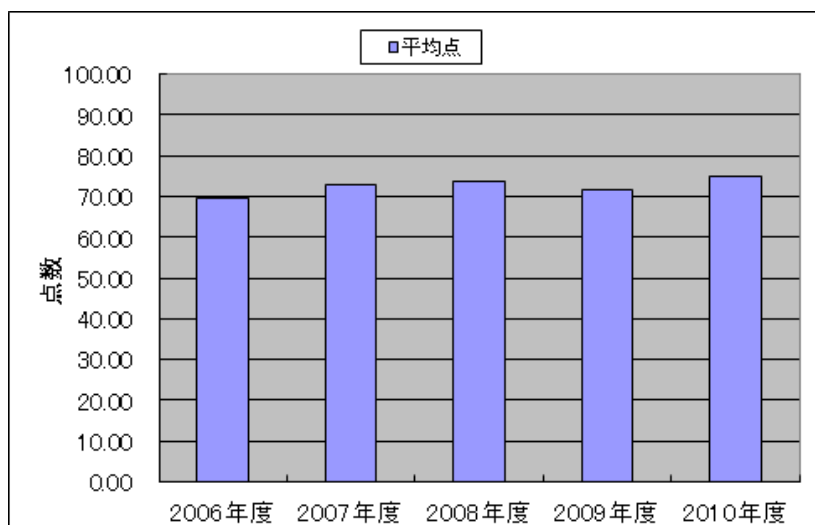
[7-2]でA（はい）と回答された方。現在どの程度達成されていますか。

達成感を有している院生の割合は80%強、「ほとんど達成されていない」とする院生は5%程度であり、達成されたと感じている学生の割合が多い。比率については5年間大きな変化はないが、重要な項目であり、今後注意を払って推移を見守っていく必要がある。



[8]学府・研究科在学中の学生生活の満足度に対して100点満点で点を付けるとすれば何点と思いますか。

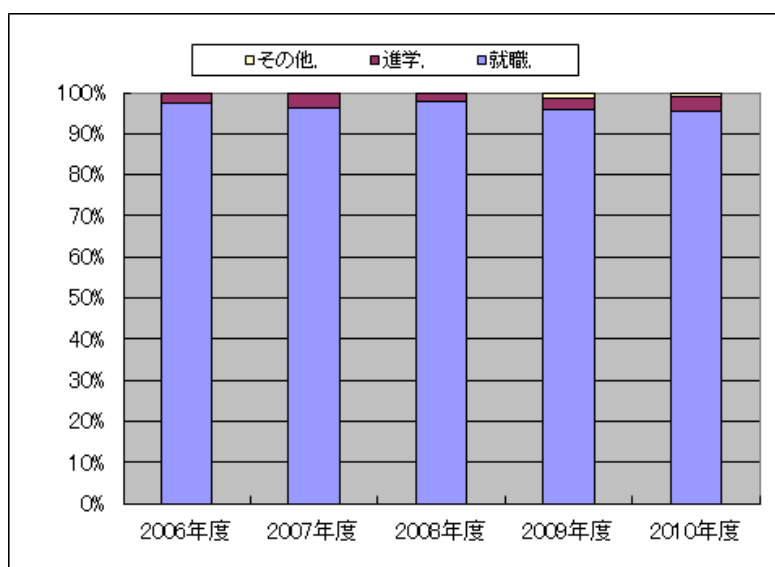
達成感を有している院生の増減と同調しているように見える。さらに向上に向けた努力が必要であろう。



[9]修了後の進路についてお尋ねします。

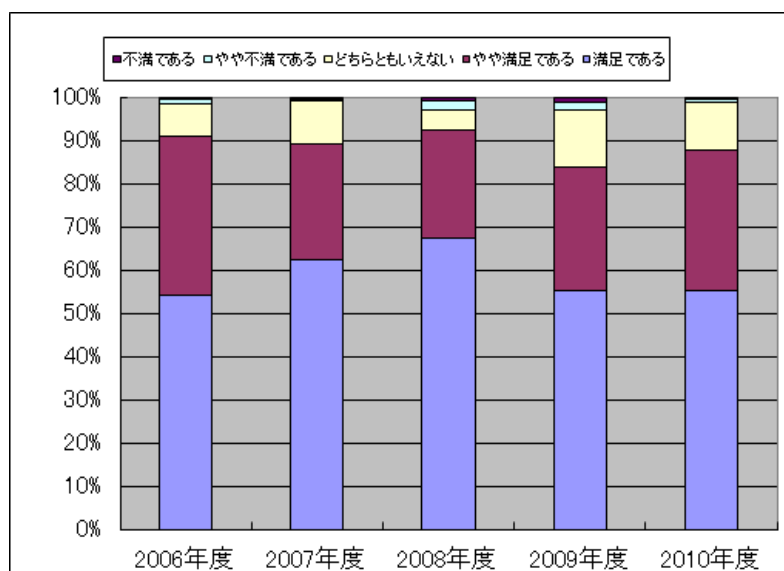
[9-1]あなたは修了後就職しますか、進学しますか。

就職する院生が95%以上で残りの学生が進学する傾向はここ数年変わらない。今後後期課程への進学率向上に向けた努力が必要であろう。



[9-2] あなたは修了後の進路に満足していますか。

修了後の進路に満足を感じている院生の割合は、減少しており、ここ2年はその傾向が強まった。原因についての精査、特に企業の景況感との関連付けが必要であろう。



[9-3] [9-2]でD（やや不満である）またはE（不満である）と答えた方：その理由は何ですか。

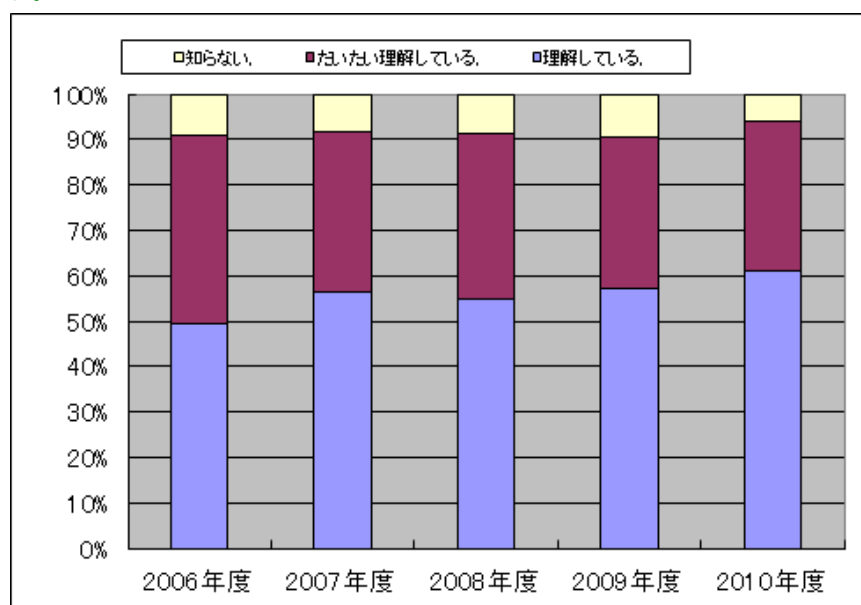
不満足感と言うよりは不安感と言った方が適切と思われる。

- ・ 自分の本当にやりたいことが見つけれなかった。
- ・ 心の底から入りたい職種でもなかったため
- ・ 就職留年だから
- ・ 不満はないから。

[10] 研究活動についてお尋ねします。

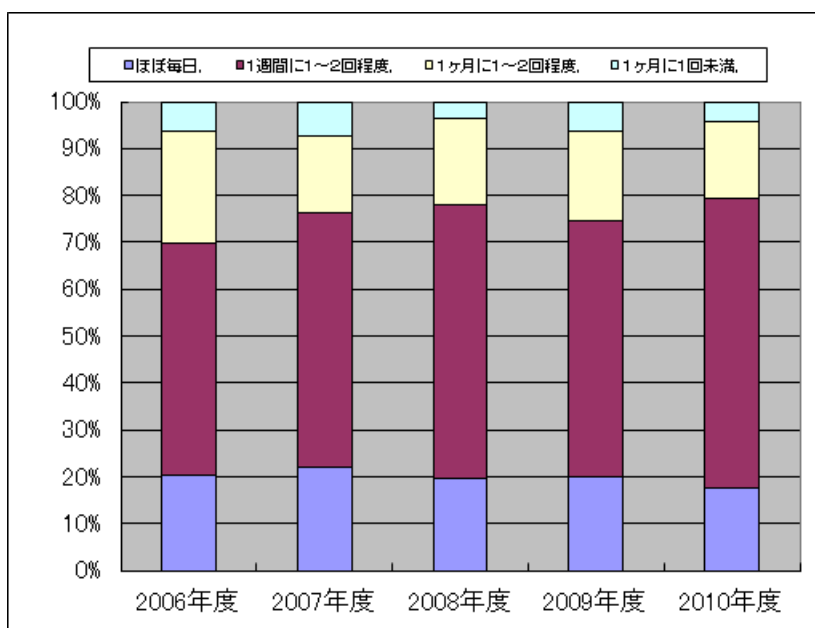
[10-1] 進学時の研究室の配属決定方法を理解していますか。

研究室配属決定方法を知らない院生は10%前後で変わらないが、さらなる周知徹底が必要であろう。



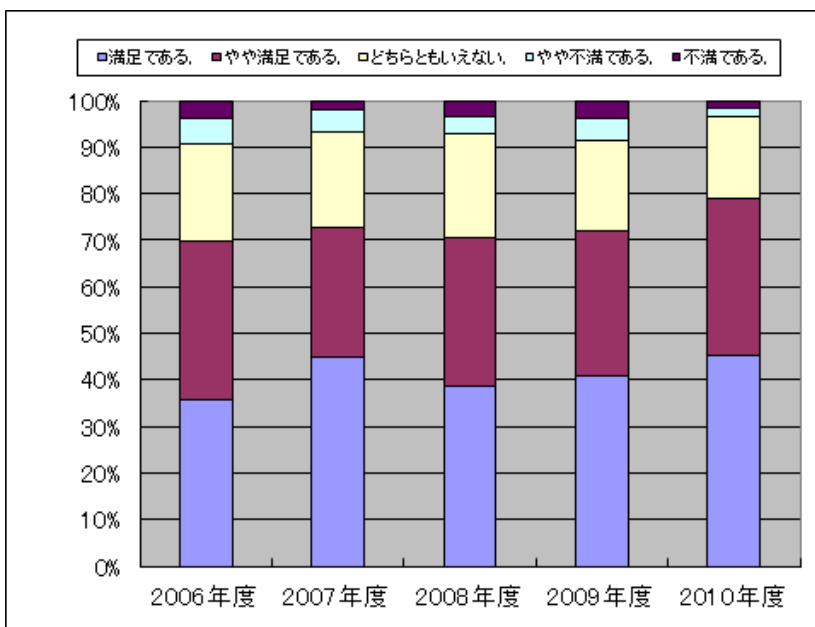
[10-2] 研究指導はどの程度の頻度で受けましたか。

「ほぼ毎日」の研究指導を受けた院生の割合は変わらないが、「1週間に1～2回程度」の院生が減少し、「1ヶ月に1～2回程度」、「1ヶ月に1回未満」と回答した院生が増える兆しも見えるので、その原因を調査し、教員が院生の研究指導にもっと多くの時間を割けるような対策、特に事務的仕事の軽減策を講じる必要がある。



[10-3] あなたの研究に対する指導方法について、どのように思っていますか。

「不満である」と「やや不満である」と回答した割合はやや増加の傾向がみられる。更に院生の研究指導方法改善の努力・工夫を続ける必要がある。



[10-4] [10-3]でD（やや不満である）またはE（不満）と答えた方：その理由は何ですか。

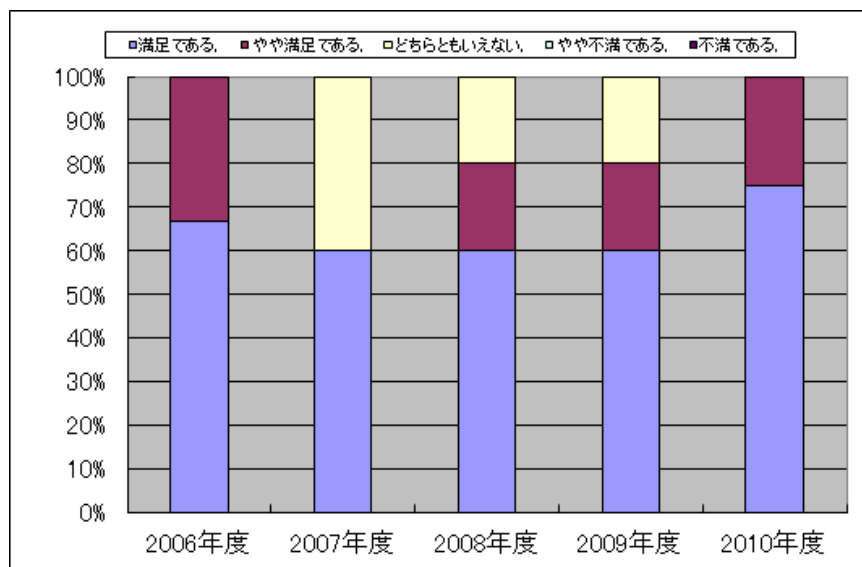
一部解釈不能な理由もあるが、特に指導時間が少なかった場合に不満を感じている様子が伺える。その原因を調査し、教員が院生の研究指導にもっと多くの時間を割けるような対策を早急に講じる必要がある。

- ・ 生徒の数に対して先生が少ない
- ・ 理不尽なことが多々あった
- ・ 無理なことを押しつけすぎ
- ・ 何も教えてもらわなかった
- ・ じゃまだった、指導ではない
- ・ 指導を受けていない。
- ・ 期待以上の事を求められた時
- ・ 指導教員が学長になってしまい指導時間が少なくなり残念でした。

- ・ どちらが教える立場かわからない。学生のやっていることに対して、何も理解していない。
- ・ 必要経費も自費で購入させられる

[10-5]あなたの研究に対する指導体制（指導教官グループ）について、どのように思っていますか。（博士後期課程の方のみ）

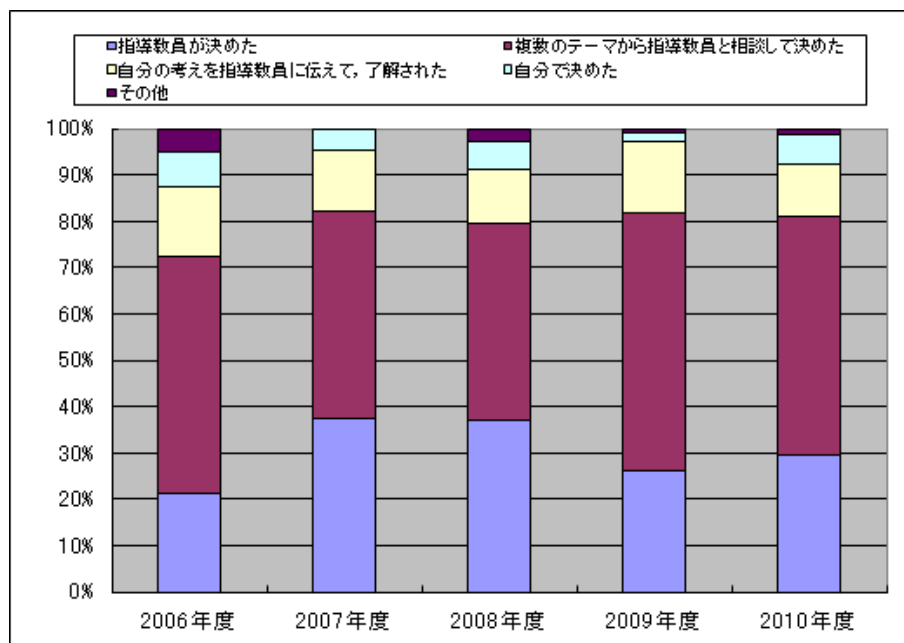
後期課程修了生の有効回答は少なく統計的な意味づけが困難であるが、特に否定的な解答は無い。



[10-6][10-5]でD（やや不満）またはE（不満）と答えた方：その理由は何ですか。（回答者なし）

[10-7]研究テーマはどのように決定されましたか。

指導教官との話し合い、あるいは複数の候補から研究テーマを決める割合が増えた。

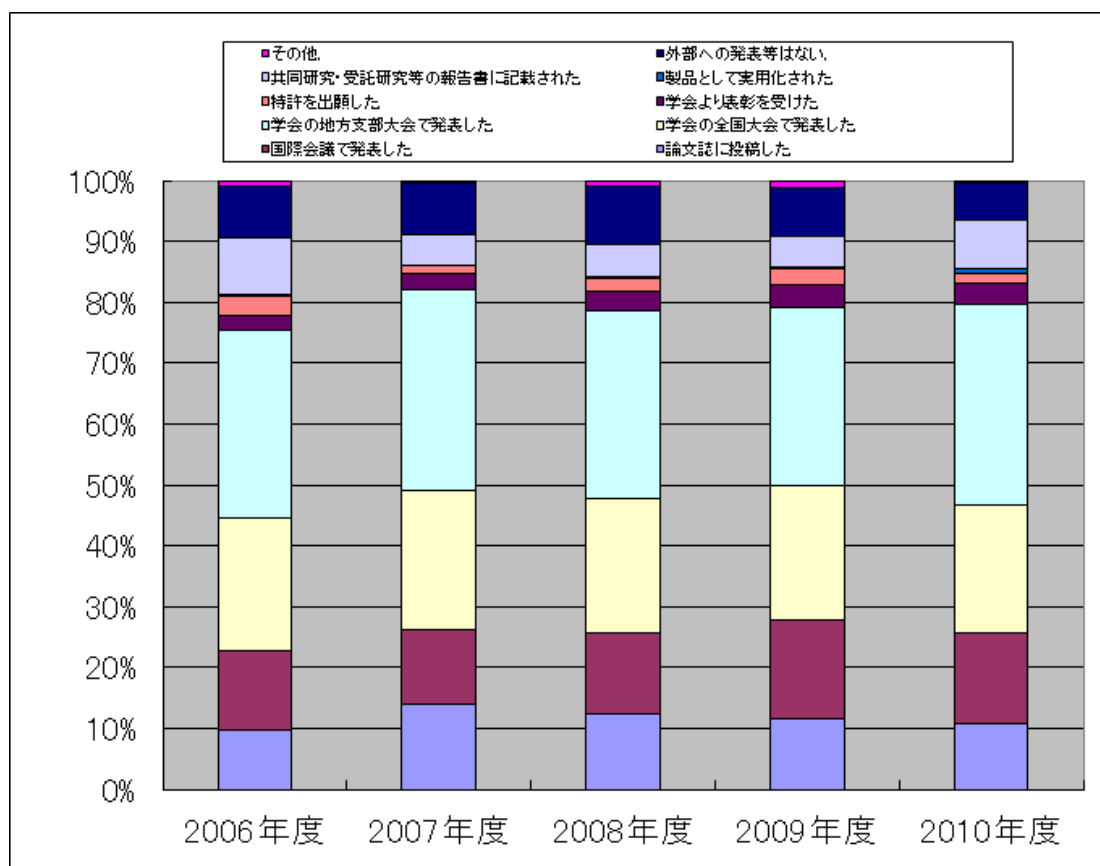


E（その他）[具体的に：]

- ・ 学部のテーマをそのまま進めた。
- ・ アドバイスをもらった。
- ・ 複数のテーマから1つを選ぶ
- ・ いくつかテーマが与えられ、その中から同期と話し合い、決定した

[10-8]あなたが在学中に研究したテーマの成果は下記のうちどれに該当しますか。(複数回答可)

論文誌への投稿が増加し、国際会議や学会の全国大会での発表も高い水準を維持している傾向は変わらないが、まったく発表しないケースも見られるので、さらに改善が必要と思われる。

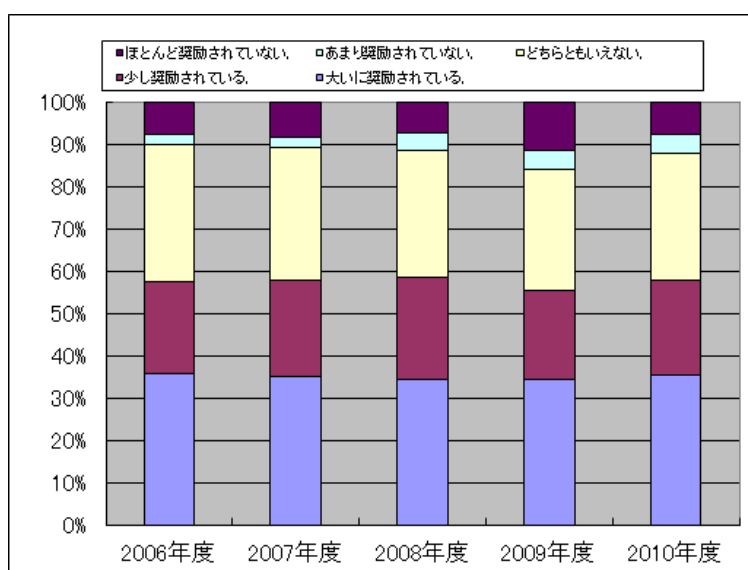


J (その他) [具体的に:]

- ・ 研究会で発表の一部を担当した
- ・ 特にない

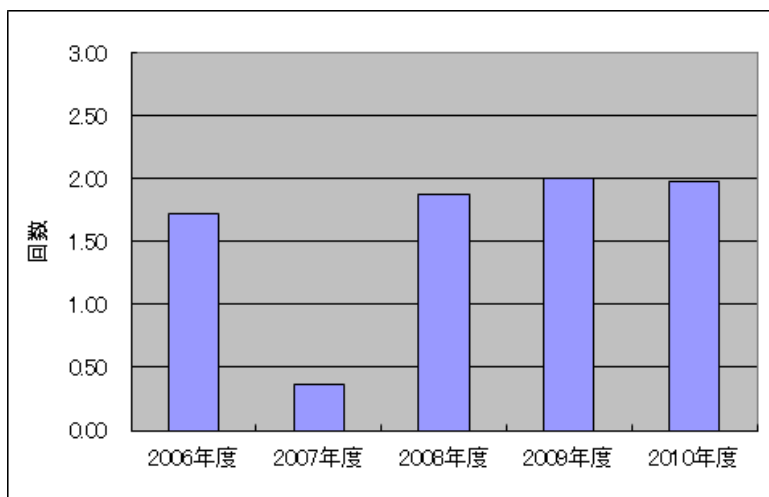
[10-9]学外での研究活動(学会発表や他機関での研究活動等)を奨励されていましたか。

ほとんどあるいはあまり推奨されていないと感じている学生の割合が増加している。教員側の意識の改革が必要である。



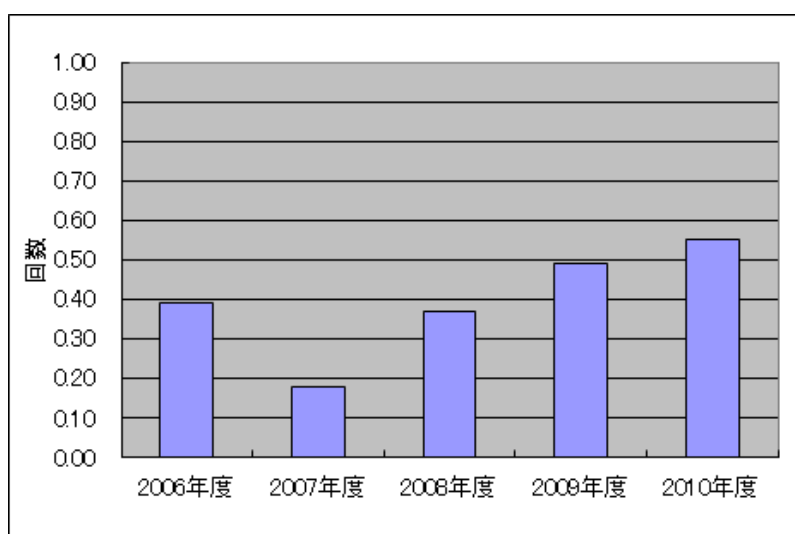
[10-10] あなたは在学中に国内学会（大会等）で何回発表しましたか。

2007年度激減した院生の発表回数が2008年度は復旧し、その後はほぼ横ばいである。在学年数からみて、2回程度は妥当であろう。



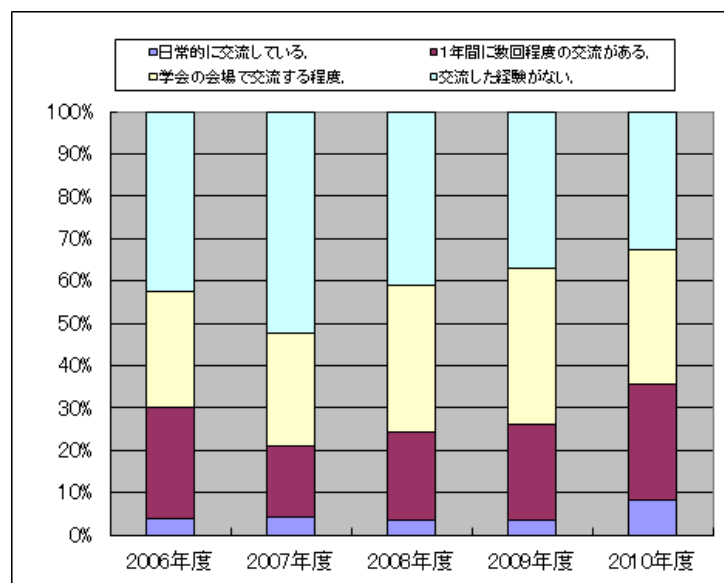
[10-11] あなたは在学中に国際会議で何回発表しましたか。

2007年度激減した院生の発表回数が2008年度は復旧し、その後は微増している。



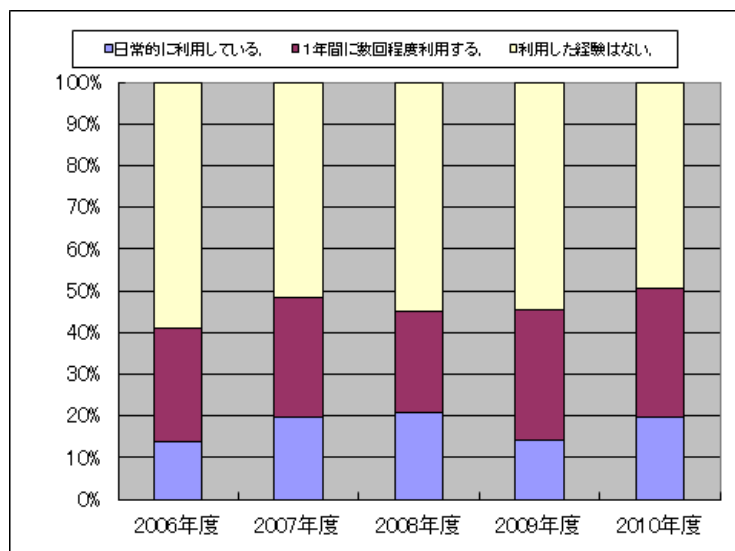
[10-12] 学外の研究者（国内および国外）と研究交流した経験がありますか。

交流した経験のない学生の比率が減少している。国際的な交流の活発化がみられる。



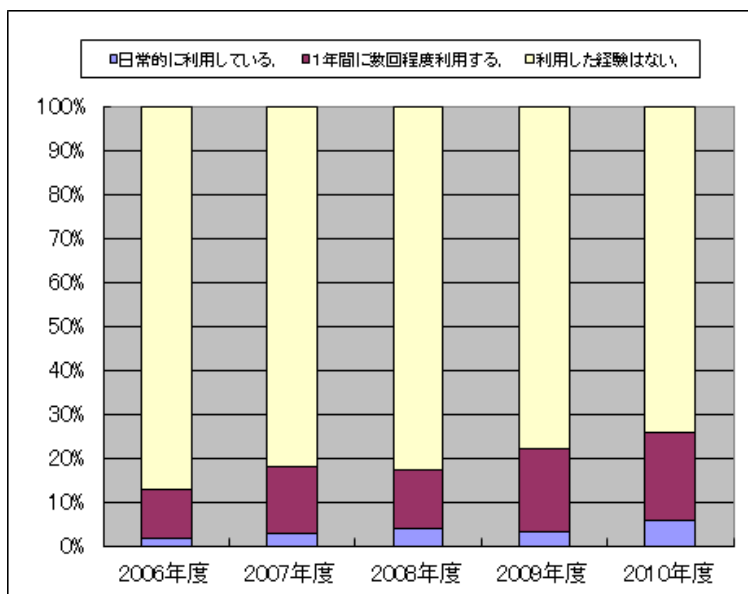
[10-13] 学内の共同利用施設（情報科学センター、機器分析センター等）を研究のために利用した経験がありますか。

経験者の割合は、50%近くであり、日常的に利用している学生数は20%の傾向を示し、この傾向が続くものと思われる。



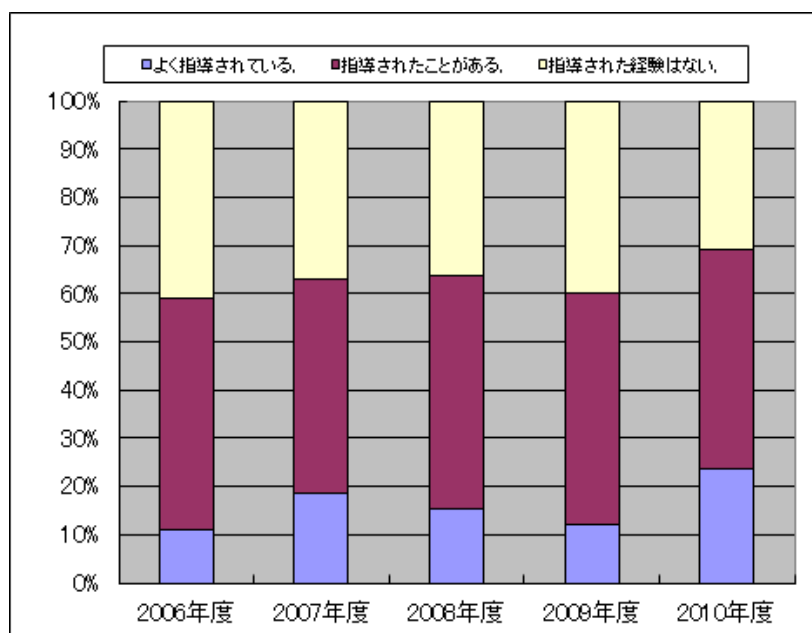
[10-14] 学外の共同利用施設等を研究のために利用した経験がありますか。

経験者の割合が微増し、25%を超えた。



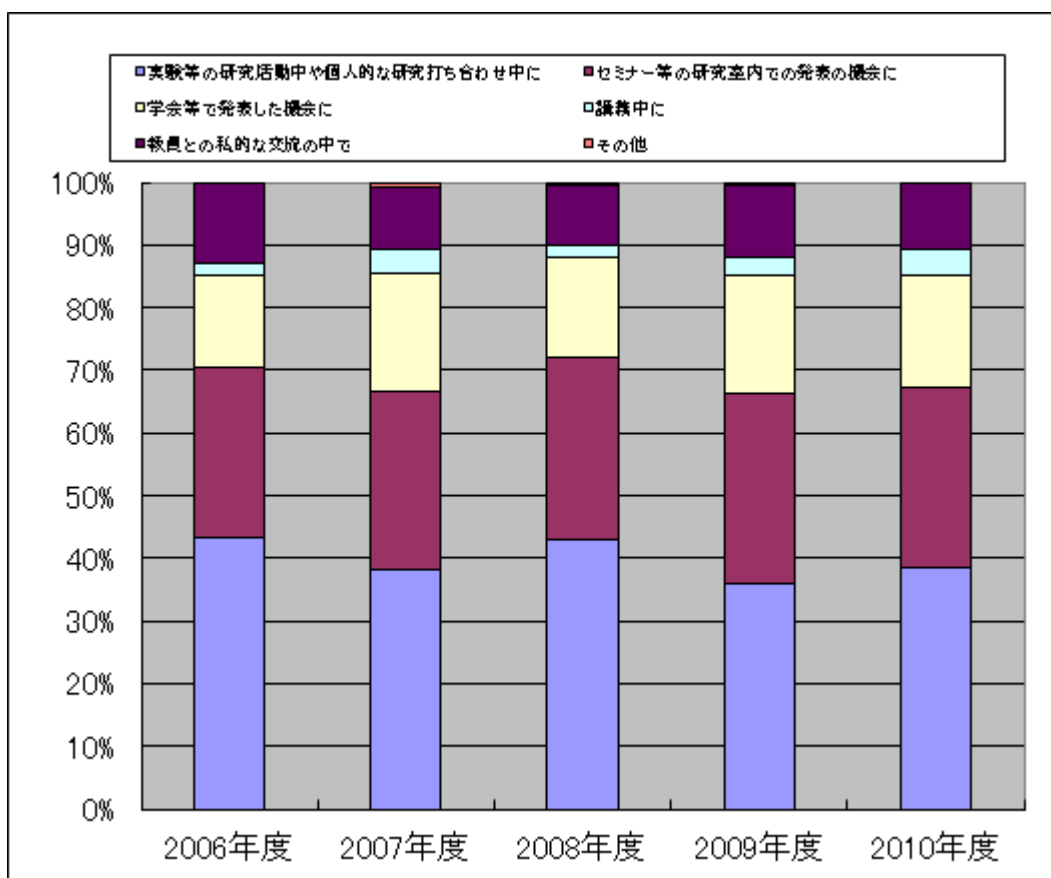
[10-15] 学位論文の研究を通して、研究遂行に対して競争意欲が向上するような指導を受けたことがありますか。

よく指導されている院生が増加しており、指導改善の取り組みの効果が見られる。



[10-16][10-15]でA（よく指導されている）またはB（指導されたことがある）と答えた方：それはどのような機会に指導されましたか。（複数回答可）

教員との個人的な研究打ち合わせやセミナー、学会発表等で指導を受けている学生の割合は90%弱に達し、この傾向はあまり変化がない。

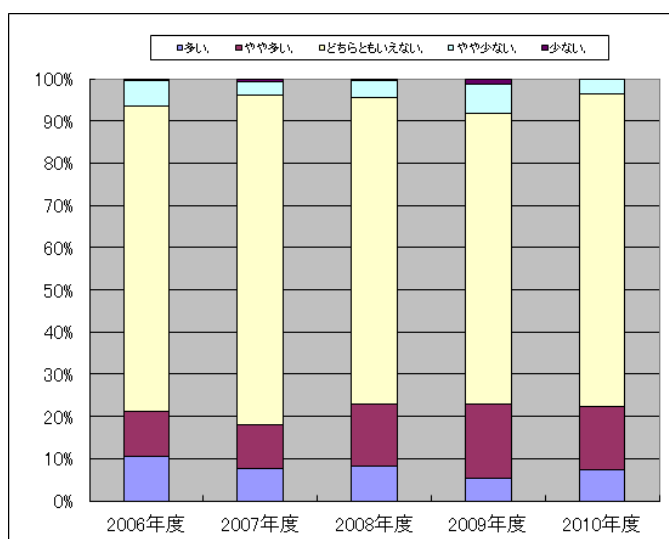


F（その他） [具体的に：]
(回答者なし)

[11]工学府・工学研究科における講義・演習等についてお尋ねします。

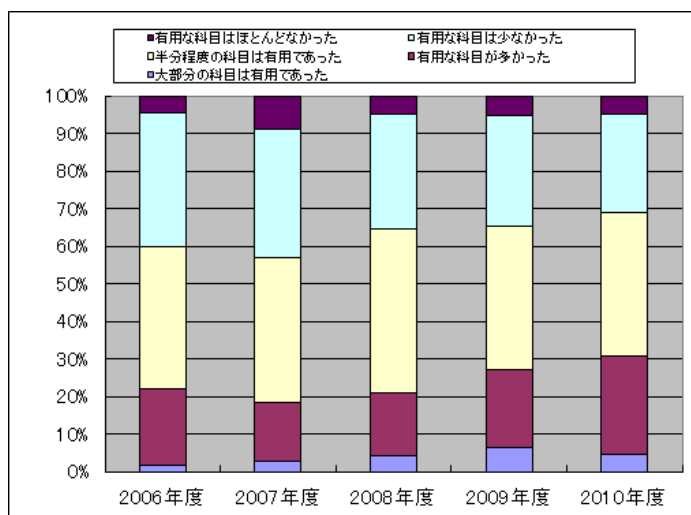
[11-1]工学府・工学研究科における講義・演習等の必要要件単位数は多いでしょうか、少ないでしょうか。

「やや多い」、「多い」と回答した院生は横ばいである。「やや少ない」、「少ない」と回答した院生が増加の傾向にある。



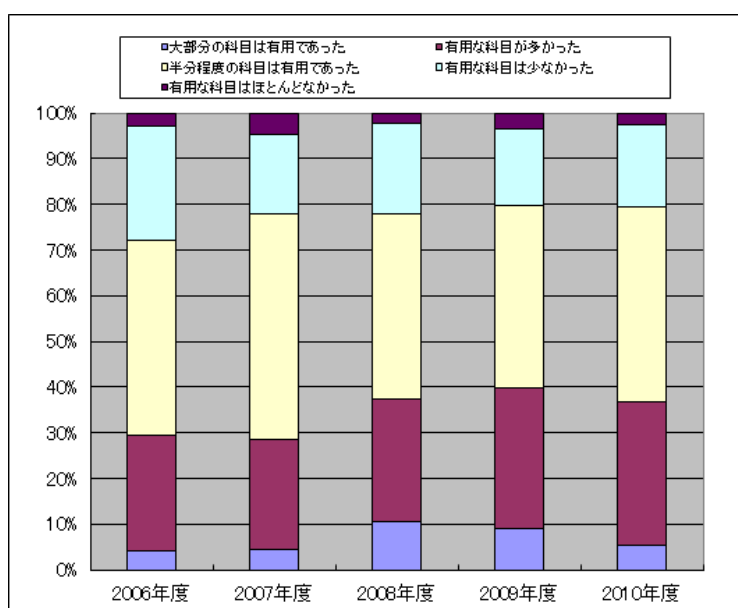
[11-2] 工学府・工学研究科で受講した講義科目（演習科目を含む）の中で、自分自身の研究に役立った科目の割合はどの程度ですか。

「有用な科目が多かった」と回答した院生はやや増加の傾向がみられる。有用な科目が増加するように、さらなる講義（演習）内容の改善が必要である。



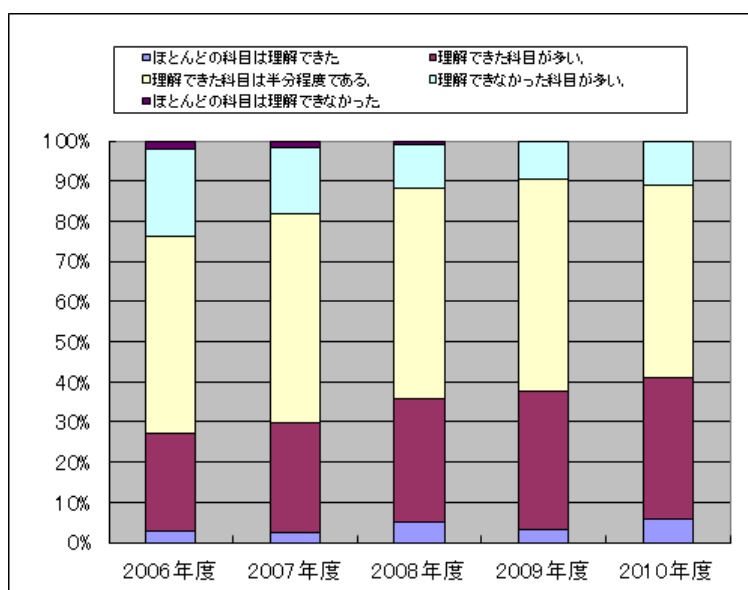
[11-3] 工学府・工学研究科で受講した講義科目（演習科目を含む）の中で、自分自身の成長のために有用であり、履修価値があった科目の割合はどの程度ですか。

「半分以上の科目は有用であった」までを含めた修了生は、80%程度となっている。受講者の意識・学力を把握、考慮した講義（演習）内容の検討が引き続き必要と思われる。



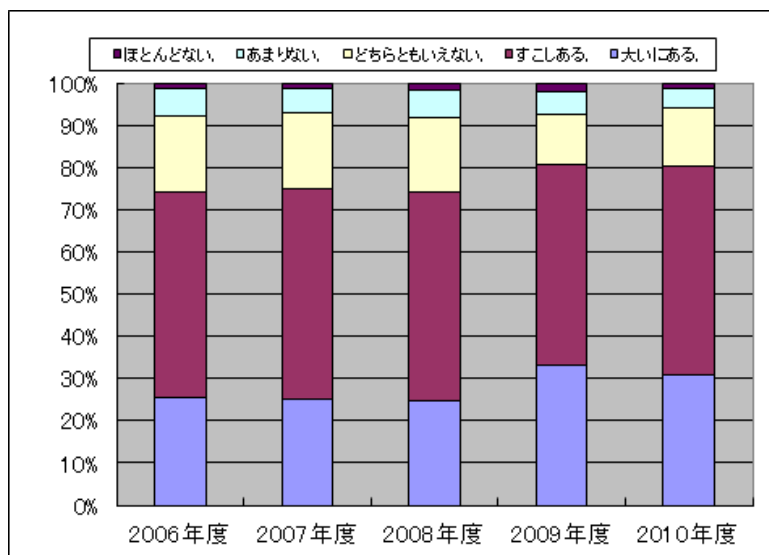
[11-4] 工学府・工学研究科で受講した講義科目の理解度はどの程度ですか。

「理解できた科目が半分以上」の修了生の割合が90%程度まで増加した。また「理解できなかった科目が多い」の割合は10%程度と同様の傾向にある。引き続き講義内容や教授方法の検討・改善が必要と思われる。



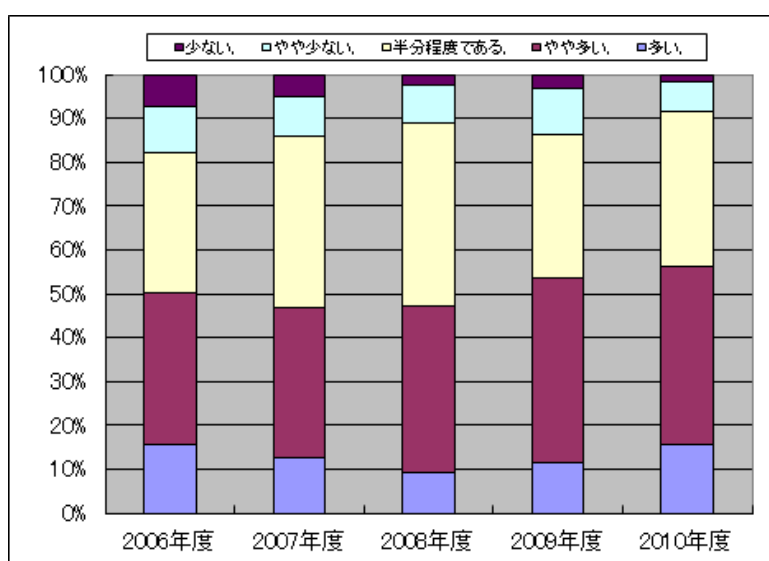
[11-5] 学部で履修した科目と研究科で履修した科目の間に、つながりがあったと思いますか。

「学部で履修した科目との関連がある」と回答した修了生の割合が80%程度まで増加しており、学部で履修した科目との関連性は向上していると判断できる。



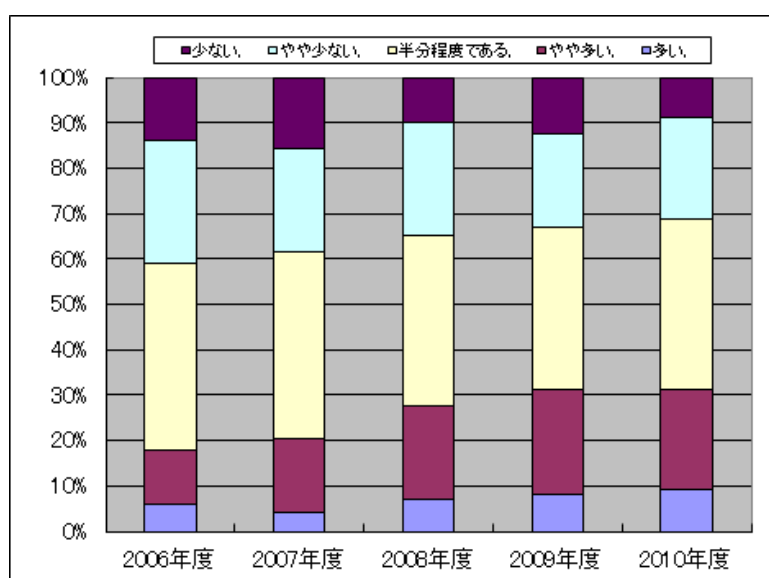
[11-6] 工学府・工学研究科で履修した科目全般について、教育への熱意があった担当教員の割合はどの程度ですか。

「半分以上の教員に熱意があった」と回答した修了生の割合は、2009年度に若干の減少を見せたが、年々増加し、2010年度では90%を超えている。過去5年間は80%台で推移している。



[11-7] 工学府・工学研究科で履修した科目で、就職後、仕事をする上で役に立つと思う科目はどれくらいありましたか。

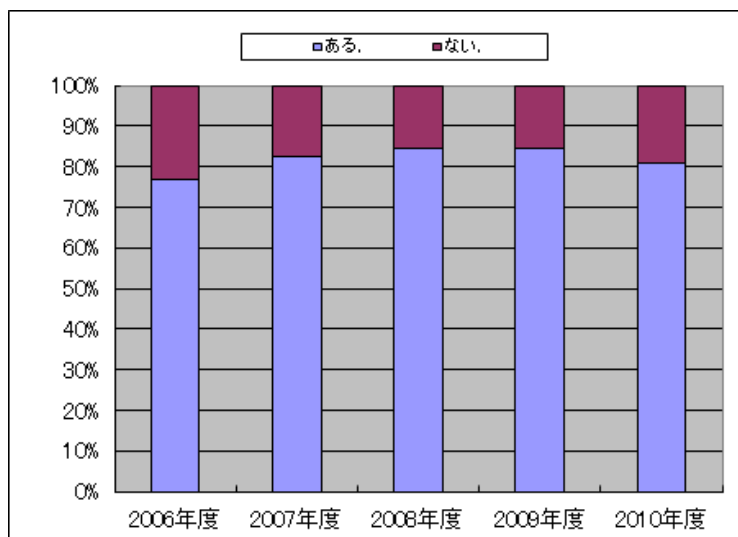
「半分以上の科目は仕事に役に立つ」と回答した修了生は、2006年度59%から2010年度69%まで増加しており、「実学」の観点からの教育効果は向上していると思われる。



[12] TA、RA等の制度についてお尋ねします。

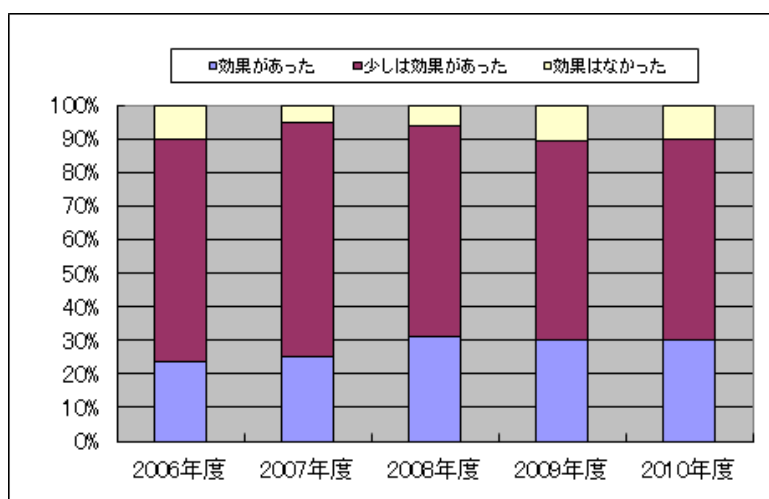
[12-1] TAを担当したことがありますか。

TA経験者は2007年度以降の80%以上に達しており、2009年度から少し減少したが、過去5年間は80%を超えている。



[12-2] [12-1]でA（効果があった）と答えた方：TA活動を通して、学部学生に対して教育的効果があったと思いますか。

「効果があった」とする回答は30%、「少しは効果があった」とする回答はおおよそ60%で二つの回答を併せると90%前後が、TAが学部教育に貢献していると自己評価している。昨年度とほぼ同じ結果になっている。



[12-3] [12-2]でC（効果はなかった）と答えた方：その理由は何ですか。

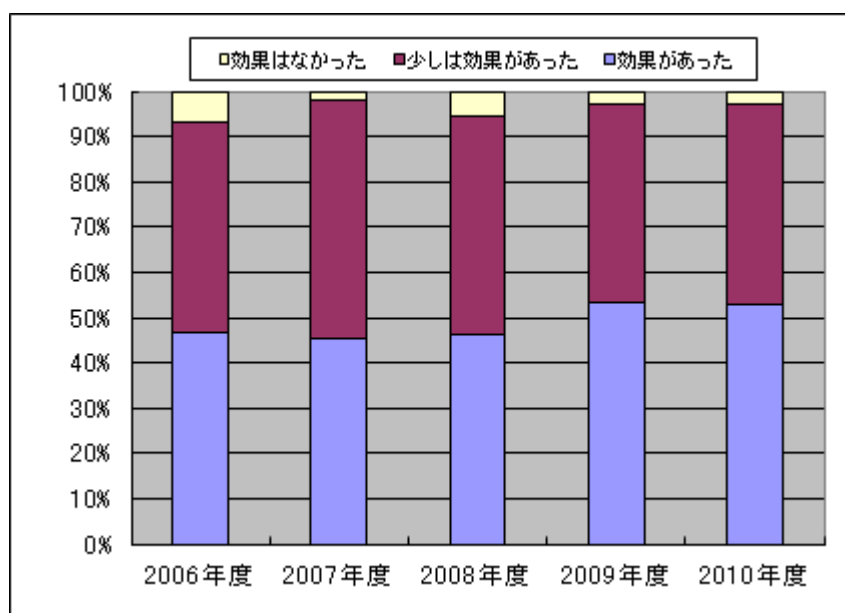
「効果がなかった」とする回答は5%から12%の間を前後しているが、過去5年間は減少傾向にあったが2009年度と2010年度は10%となった。具体的な回答は以下の通りである。TA活動がマニュアル化して、単に教員の作業を補助するだけのものになっている場合が主な理由になっている。TAの業務内容が、直接学部学生とのコンタクトを伴わない作業になっていたり、コンタクトがあっても十分に相互理解のもとでの教育効果を与えていない場合が多く見受けられる。TA制度の有効な活用についてさらに検討を進める必要がある。学部学生側のモチベーションの足りなさについて不満がある。

- ・ TAを活用する学生と全く活用しない学生の差がかなりあった。
- ・ 言っても聞かない
- ・ 学部生が積極的に質問することがなく、私の方もどの部分がわかっていないのかつかめなかった。
- ・ 教育的とは言えない、試験の係だったので。
- ・ 学部学生の多くが実験課目を軽んじている傾向が見て取れたため
- ・ 主に雑用を任せただけなので教育的効果は、無いと思います。

- ・ すわっていただけ
- ・ ほとんど何をしていたか、教員からおしえてもええなかったから
- ・ 私がTAをしたからといって学部生に教育効果があったとは思えない。
- ・ 交流する機会がなかった為。
- ・ 学生が何のための実験か理解していないから
- ・ TAが簡単に教えてくれるので、勉強してこないと思う
- ・ あまり接しなかった
- ・ 特になし
- ・ そもそも学生にやる気がない。実験の意図を理解していない。目的意識が低い。

[12-4][12-1]でA（ある）と答えた方：TA活動は、自分自身にとって教育的効果があったと思いますか。

2009年度同様、95%以上が、教育効果があったと答えており、TA活動が充分機能していると思われる。



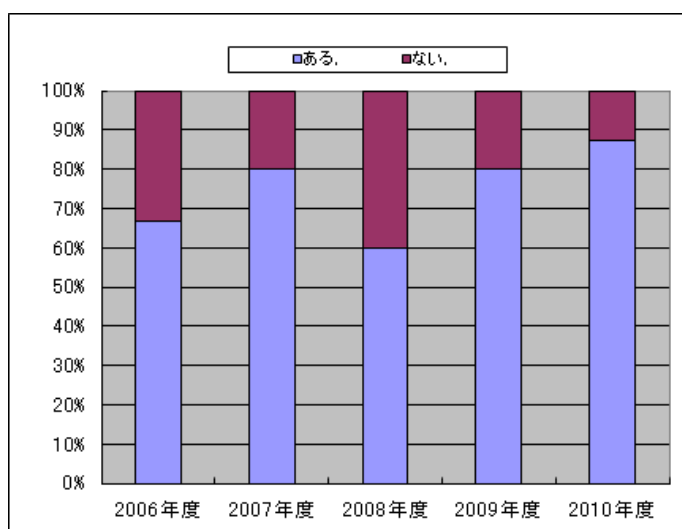
[12-5][12-4]でC（効果はなかった）と答えた方：その理由は何ですか。

TA活動は自分自身にとって教育的効果がなかったとする回答は2010年度には3%であり、この制度が十分教育的な効果を上げていると判断できる。具体的な回答は以下の通りであるが、少数意見である。

- ・ 学生と接する機会が特になかったため。
- ・ 補助の役割だったため。
- ・ 接する機会がなかった
- ・ 回数が少なかったため
- ・ 教育的効果といえる程の効果があったとは思えない
- ・ 特になし

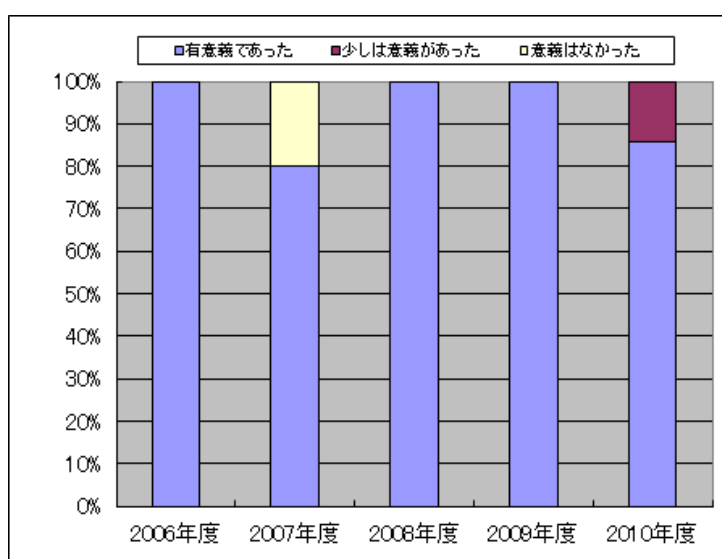
[12-6] R Aを担当したことがありますか。(博士後期課程の修了生のみ)

例年R Aを経験した博士後期課程の学生は 60%以上となりRA 制度が定着しつつある。2010 年度は過去 5 年間で最大の割合になっており、85%を超えている。



[12-7][12-6]でA（ある）と答えた方。R A活動は、自分自身にとって意義があったと思いますか。

2006 年度以来 2010 年度まで R A活動の体験者全員が RA を肯定的に考えており、2008 年度および 2009 年度には 100%の博士後期課程学生が R Aに「意義があった」と評価している。

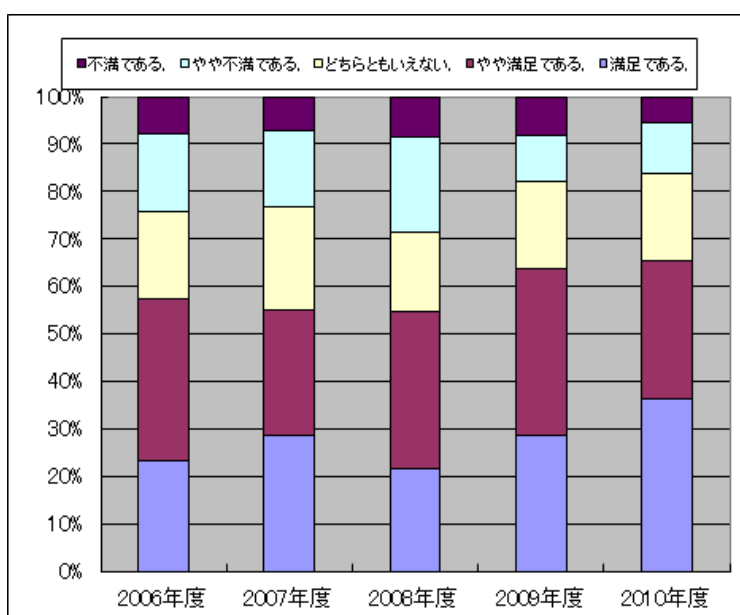


[12-8][12-7]でC（意義はなかった）と答えた方：その理由は何ですか。（博士後期課程の修了生）
（回答者なし）

[13]施設・設備等についてお尋ねします。

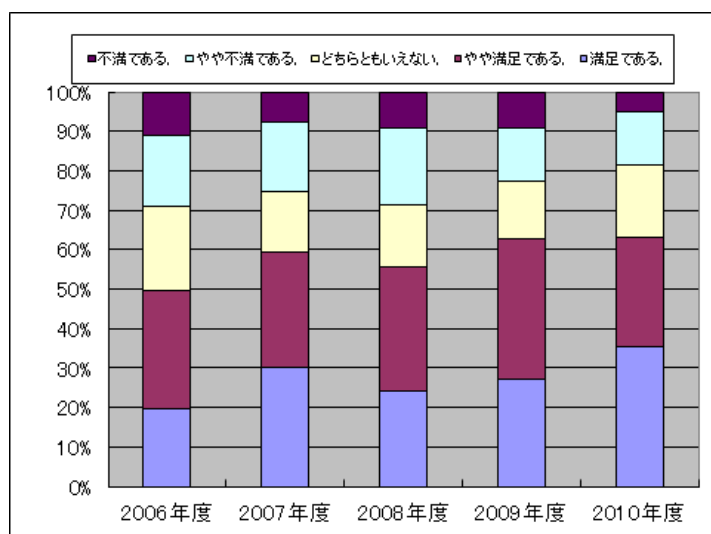
[13-1]研究に使った実験室・実習室のスペースや環境等について満足していますか。

2010 年度の「満足である」の回答が過去 5 年間で最大値になっている。「満足、やや満足」と解答した学生はほぼ半数以上である。2010 年度は最高値 65%に達している。改築等が進んでいるためと思われる。なだらかであるが次第に満足度は増加してきている。



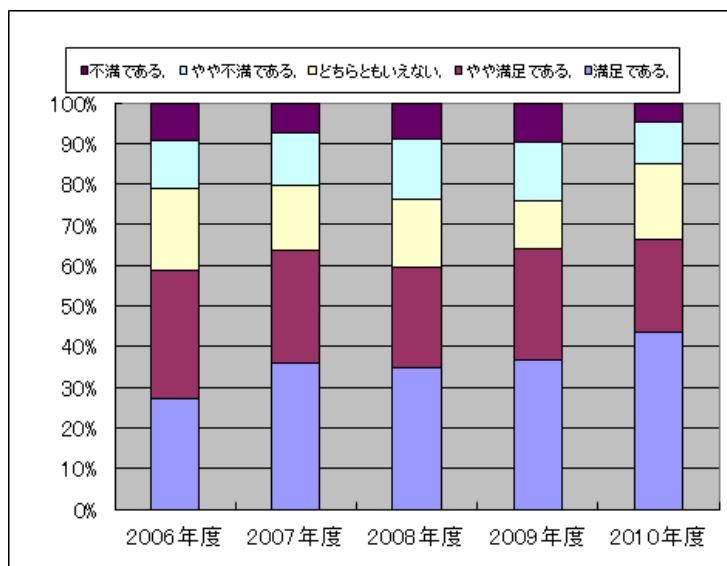
[13-2] 研究に必要な設備・装置について満足していますか。

2010年度の「満足である」の回答が過去5年間で最大値になっている。「満足、やや満足」とした回答は2006年度49%であったが、次第に満足度は増しており昨年度同様2010年度では、63%になった。引き続き、効果的な整備を進めるべく検討する必要がある。



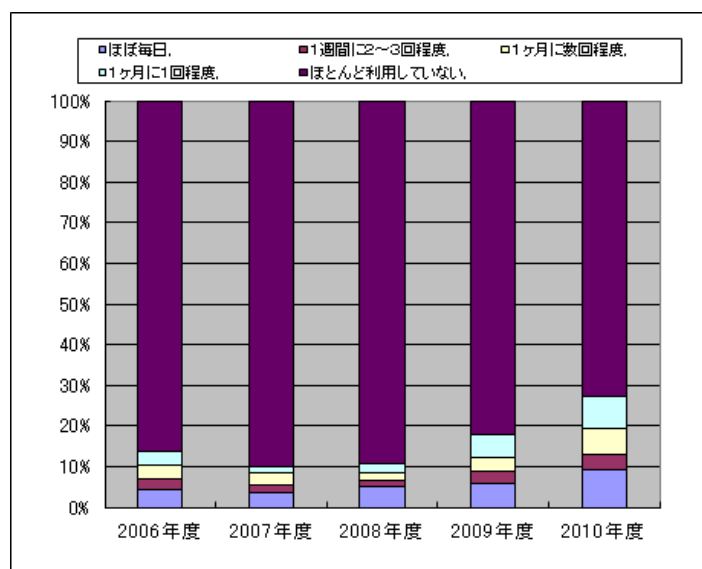
[13-3] 研究に必要な情報機器（コンピュータ端末等を含む）の整備状況について満足していますか。

「満足、やや満足」と回答した学生の割合は66%程度で定着している。引き続き整備していく必要がある。



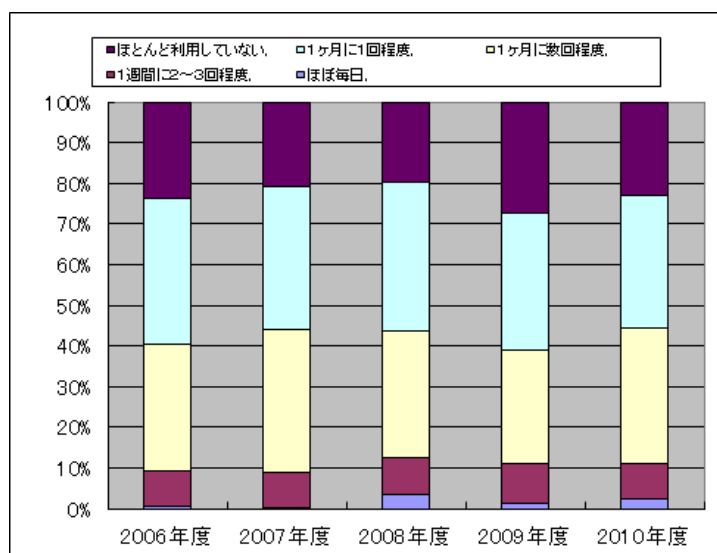
[13-4] 情報科学センターが提供しているサービスをどの程度利用していますか。（インターネットや電子メールを除く。）

約70%以上の学生が情報科学センターのサービスを利用していない。2010年度は、利用率が最も高い結果となっている。研究活動において、ゆっくりではあるが利用者数が増加しているが、利用しているとはいえない。サービス利用の促進をすべきかどうかの検討をする必要がある。



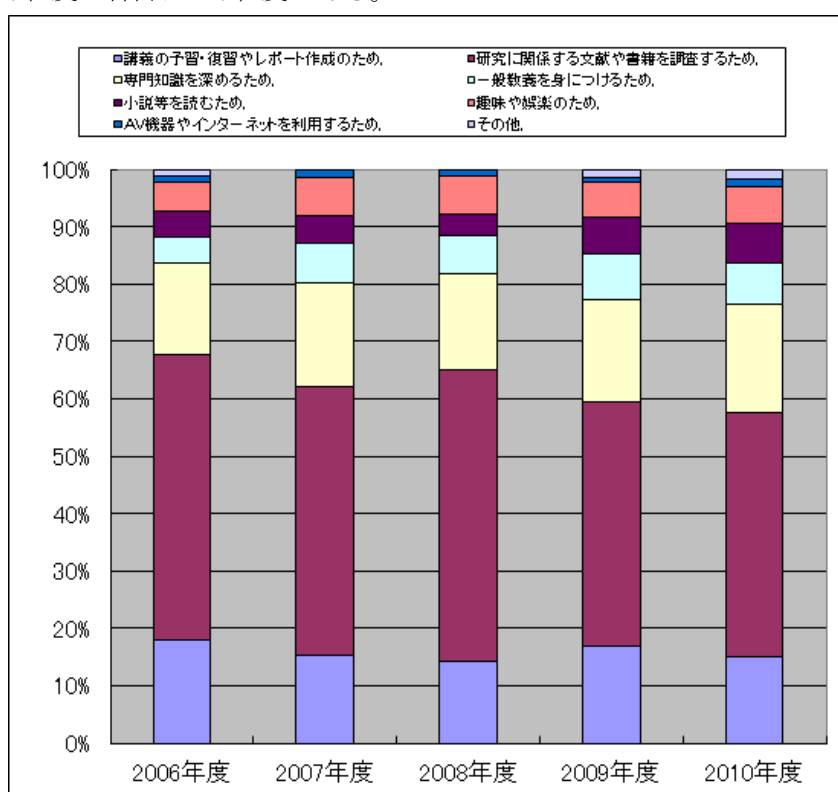
[13-5] 図書館を利用している頻度はどの程度ですか。

「1週間に2～3回程度まで」日常的に利用している学生の割合は過去5年間ほぼ一定で10%程度である。昨年と比べると「1ヶ月に数回程度」は増加の傾向にある。



[13-6] 図書館を利用する主な理由をお答えください。(複数回答可)

学生が講義、研究、専門知識および一般教養に関して図書館を利用している割合は、それぞれおよそ15%、43%、19%、7%程度で合計は84%程度である。



H (その他) [具体的に:]

- ・ バイト
- ・ TOEIC、SPI、GABなど就活のため。
- ・ 企業の宿題をやるため
- ・ 発表会場として
- ・ ほとんど行かない
- ・ 新聞を閲覧するため

- ・ 就職活動に役立つものを手に入れる為
- ・ 技報なども多種取りそろえられており、非常に利用しやすかったです。
- ・ 書庫に行く。
- ・ 就職活動

2. 3 教育達成度評価アンケート：雇用主 (2008年3月以前卒業生)

本節(2.3)と次節(2.4)では、まだ、九州工業大学工学部及び大学院工学府(旧工学研究科)における教育効果が残っていると思われる入社後3年程度を経過した本学卒業生・修了生を対象に、他大学と比較した教育レベルのアンケート調査を実施し、その結果をまとめています。なお、この時、彼らが在職する各会社・各機関(彼らの雇用主)に対しては、本アンケート調査は他大学の卒業生及び修了生に対する本学学生が受けた教育レベルの評価を行うためのものであり、対象者本人の評価を行うものではないことを断わっています。

※アンケート実施年月日 平成23年 6月10日

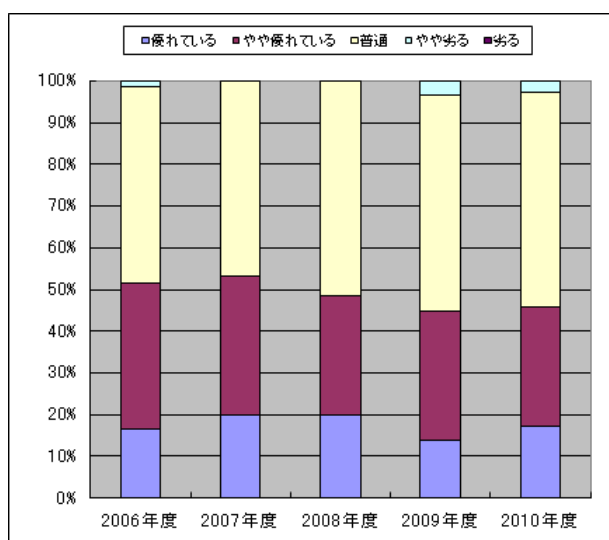
※アンケート回収率

配付枚数	回収枚数(回答率)
128社	35社(27.3%)

1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

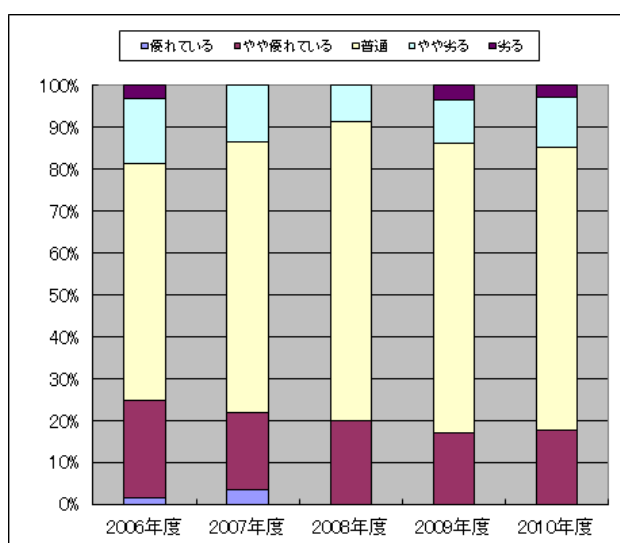
(1) 卒業生が受けた教養(人文・社会等の一般教養)教育のレベル

「優れている」が昨年よりも増加しているが、「優れている、やや優れている」が2007年度の最大値(53%)から年々減少傾向で2010年度には46%になっている。注視しておく必要がある。「やや劣る」の割合も昨年と同様にある。



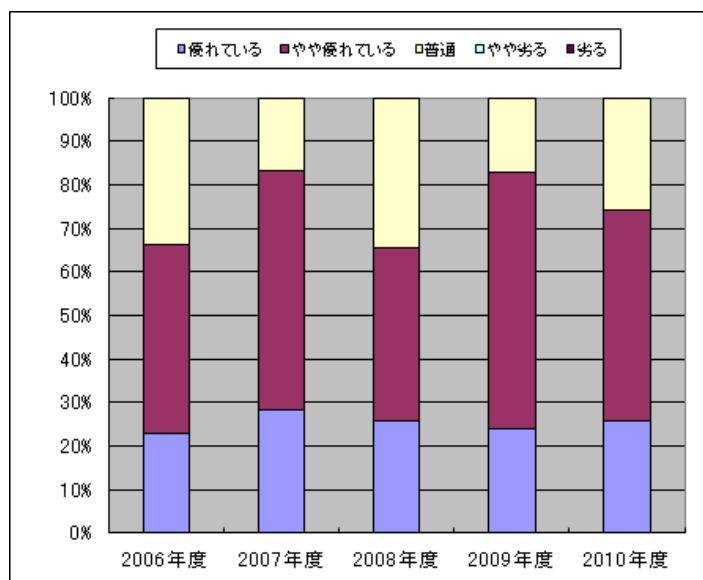
(2) 卒業生が受けた語学(特に英語)教育のレベル

80%以上が「普通以上」と回答しているが、2008年度には92%であったのが、2010年度では85%に減少した。「優れている、やや優れている」が2006年度から減少の傾向にあり、比率を増やす努力が必要である。



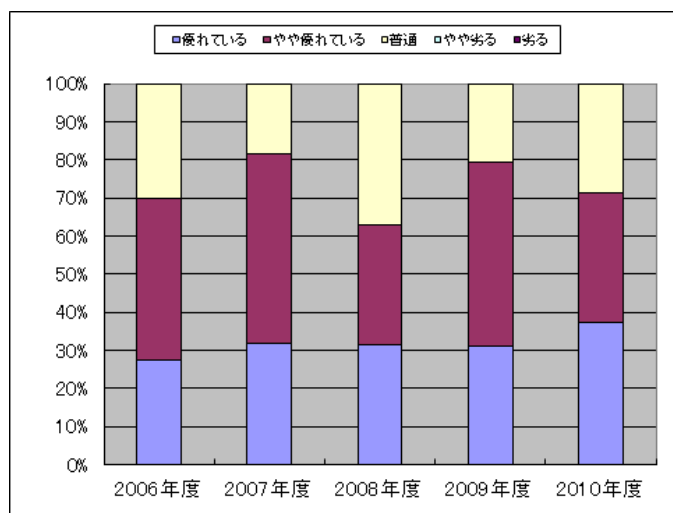
（３）卒業生が受けた理数系（数学・物理・化学）教育のレベル

「優れている、やや優れている」と回答した企業が2007年度は83%、2008年度は66%、2010年度は74%といったように年度ごとに一定していない。「優れている」について限れば、2007年度以降比率が減少してきていたが、2010年度は少し回復して25%になっている。この比率を更に上げる努力が必要である。



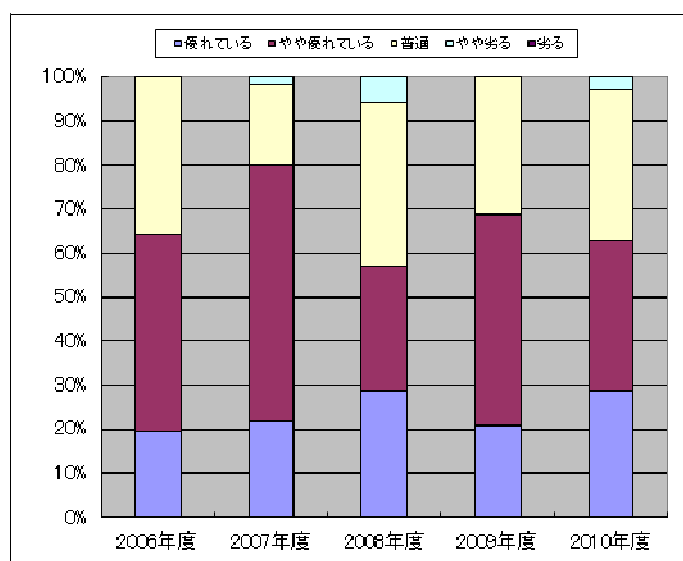
（４）卒業生が受けた専門教育のレベル

卒業生の専門教育レベルについては、「優れている、やや優れている」が年度ごとに一定しないが、60%は割らない。2010年度は72%になった。引き続き注視しておく必要がある。



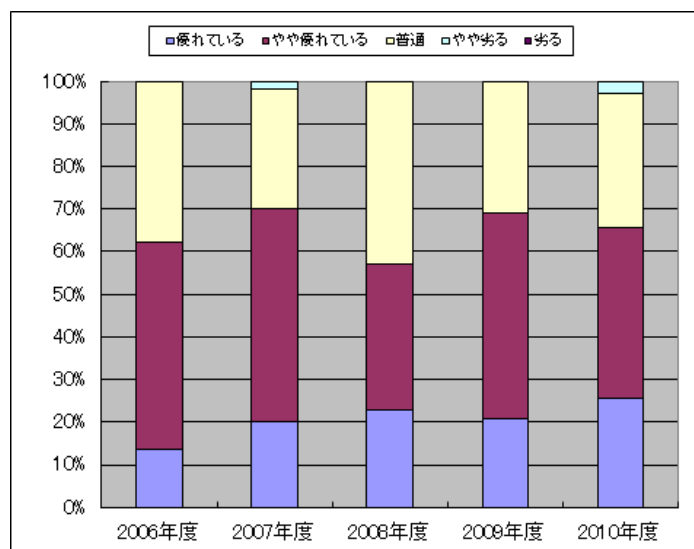
（５）卒業生が受けた課題探究能力教育のレベル

「優れている、やや優れている」が2007年度は80%、2008年度は57%となっており、年度ごとの変動が大きい。2010年度では63%としている。引き続き注視しておく必要がある。



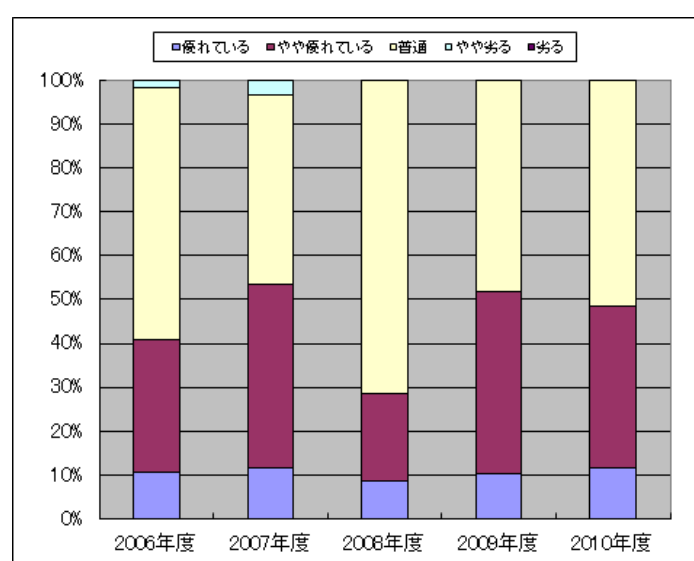
（６）卒業生が受けた課題解決能力教育のレベル

「優れている、やや優れている」は2008年度を除き60%以上になっている。しかし年度ごとの変動が大きいので、引き続き注視しておく必要がある。



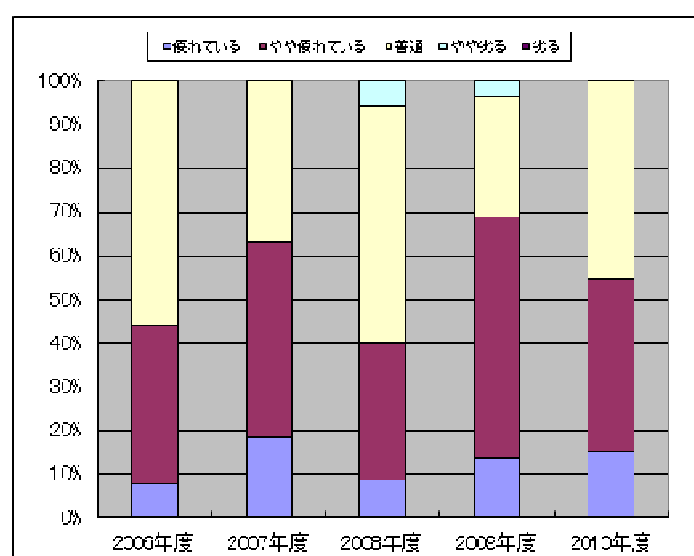
（７）卒業生が受けた独創性教育のレベル

「優れている、やや優れている」は2008年度を除き40%以上になっている。しかし、2008年度は30%未満になったことから、引き続き注視しておく必要がある。



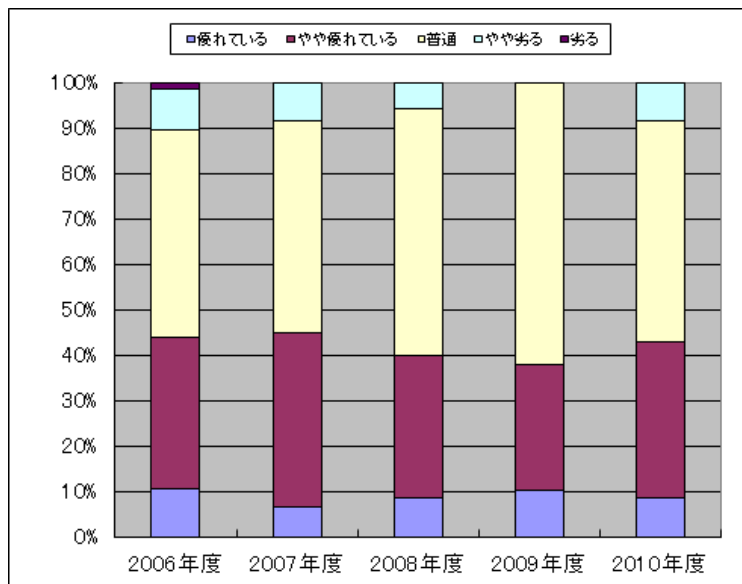
（８）卒業生が受けた構想力教育のレベル

「優れている、やや優れている」は2006年度の44%と2008年度の40%を除き、50%以上を推移してきた。年度ごとの変化が大きいことから、今後も推移を見守る必要がある。



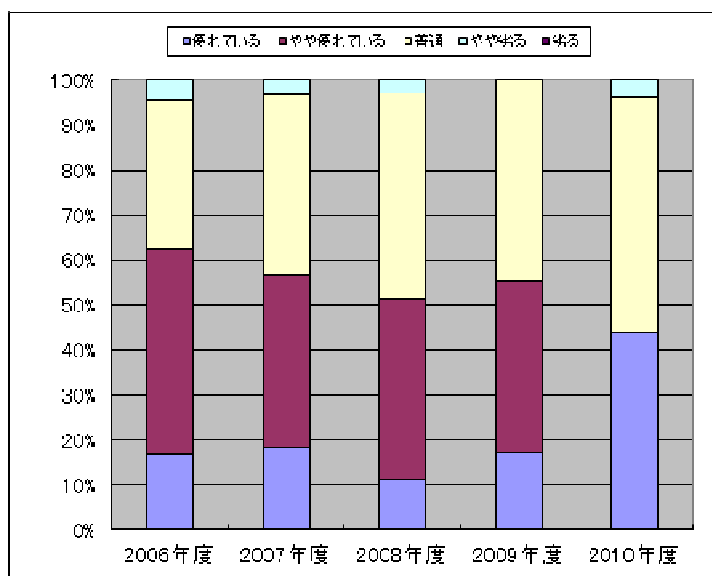
(9) 卒業生が受けた表現力教育のレベル

2005年度以降「普通」以上の評価が漸増し、2009年度は100%に達したが、2010年度は2007年度並みとなり、大きな変動はない。「やや優れている」以上の評価は2007年度以降減少傾向にあったが、2010年度は回復している。今後「優れている」「やや優れている」の更なる増加が望まれる。



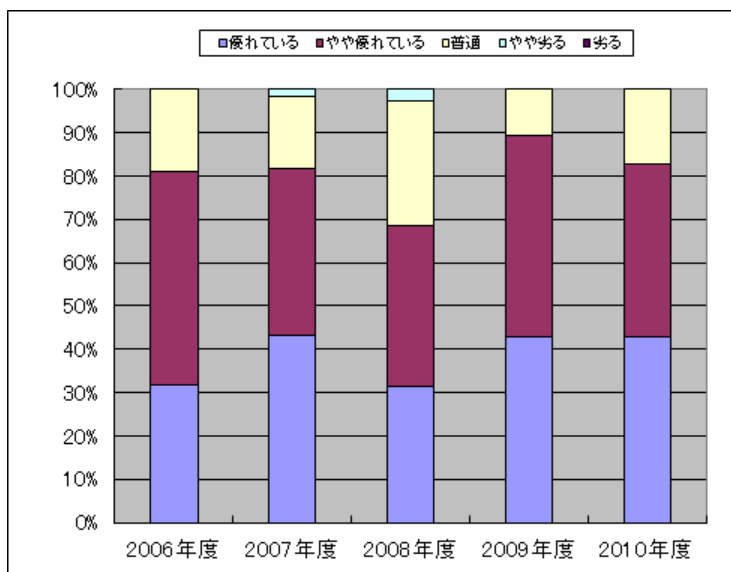
(10) 卒業生が受けたコミュニケーション能力教育のレベル

コミュニケーション能力に関しては「普通」以上の評価が増加傾向を続け、2009年度は100%に達している。2010年度は「やや優れている」が0という特異な分布となっている。2009, 2010年度はサンプル数が30未満であるため、誤差の影響が出始めている。「やや劣る」の回答が1件にとどまっていることから水準は維持している。



(11) 卒業生が受けた仕事に取り組む熱意に対する教育のレベル

「普通」以上の評価が2年連続で100%に達しており、「やや優れている」以上の評価も2008年度を除き80%以上で推移している。全体として評価は高いと言える。



2. 貴社・貴機関が九州工業大学 工学部 卒業生に望む事項（卒業生の資質等）がございましたらご記入ください。

「勉学」、「エンジニアとしての素養」といった面で一定の好評価があるが、「コミュニケーション能力」、「表現力」、「語学力」「積極性」、また「自発性」の育成への期待がある。

- ・ 主体性を持って仕事に取り組み、周囲との調整を積極的に行ってほしいと思います。何にでも探究心を持って取り組んで欲しい。
- ・ 読みやすい報告書を作成する能力。ものおじせず、未知の分野に飛び込める度胸や意欲。
- ・ 何事にも失敗を恐れずに、自から卒先して課題に取り組むとともに、常に自己研鑽に努める意欲を持ち続ける学生の育成をお願いします。
- ・ 明るく、何事にも前向きな方が多いため、現状、希望等ありません。
- ・ コミュニケーション能力（特にあいさつ）。積極性。
- ・ 真面目に取り組む姿勢や業務に対する熱意が感られ、総じて及第点を得られていると思われる。当社での卒業生も多く、コミュニケーションもうまくとれていると感じている。強いて言えば、自己実現のための積極性を備えると更に良いと感じる。
- ・ 能力に関しては問題なし。人間力、表現力、社会人スキルの向上を望む。
- ・ それぞれの分野で基本をしっかりと学んで欲しい。それに加え、知識だけでなく実戦（実際手を使って物を作る）を経験していただけるとありがたい。
- ・ 業務・社内行事等で、リーダーシップを持ってまわりを引っ張って欲しい。困難なことにぶつかった時に、解決までのストーリーを考えられる力を、研究や学内活動で養って欲しい。
- ・ ものづくり、に対する熱意
- ・ 物事への探究心を強く持つ。（高い専門性の裏付のもとで）。人とのコミュニケーション能力向上。
- ・ 特に貴校学生に対してのみという意味ではないが、技術分野におけるテーマ・課題に対し、自ら考え、自分から行動を起こす姿勢の重要性を強く意識していただきたい。
- ・ 2008年卒1名、2010年卒（大学院）1名、入社して頂きありがとうございます。真面目で優秀な学生で今後も是非入社を期待してます。学校推せんありましたら、連絡頂きたく存じます。
- ・ 当社電機メーカで理系大学で基礎・専門を学んだ学生は採用選考でのマッチングが高い。ものづくりに興味を持った学生を育ててほしい。
- ・ 特にございません。
- ・ 当社は営業主の企業であるため、コミュニケーション力を求めています。学部・修士過程で学ぶ知識が全て生せる環境ではありませんが、全てに通用する論理的思考力は秀でたものを保有していると思います。
- ・ 課題解決に向かって、粘り強く取り組み、与えられたことをその通りにこなすのではなく自分の考え方をまとめ、表現できる力が最も重要であると思われます。
- ・ 専門分野は強い方が多いと感じていますが、表現力（コミュニケーション）がもう少し豊かだとより良いと考えます。
- ・ 何事にも前向きに行動し明朗活発な学生
- ・ 変化の大きな時代となりましたので、対応力のある、そしてコミュニケーション能力のある人材の育成をお願い致します。
- ・ 指示されたことだけに留まらず、それに付随する事柄を考え、自ら行動・実践できるような発想・資質を身につけていただけたらと考えます。

- ・ 特にありません。

3. 九州工業大学 工学部の教育に対して、ご意見・ご要望（企業が必要とする人材の専門分野、専門知識等）がございましたらご記入ください。

要望・意見は、以下のとおり業務に応じて多岐に亘る。各分野に共通するような工学の基礎や「語学力」、「コミュニケーション力」への期待がある。

- ・ 専門的な内容は企業等に入ってから身に付けられるので、学生のうちは、浅くても構わないので幅広い分野の基礎的な内容を身に付けさせると良いと思います。また、できるだけ物に触れる機会の多い教育方法をとっていただきたい。
- ・ ソフトウェアの勉強を行い、学生のうちにセンスを身につけて欲しい。企業では、手で計算するわけではありません。少し複雑な計算で無駄な時間を使ってはいけない。他の大学との差を身につけておいてほしいです。
- ・ 土木工学における基礎知識（土、水、材料（コンクリート等）の修得について、ご配慮して頂きたい。
- ・ 機械工学（4力学含む）の知識がより高いと望ましい。語学力（特に英語）があれば、尚良い。特にコミュニケーション力
- ・ 特になし。
- ・ 語学力（特に英語）向上にもう少し力を入れた方がよい。電気系では、「電気主任技術者（電験）」のような資格取得を奨励することもよいと考える。化学系プラントなどでの計装に関する教育を少し充実させてほしい。
- ・ 特になし
- ・ 構造力学の基礎だけは、おさえておいて欲しい。
- ・ 特にございません。
- ・ 貴学から弊社に入社している方は、1名のみですので、貴学の教育レベルなのか、当人の資質によるものか解かりませんが、非常に高い、優れた能力レベルにあると評価しております。今後とも、優秀な人材育成に尽力下さい。
- ・ 省エネルギー推進技術、自然エネルギーの有効活用。
- ・ 上記に加え、技術者の素養として、最も重要となる、数学・物理・四大力学等の基礎分野の修得やシミュレーションだけでなく、自分で手を動かす「ものづくり」の経験。
- ・ 社会人基礎力で整理している能力は選考時の参考になりますが、職種により求める能力に優先度がありマッチングを重視しています。例えばシステムエンジニア職は、コミュニケーション・課題解決力を重視しているなど。
- ・ 特にございません。
- ・ 上記の通り、専門分野としての知識は、特に記入することはございません。しかし、研究を通じて培う、「主体性」「課題発見力」「発信力」「傾聴力」などは、実社会において重要な能力であると考えます。
- ・ 各業種に共通する基礎知識として、機械及び材料力学、機械設計・製図の教育は、必須と考えます。
- ・ 学部卒でありながら高い専門分野のスキルを持つ方が多いので、この部分は今後も続けていただきたいです。プラスして、表現力を伸ばす教育を推進していただきたいと思います。
- ・ 専門知識は基よりコミュニケーション能力の向上を目的とした教育
- ・ 国内の工場、プラントの建設など大規模な工事は減少していきます。その中で国内ではメンテナンス業務が主となり行われますので、専門分野に突出した教育をお願い致します。また、どの業種でもパソコンのスキルは必須ですので、パソコンスキルの向上をお願い致します。

- ・ 机上の研究等にとどまることなく、実践を多く取り入れられ、実務に活せる・関連する教育を行っていただけると幸いです。また、より多くの様々な人々とコミュニケーションを取りコミュニケーション能力を高めていける人材を育成いただければ幸いです。
- ・ 特にありません。

4. 全体としての傾向

2010 年度においては「普通」以上の評価が全ての項目において 85%を越えている。語学と「表現力」以外の 9 項目は 2009 年度に引き続いて 95%を超えている。語学と「表現力」は長年に亘って、10%から 20%の「やや劣る」「劣る」とした評価がある項目である。

2010 年度の「やや優れている」以上の評価は、「理数系」75%、「専門」71%、「課題探求能力」63%、「課題解決能力」66%、「構想力」54%、「表現力」38%、「仕事に取り組む熱意」83%であり、卒業生は引き続き企業から概ね高い評価を得ていると判断される。しかし、これら 7 項目の全てにおいて「やや優れている」以上の評価が減少しており、今後注視していく必要がある。

また、「教養」、「語学」、「表現力」、「独創性」、「コミュニケーション能力」の評価が 50%以下と低く、特に「語学」が以前 18%と低い。長年に亘る課題であるが、未だに解消されておらず、緊急に対処する必要がある。

2. 4 教育達成度評価アンケート：雇用主 (2008年3月以前修了生)

※アンケート実施年月日 平成23年 6月10日

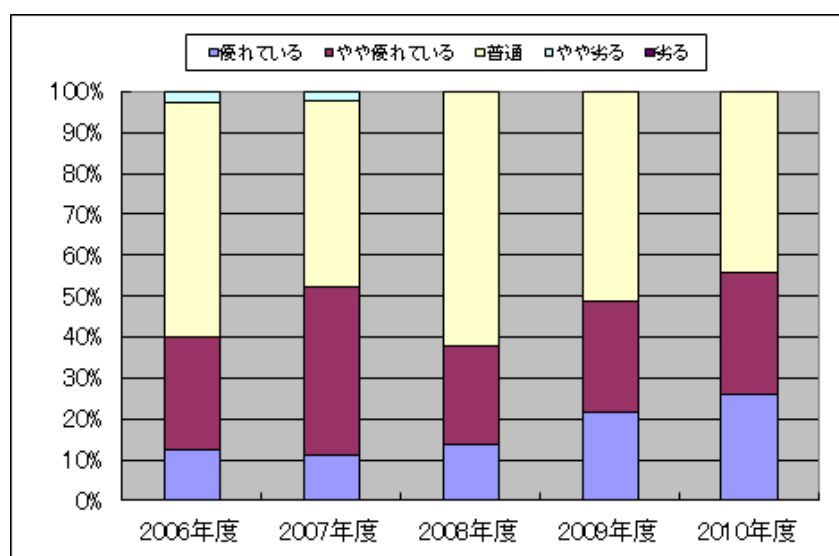
※アンケート回収率

配付枚数	回収枚数 (回答率)
120社	27社 (22.5%)

1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

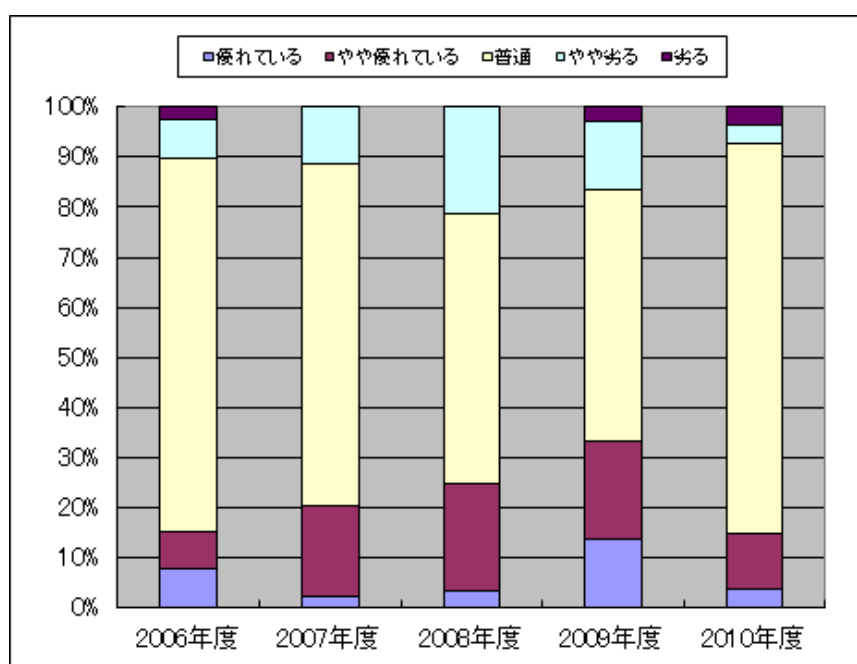
(1) 修了生が受けた教養（人文・社会等の一般教養）教育のレベル

「やや優れている」「優れている」の評価が40%～55%で推移している。全体として企業側の評価はこのレベルに定着しているとみられる。



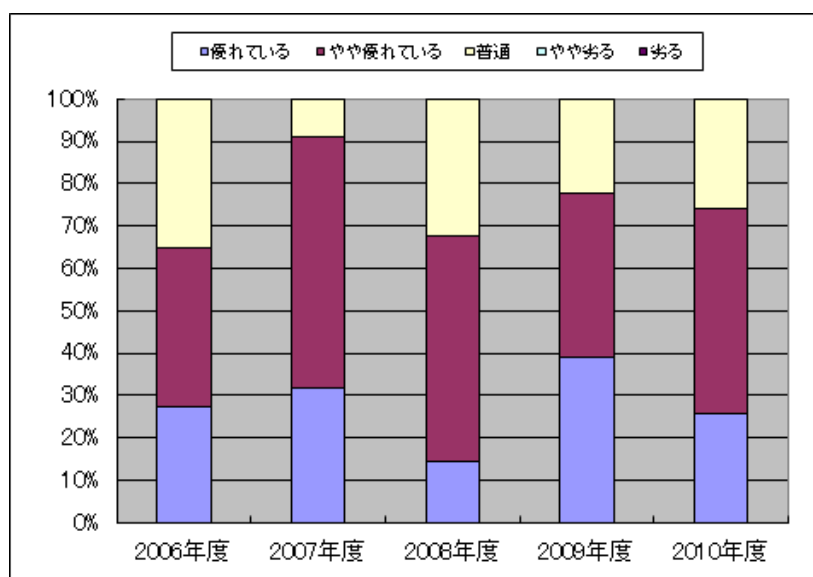
(2) 修了生が受けた語学（特に英語）教育のレベル

「普通」以上の評価が過去2年間80%を上回っているものの、「やや優れている」以上の評価が20%以下になると共に、「劣る」の評価も若干増加を見せている。長年に亘って「教養」、「理数系」等と比較して低い数値にとどまっており、着実な改善への対策が必要であると考えられる。



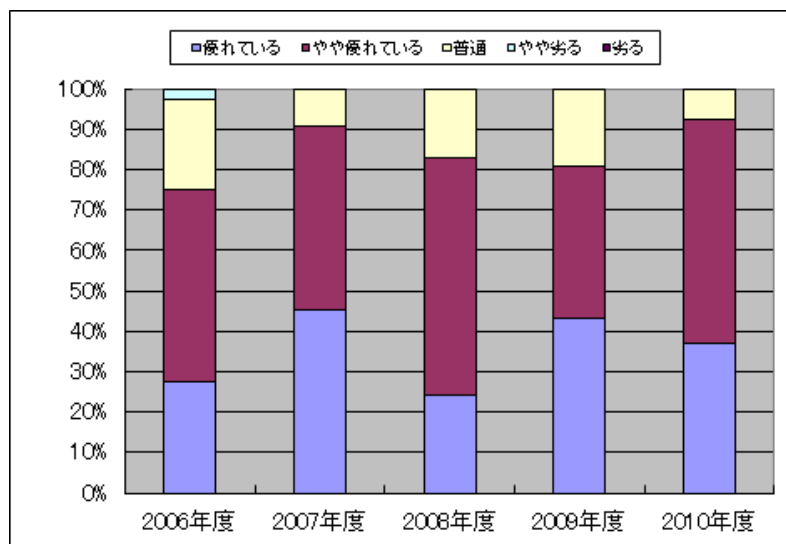
(3) 修了生が受けた理数系(数学・物理・化学)教育のレベル

「優れている」「やや優れている」の評価は、2007年度を除けば2006年度以降65%以上で推移しており、全体的に企業側の評価は高いものと判断される。



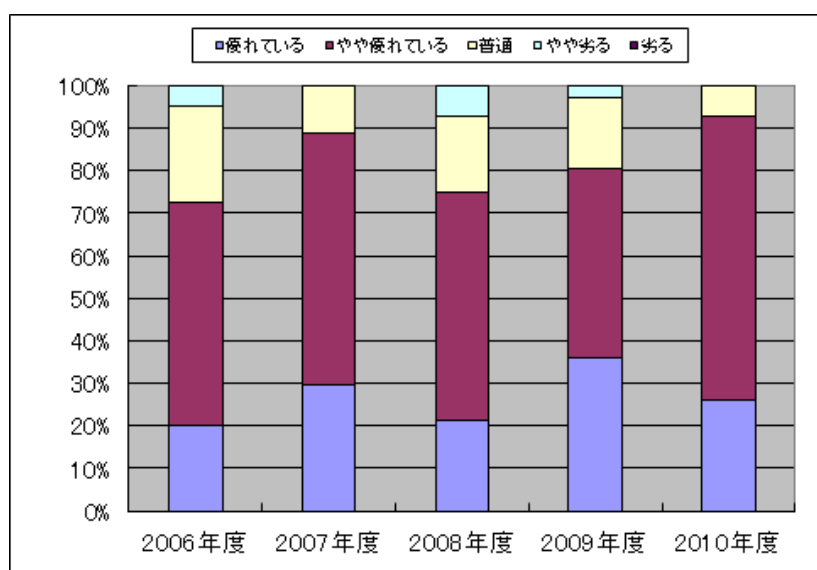
(4) 修了生が受けた専門教育のレベル

2007年度以降「普通」以上が100%である。また「優れている」「やや優れている」合計の評価も、2007年度以降80%以上である。「優れている」の評価に隔年ごとにジグザグな変動が見られるものの企業側の評価は極めて高いことがわかる。



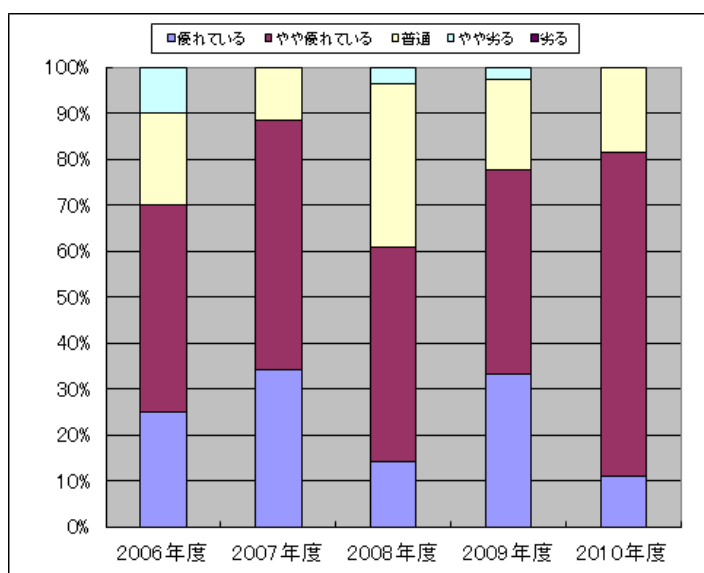
(5) 修了生が受けた課題探求能力教育のレベル

「やや劣る」の評価が2009年度には3%あるが、「やや優れている」以上の評価は2006年度以降70%台以上で推移し、2010年度は90%を上回った。企業側の評価は概ね高いと判断される。



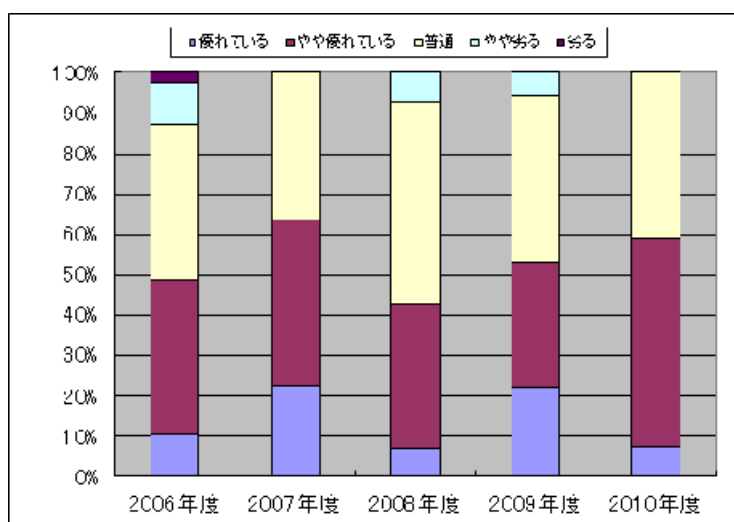
（６）修了生が受けた課題解決能力教育のレベル

「やや優れている」以上の評価は2008年度に60%台に低下したものの、それ以外は70%以上を維持し、2010年度は80%を超えている。「普通」以上の評価は2010年度に100%に達しており、概ね高い評価を受けていると思われる。



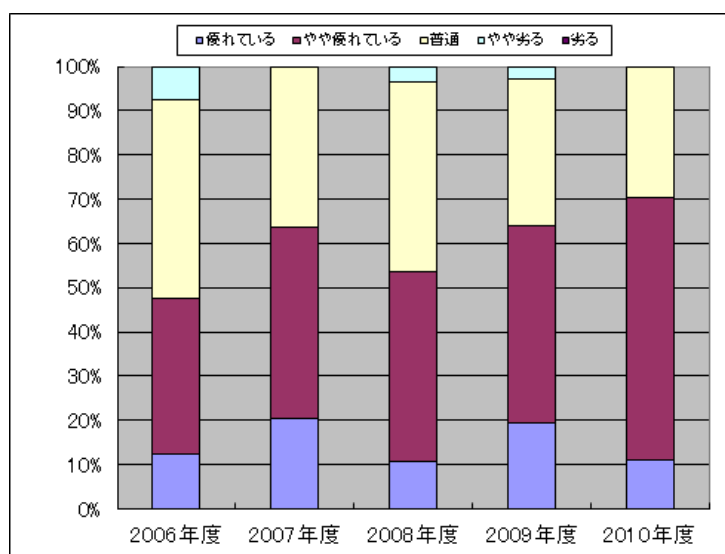
（７）修了生が受けた独創性教育のレベル

2010年度は「普通」以上の評価が100%である。2006年度～2010年度の「やや優れている」以上の評価はおおよそ50%以上で推移しているが、2008年度だけ前年度から20%ほど減少して43%となっている。引き続き、継続的な工夫が必要であろう。



（８）修了生が受けた構想力教育のレベル

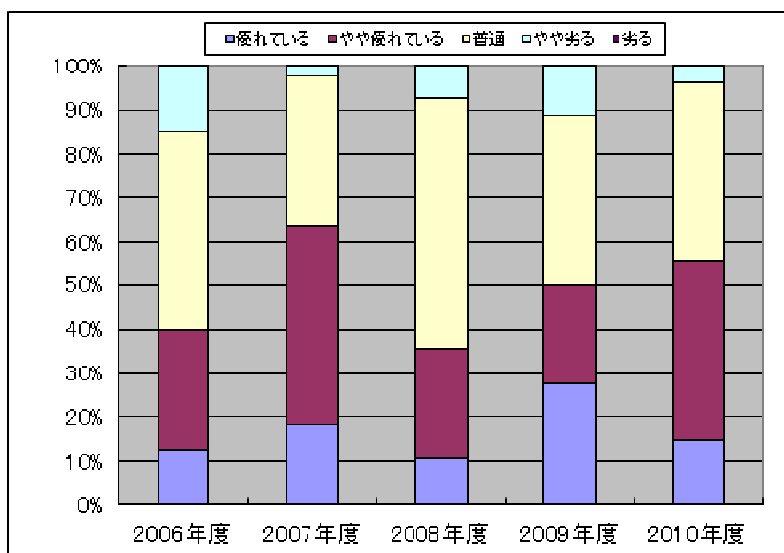
2010年度は「普通」以上の評価が100%で、「やや優れている」以上も70%に達している。過去5年間に変動はあるものの、「普通」以上が90%を維持しており、まずまずの評価と言ってよいであろう。



（９）修了生が受けた表現力教育のレベル

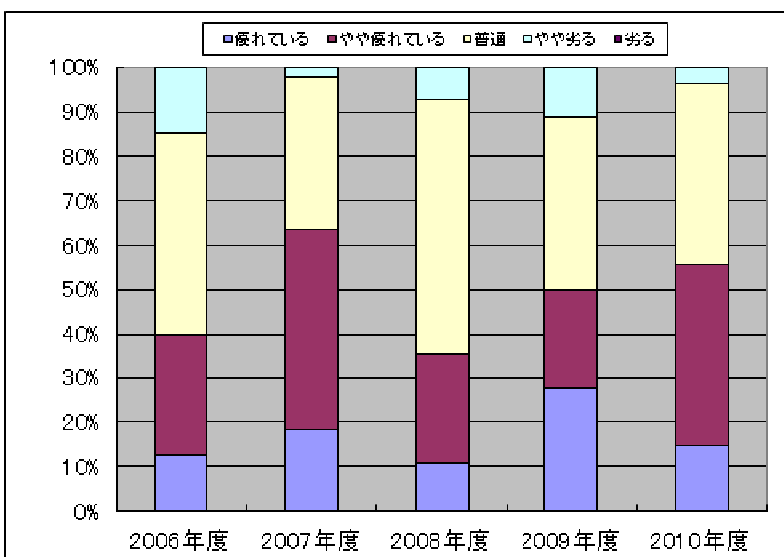
多くの項目でジグザグの傾向が見られるが、「普通」以上の評価は概ね90%で推移している。

「やや優れている」以上の評価は2007年度に64%と高い値を示したが、その他の年度は概ね40～50%の範囲で推移している。継続的な対応が必要であろう。



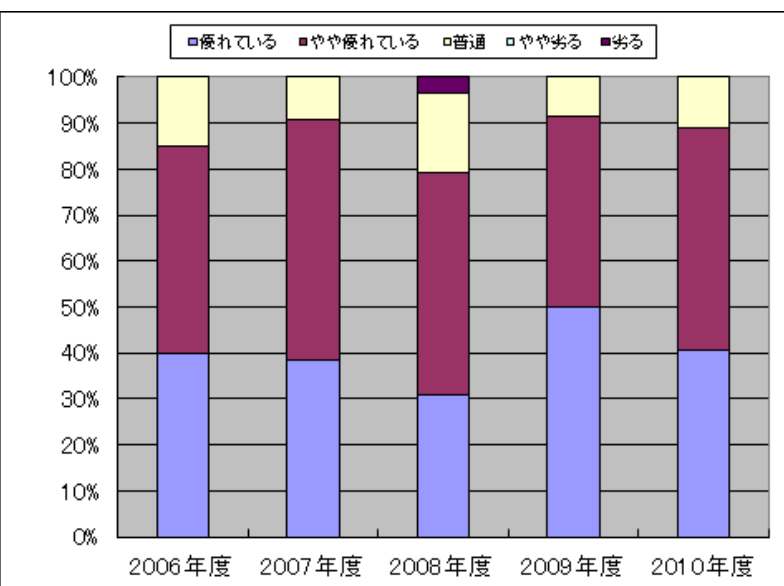
（10）修了生が受けたコミュニケーション能力教育のレベル

2010年度の「やや優れている」以上の評価が50%を超え、「普通」以上は96%である。今後も「普通」以上が100%に、また「やや優れている」以上が着実に増加するよう工夫が必要であろう。



（11）修了生が受けた仕事に取り組む熱意に対する教育のレベル

2006年度以降「やや優れている」「優れている」を合わせた評価はほぼ80%以上の数値を確保している。「普通」以上の評価は、2008年度を除き100%であり、全体的に本学の修了生は企業から高い評価を受けていると考えられる。



2. 貴社・貴機関が、九州工業大学 大学院工学研究科 修了生に望む事項（修了生の資質等）がございましたらご記入ください。

キーワードとして挙げる。「主体性」、「積極性」、「人間力」、「コミュニケーション力」、「幅広い視点」、「意欲」、「課題解決能力」、「好奇心」、「チャレンジ精神」、「論理的思考力」、「語学力」等。特に「コミュニケーション能力」を挙げている回答が多いところから、それらを組織的に伸ばす努力が必要であろう。

- ・ 物事の事象を正確に読み取り、相手に自分の考えを正しく伝えることができる学生を望む。
- ・ 貴学出身者は把握している範囲で例外なく真面目で優秀でかつおとなしい。主張を明確にする力がもっと欲しい。
- ・ 以前(卒業後10年以上)は、元気があり社内外の人との積極的コミュニケーションの取れる人が多かったが、最近の卒業生は、おとなしい人が多い。
- ・ 課題解決に向けて、自らが行動し、対応する力を身につけてほしい。
- ・ 貴校修了生に限らず、コミュニケーション能力が高いことが求められています。
- ・ 基本的な外国語を含む、コミュニケーション能力。
- ・ コミュニケーション能力(特にあいさつ)。積極性。
- ・ 現場での改善活動には、課題探求能力と解決能力が不可欠です。それ以上に現場作業者、上司、同僚、他課要員とのコミュニケーション能力とプレゼン能力は大切と考えます。
- ・ コミュニケーション能力。構想力。システムエンジニアとして重要な上記2つのポイント
- ・ 能力・知識は問題なし。その能力・知識を十分に発揮できるような表現力、適応力、課題解決力、などを望みます。
- ・ コンサルタント(土木系)に入社希望する学生の大半が「都市計画」等の計画系の分野を望む傾向がある、大学・大学院での教育では、計画的な事を学ぶ事が多いためこのような傾向になると思われる。もっとハード面についての教育を行って、学生がハード面に興味を持つようにしてほしい。
- ・ 一般的なことになりますが、何ごととも自発的・自律的に動くことができ、又、未知の分野でも好奇心を持ってチャレンジできる方が望ましいと考えています。
- ・ 工学的な好奇心、熱意、ベースとなる専門性、モノ作りへの興味。
- ・ 語学力向上。日本の技術力をグローバルに発信していこうとする気概。(小さくまとまらないでほしい)。
- ・ 幅広い分野にも興味を示す姿勢
- ・ 特に課題探究能力を期待したい
- ・ 研究に対する取組み姿勢。論理的に考える力など。
- ・ 自分で課題を設定し、解決出来る力が欲しい。
- ・ 特にございません。
- ・ これまで同様に元気で社交性に優れた、課題に対応できる方にぜひお越し頂きたいと考えております。
- ・ 残念ながら退社されました。(昨年)
- ・ 十分に高い能力を発揮されております。

3. 九州工業大学 大学院工学研究科の教育に対して、ご意見・ご要望（企業が必要とする人材の専門分野、専門知識等）がございましたらご記入下さい。

キーワードとして、「ディベート力」、「語学」、「課題解決能力」、「基礎学力」、「専門知識」、「幅広い知識」が挙げられる。また、「(修了生の) 研究レベルの維持・向上」への期待がある。

- ・ ハードウェアからソフトウェアまでの幅広い知見を習得する中で原理原則をしっかりと身に付けさせていただくことを望みます。
- ・ 基礎(数学・物理・化学)の徹底。適応力、応用力の醸成。ディベート力の育成。
- ・ 試験制度の変化(受験科目の減)に伴い、数学・物理の基礎学力が低下しているように感じる。必要な専門分野: 金属材料・化学・機械
- ・ 無機化学全般、製造プロセス技術。今後は語学能力(英語・中国語など)は必須になると思います。
- ・ 専門分野や知識はあえて問わない。研究テーマに取り組む姿勢や着眼点、アイデア、発表内容等の独自性を問う。
- ・ 物事の本質を理解する力
- ・ モラル・モチベーションの高い、前向きな人材育成をお願いします。
- ・ 当社システム構築業務に近い、アプリケーション領域、ネットワーク・データベース領域等の専門知識、研究経験。
- ・ 即戦力となる人材、教育を望む。机上の理論のみでなく、実習させて教育するプログラムも必要。(橋梁や構造物の劣化判断等を経験させるプログラム等)
- ・ 理系全搬の分野の人材ニーズがありますが、特に、機械、電気、情報、物理、化学系のスキルを持った方に来ていただきたいと思います。
- ・ 引き続き、熱意溢れる学生の育成をお願いします。
- ・ 特にありません
- ・ どのような分野であれ、基礎がしっかりとしている方を育ててほしいと思います。課題解決力を持った学生は、とても期待できます。
- ・ 優秀な学生をご紹介頂き、ありがとうございます。
- ・ 特にございません。
- ・ 今後ともよろしくお願い申し上げます。
- ・ 今後は益々、外国語力と日本の文化への知識が必要になって来ると思います。
- ・ 特にございません。

4. 全体としての傾向

2010 年度における「普通」以上の評価は、「教養」100%、「語学」92%、「理数系」100%、「専門」100%、「課題探求能力」100%、「課題解決能力」100%、「独創性」100%、「構想力」100%、「表現力」96%、「コミュニケーション能力」96%、「仕事に取り組む熱意」100%であり、ほぼ例年通りと言える。また、2010 年度における「やや優れている」以上の評価は、「教養」56%、「語学」15%、「理数系」74%、「専門」93%、「課題探求能力」93%、「課題解決能力」81%、「独創性」59%、「構想力」70%、「表現力」56%、「コミュニケーション能力」63%、「仕事に取り組む熱意」89%であり、「語学」を除いて、ほぼ例年通りである。特に、「理数系」、「専門」、「課題探求能力」、「課題解決能力」、「仕事に取り組む熱意」と高い評価を得ている。語学では「やや劣る」以上の評価が8%であるものの、「劣る」の評価が4%存在する。もとより母集団に英語が不得意な傾向があるが、「教養」、「理数系」、「専門」の評価に比べてかなり低いレベルにあり、長年に亘る課題が未だ解決途上にあることを物語っている。

2. 5 教育達成度評価アンケート：卒業生 (2008年3月以前卒業生)

本節(2.5)と次節(2.6)では、まだ、九州工業大学工学部及び大学院工学府(旧工学研究科)における教育効果が残っていると思われる入社後3年程度を経過した本学卒業生・修了生を対象に、彼らが大学時代に受けた教育レベルと満足度に対するアンケート調査を実施し、その結果をまとめています。

※アンケート実施年月日 平成23年 6月10日

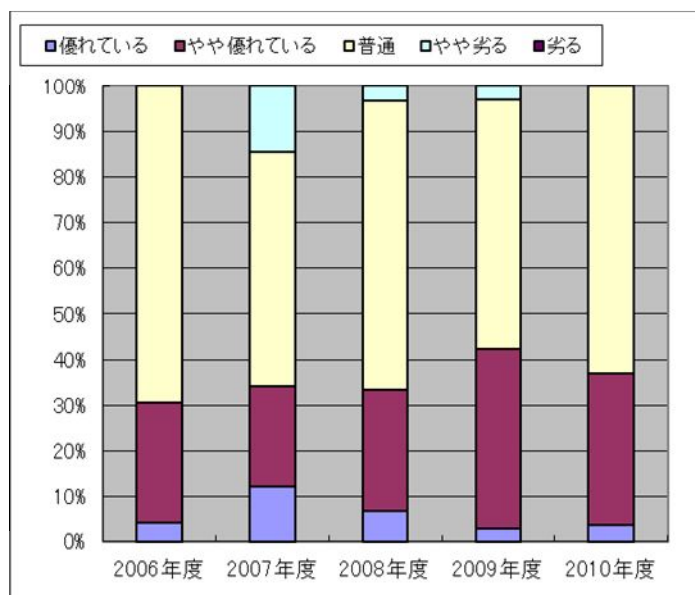
※アンケート回収率

配付枚数	回収枚数(回答率)
142名	27名(19.0%)

1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

(1) あなたが受けた教養教育 のレベル

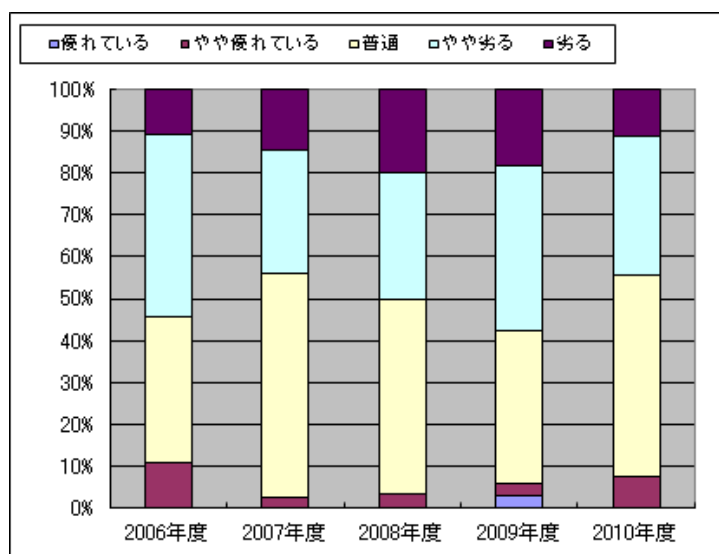
2010年度は、「普通」以上の評価が100%に達した。教養教育レベルは概ね肯定的評価を受けていると判断される。「やや優れている」以上の評価は過去5年間40%を下回っており、改善の余地をまだまだ残している。



(2) あなたが受けた語学(とくに英語)教育のレベル

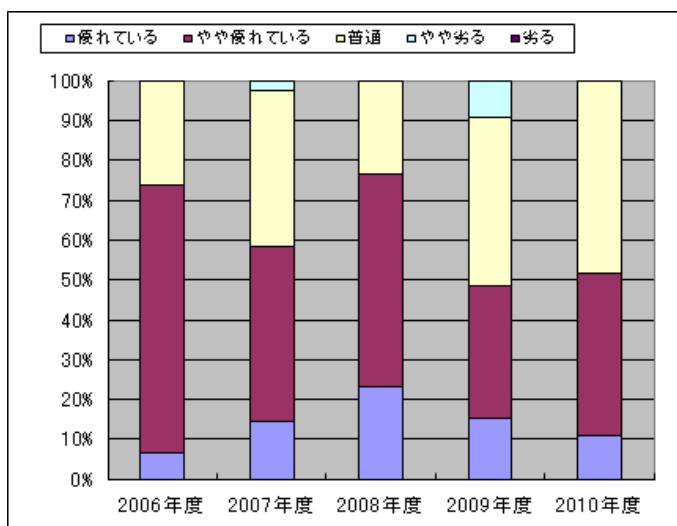
「普通」以上の評価が長年に亘って50%近傍で推移している。

「劣る」の評価も10%以上あり続けている。緊急に解決する必要がある。



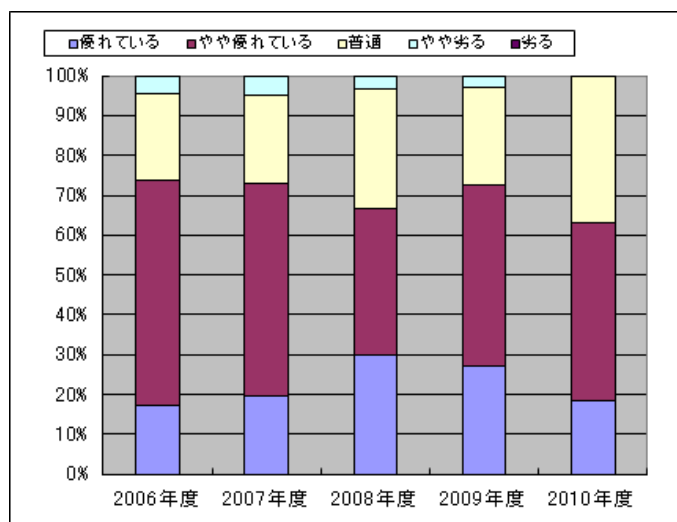
(3) あなたが受けた理数系教育のレベル

2009年度と比べて2010年度においては「優れている」「やや優れている」の合計はそれ程大きな違いはないが、2010年では「やや劣るが」無くなり、改善していることがわかる。



(4) あなたが受けた専門教育のレベル

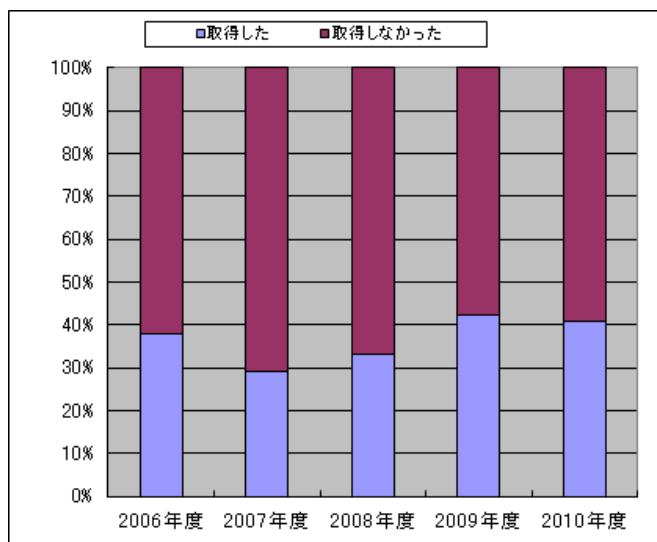
2009年度においては「優れている」「やや優れている」が全体の70%以上を占めていたが、2010年度においては前年度より10%程度減少したものの依然高く評価されていることがわかる。



(5) あなたは入社後資格を取得しましたか？

○入社後取得した資格（具体的に）

- ・ TOEIC650点
- ・ 学会設備士
- ・ 基本情報技術者、情報セキュリティ検定
- ・ 技術士補
- ・ 技術士補、一級土木施工管理技士。
金属熱処理2級、玉掛、フォークリフト、
- ・ 5t未満クレーン、有機溶剤作業主任者…。
高圧ガス製造保安責任者、甲種化学、
- ・ 危険物取扱者甲種
- ・ 消防設備士、甲種4類、危険物取扱者乙種4類、等
- ・ 電験3種、エネルギー管理士
- ・ 電験3種、第2種電気工事士

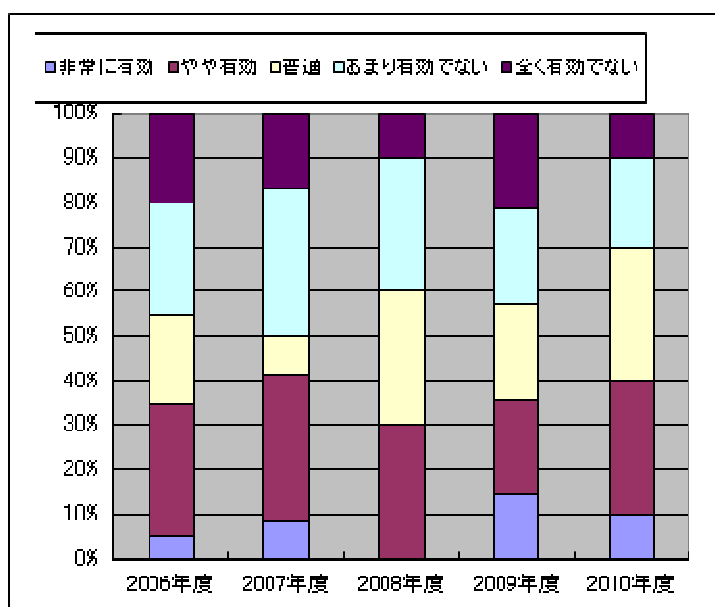


・ 簿記3級

2010年度は2008年度より10%程度増加しているものの昨年度との比較ではほぼ横ばいであることがわかる。今後、資格に関する意識を高める教育も必要と考えられる。

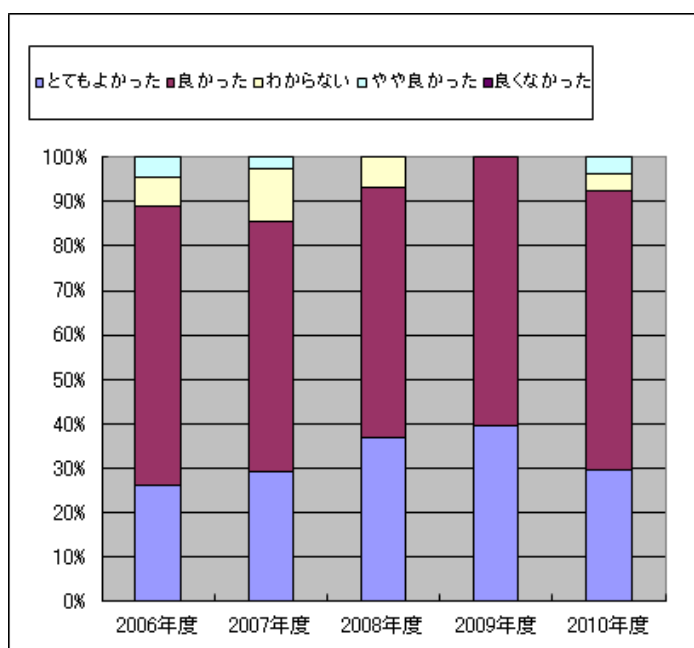
（６）資格を取得した方にお尋ねします。本学の教育は資格取得に有効でしたか？

2010年度においては「全く効果がない」の比率が一割減り、「やや有効」が同率で増えたものの、全体的には大きな違いはない。有効でなかったとの評価に関しては資格の種類（例えばフォークリフト等）と大学教育のマッチングの問題等も関与しているものと考えられる。



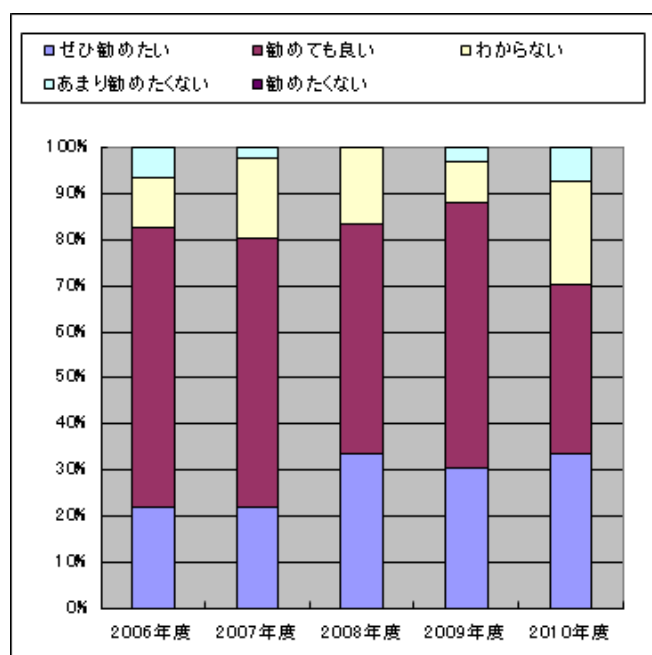
（７）あなたは、九州工業大学工学部を卒業してよかったと思いますか？

2010年度においては「とても良かった」「良かった」の評価が依然９割を超えているものの「わからない」「やや良かった」とする評価も少し入ってきた。全体的にはほぼ全ての卒業生が今の仕事を続けていく上で、本学で受けた教育の成果を肯定的に考えている。



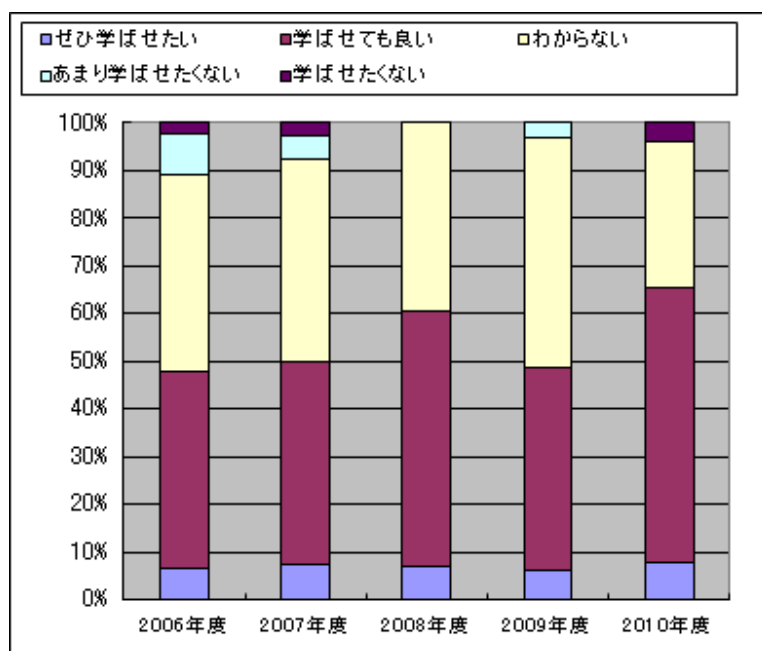
（８）あなたは、九州工業大学工学部を魅力ある学部として後輩に勧めたいと思いますか？

「ぜひ勧めたい」、「勧めても良い」の割合が2009年度の9割程度から約2割落ち込んでいる。就職者は九州工業大学工学部を魅力ある学部として後輩に勧めたいと思うように更なる努力が必要であろう。



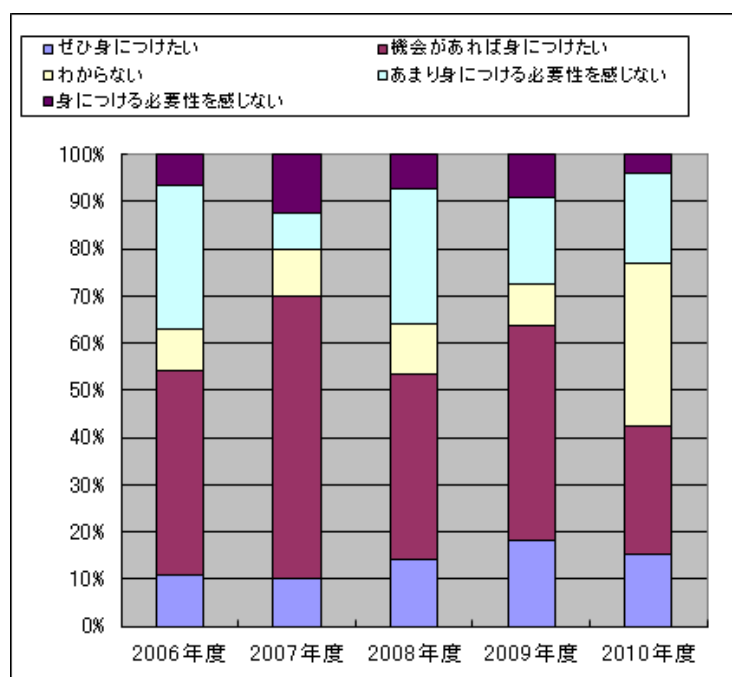
（９）あなたは、将来、子供ができたら、九州工業大学に学ばせたいと思いますか？

「ぜひ学ばせたい」、「学ばせても良い」の割合が15%以上増加している。これはここ5年間では最高の数字であり、今後もこの流れを継承し、より魅力ある大学にする努力が必要である。



(10) あなたは、更に高度な学力(修士、博士)を身につけたいと思いますか？

「あまり身につける必要性を感じない」「身につける必要性を感じない」の割合が3割程度から少し減ったものの、高度な専門性を「ぜひ身につけたい」と「機会があれば身につけたい」とするものの合計が20%以上減少し、「わからない」が激増している。かなりの数の学生がその必要性に迷いを持つようになっていることは明らかである。



2. あなたが九州工業大学 工学部 に在学して良かった点がありましたらご記入下さい。

九州工業大学で学んだことが十分職場で役立っている。特に研究室に入ってからの研究と教育によって習得したことが有効であったと考えられる。専門教育やその教育レベルの高さについての満足度は高く、研究指導では学術面の指導のみならずサークルや共同研究を通じての有意義な人的交流も特筆されている。

- ・ 専門的な知識を得たことよりも、実際の組織での仕事の進め方を学べたこと。研究室は、会社とは異なるが環境は似ていると思う。
- ・ 特にない
- ・ 実際の職場の感じを聞くことができた。単位を取る難しさを学べた。学食がおいしかった。
- ・ 答えを追求する力がつき、それが今の仕事において役に立っていると思う。
- ・ 電気に関して基礎知識をしっかりと学べた点良かった。
- ・ 大学の設備、必要な機材などが備えており研究に快適な環境でした。また、留学生サポートが充実していました。
- ・ しっかり勉強すれば力の付く授業が多かったと思います。
- ・ 自身による学習は不足していたが、専門科目のカリキュラムは充実していたと感じた。
- ・ 就職先がゼネコンであるため、業務内容は、管理業務が多くなるが、大学時代にコンクリートの製造等を実験で実際に行った事による経験が仕事に生かしていると思う。
- ・ 就職できたことと部活をやっていて他の学科に知り合いができたことです。
- ・ 就職先は大学で学んできたこととは別の業種の所ですが、専門知識以外で構想力や表現力が身に付いたと思います。他の大学のことはよく知りませんが、ある程度上のレベルで学べた事は良かったと思います。
- ・ 電気・電子・情報分野の専門知識(基礎)を学ぶ事が出来たおかげで現在の業務に生かしている。
- ・ 知識の豊富な先生方がいて、とても親切にわかりやすく教えてくれたこと。実験設備が豊富にあり、勉学する環境としてとてもいい環境だと思います。

- ・ 自分なりに目標を見付け、それを達成して卒業した点については良かった。生涯付き合える友人も出来た。就職に関しては学校推薦をいただきスムーズに現職に就く事ができた。この点は非常に感謝している。
- ・ 先輩方のおかげで、学校の名が通っている。ある程度のPCスキル。
- ・ 金属材料概論は役に立った。会社内に九工大卒の人が何人かいるため、入社後、いろいろと、役に立った。
- ・ 周りの人がみんなまじめに勉強・研究に取り組んでいる点。
- ・ 就職できた。
- ・ 部活、研究室で上下関係を学べたことは、入社後非常に大きかったと感じてます。研究室での経験が、仕事の進め方などに役に立っている。
- ・ 理数系科目については、レベルが高く、様々なことを勉強させて頂き、大変勉強になりました。また、実習・実験では物理・化学等の一般的な分野から、測定方法・web・プログラミング・組込ソフトといった専門的な分野を実際に体験して学ぶことができたことが最も良かったと思います。
- ・ 実験設備が充実していた。

3. あなたが九州工業大学 工学部 に在学して不満を感じた点、こう改善すべきだと感じた（例えばこういう技術（科目）を教えてほしかった）点がありましたらご記入ください。

学部の教育の目的や課程と日常の会社業務遂行に必要とされる能力や資格の差異については本人の意識も截然としていないため、アンケートには「不満」として表れてしまったように見受けられる。特に卒業後の業務内容との関係で一般教育や専門科目に対する要望が示されている傾向にあり、そのため実践的教育を望む声が多い。大学教育における論理的思考能力の育成という基本的課題との調和を図りながら、英語教育、プログラミング言語、CAD等の科目のより一層の充実が求められている。

- ・ 技術も大事だが、今学んでいる知識が、土木という社会でどのように活用できるのか、をまず徹底的に教えるべき。将来のイメージが根付く前に専門知識やプログラミングを教えてもあまり意味はない。（高校までの教育ではそのように考える力をつけられていないため、大学で教えるしかない）
- ・ 課題に対してどのように取り組んで解決するか考えるような講義があるといいかも
- ・ プログラミングの具体例(C++)。CAD技術。
- ・ 仕事を始めて、生産技術において配線図面を引く事があったが、講義の際に座学だけでなく、実際に配線する等の経験があっても良いと思った。（配線の基本的な知識）
- ・ 特になし
- ・ 特になし。
- ・ Auto Cadの勉強ができれば良かったと思います。
- ・ 英語はもっと重点的に学習すべきだと感じた。
- ・ 現在の仕事で必要として「CAD」の操作方法。構造物建設にあたって、調査・計画・施工の一連の流れが分かる講義。各講義は、一つ一つ専門的で魅力的だが、それらが独立しており、物づくりの流れを捉えづらいつと感じた。
- ・ 講義と会社での業務について、在学時はどうつながるのかイメージできていなかった。個人で調べても難しい所もあるので、就職を希望している学生へ各職業の業務内容、知識について講義を開いてもおもしろいと思う。
- ・ 今の時代だいたい企業がコンピューター関連に強いと有利になると思うので、どの学部であってもう少しコンピューター関連の科目が増えるといいのではないかと思います。

- ・ 情報コースではプログラム言語で「C言語」しか学ばなかったが、その他の言語でも近年主流となっているものがあれば、授業で学びたかった。
- ・ 私が在学中には、CADを使った実習・講習がありませんでしたので、そのような講義を取り入れてほしかった。明専寮をきれいにしてほしい。
- ・ 外国語の講義については、論ずるまでもなく、全てが少しも役に立っていない。例えば英語なら、TOEIC対策の為だけに1年割いてもらった方がまだ有益、社会で使える。講義にしても、大学生の時点ではどの講義が何の仕事の役に立つのかイメージできない。将来やりたい仕事と今受けられる講義とを関連付けて検索できるようなシステムを周知してくれれば良かった。
- ・ 工学(業)英語を学べる科目がほしかった
- ・ 語学力。プレゼン練習。就活時のサポートがうれしい。
- ・ 基本的に学部(4年)卒のレベルでは、どの会社に入っても、勉強した内容はあまり役に立たないと思う。必要に感じたのは、レポートの作成能力、プレゼン能力、等です。
- ・ 特になし。
- ・ 就職セミナー等を、強制参加にするべき。
- ・ 専門教育は、初めはイメージがつきにくく、頭に入りにくいので、実習、見学等をふやした方がよいと思います。
- ・ 実習や各学科でプログラミングを受講しましたが、全てC言語でのプログラミングでした。C言語の他にも言語があることは知っていましたが、その内容についてはあまり勉強できなかったもので、Java等も学べると良かったと思います。
- ・ レポート類はパソコンで作成させた方がよいと思います。(私が在籍中は手書きでした。)ディベートをもっと講義で取り入れた方がよいと思います。

4. 全体としての傾向

回答のあった卒業生は27名(回答率 19.0%)であった。問2の「在学して良かった点」と問3の「不満を感じた点」で相反する形の回答が散見され、各人の在学中や就職後の充実感・手応えと言ったものが多様であること、また卒業生の向上心が高いことを反映している。

学部教育と大学院前期、そして大学院後期の教育の目的と実社会の業務遂行における能力・資格の差異が本人にも截然と意識されていないためアンケートには「不満」として表現されてしまったような部分が見受けられる。

大学教育における論理的思考能力の育成という基本的課題との調和を図りながら、英語教育、実験・実習、プログラミング、プレゼンテーションなど実践的科目のより一層の充実が求められている。

2. 6 教育達成度評価アンケート：修了生 (2008年3月以前修了生)

※アンケート実施年月日 平成23年 6月10日

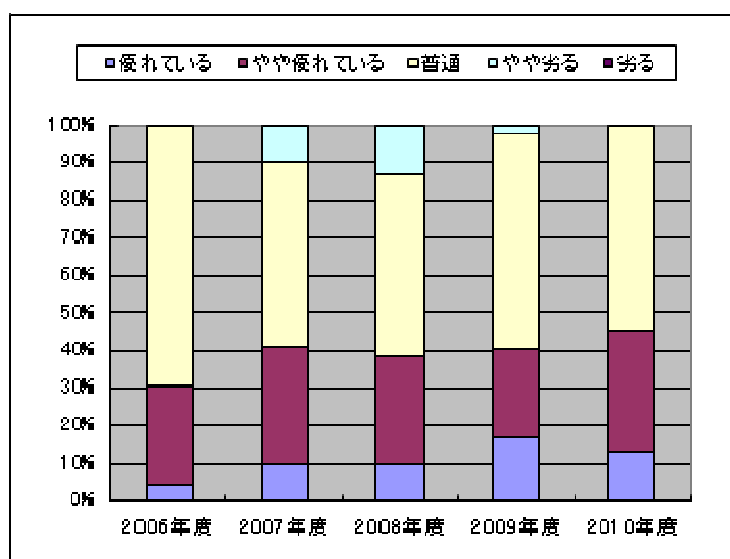
※アンケート回収率

配付枚数	回収枚数(回答率)
188名	31名(16.4%)

1. 教育の達成度について、該当項目に○をつけてください。

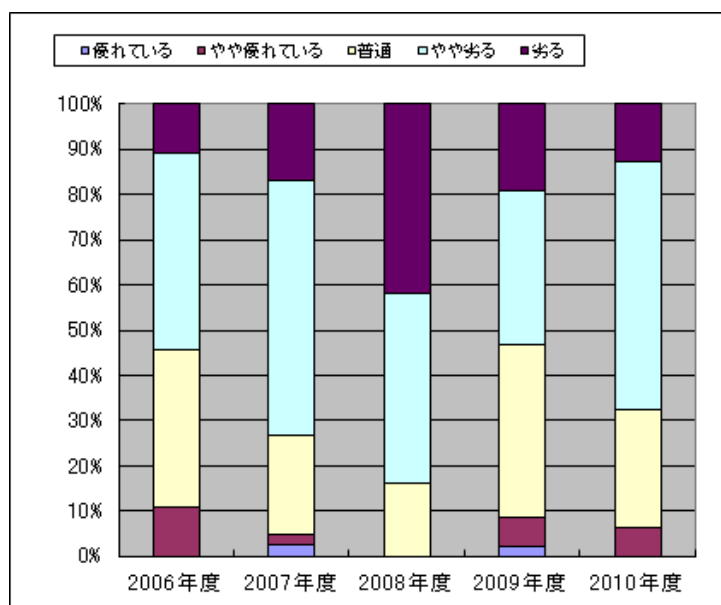
(1) あなたが受けた教養教育のレベル

2010年度は「優れている」と「やや優れている」の割合が2009年度より微増している。教養教育のレベルについては肯定的に評価されている。



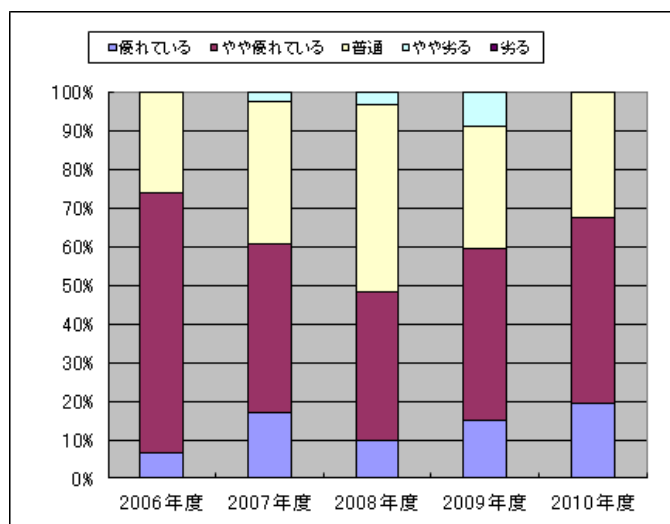
(2) あなたが受けた語学（特に英語）教育のレベル

英語等の語学教育については、現状の批判的評価が2008年度より見てみると次第に減少し肯定的評価も少し出てきたが、今後も英語教育を改善する必要がある。



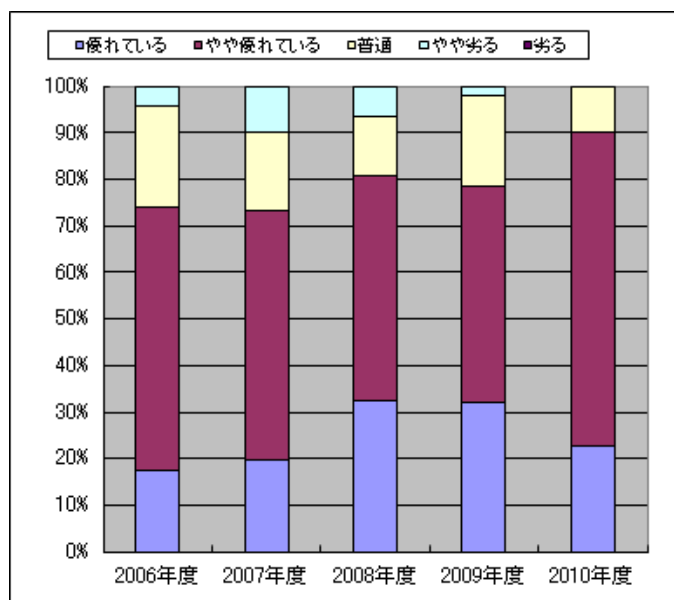
（３）あなたが受けた理数系教育のレベル

理数系の教育レベルについては、肯定的評価が７割程度であり良い評価を得ている。2009年度に10%程度あった「やや劣る」は2010年度においては消えており、改善が進んでいることがわかる。



（４）あなたが受けた専門教育のレベル

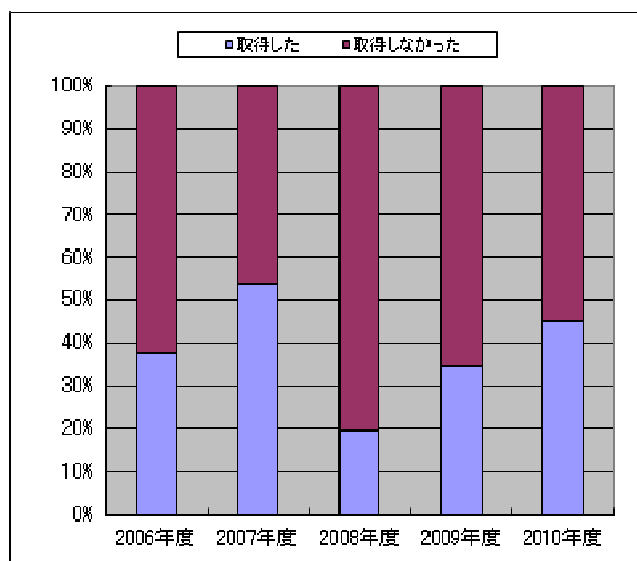
専門教育のレベルについては、肯定的評価が９割程度あり現在の教育内容が高く評価されていると判断できる。



（５）あなたは入社後資格を取得しましたか？

○入社後取得した資格（具体的に）

- ・ 公害防止管理者(水質・1種)、エックス線作業主任者、JIS品質管理責任者
- ・ 危険物取扱甲種
- ・ 危険物取扱者乙種4類
- ・ X線作業主任者
- ・ 基本情報処理技術者
- ・ 電検
- ・ 危険物取扱者甲種、火薬類取扱保安責任者甲種
- ・ QC検定2級
- ・ 危険物(甲)、公害防止管理者(水質1種)。
- ・ TOEIC(650点)、ボイラ2級、酸欠、他

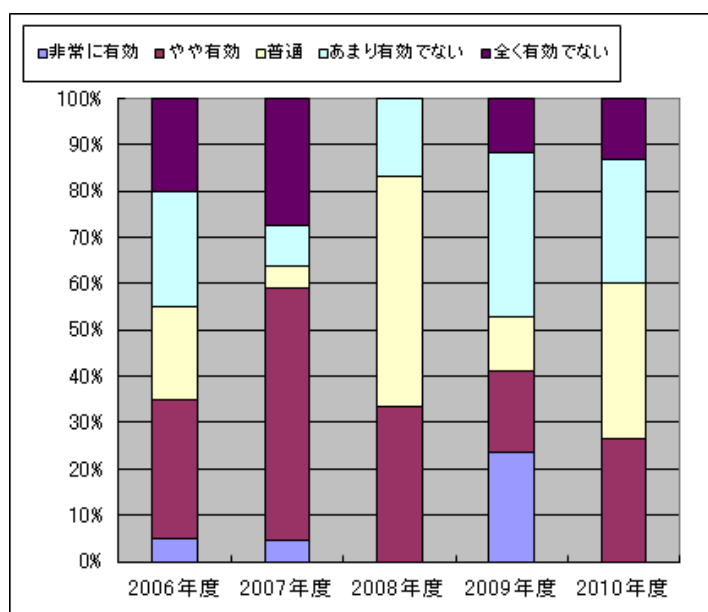


- ・ 危険物取扱者甲種
- ・ 有機溶剤、酸欠
- ・ 危険物取扱甲種

入社後に何らかの資格を取得した者の比率が2009年度より10%増加している。

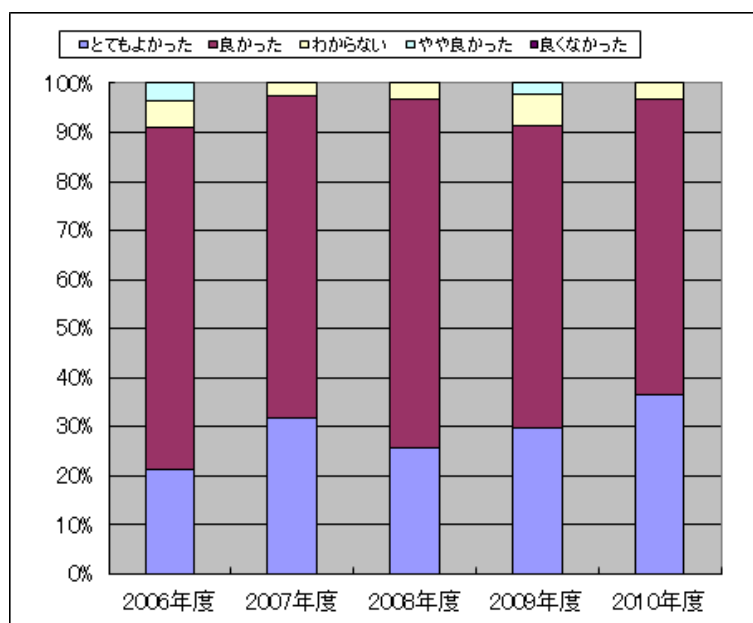
（6）資格を取得した方にお尋ねします。本学の教育は資格取得に有効でしたか？

資格取得に対する本学の教育を肯定的に評価する者の数が減り、「普通」以下の評価をする者の数が増えた。今後の調査が必要である。



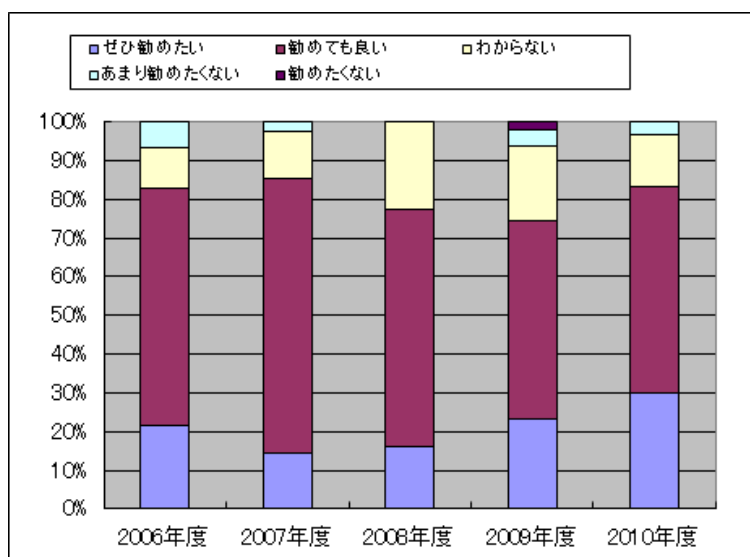
（7）あなたは、九州工業大学大学院工学研究科（博士前期又は後期課程）を修了してよかったと思いますか？

工学研究科の教育のあり方としては、2010年度は「とてもよかった」がさらに増え、大多数から肯定的評価を受けていると判断できる。



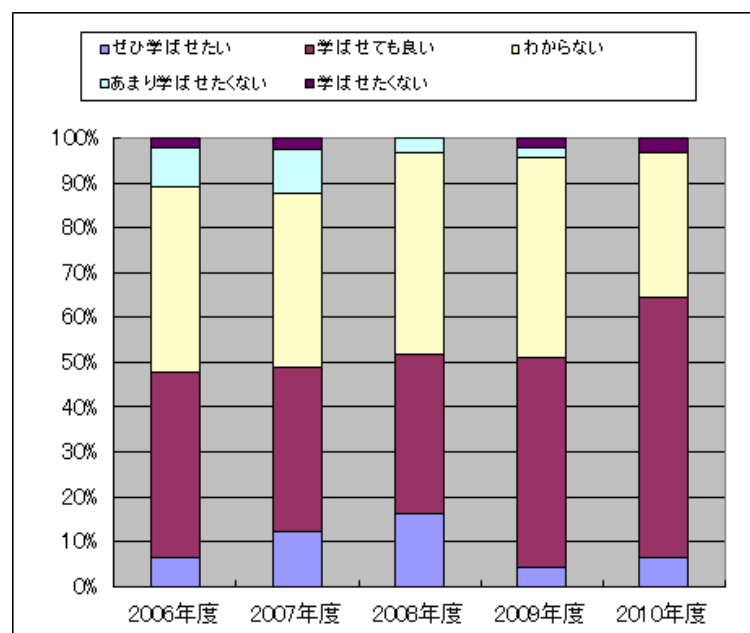
（８）あなたは、九州工業大学大学院工学研究科を魅力ある研究科として後輩に勧めたいと思いますか？

2009年度から2010年度にかけて「ぜひ勧めたい」が10%程増加し「あまり勧めたくない」を圧縮した。今後は「わからない」以下の比率を下げていく必要がある。



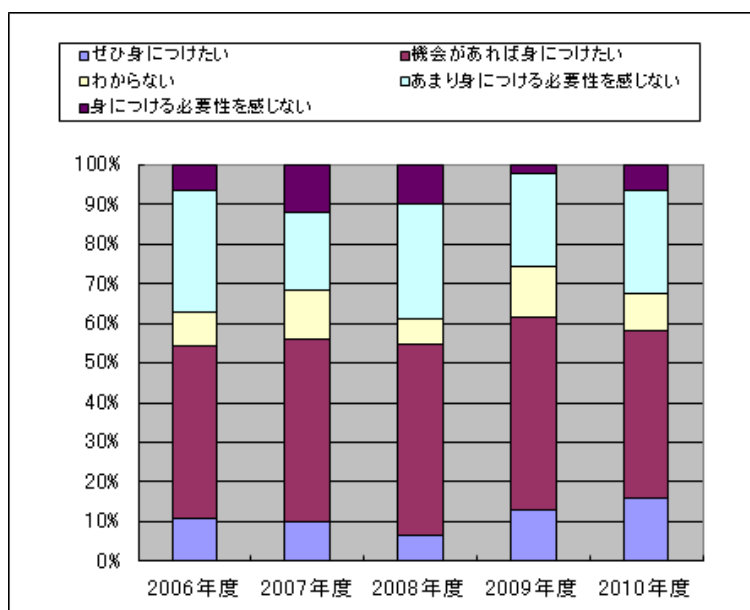
（９）あなたは将来、子供ができれば、九州工業大学に学ばせたいと思いますか？

2010度の傾向を見ると、「ぜひ学ばせたい」と「学ばせても良い」が合計で65%程度にまで上昇しこの5年間で最も高い評価を得ている。しかし依然「わからない」以下の回答も多い。より魅力ある大学にする努力が必要である。



（10）あなたは、更に高度な学力（博士）を身につけたいと思いますか？

「ぜひ身につけたい」と「機会があれば身につけたい」の合計は昨年度と大差は無い。一方で、「あまり身につける必要性を感じない」と「身につける必要性を感じない」は1割以上程度増加している。高度な学力を身につける意義を周知する必要がある。



2. あなたが、九州工業大学大学院工学研究科に在学して良かった点がありましたらご記入ください。

大学院に在籍して良かった点として、研究指導を通しての教員とのコミュニケーション、在籍中に学んだ専門知識、研究室での先輩、同輩、後輩との交流や深いつながり、学会発表、産学連携などを挙げている。このような評価は昨年と同様であり、今後もその維持と一層の高度化を図りたい。

- ・ 九工大OBの方々の面倒見が良く、安心できる。
- ・ 受講できる科目が幅広く、自分のやりたいことを見つけることが出来た。(電気工学でも情報・制御系の科目があり、システム開発に興味を持った。)
- ・ 現在、入社した会社に、九工大の出身者が比較的多かった点。
- ・ 専門知識の向上。実験(研究)を通して考える力をつける事が出来た。
- ・ 就職活動の際に学校推薦がたくさんあったこと。NMRが自由に使える。
- ・ 設計、加工、運用、トラブル対応を研究の中で経験できた点。
- ・ 専門的な知識を身に付けれたから(しかし、業務には関係なし)
- ・ 良い技術者になるための心得を厳しくご指導いただき社会人になって大変助かりました。
- ・ 課題探求能力及び課題解決能力に関しては、在学中に培った能力を活かしている
- ・ 指導教官が熱心に指導してくれたこと。
- ・ 大学としての評価が高い点。
- ・ 実践的な教育が多かったため、業務に直接役立つこともあった。
- ・ 就職先が多い。専門分野の技術力(レベル)が高い。
- ・ 研究に大くの時間を割くことができ、研究を進める上で、調査、文書の書き方、発表のやり方が学べたこと。
- ・ OB訪問や企業説明会が多く、卒業後もOBとのつながりがあったこと。特許関連の講議など、専門以外分野であっても仕事に活用できる知識を得られたこと。
- ・ 興味を持った科目に関しての知識を深めることができた。研究の取り組み方も身についた。
- ・ 現在は溶接に関する業務をしておりますが、貴学在学中には材料に関して多岐にわたり学ぶことができました。期会には多くはないですが、その知識を生かすことができしております。
- ・ 優れた先生方に、ご教示頂いた点。コンスタントに研究成果を発表できた点。それだけ、高い研究レベルにあることを意味する。私の研究室は少人数制で、丁寧な指導を受ける事ができた点。
- ・ 良き、同回生、先輩に出会えた事。一定の工学的教育を受ける事ができた。
- ・ 非常に充実した学生生活を過ごすことができたこと。同期も皆、有名、有力企業に就職できたこと。
- ・ 専門知識をしっかり学ばせていただきました。先生たちとよくコミュニケーションを取れて、楽しい学生時代を過ごさせていただきました。また、印象に残る先生が多くて、とても感謝しております。
- ・ 企業から高い評価を得ており、それに見合った研究成果が出ていること。浅いかもしれないが、他大学にはない広い領域・分野における、知識・技術を習得することができたこと。
- ・ 工学研究科というよりは、匹田研で学べたことが良かったと感じています。匹田研では非常に多くの経験をさせてもらい、自分が考えたことを比較的自由に挑戦できたし、それだけの環境が整っていたと思います。学生時代に、企業の方々と関われることも良かったと思います。
- ・ 学会発表の機会を多数もらったこと。
- ・ 学会等に積極的に参加させてもらったので、在学中のモチベーションが常に保たれた状態であった点がよかった。

3. あなたが、九州工業大学大学院工学研究科に在学して不満を感じた点、こう改善すべきだと感じた（例えばこういった技術（科目）を教えてほしかった）点がありましたらご記入ください。

英語教育の必要性を求める意見と、より実践的な専門科目や社会的に必要とされる教育やスキルを求める声が多い。今後は高度な専門教育と同時に企業等で求められるビジネスマインドを涵養するような教育への対応を考える必要がある。

- ・ 今行っている業務において、コンピュータリテラシをもっと力を入れて学ばべきだったと感じることが多く、C言語やVB Aなどに力を入れてほしい。又、FEMIについてももっと学んでおきたかった。
- ・ 表現力について、大学院では学会などで身に付ける機会があるが、学部までとなると表現力を身に付ける機会が少ない様に感じた。
- ・ 語学に関する講義が少なかった点。
- ・ 学部生の頃を振り返ると、授業の内容を理解することより、単位を取ることが目的になってしまっていたので、自分を含め周りの雰囲気はそうならないと良かったなと思いました。
- ・ 3DCADによるモデリング。
- ・ 専攻や教授によってレベルが違っていたから。（内容が浅かったり深かったりなど）
- ・ 実技講義を増やしたほうが良いと感じた
- ・ 語学(特に英語)に関しては、もう少し学んでおけばよかったと思った。
- ・ マネージメント論。
- ・ 英語。
- ・ 語学教育が不足していると思う。奨励はされていたが、強制力が無いため、語学力の差が大きくなる様に思う。
- ・ 他専攻の教科を必修にして、様々な知識を身につけさせたほうが良い。
- ・ 上記の専門以外で役立てられる知識を学べる講義を充実していただけると良いと思います。専門に関しては講義の質・量ともに特に不満はありませんでした。
- ・ 工学府・工学研究科内での交流をもっと増やすべきだと感じた。また、他大学とも積極的に交流して技術と知識の向上を図ると一人一人の能力アップにつながると思った。
- ・ 自動化技術の科目を教えてほしかった。
- ・ データ解析の手法(統計学、多変量解析等)を具体例を交えて、学べたら、より高いレベルの研究、仕事が出来ると考える。
- ・ 専門的知識ではありませんが、『プレゼンテーション』に関する学科が充実すると思います。私は学科までですので卒論発表の期会しかありませんでしたが、社会人3年目となり、さらにプレゼンテーション能力を磨いておけばと感じることがあります。
- ・ 物質工学部応用化学出身ですが、コース分けの前に金属材料の基礎(状態図の見方等)を教えて欲しかった。
- ・ 社会が求めている研究(開発)を行っている教授が少なく、工学部としての存在感がうすい。
- ・ 実学、例えば、非常に難しかった物理化学を、もっと肌で感じるができる実習や体験科目があれば良かったと思います。
- ・ 不満は特にはないです。ただし、今少子化が進み、学生さんは大学に行きやすくなっています。九工大はしっかり学生を選別し、知明度が落ちないように努力してほしいです。

- ・ 学生が自ら考えて進めるような実験や科目があっても良いのではと思った。例)実験で失敗したら、なぜ失敗したのか、本当に失敗したのか?ということ进行考察する(失敗≠落第)。自由課題、発表(何を考え、何を作っても良い)
- ・ 在学中にはいろいろ不満があったのかもしれませんが、今思うのは、必要最低限のことは教えて頂いたと思っています。建物も新しくなり、クーラーも導入されているようなので、少なくとも我々の在学中よりは勉強のしやすい環境になっているのではと思います。
- ・ 多くの分析機器(IR、NMR、XRD、SEM、AFM…)を使用したかった。
- ・ 大学院では、最先端の技術を学べたと思う。確かに最新の技術の知識は必要だと思うが、現場に出ると古い設備をいかに延命して使うかに技術者のスキルを求められ、昔からある技術の方が接する機会が多い。よって、もっと設備管理・保全の考え方を学べる科目、工場配電の設計を学べる科目を必修に含めてほしい。電気工学修了の観点で考えると、工場配電(短絡容量、保護協調の考え方、母線保護の方式、リレーの動作原理等々)をみっちり学べる科目があったら、実戦で役立つと思う。

4. 全体としての傾向

回答者31名、回答率16.4%で昨年度より回答率が半減しているものの、昨年と同様に修了生の工学研究科に対する評価はかなり高く、研究室での生活が充実したものであったことがわかる。また、専門性、プレゼンテーション能力、問題解決能力の向上にも十分な満足度が得られているものと判断される。しかし、英語教育については1.(2)にあるように、依然修了生は不足感を感じており、大学院の英語教育のあり方を議論し、対策を施す必要がある。

3 大学院工学研究院・工学府・工学部の管理運営

3. 1 大学院工学研究院・工学府・工学部の組織図

平成22年度の管理運営組織並びに意志決定体制を、図3. 1. 1及び図3. 1. 2に示す。

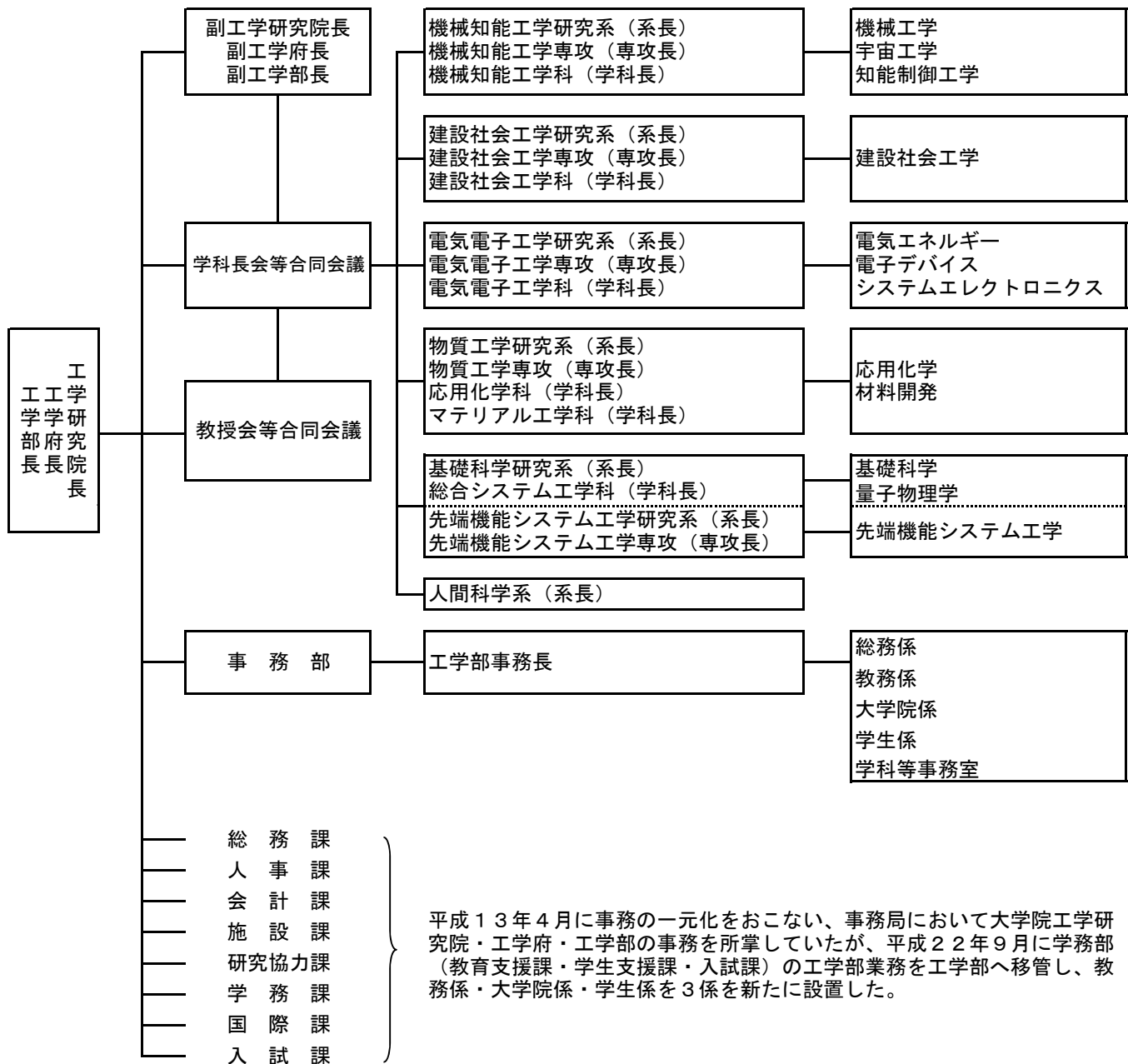


図3. 1. 1 組織図

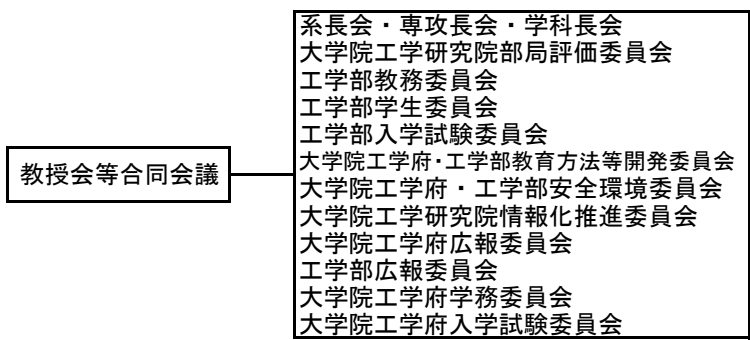


図3. 1. 2 各種委員会

3. 2 各種委員会活動の点検・評価

3. 2. 1 大学院工学研究院部局評価委員会

1. 今年度取り組んだ課題

- (1) 平成21年度卒業生、修了生アンケートの解析・まとめ
- (2) 平成21年度企業アンケートの実施と解析・まとめ
- (3) 平成19年度以前の卒業生、修了生アンケートの解析・まとめ
- (4) 平成21年度版「現状と課題」の発行
- (5) 平成22年度の各種アンケートに関する検討
- (6) 第1期中期目標期間の評価結果（現況分析-教育、研究）の確定作業（大学評価委員会教育評価部会並びに研究水準部会委員として）

2. 今年度採択した事項

- (1) 各種アンケートの結果をまとめ、「現状と課題」に掲載した。
- (2) 平成22年度卒業生・修了生アンケート内容を検討した。
- (3) 平成22年度企業アンケート内容および実施方法を検討した。

3. 残された課題または将来解決すべき事項

- (1) 各種アンケート結果の効果的な活用
長年に亘り、卒業生、修了生、企業を対象とした3種類のアンケートが同じ質問内容で実施されている。これにより、現状の問題点・課題が認識され、その改善への努力もされている。さらに、それらに関連する委員会にフィードバックして教育改善に反映させるなど、蓄積したデータを組織的に、より効果的に役立てていく工夫をする必要があると思われる。
- (2) 教育と研究の活性化システム
第1期中期目標期間の法人評価結果の確定を踏まえて、教育水準と研究水準の一層の向上へ向けて、工学研究院・工学府・工学部の組織体制を活用した着実な取り組みが望まれる。
- (3) 次回教育職員評価
回りの教育職員評価に向けて、平成20年度工学部改組による部局の新体制（学科の新設、学生定員変更など）を勘案すべき評価項目等について見直す余地がある。

4. 委員会の議論に使用された資料

- ・平成21年度卒業生・修了生アンケート、平成21年度企業アンケート、平成19年度以前の卒業生・修了生アンケート
- ・大学院工学研究院部局評価委員会内規
- ・平成21年度議題等一覧
- ・平成21年度大学院工学研究院部局評価委員会委員会報告
- ・九州工業大学大学評価委員会教育評価部会要項
- ・九州工業大学大学評価委員会研究水準部会要項

5. 工学部の現状に関する意見または改善に関する提言

上記3. (1) (2) (3) と同様

6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

- (1) 次回教育職員評価
次回教育職員評価では、平成20年度工学部改組による部局の新体制（学科新設、学生定員変更など）を勘案すべき項目等、見直す余地がある。今後、検討していく必要がある。
- (2) 各種アンケート結果のフィードバック
「現状と課題」をホームページに掲載、公表するとともに、工学研究院長、副研究院長へは紙媒体で、また、工学部教務委員長、工学研究院学務委員長へはメールで報告した。
- (3) 企業に対して、本学の教育レベルを尋ねることについて（企業アンケート）
これまでの質問への回答からでも、大学教育への評価を把握できること、また、調査結果の経年変化を見る必要があることから、企業アンケート中に質問の趣旨を述べた文章を追加した上で、本年度もこれまでと同じ質問内容で調査を実施した。

3. 2. 2 工学部教務委員会

1. 今年度取り組んだ課題

(1) 教育関係

●中期計画・中期目標

- ①平成 22 年度中期計画・中期目標について
- ②平成 23 年度年度計画について
- ③AHELO 担当者について

●成績

- ①GPA について
- ②学修自己評価システムについて
- ③卒業査定について
- ④進級査定について

●学生

- ①履修単位の上限を超える履修について
- ②出席管理システムの運用について
- ③学習支援室について
- ④「学生と教員との交流会」での質問事項に対する回答について
- ⑤学生証再発行料の改定について
- ⑥卒業・進級査定に関する学生通知について
- ⑦平成 22 年度コース分けについて
- ⑧PBL シンポジウムについて

●学籍

- ①休学の取扱いについて
- ②再入学検討ワーキンググループについて

●単位認定

- ①平成 22 年度入学前の既修得単位認定について
- ②外国語能力試験の成績に基づく単位認定について
- ③オールドドミニオン大学 (ODU) 夏期コース受講に係る工学部授業科目の認定について

●新入生、編入生

- ①推薦入試合格者の入学前教育について
- ②平成 23 年度オリエンテーションスケジュールについて
- ③平成 22 年度編入生の単位認定について
- ④平成 23 年度編入生の単位認定作業スケジュールについて
- ⑤編入学生への出身高専等で修得した科目の内容調査書について

●平成 23 年度

- ①平成 23 年度学年暦について
- ②平成 23 年度非常勤講師任用予定時間数について
- ③平成 23 年度時間割の作成について
- ④平成 23 年度入学生の指導教員の割り振りについて
- ⑤平成 23 年度シラバスについて
- ⑥履修のしおりについて
- ⑦平成 23 年度工学部研究生等事務手続き要領について

(2) 授業関係

- ①一学期あたりの授業期間 15 週確保について
- ②キャリア科目及びインターンシップについて
- ③工学系総合科目の必修化について
- ④履修者数が少ない講義科目の取扱いについて
- ⑤工学部基礎共通実験実習経費について
- ⑥平成 22 年度特別講義について

- ⑦大学院入門科目について
- ⑧昌原大学校との短期プログラムに係る授業科目について
- ⑨読替科目一覧表の確認について

(3) 修学指導

- ①平成 23 年 3 月 31 日に休学期間満了となる学生について
- ②全学生の保証人への成績郵送について
- ③履修登録をしていない学生について
- ④1 年次生保証人への単位修得状況の通知について
- ⑤学生の修学状況の確認について
- ⑥除籍対象学生への通知について
- ⑦連続する 2 年間で 30 単位を修得できない学生について

(4) その他

- ①平成 24 年度以降の学年暦について
- ②今後の教務成績情報の取扱について
- ③福岡県立ひびき高校との高大連携に係る公開授業について
- ④工学部学修細則の一部改正について

2. 今年度採択した事項

(1) 教育関係

●中期計画・中期目標

③AHELO 担当者について

AHELO 担当者を、年度ごとに学科持ち回りで選出することとした。

平成 22 年度応用化学科

平成 23 年度マテリアル工学科

●成績

①GPA について

工学部長から「GPA 制度ならびに学科改組に伴うカリキュラム変更に対する評価ならびに改善について(諮問)」を受け、ワーキンググループを作成し、検討を重ね、「GPA の取扱いについて」の答申を行った。

●学生

①出席管理システムの運用について

出席管理システムの運用について、検討を行い、機能改善をすることとした。

②学習支援室について

学習支援室の運営について、検討を行った。

④学生証再発行料の改定について

学生証再発行料を改定した。

⑤卒業・進級査定に関する学生通知について

⑧PBL シンポジウムについて

教務委員長が教育シンポジウムでの講演「手さぐり PBL：事例紹介と課題」を行い、PBL 教育の課題に関する資料、事例紹介の資料を作成。PBL シンポジウムのパネリストとしても参加。今回作成した資料を学外へ公開できる形に修正を行い PR などにも活用する。

●学籍

①休学の取扱いについて

除籍に関する学修細則の改正に伴い、休学の取扱いについて検討することとした。

②再入学検討ワーキンググループについて

再入学制度について検討した。

●単位認定

以下の単位について認定した。

- ①平成 22 年度入学前の既修得単位
- ②外国語能力試験の成績に基づく単位
- ③オールドドミニオン大学（ODU）夏期コース受講に係る工学部授業科目について
- ④e ラーニング高等教育連携に係る遠隔教育による単位

●新入生、編入生

- ①推薦入試合格者の入学前教育について

推薦入試合格者の入学前ガイダンスおよび入学前教育を行った。

- ②平成 23 年度オリエンテーションについて

平成 23 年度から入学式会場が変更になることに伴い、オリエンテーション日程を 2 日間とし、実施スケジュールについて承認した。

- ③平成 22 年度編入生の単位認定について

平成 22 年度編入生の単位認定について承認した。

●平成 23 年度

- ①平成 23 年度学年暦について

平成 23 年度学年暦について承認した。

- ②平成 23 年度非常勤講師任用予定時間数について

平成 23 年度非常勤講師任用予定時間数について承認した。

- ④平成 23 年度入学生の指導教員の割り振りについて

平成 23 年度入学生の指導教員の割り振り方法について確認した。

- ⑤平成 23 年度シラバスについて

平成 23 年度シラバスから、CD-ROM で配付することとした。

また、教務情報システム（LiveCampus）のシラバス機能を利用し、シラバスが閲覧できるように対応することとした。

(2) 授業関係

- ①一学期あたりの授業期間 15 週確保について

授業期間 14 週、試験期間 1 週、試験等解説 1 週とし、15 週を確保することとなった。

- ②キャリア科目及びインターンシップについて

キャリア科目として、「キャリア形成入門」を開設することとした。

インターンシップとして、「インターンシップ実習」を開設することとした。

- ③工学系総合科目の必修化について

「工学と環境」「工学倫理・安全工学」について、選択必修科目とすることとした。

- ④履修者数が少ない講義科目の取扱いについて

履修者数が少ない講義科目について、副学長より検討依頼があり、工学部の見解を以下のとおりとした。

1. 大学の教育には幅広い科目を提供し、学生に選択させるという側面もあること。

2. GPA 及び CAP 制の導入により 1 人あたりの履修科目数がへっていること。特に資格取得を目指している学生は、それに関する授業科目を履修するため、他の科目を履修しない（できない）傾向があること。

- ⑤工学部基礎共通実験実習経費について

工学部基礎共通実験実習経費について、平成 22 年度案を作成し、承認した。

- ⑥平成 22 年度特別講義について

- ⑦大学院入門科目について

- ⑧昌原大学校との短期プログラムに係る授業科目について

(3) 修学指導

以下の件について、保証人宛に通知文書を郵送した。

- ①平成 23 年 3 月 31 日に休学期間満了となる学生について

- ②全学生の保証人への成績郵送について

- ③履修登録をしていない学生について

- ④ 1 年次生保証人への単位修得状況の通知について（平成 22 年度より開始）
- ⑤ 学生の修学状況の確認について
- ⑥ 除籍対象学生への通知について
- ⑦ 連続する 2 年間で 30 単位を修得できない学生について

（4）その他

- ① 平成 24 年度以降の学年暦について
- ② 今後の教務成績情報の取扱について
- ③ 福岡県立ひびき高校との高大連携に係る公開授業について
- ④ 工学部学修細則の一部改正について

3. 残された課題または将来解決すべき事項

- （1）休学の取扱いについて
- （2）新設された「学習教育センター」との連携
- （3）各学科コース等が行っている優れた教育活動の「見える化」

4. 委員会の議論に使用された資料

- （1）九州工業大学中期計画・中期目標
- （2）教育委員会資料
- （3）教務委員会資料等

5. 工学部の現状に関する意見または改善に関する提言

- （1）各学科コース等が行っている優れた教育活動事例の相互紹介
- （2）図書館などの施設の新たな活用方法模索

6. 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善及び新たな問題点

（1）授業関係

- ① キャリア科目およびインターンシップについて
 キャリア科目として、「キャリア形成入門」を開設することとした。
 インターンシップとして、「インターンシップ実習」を開設することとした。

（2）教育関係

- ① 単位の実質化（1 単位 4 5 時間相当の学習の確保、1 5 週の確保）
 授業期間 1 4 週、試験期間 1 週、試験等解説 1 週とし、1 5 週を確保することとなった。
- ② 学修自己評価システムの運用について
 平成 2 2 年度入学生より、学修自己評価システムの運用を開始した。
- ③ 成業の見込みがないと認められる者の指導等について
 今後も引き続き、検討を重ねていくこととした。
- ④ JABEE 受審に関する対応について
 応用化学科が JABEE を受審した。
- ⑤ 出席管理システムの有効利用について
 平成 2 2 年度後期より、出席管理システムを本稼働させた。

（3）学生関係

- ① 欠席または不登校学生の早期発見と指導教員による指導（グループ担任制）について
 今後も引き続き、検討を重ねていくこととした。
- ② 学習支援室の運営について
 学習支援室の利用状況の調査結果や、利用者アンケートをもとに、今後の運営について検討を行った。
 来年度以降も、今年度と同様の科目を開設することとした。

3. 2. 3 工学部学生委員会

1. 今年度取り組んだ課題

- (1) 中期目標・中期計画の立案と実行
- (2) 授業料特別免除推薦候補者選考基準の改定
- (3) 授業料特別免除に代わるインセンティブ効果のある学生支援について
- (4) 不正行為防止について
- (5) 不正行為に係る学生の処分
- (6) 試験における不正行為(防止)に関する取り組みについて
- (7) 工大祭への対応
- (8) 新入生研修の実施日程及び研修資料策定に係る部局意見の検討
- (9) 学期初回授業における学生への注意喚起
- (10) 安全保障輸出管理に係る外国人留学生受入実施要項の検討
- (11) 授業料特別免除推薦候補者選考基準の改定
- (12) 二輪車の迷惑駐輪の防止策の検討
- (13) 日本学生支援機構奨学生の選考
- (14) 意見箱へ寄せられた学生からの意見への対応

2. 今年度採択した事項

- (1) 東門駐車場・職員宿舍付近の本来駐輪禁止の区域に二輪車の駐輪されているケースが多く見られるため、掲示による駐輪指導と併せて違反車両へのチェーンロック実施の周知も行うこととし、工学部交通規制委員会に意見を具申することとした。
- (2) 安全保障輸出管理に係る外国人留学生の取り扱いについて、留学生に対する平等性を確保すべきとの観点から、外国ユーザーリスト掲載機関ないし懸念国からの留学生の受け入れにも余地を残すこととした。
- (3) 授業料特別免除推薦候補者選考基準について、改組された学年が23年度に4年生に進学することから、それに合わせた改定を行った。一方、授業料特別免除に対してインセンティブ効果はほとんど見られないことを工学部学生委員会として認識しており、早期に授業料特別免除に代わるインセンティブ効果のある学生支援策を全学学生委員会に提案することが重要であることを確認した。

3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

- (1) 授業料特別免除に代わるインセンティブ効果のある学生支援策の策定
- (2) 試験における不正行為に関する取りすめ

学生の不正行為に対しては重い処分が下される。従って、不正行為をおこさせない環境を作ると共に、もし不正行為が起こった場合は、最終的に学生、教員が納得する処分が行われなければならない。そのためにはどのようなプロセスが行われるか、摘発する教員も認識しなくてはならないと考えられる。

- (3) 国際交流会館の収容能力増大

平成21年度後期から留学生の数が特に増加し、国際交流会館ではこれまで1年間の入居が認められていたものを半年へと短縮せざるを得なくなった。今後、特に工学研究府においては外国人留学生の増加が見込まれるため、それを見越した対策(国際交流会館の増築など)を検討すべきである。

4. 委員会の議論に使われた資料

- ・九州工業大学中期目標・中期計画
- ・H22年度日本学生支援機構奨学生 工学部推薦者選考資料

5. 工学部・工学研究府の現状に関する意見、又は改善に関する提言

試験中の不正行為の発覚が絶えない。学生が「技術に堪能なる士君子」として踏み出せるようにするには、どうしたらよいのか、教員側もしっかり認識する必要がある。10年前とは違う学生が入学しているのに、10年前と同じ授業をやっているのか。変えるべきところと、変えてはいけないところをしっかりと認識して学生に接しないとイケない。不正行為は許されない行為であるが、なぜ起こっているか、起こるような余地を学生に与えていないか教員は理解すべきであろう。

世の中の風潮とも連動すると考えられるが、モラルを向上するにはどうしたらよいのか。条例や学則で禁止されているから、やってはいけないというのは、非常に残念である。モラル向上に向け何をやるべきか今後議論が必要であろう。

6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

特に該当事項なし。

3. 2. 4 工学部入学試験委員会

1. 今年度、本委員会が取り組んだ課題

- (1) 平成23年度編入試について
- (2) 平成23年度入学者選抜要項について
- (3) 中期目標・中期計画について
- (4) 平成24年度センター入試科目について
- (5) センター入試科目に生物を導入することについて
- (6) 平成23年度推薦入試について
- (7) 平成23年度一般入試について
- (8) 平成23年度帰国子女特別入試・私費外国人留学生試験について
- (9) 平成24年度編入学試験の募集要項について
- (10) 平成23年度個別学力検査追加合格者決定要領について
- (11) 平成23年度欠員補充第2次募集について

2. 今年度、本委員会が採択し、実施した事項

通常の選考・審査、募集要項の作成については例年どおり実施した。ここでは、新たに実施した事項についてのみ記す。

- (1) 平成23年度編入学試験について
 - ・昨年と同様、合格者が定員を満たさなかった場合の説明に使用するため、各学科で不合格理由について記録を残し、入試委員が把握しておくこととした。
 - ・昨年と同様、面接員は専門学科の教員のみとし、学科・コースごとに5名で構成することとした。
 - ・編入学試験応募者は昨年と同様であった。高専への広報活動の強化を続けることが必要と考えられる。
 - ・編入学試験選考方法は、現行通り「合格点の点数は最低点を600点以上とする。」とした。
- (2) 平成23年度入学者選抜要項について
 - ・教育方針、入学者受入方針（アドミッションポリシー）について学科ごとに記載することとなった。それと同時に私費外国人留学生入試募集要項に英語版のアドミッションポリシーを作成した。
 - ・アドミッションポリシーについては工学部のホームページに記載した。
 - ・私費外国人留学生入試募集要項に安全保障輸出管理に係る外国人留学生に関してチェックリストが加わった。
- (3) 中期目標・中期計画について

評価項目[I-3-02]（理数教育支援センターと連携して、小・中・高校生や高校教員等を対象とした教育への取り組みを検討する。）については入試委員会の審議事項と異なるため、担当委員会の変更について工学部へ意見をを行った。
- (4) センター入試科目の生物入試について

昨年度工学部ではセンター入試科目に生物入試を導入しない方針となったが、再度、戦略会議（企画会議）から生物入試の導入の可能性が打診された。リメディアル教育、学科での第二希望の選択の狭まりの観点から、工学部では導入しないこととした。なお、情報工学部においては、平成23年度入試からシステム創成情報工学科と生命情報工学科で導入することとなった。
- (5) 推薦入試（センターを課さない女子枠）について
 - ・戦略会議（企画会議）から推薦入試（センターを課さない女子枠）の可能性が打診されたが、工学部では導入しないこととなった。

- (6) センターを課す推薦入試について
戦略会議（企画会議）からセンターを課す推薦入試に関して打診された。工学部としては、その効果が見えないこともあって反対であったが、同会議の強い要望で再度検討することとなった。平成 25 年度より高校で数学 III・数学 C、物理 II を履修していることを条件として、前期日程と同じ科目・同じ配点基準で行うこととなった。
- (7) 平成 23 年度推薦入試について
- ・推薦入試の合格点は 600 点以上を目安とすることにした。ただ、不合格者から点数の開示要求があった場合、十点刻みで知らせるので、合格者との点差が明確すべきとの意見があった。
 - ・本年度は、全学科とも大幅に倍率が増えたが、合格者の質の向上に繋がっていないとの意見があった。
 - ・成績報告への記載が煩雑となっているので、エクセル形式で配布することとなった。（個人情報保護の観点から番号だけになっており、同点が出た場合の順位の記載などで間違いやすくなっている。）
- (8) 私費外国人留学生試験について
- ・例年に比べ全学科とも大幅に倍率が増えたので各学科より試験官を一名お願いした。
 - ・これまで人間科学教室の教員に TOEIC、TOEFL 等の結果を 100 点満点として英語能力検定試験結果へ換算して頂いていたが、受験生が大幅にふえたので対応できないとの申し出があったが、機械的に変換することで了承頂いた。
 - ・また、2009 年 12 月に日本学生支援機構で日本語留学生試験改定が行われたことから本学の入試における日本留学試験に配点の換算の変更の可能性も議論したが、最終的に従来どおり行うこととした。
- (9) 平成 23 年度個別学力検査追加合格決定合格者決定要領について
一般入試（前期日程および後期日程）の正員数の決定において、その補欠者数は正員数全体の 3 割と定められている。その正確な人数は、正員数全体に 0.3 をかけた後、四捨五入によって決定することとした。本年度は、前後期との合格辞退者がでて、追加合格者がでた。
- (10) 学部の入学資格について
学校教育法施行規則等の一部を改正する省令等の施行等に伴う学則改正の検討についての文科省通知に伴い、学則第 17 条の学部の入学資格について改正された。

3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

- (1) 工学部教務委員長からの依頼があり、再入学検討ワーキンググループに委員長と副委員長が選出された。再入学に関して文科省の見解として教育的見地から退学者の再入学を受け入れるように勧めている。本学の規則では再入学に係る全学的な規則が存在しないことから、工学部細則（それに付随する学則）の改定が必要となった。全学委員会へ提案したが、現状の工学部細則および学則で対応できるので改定しなくても良いとの意見がでたが、学部間や年度によって統一的な判断をするためには改定が必要との意見もあり、まずは事務的に可能であるかどうかを調べ今後検討することになった。
- (2) 生物入試の導入に関して、工学部全体で行うことが決まらない限り、工学部の入試システムから導入は無理のように思われる。また、入学してからのリメディアル教育に関しても各学科で行う体制であればなお難しくなると思われる。更に工学部のアドミッションポリシーから生物入試の意味づけが難しくなるように思われる。
- (3) 入試問題に関しての解答例や出題意図の開示について検討が行われているが、工学部入試委員会で決めるのではなく出題委員長を交えて出題委員の意見を反映させるべき

である。出題は、負担平等でローテーションでできるものではない現状であり、出題委員に負担をかけるようになると出題ミスなどの事態を招きかねない。本年度の工学部入試委員会は、解答例のみならず出題意図も開示しないとの意見が強い現状である。出題委員の選出方法を含めて議論する必要がある。

4. 委員会の議論に使われた資料

- (1) 平成22年度、平成23年度入学者選抜要項
- (2) 平成22年度、平成23年度編入学学生募集要項
- (3) 平成22年度帰国子女特別選抜学生募集要項、平成23年度帰国子女特別入試学生募集要項
- (4) 平成22年度推薦入学学生募集要項、平成23年度推薦入試学生募集要項
- (5) 平成22年度、平成23年度私費外国人留学生入試学生募集要項
- (6) 平成22年度一般選抜学生募集要項、平成23年度一般入試学生募集要項
- (7) 平成23年度欠員補充第2次学生募集要項
- (8) 中期目標・中期計画（案）

5. 工学部の現状に関する意見、又は改善に関する提言

- (1) 広報委員会の努力により、今年度も、工学部の受験倍率は前期日程が2.57倍、後期日程が2.90倍と2倍以上の倍率を昨年度に続き維持することができた。高い倍率を維持することは、レベルのそろった学生を獲得する上で重要であるので、今後も広報活動についての一層の努力を期待したい。
- (2) 編入学試験の応募者については、平成22年度の38名に比べると、本年度は1名ではあるが39名に増加した。しかし、平成19年度（52名）以前に比べ減少している。今年度の増加は昨年度の広報活動の強化の努力による可能性があるが、平成24年度入試において減少する場合には、さらなる広報活動の強化対策を、工学部として考えて行く必要がある。
- (3) 私費外国人留学生入試が平成22年度の18名に比べると、本年度は48名と大幅に増加した。中国からの受験者が主ではあるが、この原因の解明と今後の対応法を議論しておく必要がある。

6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

- (1) 長期間にわたる受験生の入学試験成績情報、入学後の学生の成績情報（成績の推移情報）、卒業後の進路に関する情報を網羅するデータベースを構築して、入試データの追跡調査を行い、追跡調査結果のデータに基づいた入学者選抜方法の改善に取り組む」については、20年度にはデータベースの構築、21年度にはそのデータベースを用いて追跡調査を行い、入学者選抜方法の改善として、選抜区分ごとに入学後のGPAの推移について調べ、各学科の選抜区の定員調整の参考資料として活用できるようにし、活用した。しかし、卒業後の就職先のデータをどのように解析すべきかが課題として残されている。その資料は、平成21年度学部入学者選抜方法研究専門部会によって作成された。平成24年度入学者選抜要項においても入学者選抜方法の改善、特に選抜区の定員調整の参考資料とすることが期待される。
- (2) 多様な受験生に対する多様な入試形態を文科省が求めているところであるが、本学に適した入学試験の方法を議論していくべきである。効果のある入試形態を優先的に進めていくべきである。このためには学内での関係部署と連携を深め議論していくことが重要である
- (3) 一般入試の後期日程において、合格者発表後、入学手続き者数が定員を満たさない学科

が生じた。そのため追加合格候補者（３名）を合格者等選考方法に基づいて作成された補欠者リストから選出した。追加合格者が何故生じたかの原因究明とそれが今後起こらないようにするための対策をねっておく必要がある。

- （４）中期目標・中期計画の入学試験委員会に関わる課題の準備を行う。

3. 2. 5 大学院工学府・工学部教育方法等開発委員会

1. 今年度、本委員会が取り組んだ課題

- (1) 授業評価アンケートの実施と実施方法の改善および web 化の一部試行
- (2) 公開授業（公開授業週間）の実施
- (3) 学生と教員との交流会の実施
- (4) FD 講演会の実施
- (5) FD 活動の公表（FD ニュースレター発行）
- (6) 中期計画における年度計画の実施と次期中期計画における年度計画案の作成

2. 今年度、本委員会が採択した事項

2-1 授業評価アンケートの実施と実施方法の改善および web 化の一部試行

平成 21 年度のアンケート結果の解析を行うと共に、大学院ならびに学部の全科目を対象とした授業アンケートを前後期に実施した。アンケートのうち講義科目と実験・演習科目で設問が分かれている問 6 および 9 について、学生にとっては科目の区分が分かりにくく、同じ科目を受講している学生が異なる設問に回答する場合があるとの問題点が指摘された。検討を重ねた結果「実験・実技・演習科目」への対応を維持しながら内容を統合した新しい設問へと後期に変更した。また web アンケートの試行を (A) 講義時間内に Web 入力する端末利用科目、(B) 講義時間内は説明のみで期日までに Web 入力するよう学生にアナウンスする科目の 2 方式について実施した。A、B 方式の前期科目の回収率（回答者数/履修者数）はそれぞれ 79.2%、57.4%、後期のそれはそれぞれ 71.1%、61.0%であった。更に Web 化に対する学生の意識調査を実施し、教員側とは違う視点での問題抽出を行った。

＊公開授業週間の概要については FD ニュースレター No. 4 を参照

2-2 公開授業（公開授業週間）の実施

10 月 25 日（月）～29 日（金）に実験を含む全科目について公開授業週間を実施した。どの講義を参観すべきか分からないとの昨年度の意見を踏まえて、本年度は参観推奨科目を 5 科目/学科新たに設けた。参観者に記入戴いたコメント用紙の集計結果から、参観公開授業総数（参観者がおられた授業総数）は学部 40、大学院 2、参観教員総数は学部授業・実験 59 名、大学院授業 4 名であった。公開授業実施後に教員対象にアンケートを行い、授業を参観しなかった 23 名を含む全 61 名から意見を得た。

＊公開授業週間の概要については FD ニュースレター No. 4 を参照。

2-3 学生と教員との交流会の実施

学生と教員との交流会を 11 月 19 日（金）10:00～13:00 に附属図書館 4 階 グループ研究室において実施した。出席教員は工学部・工学府 F D 委員会委員 6 名、学生委員会委員長 1 名、広報室長 1 名であり、参加学生は自主応募者 1 名を含む計 26 名であった。交流会終了後に学生から出た意見を関連委員会へ照会し、その回答を Web で公開することで学生へのフィードバックを実施した。

＊学生懇談会の概要については FD ニュースレター No. 4 を参照。

2-4 講演会の実施

第 8、第 9 回、第 10 回 F D 講演会を実施した。

第 8 回 F D 講演会

日 時：平成 23 年 1 月 26 日（水）

13 時 30 分～17 時 00 分

場 所：戸畑キャンパス教育研究 3 号棟プロジェクトラボラトリ

講演者・講演題目

①慶應義塾大学 横山 千晶先生、大出 敦先生

「慶應義塾大学“アカデミック・スキルズ”について」

②工学研究院 中尾 基先生、虹林 慶先生

「九州工業大学“PBL 科目”について」

③工学研究院 今井 敦先生、中尾 基先生、水井 万里子先生、岸根 順一郎先生
「学術スキルの教育方法」

第9回FD講演会（勉強会）

日 時：平成23年2月2日（水）

13時00分～14時30分

場 所：戸畑キャンパス教育研究3号棟プロジェクトラボラトリ

テーマ：学生のモチベーションをどう引き出すか

参加者：仙葉先生（総合システム）、長山先生（機械知能）、虹林先生（人間科学）、廣岡先生（建設社会）大野先生（人間科学）、廣田先生（マテリアル）、水井先生（人間科学）、アブドゥハン先生（人間科学）、清水先生（機械知能）、中尾先生（総合システム）、前田先生（電気電子）、八丁先生（人間科学）、東野先生（人間科学）、松平先生（電気電子）、山村先生（応用化学）

第10回FD講演会

日 時：平成23年3月1日（火）

14時00分～17時00分

場 所：総合教育棟3階 C-3C 講義室

講演者・講演題目

①徳島大学工学部 創成学習開発センター教授 英崇生先生

「学びの場ーアクティブラーニングー」

②工学部PBL教育推進室室長 中尾基先生

「PBLを基軸とする工学教育プログラムについて」

③工学部教務委員会委員長 大村一郎先生

「手探りPBL：事例紹介と課題」

④工学部総合システム工学科3年生 高橋明敏，西浦秀和，世利祐樹

「PBL教育を受けて」

*講演会概要についてはFDニューズレターNo.4を参照。なお第8回は工学部教育方法改革WGおよび工学部PBL教育推進室との共催、第9回は工学部教育方法改革WGとの共催、第10回は工学部PBL教育推進室が主催したPBLシンポジウムに工学府・工学部教育方法等開発委員会および工学部教育方法改革WGが共催する形でそれぞれ開催された。

2-5 FD活動の公表

本年度のFD活動に基づいたFDニューズレター No.4を発行した。

2-6 中期計画における年度計画の実施と次期中期計画における年度計画案の提案

中期計画に基づき全学の教育委員会に報告すべき工学部FD活動の内容について評価・検討を行った。更に、次期中期計画における年度計画案を検討した。

3. 残された課題、将来解決すべき事項

3-1 授業アンケートのweb化の導入

アンケートのweb入力の一部試行を実施した結果、回収率の大幅な減少は見られないものの、上級生になるほど回収率がやや低下する傾向があること、設問数が情報工学部の3倍以上と多く全科目をこの方式にすると学生の入力負担が大きくなることなどの問題点が指摘されている。今後は学生に対してweb入力を促す適切なアナウンスの実施、設問項目数の再検討、学期末に行うwebアンケートと学期中期に行う自由記述との混合方式の試行などを検討した上で、web化の本格導入を行う必要がある。

3-2 公開授業週間の実施方法

参加希望者の利便を考慮して、参観時間を15分程度でよいとする、参観ガイドをホームページ上で公開する、推奨科目を設けることで参観対象を明示するなどのいくつか試みを実施

しているが、参加人数の大幅な増加は見られていない。参観可能な時間を確保する仕組みの構築、ある程度の強制力を伴った参観要請、新任教員が担当する講義への集中参観など組織的な取り組みを検討する必要がある。

3-3 学生へのフィードバック方法

本年度の学生と教員との交流会では、学生からの意見に対する回答の公開を実施した。しかし授業アンケート結果を元にした教育改善の内容は、学生から見て分かりやすい形で整理されていない。授業アンケートに対するフィードバックを公開するシステムの構築、個々の科目に対するアンケート結果を学生や他教員へ公開する仕組み、3-1と連動したアンケート項目の整理などの検討を行う必要がある。

4. 委員会の議論に使われた資料

主な資料として

- (1) 授業アンケート
- (2) 平成 21 年度 授業アンケート解析結果
- (3) 公開授業週間のアンケート結果
- (4) 平成 22 年度 FD ニュースレターNo. 4

5. 工学部の現状に関する意見、又は改善に関する提言

授業アンケートの web 化導入に向けて、実施方法や回収率に関する更なる検討が必要である。公開授業の参加者数を継続して増やす方策を検討する必要がある。

グループディスカッション形式の FD 勉強会は学科を超えた情報共有に有効な方法であり、今後も継続する必要がある。

6. 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善及び新たな問題点

昨年度『教職員の教育能力向上と学生の学習意欲向上にとってどのような手段が有効なのかを検討する必要がある』という提言があった。本年度の公開授業のコメントでも、学生の学習意欲の低下を実感したとの意見があった。今年度は学生のモチベーションをテーマとした学科横断型の FD 勉強会を初めて実施したほか、PBL 関連プロジェクトとの講演会共催等を通じて、学習意欲向上に対する教員間の情報共有を進める取り組みを実施した。FD 勉強会では様々な具体的改善方法が議論されたが、良いアイディアは実施できる体制に結びつけることを考えておかないと単なる座談会になってしまうとの指摘があり、今後も引き続き有効な手段を模索する必要がある。

3. 2. 6 大学院工学府・工学部安全環境委員会

1. 今年度取り組んだ課題

(1) 「安全衛生教育」「安全衛生ミーティング」の実施および実施結果の評価

昨年度と同様、「安全衛生ミーティング」の実施要綱をもとに、各教室で7月および12月に安全衛生ミーティング実施のアナウンスと「安全衛生ミーティング記録」の提出依頼を行った。各研究室でヒヤリハット事例など事故につながる恐れのある危険因子を学生と教職員で共有できたとの報告が多数見られ、本ミーティングが当初の実施目的を達成していることが確認された。

(2) 学部生における安全衛生教育体制の整備

昨年度作成した「学部2と3学年における安全衛生教育実施要項」と「学部2と3学年安全衛生教育実施報告書」に基づき、安全衛生教育を実施し、安全衛生教育実施報告書の各教室で7月に提出依頼を行った。

戸畑地区安全衛生委員会の依頼により、本年度は建設社会と機械知能の1年生を対象とする「化学実験B」における「ヒヤリハット調査」に協力した。

(3) 「実験・実習における安全の手引き」の改訂

本年度版の内容について、分野ごとに担当を定め改訂作業を行った。

(4) 中期目標・中期計画の達成評価と次年度の計画

ほぼ計画に従い活動を進め「3」の達成度と評価できた。

2. 今年度採択した事項

(1) 「講義室安全環境チェック」の対象となる講義室の担当の見直しを行い、なるべく各教室の担当が公平となるようにした。

(2) 戸畑地区安全衛生委員会に協力し、学部1～3年次の学生実験において、学生にアンケートを配布し「ヒヤリハット調査」を行うこととした。対象となる学生実験は戸畑地区安全衛生委員会が選び、それを工学部安全環境委員会において承認することとなった。

(3) 「負傷者・火災発生時の連絡方法」の改訂を行った。従来、情報量が多すぎたため、必要最小限の簡素な内容にした。

3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

(1) 防災マニュアルの見直し、防災パンフレットの作成と配布

(2) 「ヒヤリハット調査」のWeb化

4. 委員会の議論に使われた資料

(1) 工学部の平成22年度版「実験・実習における安全の手引」

(2) 中期目標・中期計画 ファイル

5. 安全衛生委員会との連携に関する提言

安全衛生委員会は毎月会合を行っている。本委員会の委員長はオブザーバーとして安全衛生委員会に出席し、重要課題は本委員会に報告することが実施されてきた。今後ともこの体制を維持し、両委員会は積極的に連携を強化し、各教室に安全衛生委員会の議論内容のフィードバックが必要である。

6. 問題点

「安全衛生教育」「安全衛生ミーティング」「ヒヤリハット調査」等、学生に対する安全衛生教育の体制はほぼ確立されている。これらの内容を現場でのみの議論に終わらせるのではなく、より広く問題点を共有する体制の整備が今後の課題である。

3. 2. 7 大学院工学研究院学術情報委員会

1. 今年度、委員会が取り組んだ課題

- (1) 本委員会組織に関わる検討
 - A. 正副委員長の選出と本委員会の業務等確認
 - B. 情報ネットワーク・セキュリティ専門部会及び情報セキュリティポリシー策定専門部会への委員の参加
 - C. 全学統合ID管理システム導入WGへの参加
 - D. 次期グループウェア検討WGへの参加
 - E. 情報セキュリティポリシー実施WGへの参加
- (2) 違法行為防止、及びセキュリティ向上についての検討と対処
 - A. 平成22年度前学期情報モラル向上週間の実施
 - B. 情報モラル向上週間等の説明資料の検討
 - C. スキルアップ講習会の実施
 - D. 平成22年度後学期情報モラル向上週間の実施
 - E. 平成23年度前学期情報モラル向上週間の企画
- (3) 全学運用情報化関連ソフトウェアの工学部での運用方法の検討と実施
 - A. CA申請システムの運用
 - B. ウィルス対策ソフトウェアの運用
 - C. MSCAの工学研究院における運用
 - D. Mathematica
- (4) 工学研究院の情報化に係る施設設備に関する検討
 - A. 無線LANの整備
 - B. 戸畑キャンパスにおけるホスト名の運用
 - C. 先端教育支援システム仕様策定WGの設置とシステム整備
 - D. 情報基盤の実態調査の実施
- (5) 附属図書館に関する検討
 - A. 工学部学生用図書購入予算額配分
 - B. ヨミダス文書館の利用
 - C. 九州工業大学研究報告
 - D. 学生選書ツアー・Library Lovers Weekの実施

2. 今年度、委員会が採択した事項

- (1) 本委員会組織に関わる検討
 - A. 正副委員長の選出と本委員会の業務等確認（第1回）
正副委員長を選出し、副委員長が全学委員会へオブザーバー参加することを確認した。
また本委員会における業務等をまとめ確認した。
 - B. 情報ネットワーク・セキュリティ専門部会及び情報セキュリティポリシー策定専門部会への委員の参加（第1回）
標記部会へ本委員会から委員を推薦した。なお、情報ネットワーク・セキュリティ専門部会委員の任期は2年間であるため、1年間は渡邊委員にお願いし、次年度については、次年度の工学研究院学術情報委員会において、再度2年任期の委員の中から推薦することとした。
 - C. 全学統合ID管理システム導入WGへの参加（第1回）
標記WGへ本委員会から委員を推薦した。
 - D. 次期グループウェア検討WGへの参加（第2回）
標記WGへ、情報科学センター職員がいらないことについて意見を受け、本委員会から情報科学センターの教員から委員を推薦した。
 - E. 情報セキュリティポリシー実施WGへの参加（第2回）
標記WGへ本委員会及び工学研究院情報基盤室から各1名推薦した。
- (2) 違法行為防止、及びセキュリティ向上についての検討と対処
 - A. 平成22年度前学期情報モラル向上週間の実施（第1回）
昨年度に決定した企画の内容を確認し実施した。実施内容としては、1年生については「情報

リテラシー」の講義において「情報倫理デジタル小品集3」のDVDの閲覧を実施した。2年生以上については、各教室において、学生を集めてDVDを閲覧させるとともに、可能であれば、情報セキュリティポリシーに関する説明を実施した。以上の実施記録を委員会に報告し、実施状況を一覧としてまとめた。

B. 情報モラル向上週間等の説明資料の検討（第1回）

情報モラル教育や情報セキュリティポリシー説明会などにおいて、こういった資料をもとに、どのようなことを説明するべきかが分かりにくい状態であるため、説明資料の整理が必要であることを議論した。結果、セキュリティポリシー関連部会にて検討され情報が整理された。

C. スキルアップ講習会の実施（第2・3回）

工学研究院のネットワーク管理者および戸畑キャンパスの各センターへ周知し、後学期の情報モラル向上週間に合わせて第1回スキルアップ講習会を実施した。

D. 平成22年度後学期情報モラル向上週間の実施（第3・4・5回）

平成22年後学期の情報モラル向上週間（10/18～29）は、前年度後学期と同様の内容（1年生：「情報PBL」において「情報倫理デジタル小品集3」を利用し実施、2年生以上：moodleを用いたビデオの閲覧と小テスト、教員：「情報倫理デジタル小品集3」の閲覧案内・啓蒙）で実施した。以上の実施記録を委員会に報告し、実施状況を一覧としてまとめた。

E. 平成23年度前学期情報モラル向上週間の企画（第8回）

基本的には平成22年度と同様に実施することとしたが、特にファイル共有ソフトの取り扱いについて注意喚起する必要がある、ファイル共有ソフトの使用実態は大学で把握できるため隠れて利用することはできない等の具体的な説明を行うこと、インシデントの具体例や法令違反の内容を盛り込んだ資料を作成し教材として使用すること、を取り決めた。

（3）全学運用情報化関連ソフトウェアの工学部での運用方法の検討と実施

A. CA申請システムの運用（第1・2・5・7・8回）

CA申請システムのテスト後、教授会（5/26）にて全教員向けのCA申請システム説明会を行い、本格実施に移った。

CA申請システムの運用にあたって、利用者がパスワードを忘れた場合の措置として、パスワードをリセットできる仕組みに改良を行った。

学部生が博士前期課程へ、博士前期課程学生が博士後期課程へ進学する際に学生番号が変わるため、CA申請システムの対応も必要となる。審議の結果、卒業時にMSCA使用許諾申請を行う際、進学予定者にも申請をしてもらい、進学後新たにインストールするものについてののみCA申請システムで申請してもらうこととした。

卒業後に使用できるMSCAの使用許諾書の発行は、今年度は（すでに紙媒体で申請している学生が多数のため）従来どおり紙媒体で行うが、来年度以降はCA申請システムで申請することとし、今年度もシステムの試行を兼ねてシステムを利用して申請した利用者からはシステムの申請からも受け付けることとなった。

学部3年生から4年生へ進級する際に、システム上の承認権者が情報基盤室から各研究室指導教員へ変わることについて、学生自身がシステム上で指導教員を変更できるようなプログラムを修正することとした。

工学部研究院情報基盤室におけるCA申請システムの運用に関して、(1)本人確認の必要性から基盤室で対応が必要な学生にはメールでなく基盤室窓口に来室し学生証を提示すること、(2)パートタイム職員退職の際は基本的にアンインストールせず後任者が採用後にCA申請システムへ登録を行う、(3)3年から4年への進級時の承認権者の変更は学生各自で行う、(4)PCを廃棄時はシステムでの利用登録を削除するため廃棄時の処理手順をシステム画面に表示する、等の取り決めとした。

B. ウィルス対策ソフトウェアの運用（第1・2回）

工学研究院情報基盤室サーバーから提供しているコーポレートエディションについてwindows7に対応していないことからバージョンアップを承認した。また、情報基盤室へコーポレートエディションのインストール手順の作成を依頼した。

ウィルスバスター・コーポレートエディションとウィルスバスター2010のどちらをインストールすべきかの区分が曖昧であることを受け、大学所有PCであればコーポレートエディションのインストールを促すように取り決めた。

C. M S C Aの工学研究院における運用（第2・7回）

基本方針について、従来は毎年書面にて継続利用申請を行わなければならなかったが、C A申請システムの特徴を効果的に発揮させるため、利用規程に「継続利用の場合は、再申請の必要はない」との文言に変更した。

メディアの貸出しは、従来まで教職員のみ行うことができるという規定であったが、学科管理者から貸し出すことを可能とし、ただし、貸し出したメディアが学科管理者の手元に戻るまでの責任は各教職員が負うこととした。これに基づき基本規定の変更を行った。

また、C A申請システムへの移行・運用と整合させるため基本方針の修正を行った。

D. Mathematica

全学としては契約を結ばないこととなり、今後の工学部・工学研究院としての運用を検討するために、各学科・系において利用状況を把握するために、利用実績及び今後の使用予定について調査を実施した。

（4）工学研究院の情報化に係る施設設備に関する検討

A. 無線LANの整備（第1・2回）

総合研究棟を除く講義室とリフレッシュスペースの無線LANの整備について、予算請求等を検討した。工学研究院長と相談した結果、工学研究院として予算を措置するかどうかは保留となったこと、またその理由としては、整備した後に見込まれる利用数が高透明であること、また整備後の管理運営体制を整える必要があること等があげられた。

B. 戸畑キャンパスにおけるホスト名の運用（第2回）

工学研究院情報基盤室において、「***.tobata.kyutech.ac.jp」のホスト名の利用について、基本的に工学研究院基盤室の判断に一任することとした。

C. 先端教育支援システム仕様策定WGの設置とシステム整備（第3・5回）

次年度以降も当該システムの契約を承認し、仕様策定WGを設置した。工学部工学専門教育用計算機・ネットワークシステムと統合して管理できるよう設計し、契約の時期も合わせることにした。また、次期運用より、情報基盤室において本システムの利用状況の統計を収集することになった。

D. 情報基盤の実態調査の実施（第3回）

全学委員会から情報基盤の実態調査について依頼があり、先端教育支援システム、工学部工学専門教育用計算機・ネットワークシステム・地域支援教育システム（現代G P用）など設置状況について取り纏め、委員会で承認を受けて提出した。

（5）附属図書館に関する検討

A. 工学部学生用図書購入予算額配分（第1回）

従来通り各系に予算を按分することを了承し、選書を実施した。

3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

以下の事項について、引続き主体的に取り組んでいく必要がある。

- （1）情報セキュリティポリシーの不断の周知徹底
- （2）ファイル共有ソフトをはじめとした情報モラル向上のための啓蒙活動
- （3）ソフトウェアライセンス管理の徹底とC A申請システムの継続的運用
- （4）戸畑キャンパスネットワークの安定的な運用管理体制の整備と維持

4. 委員会の議論に使われた資料

（1）本委員会組織に関わる検討

- ・平成22年度大学院工学研究院学術情報委員会委員名簿
- ・大学院工学研究院学術情報委員会委員長ローテーション
- ・平成21年度大学院工学研究院情報化推進委員会議題一覧
- ・平成21年度大学院工学研究院情報化推進委員会（現状と課題）
- ・九州工業大学情報ネットワーク・セキュリティ専門部会要項
- ・九州工業大学情報セキュリティポリシー策定専門部会要項

（2）違法行為防止、及びセキュリティ向上についての検討と対処

- ・工学研究院 情報モラル向上週間での取組企画
- ・平成22年度前期情報モラル向上週間における講習会実施状況一覧

- ・ ネットワーク管理者を対象としたスキルアップ講習会の提案
- ・ スキルアップ講習会・第一回会議メモ
- ・ 平成 22 年度後期情報モラル向上週間における講習会実施状況一覧
- (3) 全学運用情報化関連ソフトウェアの工学部での運用方法の検討と実施
 - ・ C A 申請システム 主な問題点と対応
 - ・ ウィルスバスターの運用に関する工学研究院の基本方針
 - ・ 平成 22 年度ウィルス対策ソフトウェアの全学的運用について
 - ・ マイクロソフトライセンスプログラムキャンパスアグリーメント (M S C A) に関する工学研究院の基本方針
- (4) 工学研究院の情報化に係る施設設備に関する検討
 - ・ 契約年間スケジュール (案)
 - ・ 賃貸借契約書
 - ・ 国立大学法人九州工業大学先端教育支援システム (平成 22 年度) 仕様書
 - ・ 国立大学法人九州工業大学先端教育支援システム (平成 22 年度) 物品調達に備えるべき技術的要件
 - ・ 国立大学法人九州工業大学先端教育支援システムの設置
 - ・ 情報基盤の実態調査について
- (5) 附属図書館に関する検討
 - ・ 平成 22 年度 工学部学生用図書購入予算額配分 (案)

5. 工学研究院の現状に関する意見、又は改善に関する提言

情報セキュリティの向上については、中期目標・中期計画にも記載しており、重要な課題である。その中でも特に、学生・職員に対する情報セキュリティの研修プログラムに関しては、最終的には、各部局で責任を持って実施することになる。効果的な方法を策定するには、情報基盤室も含めた工学研究院におけるこれまでの取り組みや特性を考慮に入れ、情報科学センターと連携するとともに、全学委員会及び関連部会・WGと密接に連携することが重要と考えられる。

6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

(1) 情報セキュリティポリシーの不断の周知徹底

ネットワークの安全性については、新たに管理者サイドへのスキルアップ講習会を実施しはじめるとともに、セキュリティポリシー関連部会・WGの成果などから向上している。引き続き情報を共有するとともに安全性を維持・向上していくことが期待される。

情報セキュリティポリシーの周知徹底については、新入生のオリエンテーションおよび情報モラル向上週間の取り組みで学生に周知を行っている。教職員（責任者・システム管理者・一般職員）向けの講習会についても適宜実施している。今後、各所への伝えるべき情報を精査・区分し、省力化を念頭に効果的な周知徹底の方法を確立させていくことを期待したい。

(2) ファイル共有ソフトをはじめとした情報モラル向上のための啓蒙活動

情報セキュリティポリシーの周知徹底については、新入生のオリエンテーションおよび情報モラル向上週間の取り組みで学生に周知を行っている。教職員（責任者・システム管理者・一般職員）向けの講習会についても適宜実施している。今後、各所への伝えるべき情報を精査・区分し、省力化を念頭に効果的な周知徹底の方法を確立させていくことを期待したい。

(3) ソフトウェアライセンス管理の徹底と C A 申請システムの継続的運用

ソフトウェアライセンス管理では C A 申請システムを導入し、事務作業など管理業務の省力化を図るとともに管理体制を強化した。導入 1 年目ということもあり、運用しながらシステムの改善を進めていたが、今後は継続的運用するために、M S C A の契約内容を鑑みつつ、C A 申請システムの改良と運用体制を確立していくことが必要である。

(4) 戸畑キャンパスネットワークの安定的な運用管理体制の整備と維持

今後とも、情報基盤室や情報科学センターと連携しつつ、戸畑キャンパスのネットワークの改善・維持をすすめるとともに、戸畑キャンパスにおける無線 LAN の整備とネットワーク管理体制の整備について検討していくことを期待したい。

3. 2. 8 大学院工学府広報委員会

1. 今年度取り組んだ課題

- (1) 社会人プログラムリーフレットの改訂版作成・発行
- (2) 工学部ホームページの全面改定・公開
- (3) 工学部ホームページでの高校生向け研究者紹介

2. 今年度採択した事項

- (1) 社会人プログラムリーフレットの改訂版作成・発行
- (2) 工学部ホームページの全面改定・公開
- (3) 工学部ホームページでの高校生向け研究者紹介

3. 残された課題または将来解決すべき事項

高校生や社会人が大学について調べるための手段のひとつとして、ホームページの重要性が年々増している。しかしながら、工学部ホームページの活用度は必ずしも高くないため、昨年度、全面改定に着手した。活用度向上には、ホームページの充実が一義的に大事であり、要望に合わせて迅速に追加・変更する必要がある。それには、工学部内でホームページを自作することが望ましいとの判断から、工学部情報基盤室に作成を依頼した。このことを踏まえ、今年度、工学部情報基盤室より工学部のホームページの改定原案が示され、本委員会での審議を経て、全面改定版を公開するに至った。また、迅速に情報公開できるよう、承認手続きについても申し合わされた。この新たなホームページを活用し、高校生や社会人に情報発信していくかが課題である。

4. 委員会の議論に使用された資料

- (1) 平成21年度委員会名簿
- (2) 九州工業大学広報委員会規則
- (3) 九州工業大学工学部・工学研究科広報委員会内規
- (4) 社会人プログラムリーフレットの改訂版原案
- (5) 工学部のホームページの全面改定原案
- (6) 工学部のホームページでの高校生向け研究者紹介ページ例

5. 工学部・工学府の現状に関する意見または改善に関する提言

工学部、工学府における入学試験志願倍率を上げるためにも日本だけではなく、近隣アジア諸国への広報活動の強化が極めて必要である。そのために工学部ホームページの充実は必須であり、今後、日本語版はもとより、工学部ホームページの英語版についても運用の仕方を検討する必要がある。

6. 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善及び新たな問題点

工学部情報基盤室の協力を得て、工学部ホームページを全面改定し、公開した。今後は情報を逐次更新し、コンテンツを充実させていく必要がある。海外に向けての情報発信には、パンフレット、ホームページの英語版が重要であるが、今年度はこの点に関する改善に着手できなかった。

3. 2. 9 工学部広報委員会

1. 今年度、貴委員会が取り組んだ課題

工学部広報委員会は学部学生募集活動の実施母体である。当委員会に係わる定例的な活動は、オープンキャンパス、大学説明会（高校訪問）、本学が主催する入試説明会、業者等が主催する大学進学説明会への参加、高校等から依頼される工学部見学、大学案内の編集補助等である。

以下に各活動の取り組み課題をまとめる。情報工学部と連携を取りながら、高校訪問のための大学説明資料の統一、高校への訪問教員の調整、新聞・列車広告の実施等、全学的に統一性のある学生募集活動の充実に努めた。また、広報室員の増加等、工学研究院広報室との連携を強め、質の高い学生募集活動の充実に努めた。

- (a) オープンキャンパス：土曜日開催、スタンプラリー・学科何でも相談コーナーの参加者増およびアンケート回収率向上のための工夫、保護者向けの説明会の開催、主要行事への追加。
- (b) 大学説明会（高校訪問）：県内高校に対する工学部・情報工学部分担。岡山以西の全高校への案内送付。
- (c) 進学説明会：業者主催の説明会への積極的参加。
- (d) 大学主催入試説明会：工学部の説明。
- (e) 高校からの工学部訪問への対処：大学概要の説明への協力。
- (f) 大学案内の編集補助：研究室及び学生推薦等の取材協力、共通部分の企画。発行時期の検討。
- (g) 大学広告の作成：新聞広告の作成。
- (h) 工学研究院広報室との連携：工学部の学生募集活動の充実化。

2. 今年度、貴委員会が採択した事項

前項目の活動及び各課題を解決するため下記事項を採択した。

- (a) オープンキャンパス
 - (1) 今年度のオープンキャンパス開催日は8月6日(金)と7日(土)であった。参加人数は1594人で、過去最高の来場者数であった。
 - (2) 実施内容は次の通りである。午前の部では、学科・コースの説明および本学が用意した見学コースに沿って各学科の施設見学を行った。見学コースは、①機械知能・電気電子・応化と②建社・マテリアル・総合システムの2コースとし、移動距離が短く、極力日陰を歩くことができるように見学順路を設定した。午後の部では、テーマ別の自由見学を実施した。午前の部で見学できなかった学科への見学を促すために、スタンプラリーを実施した。アンケートの回収は、昨年度と同様に、スタンプラリーの景品交換場所をメインとし、各学科に回収箱を設置した。また、昨年度と同様に正門に広報室事務補佐員を配置した。
 - (3) 各学科の説明においては、昨年度と同様に説明者の服装、態度に関して改善をお願いすると共に、より平易な説明を心がけていただけよう依頼した。また、鳳龍会館に置いて教職員による「何でも相談会」を実施した。
 - (4) 期間中にボランティアで協力していただく生協学生委員に対して、昨年同様、服装、態度に関して改善をお願いすると共に、説明内容をキャンパス生活などに限定するように依頼した。
- (b) 大学説明会（高校訪問）
 - (1) 今年度は、岡山以西の全高校に大学説明会の案内を送り、生徒向け・進路指導教諭向けの説明会を実施した。
- (c) 進学説明会
 - 業者主催進学説明会に参加した。広いエリアで入学希望者を募るという考えのもと、県外で実施される進学相談会にも参加した。
- (d) 大学主催入試説明会
 - 一昨年度から高校教諭からの質問に柔軟に対応するため、学部広報委員が出席することとしている。
- (e) 高校からの工学部訪問
 - 理数教育支援センターが受付けている大学訪問に対して大学説明を実施した。
- (f) 大学案内の編集補助

昨年度と同様に、平成23年度の大学案内も大幅に変更せず、学生のコメントとデザインの変更程度にとどめることを確認した。

3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

充実したオープンキャンパス、高校訪問を目標に活動を行ってきた。23年度も、同内容の活動を継続することで順調な広報活動を遂行できると思われる。

4. 委員会の議論に使われた資料

高校訪問アンケートおよび調査結果、オープンキャンパスアンケートおよび調査結果、大学案内、進学説明会趣意書等。

5. 工学部・工学研究科の現状に関する意見、又は改善に関する提言

特になし

6. 昨年度の改善に関する提言に対する改善状況と未改善及び新たな問題点

特になし

3. 2. 10 大学院工学府学務委員会

1. 今年度取り組んだ課題

(1) 授業関係・教育関係

- イ) 課程Bの履修内容等について
- ロ) 工学府授業科目の特例履修に関する単位の認定について
- ハ) 一学期あたりの授業期間15週確保について
- ニ) 平成22年度前期成績報告について
- ホ) 修了査定について(前学期)
- ヘ) 社会人修学支援講座(技術者大学院講座)の受入について
- ト) 再試験制度について
- チ) 10月入学者の研究指導計画書の作成について
- リ) インターナショナルコースの導入について
- ヌ) 平成23年度工学府学生便覧等の原稿作成について
- ル) 平成23年度社会人修学支援講座について
- ヲ) 英語科目の改定について
- ワ) 平成23年3月博士後期課程修了予定者等の学位論文審査日程について
- カ) 「教育・研究活動報告書」の提出状況について
- ヨ) 平成23年度のシラバスについて
- タ) 工学府学修細則の一部改定(案)について
- レ) 工学府社会人修学支援講座実施要項の改定について
- ソ) 工学英語科目の充実について
- ツ) 平成22年度後期成績報告について
- ネ) 履修の手引きの改定について
- ナ) 平成23年度工学府時間割表について
- ラ) 教育・学習系統図について
- ム) 出欠管理システムの利用について
- ウ) 平成23年度大学院工学府研究生・科目等履修生・聴講生の募集について
- ヰ) 平成23年度大学院工学府オリエンテーションスケジュールについて
- ノ) 平成23年度工学府学年暦について
- オ) 修了査定について(後学期)
- ク) 4月入学者の研究指導計画書の作成について

(2) 学生関係

- イ) 学生の除籍について
- ロ) 学生異動について
- ハ) 派遣学生の報告について
- ニ) 平成22年度博士後期課程指導教員グループの決定について
- ホ) 博士後期課程指導教員グループの変更について
- ヘ) 外国人特別研究学生の受入について
- ト) 日本学生支援機構大学院奨学生の選考について
- チ) 学生の派遣について
- リ) 日本学術振興会 育志賞受賞候補者の推薦について
- ヌ) 外国人研究生受入について
- ル) 長期履修申請について
- ヲ) 他大学等派遣研究学生の研究期間変更について
- ワ) 他大学等派遣学生研究報告について
- カ) 日本学生支援機構大学院予約奨学生の選考方法について
- ヨ) 平成22年度(10月入学者)博士後期課程指導教員グループについて
- タ) 学部学生の大学院入門科目の履修について
- レ) 学生の懲戒について
- ソ) 「学生と教員との交流会」での質問事項について
- ツ) 日本学生支援機構大学院第一種奨学金の返還免除候補者推薦枠の配分(案)について
- ネ) 特別研究学生の受入期間変更について
- ナ) 他大学等派遣学生研究報告について
- ラ) 日本学生支援機構大学院第一種奨学金の返還免除候補者の推薦について

- ム) 長期履修期間変更申請について
- ウ) 工学府研究生の受入れについて
- 中) 社会人修学支援講座（技術者大学院講座）の科目等履修生の受入について
- (3) ダブルディグリー
 - イ) ダブル・ディグリー制度について
 - ロ) ダブル・ディグリー制度の修士論文の取り扱いについて
 - ハ) ダブルディグリー制度の修了要件について
 - ニ) ダブルディグリー学生の単位の認定について
 - ホ) 工学府のダブル・ディグリー制度について
- (4) その他
 - イ) 中期目標・中期計画について
 - ロ) 教育委員会の報告について
 - ハ) 平成23年度大学院工学府学務委員会委員長・副委員長について

2. 今年度採択した事項

(1) 授業関係・教育関係

イ) 課程Bの履修内容等について

大学院G P関係で新設した科目（6科目15単位）について、実践科目として設定しており、科目区分は他専攻の取り扱いとなるが、課程Bでの修了要件となる履修単位は14単位までであり、全ての科目が修了要件とならないため、当該専攻の専門科目への取り扱いの変更依頼があった。審議した結果、履修の手引きに説明書きを加え、今年度から当該専攻の専門科目として取り扱うこととした。

ロ) 一学期あたりの授業期間15週確保について

一学期あたりの授業期間15週確保について、大学院の授業も学部と同様に扱うこととした

ハ) 再試験制度について

再試験制度の変更が望まれているが、システムの変更を伴うため、開発費用、開発期間を調査したうえで、再度審議することとした。再度の審議では、開発経費に百万円程度かかること、他大学の状況を調査したところ、ほとんどの大学が制度として取り入れていないこと、及び変更を希望しない専攻があること等を勘案し、制度として取り入れないこととした。ただし、試験の実施から成績報告を行うまでの期間が短いことから、再試験分の日程を勘案し、成績報告の日程を遅らせる方向で調整を行うこととした。

ニ) インターナショナルコースの導入について

インターナショナルコースの導入について工学府長からの意向を確認した後、再度審議することとした。なお、審議の際、次のような意見が出された。

- ・受講の対象者は誰を想定しているのか。
- ・導入するなら前期・後期同時とするべきでは。
- ・日本人学生も受講可としてはどうか。

石川工学府長からインターナショナルコースについての説明が行われた。制度の背景として、後期課程の定員充足、JICAや国連からの留学生受入れ等の取り組み、国際性を備えた博士課程学生の涵養等があり、英語での講義の必要性の説明があった。各コース（分野）2科目ずつ、英語のみでの講義と通常の日本語での講義を隔年で行う方法が提案された。

ホ) 平成23年度のシラバスについて

平成23年度は一学期の授業期間を15週確保することが決定したため、大学院のシラバスについて、14週で記載しているものについては15週に、その他の方法で記載しているものについても、15週分の内容で記載することとした。

ヘ) 工学府学修細則の一部改定（案）について

履修の手引きの「(3) 授業科目等について」について、科目区分の記載方法に解りにくい部分があるため、見直しを行うこととした。見直し案については、大学院係で原案を作成したものを学務委員宛送付し、事前に確認のうえ、1月の学務委員会で審議することとした。

ト) 工学英語科目の充実について

各コース2科目ずつ英語のみでの講義と通常の日本語での講義を隔年で行う方法に代えて、工学英語科目を充実させる方向で、各専攻に持ち帰り意見を聞くことし、再度審議を行った。審議の結果、工学英語科目を充実するだけであれば対応可能な専攻もあるが、英語で授業をしたことにより入学希望の学生が増えるかどうか疑問であり、また、英語の授業を行っていると対外的に言える

ほどの準備を行うのは困難であろうとの結論となり、今回の審議について、委員長より工学府長に報告することとなった。

なお、審議の際、次のような意見が出された。

- ・現在の工学英語科目を増やすことについては、対応可能である。
- ・英語で授業があるから学生が集まるのではなく、先生を募ってくるのではないか。
- ・現在の工学英語科目を増やすことで、本当に英語の授業をしていると外部に対して言えるかが疑問である。
- ・各専攻で2科目ずつ英語の授業をし、専攻横断で30単位を履修することとなった場合、学生が何を勉強しに来たのかが不明確になる。
- ・後期課程対象であればすぐにでも対応可ではないか。
- ・主に日本人の教育をしている。GP等の予算的措置がない状況で、少ない外国人対象に、手出しで労力や物を提供する価値があるのか。
- ・JICAや国連大学から受け入れを予定している、英語で授業希望の学生については、少人数なので個別対応としてはどうか。

チ) 平成22年度後期成績報告について

再試験制度についての審議で、再試験を行わず成績報告日程を延ばすため、平成22年度後期試験の報告期限を3月3日(木)まで延ばして対応することとした

リ) 「学生と教員との交流会」での質問事項について

次のような質問事項に対し、回答を審議しホームページに掲載された。

出席管理システムについて：学生証をかざしたにもかかわらず、教員に出席が認知されていないケースがある、教室の変更が反映されていない。

シラバスについて：検索システムを入れて欲しい、英語科目と書いてあるが英語での授業が行われていない。

(2) 学生関係

イ) 学生の懲戒について

不祥事を起こした大学院生の懲戒処分について審議の結果、委員長原案を承認し、工学府教授会に諮ることとした。

(3) ダブルディグリー

イ) ダブル・ディグリー制度の修士論文の取り扱いについて

ダブル・ディグリー制度の修士論文の取り扱いについて審議し、他大学の修士論文の取り扱いや審査方法について調査し、本学の基準作りをすることとした。修士論文は両大学に異なる内容のものをそれぞれ提出することとした。

ロ) ダブルディグリー制度の修了要件について

ダブルディグリー制度の修了要件については新たに申し合わせを作成せず、既定の申し合わせ等に特記する方法を採ることとした。早期修了については、日本人学生と同様の取り扱いとすることとした。

ハ) ダブルディグリー学生の単位の認定について

ダブルディグリーで入学した学生については、協定の相手方大学で修得した単位について、10単位まで認めることができることとなっているが、その履修科目については認定が必要であるため、認定方法について審議を提案した。相手方大学の修士課程で修得した単位の成績表について、入試の際に提出されていればそれを使用することとし、無ければ取り寄せることとした(後に提出されていないことが判明)。また、取り寄せた成績表を参考に本学の授業科目で認定することとし、詳細については学務委員会(メール会議含む)で決定することとした。

12月に行ったメールでの審議で決定した認定方法により、学務委員会で審議を行うため、単位認定報告書を1月21日(金)までに提出するよう説明があった。メール審議での決定内容は以下のとおり。

1. 学務委員より当該指導教員に成績表の徴収依頼を行う。
2. 徴収した成績表により、当該コース(分野)の学務委員が認定を行う。
3. 本学のどの単位として認定するかを決定し、学務委員会で審議する。
4. 単位の換算方法については、個々の科目では本学の2単位に満たない場合や端数を生じる場合、本学における認定科目の単位の合計が出身大学の認定可能な科目群の単位の合計(換算率がある場合はこれを考慮する)を上回らないものとする。

単位認定報告書に基づいて審議の結果承認し、工学府教授会に諮ることとした。

なお、成績表については中国語で記載されているため、認定にあたり、シラバス及びその和訳ま

たは英訳が必要であるとの意見があったため、今後は入学時に成績表とともに徴取を依頼すること
で対応することとした。

ニ) 工学府のダブル・ディグリー制度について

工学府のダブル・ディグリー制度についての審議事項について確認を行った。原則として、学位
授与は同時期とすることは確認されたが、3月25日の学位記授与日に、ダブル・ディグリー学生に課程
を修了したことの証明書を渡すことについては、学位を取得したことの証明となってしまう恐れが
あるため、取得見込証明として作成した方が良いとの意見が多かった。

3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

(1) 授業関係・教育関係

出席管理システムは学部講義では全教室に完備されたが、大学院講義ではまだ未設置の教室が残
っている。

(2) 学生関係

学生の就職状況は厳しさを増すものと予想される。キャリアセンターとの連携等が重要となる。

(3) ダブルディグリー

10月期に修了のダブルディグリー学生に対しては、日本語訳付のシラバスを提出させることとなっ
た。

また、本学の課程のみ修了し、本国の大学の卒業を待たずに次の学期より本学博士後期課程に進学で
きるかどうかは未解決となった。

修了審査の際には相手校の教員を参加させることができる、となっているため、審査日程が決まれば
通知（予算があれば招聘）する必要がある。なお本年度に関しては、揚州大学より出席の予定であった
が、東北地方太平洋沖地震のため中国政府の要請により来日は実現しなかった。

(4) その他

中期目標・中期計画についてエビデンスを残すよう要請されている。

4. 委員会の議論に使われた資料

- ・九州工業大学中期目標・中期計画
- ・教育委員会資料
- ・Joint agreement of co-operation for double degree program between Yangzhou University and Kyushu Institute of Technology
- ・平成22年度組織的な大学院教育改革推進プログラム「プロジェクト・リーダー型博士技術者の育成」ProST 運営会議資料
- ・H22 日本学生支援機構奨学生 工学府推薦者選考資料
- ・大学院設置基準（抜粋）
- ・九州工業大学大学院工学府社会人就学支援講座
- ・情報工学部教育フォーラム

5. 工学府の現状に関する意見または改善に関する提言

(1) 教務情報システムについて

教務情報システムにおいて、学務委員が担当分野の学生の学籍情報・履修情報・成績情報を見ることができ
ない。これらは指導教員のみが見られる設定となっているが、学生指導の必要上、学務委員もアクセスでき
ることが望ましい。

また電気電子工学専攻では本来必修ではない講究や特別実験が教務情報システム上で必修とされており、矛
盾が生じている。

なお、教務情報システムの改修には約百万円かかるとの報告があった。

6. 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善および新たな問題点

特に該当事項なし

3. 2. 1 1 大学院工学府入学試験委員会

1. 今年度取り組んだ課題

- (1) 大学院入学試験専門部会委員を選出した。
- (2) 出願資格認定委員会委員を選出した。
- (3) 平成23年度工学府博士前期課程入学試験（推薦、第1回）実施日程を決定した。
- (4) 平成23年度博士前期課程入学試験（推薦選抜）合格候補者を選考した。
- (5) 平成23年度工学府博士前期課程入学試験募集人員の変更を行った。
- (6) 平成23年度工学府博士前期、後期課程入学試験の出願資格認定を行った。
- (7) 中期目標・中期計画について審議した。
- (8) 平成23年度工学府博士前期課程入学試験の充足状況を確認した。
- (9) 国際共同教育学生選抜実施要項に基づく平成22年10月入学大学院工学府博士前期課程入学試験合格者候補者を選考した。
- (10) 平成23年度博士前・後期課程（第1回募集）入学試験合格者を選考した。
- (11) 工学府入学選抜におけるTOEICの扱いについて審議した。
- (12) 工学府博士前期課程の入学定員の厳守（定員の1.3倍）について審議した。
- (13) 生命体との大学院入試同時開催について審議した。
- (14) 合格者発表をホームページのみで行うこととした。
- (15) 平成23年度大学院工学府博士後期課程入学試験の出願資格を認定した。
- (16) 平成24年度九州工業大学大学院工学府入試日程(案)及び募集人員(案)について審議した。
- (17) 平成23年度工学府博士課程入学試験（第2回募集）実施日程を決定した。
- (18) 各大学院入試の同一日開催、及び第二志望の取り扱いを決定した。
- (18) 平成24年度九州工業大学大学院工学府学生募集要項について審議した。
- (19) 平成23年度博士前・後期課程（第2回募集）入学試験合格者を選考した。

2. 今年度採択した事項

- (1) 九州工業大学大学院工学府、情報工学府、生命体工学研究科の入試日程を同一日とした。
- (2) 一般選抜出願にあたって、生命体工学研究科を第二志望とすることを可能とした。
- (3) 工学府博士前期課程の入学定員数を厳守（定員の1.3倍）することとした。ただし、飛び級入学、社会人特別選抜、外国人留学生特別選抜については、この定員に入れない。
- (4) 工学府入学選抜におけるTOEICの扱いについて決めた。

3. 残された課題、又は将来解決すべき事項

- (1) 工学府博士前期課程の入学定員数を厳守（定員の1.3倍）に関して、本学の将来構想に関連した議論がなされず、数字のみ独り歩きた。
- (2) 博士後期課程の定員充足に関しては抜本的な改善策はなく、今後の検討が必要不可欠である。
- (3) 工学府内の第二志望（先端機能システム）に関しても、議論が必要である。

4. 委員会の議論に使用された資料

- (1) 各専攻の入試実施期日に関する希望調査
- (2) 「中期目標・中期計画」
- (3) 各専攻のTOEICの取り扱いについての提言
- (4) 平成24年度九州工業大学大学院工学府入学者選抜要項（案）
- (5) 平成24年度九州工業大学大学院工学府博士前期課程学生募集要項（案）
- (6) 平成24年度九州工業大学大学院工学府博士後期課程学生募集要項(案)

5. 工学府の現状に関する意見または改善に関する提言

- (1) 工学府博士前期課程の入学定員数の厳守（定員の1.3倍）に関して、試験実施数日前に通達があり、受験生には多大な迷惑をかけた結果となった。近郊の大学の対応もまちまちであり、本学の大学院の在り方に関する議論がなく、一方的に定員の1.3倍が決められてしまったことは遺憾である。
- (2) 工学府博士前期課程の外国人留学生特別選抜において、従来の学科試験が免除されたこともあり、選抜が難しくなっている面も否定できない。特に、指導を希望する教員との事前コンタクトについては重要と考えられることから、今後は、このことを制度化する必要がある。
- (3) 博士前期課程の課程Bがほとんど機能しておらず、早急な対応が必要である。

6. 昨年度の改善に関する提言に対する、改善状況と未改善及び新たな問題点

- (1) 外国人留学生特別選抜に関しては、確かに受験生の数は増加したが、受入学生の質の維持ができているかどうかの検証はできていない。
- (2) ダブルディグリー制度については、既に修了生も出ており改善されている。

3. 3 教員組織

3. 3. 1 教員の配置

① 大学院工学研究院

表 3. 3. 1 大学院工学研究院教員現員一覧

(平成 22 年 4 月 1 日現在)

系	講座名	教 授		准教授		講 師		助 教		合計	技術職員等
		現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	現員
機械知能工学研究系	機械工学部門	5	梅景 俊彦 金元 敏明 鶴田 隆治 野田 尚昭 水垣 善夫	7	河部 徹 吉川 浩一 黒島 義人 清水 浩貴 坪井 伸幸 長山 暁子 宮崎 康次	1	高藤 和樹	3	谷川 洋文 田丸 雄摩 吉田 幸一	16	13
	宇宙工学部門	4	赤星 保浩 橘 武史 松田 健次 米本 浩一	1	平木 講儒	0		2	各務 聡 西川 宏志	7	
	知能制御工学部門	5	石川 聖二 大屋 勝敬 黒木 秀一 坂本 哲三 田川 善彦	2	金 亨燮 相良 慎一	0		2	西田 健 タン・ジ ュークイ	9	5
	小計	14		10		1		7		32	50
建設社会工学研究系		7	秋山 壽一郎 毛井 崇博 幸左 賢二 永瀬 英生 仲間 浩一 山口 栄輝 渡辺 義則	8	伊東 啓太郎 鬼束 幸樹 木村 吉郎 重枝 未玲 寺町 賢一 徳田 光弘 日比野 誠 廣岡 明彦	0		2	加藤 九州男 合田 寛基	17	3
	小計	7		8		0		2		17	20
電気電子工学研究系	電気エネルギー部門	3	白土 竜一 匹田 政幸 三谷 康範	3	大塚 信也 豊田 和弘 渡邊 政幸	0		1	小迫 雅裕	7	10
	電子デバイス部門	6	和泉 亮 大村 一郎 高木 精志 西垣 敏 藤原 賢三 松本 聡	2	川島 健児 内藤 正路	0		6	佐竹 昭泰 鶴巻 浩 羽野 一則 松平 和之 山内 貴志 渡邊 晃彦	14	
	システムエレクトロニクス部門	5	桑原 伸夫 芹川 聖一 二矢田 勝行 前田 博 水波 徹	4	池永 全志 生駒 哲一 市坪 信一 中司 賢一	0		5	河野 英昭 張 力峰 水町 光徳 山脇 彰 楊 世淵	14	
	小計	14		9		0		12		35	45

物質工学研究系	応用化学部門	8	横野 照尚 鹿毛 浩之 古曳 重美 清水 陽一 竹中 繁織 柘植 顕彦 松永 守央 吉永 耕二	7	新井 徹 荒木 孝司 植田 和茂 岡内 辰夫 北村 充 坪田 敏樹 山村 方人	0		7	大塚 圭一 下岡 弘和 高瀬 聡子 馬渡 佳秀 村上 直也 毛利 恵美子 森口 哲次	22	6
	材料開発部門	3	恵良 秀則 大谷 博司 松本 要	5	秋山 哲也 篠崎 信也 高須 登実男 廣田 健治 横山 賢一	0		6	伊藤 秀行 大坪 文隆 北村 貴典 山口 富子 山根 政博 和才 京子	14	4
	小計	11		12		0		13		36	46
基礎科学研究系	数理学部門	4	池田 敏春 加藤 幹雄 酒井 浩隆 仙葉 隆	7	浅海 賢一 井上 創造 木村 広 鈴木 智成 平山 至大 藤田 敏治 三浦 元喜	0		0		11	1
	量子物理学部門	4	岡本 良治 鎌田 裕之 出口 博之 西谷 龍介	3	岸根 順一郎 中尾 基正樹 美藤 正樹	0		0		7	
	小計	8		10		0		0		18	19
先端機能システム工学研究系		4	小森 望充 鈴木 芳文 趙 孟佑 本田 崇	5	大門 秀朗 孫 勇 高原 良博 竹澤 昌晃 脇迫 仁	0		2	岩田 稔 徳永 辰也	11	0
	小計	4		5		0		2		11	11
人間科学系		7	アブドゥルハミド・恭子 井上 寛 田吹 昌俊 鳥井 正史 藤澤 正明 本田 逸夫 ラックス・ジョン・c	9	李 友炯 今井 敦 大野 瀬津子 反町 裕司 中村 雅之 虹林 慶 八丁 由比 東野 充成 水井 万里子	0		0		16	0
	小計	7		9		0		0		16	16
合計		65		63		1		36		165	207

② 大学院工学府

表 3. 3. 2 大学院工学府連携講座（定員外）

（平成 22 年 4 月 1 日現在）

専攻名	教 授		准教授		講 師		助 教		合計	技術職員等
	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	氏名	現員	現員
先端機能システム工学専攻	1	納富 啓	1	西 敏郎	0		0		2	0
合計	1		1		0		0		2	0

3. 4 事務組織

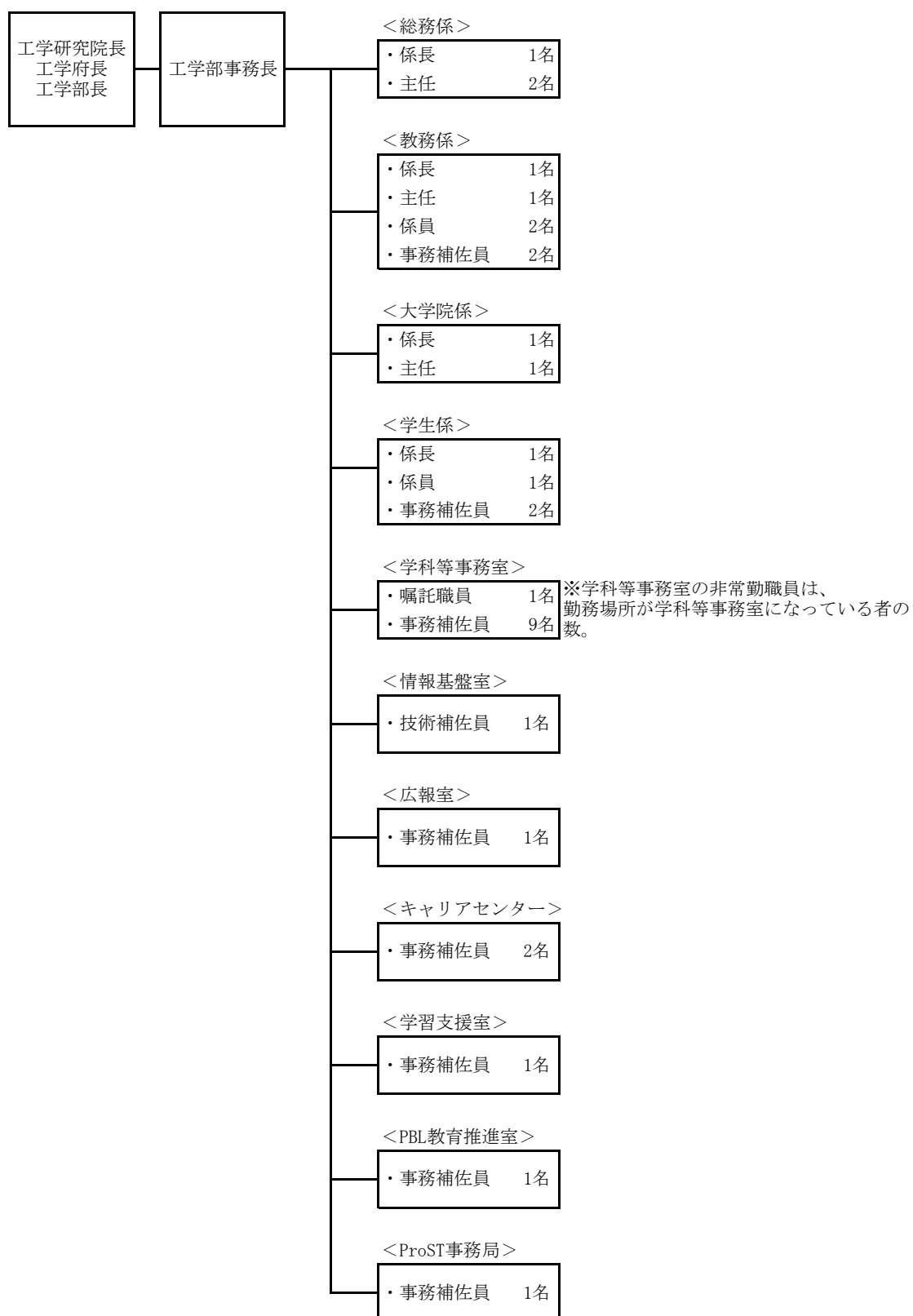


図 3. 4. 1 事務組織図（平成 22 年 4 月 1 日現在）

4 大学院工学研究院・工学府・工学部の財政

4. 1 運営費交付金配分状況

表 4. 1. 1 運営費交付金配分額、学部運営費、教室配分額年次変化

(単位：千円)

区分 \ 年度	平成 1 8 年度	平成 1 9 年度	平成 2 0 年度	平成 2 1 年度	平成 2 2 年度
運営費交付金配分額	391, 496	409, 336	381, 132	480, 984	488, 920
学部運営費 (うち光熱水費保留分)	104, 257 (11, 383)	101, 843 (11, 460)	100, 975 (11, 313)	194, 407 (116, 320)*	198, 584 (116, 773)
各学科等配分額	287, 239	307, 493	280, 157	286, 577	290, 336

(*) 平成 2 1 年度より光熱水費の全額を部局で管理することとなったため、額が例年よりも大きくなっている。

表 4. 1. 2 平成 2 2 年度費目別配分額

(単位：千円)

費 目	配分額	比率 (%)
研究経費	84, 576	17. 30
教育経費	146, 539	29. 97
業績等配分経費	27, 850	5. 70
事項指定経費	31, 371	6. 42
学部運営費	81, 811	16. 73
光熱水費	116, 773	23. 88
その他	0	0
合 計	488, 920	100. 00

表 4.1.3 過去 5 年間の学科等別積算校費配分額の推移

(単位：千円)

年度・科目		学科等 機械知能 工学科	建設社会 工学科	電気電子 工学科	物質工学 科	共通講座		機能システム創成 工学専攻	その他
平成 18 年 度	教育・研究費								
	研究経費	10,370	5,281	12,415	11,065	12,193		5,018	243
	教育経費	38,681	17,456	40,536	31,887	5,972		12,848	7,175
	業績等配分経費	5,286	2,641	8,547	6,145	3,360		2,107	0
平成 19 年 度	その他	1,872	0	33,928	1,652	0		2,218	112,600
	教育・研究費								
	研究経費	13,089	6,967	17,504	14,861	15,400		6,371	300
	教育経費	37,310	16,395	40,249	32,817	6,540		13,270	7,175
平成 20 年 度	業績等配分経費	4,232	1,621	5,712	4,530	2,445		1,726	7,579
	その他	1,422	0	33,928	1,652	0		2,218	114,023
年度・科目		系 機械知能 工学研究系	建設社会 工学研究系	電気電子 工学研究系	物質工学 研究系	基礎科学系	人間科学系	先端機能システム 工学研究系	その他
平成 21 年 度	教育・研究費								
	研究経費	13,282	7,533	16,232	14,836	7,527	7,418	5,516	0
	教育経費	33,475	15,284	37,650	34,375	0	2,257	18,378	0
	業績等配分経費	3,629	1,646	5,667	5,423	1,476	1,177	1,419	0
平成 22 年 度	その他	1,564	0	32,443	1,526	0	0	3,072	108,307
	教育・研究費								
	研究経費	13,984	7,600	15,200	15,592	7,192	7,600	4,400	0
	教育経費	35,464	17,051	38,413	35,279	0	2,929	17,384	0
平成 23 年 度	業績等配分経費	4,325	1,827	5,338	5,432	549	1,282	1,629	0
	その他	753	0	32,439	1,502	0	0	3,023	204,797
平成 24 年 度	教育・研究費								
	研究経費	16,500	8,500	17,988	17,400	9,000	8,500	6,688	0
	教育経費	36,305	16,421	38,276	34,348	0	2,218	18,971	0
	業績等配分経費	3,646	1,752	5,921	5,126	1,653	1,126	1,115	7,511
平成 25 年 度	その他	981	0	257	1,267	0	0	3,963	223,487

4. 2 科学研究費補助金の採択状況

※金額は、直接経費のみ。
(転出を含み、転入を除く)

表 4.2.1 科学研究費補助金採択状況

(単位：千円)

種目	年度		平成18年度		平成19年度		平成20年度		平成21年度		平成22年度	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
特別推進研究	2	35,470	2	26,700	1	11,700	1	11,700	—	—	—	—
特定領域研究	5	21,500	4	18,400	1	2,600	—	—	1	4,900	—	—
特別研究促進費	—	—	—	—	1	8,000	—	—	—	—	—	—
新学術領域研究	—	—	—	—	—	—	1	3,300	1	3,300	—	—
基盤研究 (A) (海外)	—	—	—	—	1	11,600	1	10,600	1	5,000	—	—
基盤研究 (A) (一般)	2	23,500	3	33,200	3	28,200	3	20,000	1	15,200	—	—
基盤研究 (B) (一般)	15	59,300	12	40,600	7	42,800	10	43,200	10	32,100	—	—
基盤研究 (C) (一般)	23	27,900	21	30,900	26	28,300	22	26,000	30	30,900	—	—
挑戦的萌芽研究	7	12,400	8	11,100	4	4,900	3	3,200	5	5,800	—	—
奨励研究	—	—	—	—	1	580	—	—	1	570	—	—
若手研究 (A)	1	15,900	1	2,100	2	4,000	—	—	2	8,400	—	—
若手研究 (B)	16	20,100	17	23,600	16	17,600	13	17,600	11	13,700	—	—
特別研究員奨励費	—	—	1	900	—	—	4	2,500	5	3,700	—	—
計	71	216,070	69	187,500	63	160,280	58	138,100	68	123,570	—	—

表 4.2.2 平成22年度科学研究費補助金学科等別申請、採択状況

(上段数字は継続課題で内数)

系 事項	機械知能工学 研究系	建設社会工学 研究系	電気電子工学 研究系	物質工学 研究系	基礎科学 研究系	人間科学 研究系	先端機能シ ステム工学 研究系	合 計
申請件数	36	19	41	38	18	20	9	181
採択件数	9	7	4	8	8	0	2	38
	15	8	9	12	11	2	5	62

※申請件数・採択件数ともに、非常勤研究員を含む。

また、申請・採択件数には、奨励研究費及び特別研究員奨励費を含まない。

4. 3 外部資金導入状況

4. 3. 1 寄附金（奨学寄附金）

		表 4.3.1 寄附金受け入れ状況									
		(単位：千円)									
学科等	年度	平成18年度		平成19年度		平成20年度		平成21年度		平成22年度	
		件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
機械知能工学研究系		13	9,770	18	13,070	14	13,902	17	12,800	19	12,767
建設社会工学研究系		24	32,840	15	22,800	20	57,130	13	15,390	12	19,936
電気電子工学研究系		15	11,280	11	8,550	22	12,670	18	18,987	23	32,440
物質工学研究系		42	26,357	35	23,225	36	28,170	26	19,240	32	28,425
共通講座		5	2,400	4	5,980	—	—	0	0	0	0
基礎科学研究系		—	—	—	—	3	954	2	1,950	2	310
人間科学系		—	—	—	—	—	—	0	0	0	0
先端機能システム工学研究系		8	5,385	6	3,900	5	49,723	8	5,010	4	2,000
合計		106	88,032	89	77,525	100	117,799	84	73,377	92	95,878

4. 3. 2 民間等との共同研究

		表 4.3.2 民間等との共同研究受け入れ状況								(単位：千円)	
		平成18年度		平成19年度		平成20年度		平成21年度		平成22年度	
学科等	年度	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
機械知能工学研究系		8	5,670 (5,670)	8	7,489 (7,489)	19	19,260 (19,260)	13	11,650 (11,650)	19	24,848 (24,848)
建設社会工学研究系		5	10,806 (10,806)	4	8,500 (8,500)	4	3,000 (3,000)	4	13,986 (13,986)	4	9,540 (9,540)
電気電子工学研究系		24	36,085 (36,085)	27	39,649 (39,649)	34	49,657 (49,657)	31	74,909 (74,909)	37	66,063 (66,063)
物質工学研究系		20	25,399 (25,399)	26	32,791 (32,791)	34	43,154 (43,154)	38	41,120 (31,555)	33	36,492 (36,492)
共通講座		2	2,500 (2,500)	3	3,750 (3,750)	—	—	—	—	—	—
基礎科学研究系		—	—	—	—	3	2,400 (2,400)	6	5,119 (5,119)	4	2,000 (2,000)
人間科学系		—	—	—	—	0	0 (0)	0	0 (0)	—	0 (0)
機能システム創成工学専攻 (先端機能システム工学研究系)		4	2,000 (2,000)	7	14,699 (14,699)	2	12,598 (12,598)	4	12,970 (12,970)	8	120,428 (120,428)
合計		63	82,460 (82,460)	75	106,878 (106,878)	96	130,069 (130,069)	96	159,754 (159,754)	105	259,371 (259,371)

※下段の（ ）数字は民間負担分の歳入金額で内数。

※複数年契約を含む。

※注意事項：継続研究員である長谷部特任教授は物質工学研究系、増山特任教授は先端機能システム工学研究系で集計。

4. 3. 3 受託研究

		表 4.3.3 受託研究受け入れ状況								(単位：千円)	
学科等	年度	平成18年度		平成19年度		平成20年度		平成21年度		平成22年度	
		件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
機械知能工学研究系		15	24,283	12	18,514	13	30,148	13	25,448	9	10,862
建設社会工学研究系		2	6,465	3	19,015	5	18,483	2	12,000	3	1,180
電気電子工学研究系		12	72,469	17	79,013	21	58,781	23	68,501	18	62,414
物質工学研究系		11	24,903	10	149,586	18	109,638	19	97,956	18	134,331
共通講座		1	5,696	2	4,640	—	—	—	—	—	—
基礎科学研究系		—	—	—	—	1	2,000	2	4,860	2	3,600
人間科学系		—	—	—	—	0	0	0	0	0	0
機能システム創成工学専攻 (先端機能システム工学研究系)		5	10,633	7	21,737	3	21,072	4	18,092	12	87,282
合計		46	144,449	51	292,505	61	240,122	63	226,857	62	299,669
※複数年契約を含む。 ※注意事項 ・東証契約もありますが、申請を1件としています。 ・知的クラスターは1テーマを1件とし、代表者の所属で分けています。 ・受託事業は含まれていません。 ・継続研究員である長谷部特任教授は物質工学研究系、増山特任教授は先端機能システム工学研究系で集計。											

4. 3. 4 寄附講座

		表 4.3.4 寄附講座受け入れ状況						(単位：千円)	
名称	所属学科	寄附者	年度別受け入れ金額					教員組織	
			平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	平成22年度		
電力系統 制御工学	電気工学科	九州電力(株)	30,000	30,000	30,000	30,000	30,000	平成22年度 客員教授 1 寄附講座教員 1	

4. 3. 5 寄附金の利息

大学院工学研究院・工学府・工学部では、寄附金の利息を共通経費として運用している。

表4. 3. 5に平成22年度の使用内訳を示す。

表4. 3. 5 平成22年度寄附金共通経費使用報告

(単位:円)

受入額		使用額	
事項	金額	事項	金額
前年度より繰越	2,467,580	国際交流打合せ旅費 (サレント大学、ローマ・ラ・サピエンツァ大学)	187,260
寄附金オーバーヘッド分	2,522,419	国際交流会議費 (東北大学・サンテティエンヌ国立高等鉱業学院)	103,427
		国際交流記念品	355,455
		第60回国立大学工学部長会議懇親会費 (工学研究院長出席)	10,000
		宇宙オープンキャンパス会議費	6,825
		福岡留学フェア旅費 (副工学研究院長出席)	140,085
		工学部教育方法改革研修・講演会会議費	7,140
		PBL教育推進室・FD委員会・工学部教育方法改革合同シンポジウム会議費	70,000
		(小計)	880,192
		繰越額	4,109,807
合計	4,989,999	合計	4,989,999

5 大学院工学研究院・工学府・工学部と社会のつながり

5.1 地域貢献活動

5.1.1 大学公開

大学公開事業の一環として実施している高校生のためのオープンキャンパス（学内見学会）の実施状況を表5.1.1に示す。

表5.1.1 高校生のためのオープンキャンパス（学内見学会）の実施状況

年度	参加校数（校）	参加者数（名）		
		大学全体	学部別	
平成18年度	255	1,543	(工)	968
			(情)	575
平成19年度		1,701	(工)	1,065
			(情)	636
平成20年度		2,198	(工)	1,285
			(情)	913
平成21年度		2,427	(工)	1,502
			(情)	925
平成22年度		2,767	(工)	1,594
			(情)	1,173

※19年度より、個人の参加申込みとなったため、参加校数のデータは取っておりません。

5. 1. 2 公開講座等

表 5.1.2 公開講座等実施状況

(単位：名)

年度	講座名	対象	参加者数
平成 18 年度	第 3 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙を切って作るふしぎな図形」	小学生以上	59
	八幡大谷市民センター 折り紙講座	市民対象	27
	第 4 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「光の不思議を体験しよう」	小学校 4 年生以上	55
	明治学園小学校 天体観測会	5 年生	41
	戸畑子ども会 折り紙講座	小学生	50
	第 5 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「人力飛行機で学ぶ飛行機の仕組み」	小学校 4 年生以上	73
	第 6 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「見て、触れて楽しもう！ 北九州工学体験工房」	中学生	17
	第 7 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙をたたんで作るふしぎな模様」	小学生以上	64
	第 8 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「圧力ガンガン」	小学校 4 年生以上	68
	第 9 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「正 6 角形で作るふしぎな立体」	小学校以上	99
	第 10 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「超伝導ってなんだろう？」	小学校 4 年生以上	63
	第 11 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「発泡スチロールのリサイクル」	小学校 4 年生以上	44
	第 12 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「燃える不思議－花火のひみつ－」	小学校 4 年生以上	88
平成 19 年度	第 13 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「正 6 角形で作るふしぎな立体」	小学校以上	97
	第 13 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙を組んで作るふしぎな立体」	小学生以上	97
	第 14 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「JSS in 環境ミュージアム」	小学生以上	
	第 15 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「見て、触れて楽しもう！ 北九州工学体験工房」	中学生	41
	第 16 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「人力飛行機で学ぶ飛行機の仕組み」	小学 4 年生～中学生	41
	第 17 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「正方形や長方形や三角形の折り紙をたたんでみよう！」	小学生以上	86
	第 18 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「光と色のマジック！～発光体～」	小学生以上	67
	第 19 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「天気のかなでに挑戦しよう！」	小学 4 年生以上	69
	第 20 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「身近な化学…しょっぱいだけじゃない塩水の不思議」	小・中学生	131
	第 21 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙をたたんで切って開いてできる、ふしぎな模様」	小学生以上	79
	第 21 回 ジュニア・サイエンス・スクール(2 回目) 「折り紙をたたんで切って開いてできる、ふしぎな模様」	小学生以上	70
	第 22 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「燃える不思議－花火のひみつ (2)」	小学 4 年生以上	85
	もりつね祭ブース出展	一般	
	毎日新聞社主催「ふしぎ発見ワークショップ」への協力	一般	
	インフォネットフェスティバル 2007 への協力	一般	
平成 20 年度	青少年の為の科学の祭典 実験ブース出展	一般	
	北九州市児童文化科学館「わくわくサイエンスキッズ」への協力	一般	
	こどもエコクラブ全国フェスティバル in 北九州	一般	
平成 20 年度	第 23 回 ジュニア・サイエンス・スクール 「JSS in 環境ミュージアム」	小学生以上	ブース 出展

	第 24 回ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙ユニットで作るふしぎな立体」	小学生以上	105
	第 25 回ジュニア・サイエンス・スクール 「天体観望会：大型望遠鏡で月や惑星をみよう」	中学生	228
	第 26 回ジュニア・サイエンス・スクール 「見て、触れて楽しもう！北九州工学体験工房」	小学 4 年生～中学生	29
	第 27 回ジュニア・サイエンス・スクール 「JSS in 水環境館」	小学生以上	ブース 出展
	第 28 回ジュニア・サイエンス・スクール 「正 6 画形で作るふしぎな立体」	小学生以上	78
	第 29 回ジュニア・サイエンス・スクール 「人力飛行機の最新技術」	小学 4 年生以上	30
	第 30 回ジュニア・サイエンス・スクール 「音と楽器の科学」 「ミニチュア電子ピアノの作製」	小・中学生 中学生	28 16
	第 31 回ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙ユニットで作るふしぎな立体(初級)」 「折り紙ユニットで作るふしぎな立体(中級)」	小学生以上	36 44
	第 32 回ジュニア・サイエンス・スクール 「磁石を使って魚ロボットを動かしてみよう」	小学生以上	28
	もりつね祭ブース出展	一般	
	青少年の為の科学の祭典 実験ブース出展	一般	ブース 出展
	北九州市児童文化科学館 「わくわくサイエンスキッズ」への協力	一般	ブース 出展
	福岡市少年科学文化会館 「音と楽器の科学」への協力	一般	ブース 出展
	福岡市少年科学文化会館 「わくわく科学カーニバル」への協力	一般	ブース 出展
	北九州市立中原市民センター	小学 1～6 年生	約 30
	北九州市立三六市民センター	小学生（主に 1～3 年生）	約 40
	福岡県高校化学部会研修会	高校教員	20
	天文講演会 「生命の歩み-君はどこからきたのか-」	小学校高学年以上一般まで	162
	中学理科教員サークル研修 「天気のはじめに挑戦しよう！」 「光の不思議を体験しよう」	中学教員	約 20
	飛幡中学校 「燃える不思議-花火のひみつ-」	中学 1・2 年	14
	インターンシップ 福岡県立八幡工業高等学校	高校生	2
平成 21 年度	福岡県高校化学部会研修会	高校教員	20
	第 33 回ジュニア・サイエンス・スクール 「JSS in 環境ミュージアム」	小学生以上	ブース 出展
	第 34 回ジュニア・サイエンス・スクール 「多角形をたたんで作るふしぎな模様」	小学生以上	59
	北九州市立永犬丸市民センター	小学 1～6 年生	約 50
	北九州市立前田市民センター	小学 1～6 年生	25
	第 35 回ジュニア・サイエンス・スクール 「皆既日食観察会」	小学生以上	420
	第 36 回ジュニア・サイエンス・スクール 「見て、触れて楽しもう！北九州工学体験工房」	中学生	42
	日本化学会九州支部「化学への招待」への協力	小学生以上	63
	北九州市児童文化科学館 「わくわくサイエンスキッズ」への協力	一般	ブース 出展
	戸畑区「いいっちゃ戸畑」への協力	一般	ブース 出展
	戸畑区まちづくり推進課推進課 「安川・松本家と戸畑の百年」記念事業への協力	一般	33

平成22年度	天文講演会 「宇宙を身近に～宇宙開発者たちに聞いてみよう～」	小学校高学年以上一般まで	103
	第37回ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙ユニットで作るふしぎな立体(初級)」 「折り紙ユニットで作るふしぎな立体(中級)」	小学生以上	32 40
	北九州市立三六市民センター	小学1～6年生	約40
	第38回ジュニア・サイエンス・スクール 「ソルバトクロミズム：周りの環境で色が変わるカメレオン分子を作ってみよう」	小学生以上	45
	第39回ジュニア・サイエンス・スクール 「家庭の科学—電気製品の仕組みと安全な使用法」	小学生以上	30
	第40回ジュニア・サイエンス・スクール 「ドライアイスで遊ぼう！」	小学生以上	41
	福岡県立戸畑高等学校文化祭に参加 「折り紙ユニットで立体を作ってみよう」 「超高速カメラでおもしろ実験」	小学生以上	ブース 出展
	第41回ジュニア・サイエンス・スクール 「JSS in 環境ミュージアム」	小学生以上	ブース 出展
	第42回ジュニア・サイエンス・スクール 「多角形を切って作るふしぎな模様」	小学生以上	100
	天文講演会 「星をながめて」	小学校高学年以上一般まで	82
	福岡県高校化学部会研修会	高校教員	19
	読売新聞企画 社会見学受入れ 「液体窒素の実験」	小学生	30
	第43回ジュニア・サイエンス・スクール 「見て、触れて楽しもう！ 北九州工学体験工房」	中学生	33
	第44回ジュニア・サイエンス・スクール 「DNAを調べよう」	小学生以上	58
	出張！オープンキャンパス in イムズ 「折り紙ユニットで立体をつくってみよう」 「宇宙空間ってどんなところ？」	一般	ブース 出展
	北九州市児童文化科学館 「わくわくサイエンスキッズ」への協力	一般	ブース 出展
	フクオカサイエンスマンス 「光と電気のふしぎ体験」	小学生以上	ブース 出展
	科学で遊ぼう！夢テクノロジー2010 in 中津	小学生以上	ブース 出展
	理数教育研究セミナー2010	一般	28
	第45回ジュニア・サイエンス・スクール 「手作り望遠鏡教室」	小学生以上	29
	第46回ジュニア・サイエンス・スクール 「折り紙ユニットで作るふしぎな立体(中級)」	小学生以上	52

5. 1. 3 北九州市民カレッジへの協力

本学は、福岡・北九州地域リカレント教育推進協議会主催のリカレント教育の実施大学の一つになっていたが、その後継事業として、平成17年度から北九州市民カレッジが始まった。これらの事業にこの5年間に協力したセミナーの実施状況を表5. 1. 3に示す。

表 5. 1. 3 北九州市民カレッジ（リカレント教育）協力セミナー実施状況（単位：名）

年 度	セミナー名	参加者数	備 考
平成18年度	申込者が少数のため実施なし		市民カレッジ
平成19年度	申込者が少数のため実施なし		市民カレッジ
平成20年度	現代社会を支える化学ー最先端機能物質から環境・リサイクルまで	18	市民カレッジ
平成21年度	原語で読む現代ドイツ文学 ーダニエル・ケールマン『陽の下で』ー	27	市民カレッジ
平成22年度	前期 原語で読む現代ドイツ文学（2） ーダニエル・ケールマン『陽の下で』ー	21	市民カレッジ
	後期 講師の都合により中止		

5. 1. 4 出前講義

近年、社会的問題となっている、いわゆる青少年の「科学離れ」「理工系離れ」対策の一環として、小・中・高等学校の生徒を対象に本学の教官が小・中・高等学校に出向き、理工系分野の学問の最前線の話題や魅力等について分かり易く講義をする。

表 5.1.4 出前講義

年度	講義名	実施件数	対象者
平成18年度	天気予報の物理と数学 一流れの力学から気象予報士になる方法までー	2	高校生
	エコポ・ワークショップ! 植木鉢から学ぶ身近な自然と日本の文化 ー自分でデザインした植木鉢をつくって植物を育てようー	1	小・中・高校生
	魚のすみやすい川づくり	1	中・高校生
	身近な科学の話 ー理科(科学)の学習の意味を考えるー	3	中・高校生
	3次方程式の解法 ー楽しい数学ー	1	高校生
	宇宙とは何か? 時間とは何か? 人間とは何か?	2	高校生
	万有引力の法則の初等的な導出法ーニュートンが目指したものー	1	中・高校生
	相対性理論と4次元時空間ーアインシュタインが目指したものー	3	中・高校生
	進化する機械工学とグローバル化時代に期待される技術者	1	高校生
	ニューラルネットのロボットへの応用 ー脳をまねてロボットを動かすはなしー	1	高校生
	エネルギーと環境	1	中・高校生
平成19年度	「アポロ13」はただの冒険映画じゃない ー技術者ってかつこいい!ー	4	中・高校生
	ニューラルネットのロボットへの応用 ー脳をまねてロボットを動かすはなしー	5	高校生
	やさしい情報通信の世界 ーインターネットの基礎と応用ー	2	高校生
	テレビはなぜ見える! ーテレビ・ラジオの原理と電波のふしぎー	4	小・中・高校生
	シミュレーションで学ぶデジタル通信の仕組み	1	高校生
	聞こえないことと、その支援方法	1	中・高校生
	視覚障害者のための福祉機器について ー視覚障害を体験して考えてみるー	1	中・高校生
	電気のいろいろな作り方 ー身近なもので電気をつくろうー	3	小学生
	超伝導体による浮上実験 ー超伝導体と磁石はどう違うか?ー	8	小・中・高校生
	シャボン玉から知る複合材料の科学	2	中・高校生
	携帯電話もパソコンもテレビも車も集積回路(LSI)がぎっしりーLSIってなに? 半導体ってなに?ー	3	小・中・高校生
	水の不思議 ー20℃で、あたたかい氷をつくってみよう!ー	1	小・中・高校生
	遺伝子とゲノムと生命 ーやさしい遺伝子のはなしー	1	中・高校生
	医薬品の安全で効果的な体内取り込み技術 ー生物に学ぶドラッグデリバリーシステムー	2	高校生
	マイクロ波が促進する化学反応 ー電子レンジで化学の実験ー	1	小・中・高校生
	身のまわりのプラスチックとリサイクル ーペットボトルやビニールについてもっと知ろうー	2	小・中・高校生
	あっ、プラスチックが水に溶ける! ープラスチックのリサイクルを考えるー	2	高校生
	生ゴミからプラスチックと肥料をつくる ーリサイクルを考えようー	2	小・中学生
	魚のすみやすい川づくり	1	中・高校生

平成20年度	風を生活に役立てる最先端研究－何がわかって、何がわかってない？－	1	高校生
	エネルギーと環境－おまけ 僕や私の生きる道（技術者編）－	6	中・高校生
	天気予報のしくみと地球の気候変動－気象現象の物理と数学－	3	高校生
	身近な物理現象と、大学での研究例との関係－多様な知識と好奇心が共通にある－	1	小・中・高校生
	3次方程式の解法－楽しい数学－	2	高校生
	宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？	1	高校生
	相対性理論と4次元時空間－アインシュタインが目指したもの－	1	高校生
	やってみなくちゃ分からない折り紙飛行機－ものづくりの秘密－	2	小・中学生
	「紅の豚」はただのアニメじゃない－技術者っていいもんだ！－	4	中・高校生
	進化する機械工学とグローバル化時代に期待される技術者	2	高校生
	もてる男の顔・対称性とその顔認証への応用－バイセキュリティの世界－	4	小・高校生
	やさしい情報通信の世界－インターネットの基礎と応用－	3	高校生
	テレビはなぜ見える！－テレビ・ラジオの原理と電波のふしぎ－	3	小・高校生
	音声のブラインド信号分離－聖徳太子プロジェクト－	2	高校生
	世界最速のデジタルオーディオ IC	1	高校生
	脳と機械の「見る」－人間の視覚のしくみとロボットへの応用－	3	小・高校生
	ニューラルネットのロボットへの応用－脳をまねてロボットを動かすはなし－	2	高校生
	環境にやさしいプラスチックで作る自在に曲がる電子デバイス－ポリマーで拓く未来の情報機器とロボット－	1	高校生
	携帯電話もパソコンもテレビも車も集積回路（LSI）がぎっしり－LSI ってなに？半導体ってなに？－	4	高校生
	超伝導体による浮上実験－超伝導体と磁石はどう違うか？－	10	小・中・高校生
	生物の生み出すナノ工作の世界－生物の働きを生み出すタンパク質達を眺めてみよう－	1	高校生
	DNAと遺伝子－やさしい遺伝子のはなし－	5	高校生
	医薬品の安全で効果的な体内取り込み技術－生物に学ぶドラッグデリバリーシステム－	3	高校生
	エコポ・ワークショップ！植木鉢から学ぶ身近な自然と日本の文化－自分でデザインした植木鉢をつくって植物を育てよう－	3	小学生
	魚のすみやすい川づくり	1	高校生
	風を生活に役立てる最先端研究－何がわかって、何がわかってない？－	2	高校生
	地球温暖化問題と自然エネルギー－風力発電を含めて－	2	小・高校生
	エネルギーと環境－新聞から学ぶ 原発と温暖化対策－	1	高校生
	お日様パワーは地球を救う－太陽電池のはなし－	2	高校生
	光触媒を使った環境浄化について	1	高校生
	生ゴミからプラスチックと肥料をつくる－リサイクルを考えよう－	3	小・中学生
	あつ、プラスチックが水に溶ける！－プラスチックのリサイクルを考える－	1	高校生

	たになるけど、ホントはコワイ確率の話。ー確率にだまされるな。確率は人の生命も左右する鋭い牙にもなる。確率は科学の大事な根っこ。ー	1	高校生
	正多面体のはなしー折り紙でいろいろな立体をつくろうー	1	小学生
	宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？	1	高校生
	天気予報のしくみと地球の気候変動ー気象現象の物理と数学ー	2	高校生
	「アポロ13」はただの冒険映画じゃないー技術者ってかっこいい！ー	2	高校生
	「紅の豚」はただのアニメじゃないー技術者っていいもんだ！ー	4	高校生
	自動車の出来るまでーものづくりの現場を見てみようー	5	高校生
	工学部ってどんなところ？	5	高校生
	僕や私の生きる道（工学編）ー人生なんとかなるもんだー	2	高校生
平成21年度	もてる男の顔・対称性とその顔認証への応用ーバイセキュリティの世界ー	9	高校生
	情報工学のもたらす新世界探訪ー情報工学の可能性は∞ー	3	高校生
	やさしい情報通信の世界ーインターネットの基礎と応用ー	1	高校生
	テレビはなぜ見える！ーテレビ・デジタルテレビの原理と電波のふしぎー	4	高校生
	音声のブラインド信号分離ー聖徳太子プロジェクトー	1	高校生
	世界最速のデジタルオーディオICー20年目の夢ー	3	高校生
	見えないことと、その支援方法	1	高校生
	聞こえないことと、その支援方法	1	高校生
	いつも働いている脳ー早寝、早起き、脳にご飯をー	2	高校生
	人間の見るしくみをしらべてロボットの見るしくみをつくってま すー脳の視覚のしくみをコンピュータで実現ー	10	中・高校生
	自動ピアノから学ぶ人間の不思議ー人の感覚を探るー	2	高校生
	生物の動きを真似たマイクロマシンと磁場ー先端医療デバイス からアミューズメントロボットまで	3	高校生
	ニューラルネットのロボットへの応用ー脳をまねてロボットを 動かすはなしー	2	高校生
	携帯電話もパソコンもテレビも車も集積回路(IC)がぎっしりー ICってなに？半導体ってなに？ー	2	高校生
	カーボンナノチューブによる半導体ナノテクノロジーーカーボ ンナノチューブとは？ー	3	高校生
	超伝導体による浮上実験ー超伝導体と磁石はどう違うか？ー	11	小・中・高校生
	電気のいろいろな作り方ー身近なもので電気をつくろうー	2	小学生
	生物のつくるナノ構造を観察しよう！ーコンピュータを使った 新しい自然観察ー	1	高校生
	DNAと遺伝子ーやさしい遺伝子のはなしー	1	高校生
	医薬品の安全で効果的な体内取り込み技術ー生物に学ぶドラッ グデリバリーシステムー	1	高校生
	なぜ砂糖や塩に味を感じるのか？	1	高校生
	エコポ・ワークショップ！植木鉢から学ぶ身近な自然と日本の文 化ー自分でデザインした植木鉢をつくって植物を育てようー	1	高校生
	魚のすみやすい川づくり	1	高校生
	風を生活に役立てる最先端研究ー何がわかってて、何がわかって ない？ー	2	高校生

	地球温暖化問題と自然エネルギーー風力発電を含めてー	2	高校生
	お日様パワーは地球を救うー太陽電池のはなしー	4	高校生
	電子レンジで化学の実験ーマイクロ波が促進する化学反応ー	3	高校生
	生ゴミからプラスチックと肥料をつくるーびせいぶつの不思議な世界ー	1	高校生
	生ゴミからプラスチックと肥料をつくるーリサイクルを考えようー	1	高校生
	あっ、プラスチックが水に溶ける！ープラスチックのリサイクルを考えるー	1	高校生
	データを科学する：判断や認識に潜む危うさを見抜くー血液型で性格判断できるってホント？認識って実は何？ー	2	高校生
	正多面体のはなしー折り紙でいろいろな立体をつくろうー	3	中・高校生
	相対性理論と4次元時空間ーアインシュタインが目指したものー	1	高校生
	宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？ー科学と技術ー	2	高校生
	「アポロ13」はただの冒険映画じゃないー技術者ってカッコいい！ー	2	高校生
	「紅の豚」はただのアニメじゃないー技術者っていいもんだ！ー	4	高校生
	自動車の出来るまでーものづくりの現場を見てみようー	5	高校生
	工学部ってどんなところ？	3	高校生
平成22年度	もてる男の顔・対称性とその顔認証への対応ーバイオセキュリティの世界ー	10	高校生
	情報工学のもたらす新世界探訪ー情報工学の可能性は∞ー	5	高校生
	テレビはなぜ見える！ーテレビの基本原理と電波のふしぎー	6	小学・高校生
	世界最速のオーディオ I Cー20年目の夢ー	3	高校生
	見えないことと、その支援方法	1	高校生
	いつも働いている脳ー早寝、早起き、脳にご飯をー	5	高校生
	データを科学する：判断や認識に潜む危うさを見抜くー血液型で性格判断できるってホント？認識って実は何？ー	1	高校生
	人間の見るしぐみをしらべてロボットの見るしぐみをつくってま すー脳の視覚のしぐみをコンピューターで実現ー	8	高校生・その他
	迷路とマイクロマウスー人工知能ってなにー	1	高校生
	機械情報工学って何？ー身近な機械情報工学、医療・ロボット 開発で活躍する情報工学技術ー	5	高校生
	世界初！蝶ロボットの開発ー何故、蝶は飛ぶことができるの か？ー	3	高校生
	自動ピアノから学ぶ人間の不思議ー一人の感覚を探るー	3	高校生
	生物の動きを真似たマイクロマシンと磁場ー先端医療デバイス からアミューズメントロボットまでー	4	高校生
	ニューラルネットのロボットへの応用ー脳をまねてロボットを 動かすはなしー	5	高校生
	からくり人形とロボットの不思議	3	高校生
	超精密の不思議ー身の回りにある超精密ー	3	高校生
	「鉄&鉄子」の楽しみー身近な電車の中の先端技術ー	1	高校生
	ミクロの機械の不思議ーマイクロマシン（微小な機械）ー	1	高校生
	携帯電話もゲームもパソコンも自動車も集積回路（LSI）がぎ っしりーLSIってなに？半導体ってなに？ー	9	高校生
	自動車の出来るまでーものづくりの現場を見てみようー	3	高校生

カーボンナノチューブによる半導体ナノテクノロジーーカーボンナノチューブとは？ー	2	高校生
生命に学ぶナノテクノロジーー機械工学へのナノテク応用ー	2	高校生
シャボン玉から知る複合材料の科学	1	高校生
超伝導体による浮上実験ー超伝導体と磁石はどう違うか？ー	15	小学・中学・高校生
電気のいろいろな作り方ー身近なもので電気をつくろうー	3	小学生
お日様パワーは地球を救うー電気から学ぶ資源とエネルギーー	1	高校生
地球温暖化問題と自然エネルギーー風力発電を含めてー	2	高校生
エコポ・ワークショップ！植木鉢から学ぶ身近な自然と日本の文化ー自分のデザインした植木鉢をつくって植物を育てようー	1	高校生
魚のすみやすい川づくり	2	高校生
風を生活に役立てる最先端研究ー何がわかってて、何がわかってない？ー	2	中学・高校生
地盤災害はどうして起こる？	4	高校生
生ゴミからプラスチックと肥料をつくるーリサイクルを考えようー	5	中学・高校生
生ゴミからプラスチックと肥料をつくるーびせいぶつの不思議な世界ー	3	高校生
あっプラスチックが水に溶ける！ープラスチックのリサイクルを考えるー	2	高校生
生命がつくるナノ構造を覗き見るーコンピュータをつかった新しい自然観察ー	3	中学・高校生
DNAと遺伝子ーやさしい遺伝のはなしー	2	高校生
医薬品の安全で効果的な体内取り込み技術ー生物に学ぶドラッグデリバリーシステムー	2	高校生
総合的学問「建築」への招待	3	高校生
生き物の分子をデザインするー遺伝子や蛋白質の美しさと生命科学の世界ー	1	高校生
驚きのマイクロ波化学ー電子レンジがCO ₂ を減らすー	1	高校生
宇宙とは何か？時間とは何か？人間とは何か？	1	高校生
正多面体のはなしー折り紙でいろいろな立体をつくろうー	3	高校生
「アポロ13」はただの冒険映画じゃないー技術者ってカッコいい！ー	7	高校生
「紅の豚」はただのアニメじゃないー技術者っていいもんだ！ー	1	高校生
工学部ってどんなところ？	3	高校生

5. 1. 5 情報公開

大学院工学研究院・工学府・工学部の情報公開の実施状況を表 5. 1. 5 に示す。

表 5.1.5 各種情報公開の現状

現在公開（公表） している情報等	編集方針	年間発行回数、 発行時期	公開・情報提供先	編集組織の名称
大学院工学研究院・工学府・工学部自己点検・評価報告書	大学院工学研究院・工学府・工学部とその関連部局における自己点検・評価を行い、その結果を公表する。	1回・2月	大学公式ホームページ上で、学内外へ公開	大学院工学研究院部局評価委員会

5.2 学生の国際交流

表5.2.1 外国人留学生(国籍別・課程別・費用別)在学状況一覧表

◎外国人留学生在学状況																									(単位：人)	
平成22年5月1日現在																										
所 属・ 課 程・ 費 用 別 等		中国	韓 国	マレーシア	インドネシア	ベトナム	バングラデシュ	タイ	フランス	ラオス	ネパール	インド	台湾	ミャンマー	シリア	メキシコ	イラン	ブラジル	ホンジュラス	フィリピン	キューバ	スリランカ	リベリア	ペルー	合 計	
工学 工学 府部 ・ 工学研究科	博士後期課程	6	2		5	3	3		1	1	1	1	1	1	1										18	
	博士前期課程	25	3			3		1	1	1	1		1		1								1		37	
	学 部 生	4	1	4		1			1																11	
	研究生/聴講生	12	10																						22	
	内 訳	3	2		2	1	1								1	1							1		12	
	費用別			4																						4
	本国政府派遣																									
工学 工学 府部 ・ 工学研究科	私 費	44	11		3	3	2		1	2	1	1	1	1											69	
	JASSO		3																						3	
	国 籍	47	16	4	5	4	3	0	1	2	1	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	88	
	小 計																								14ヶ国	
	博士後期課程	1		3	2	1	3	2											1						15	
	博士前期課程	15	1		2	1														1					20	
	学 部 生	16		1	1	1			1	1							1								21	
工学 工学 府部 ・ 工学研究科	研究生/聴講生	3		1	1			1																	6	
	内 訳																									
	費用別	1					1				1						1								5	
	国内費用別			1																					1	
	本国政府派遣																									
	私 費	34	1	4	4	3	2	3	1										1	1	1				55	
	JASSO				1																				1	
生命 体工 工学 研究科	国 籍	35	1	5	5	3	3	3	0	1	1	0	0	0	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0	62	
	小 計																								14ヶ国	
	博士後期課程	10	4	3			2																		19	
	博士前期課程	5	3	1	1	1		2	3													1		1	18	
	内 訳	3							1									1							5	
	研究生/聴講生																									
	国内費用別	1	3			1		2	1								1					1		1	11	
生命 体工 工学 研究科	費用別																								0	
	本国政府派遣																									
	私 費	17	4	4	1		2		3																31	
	JASSO																								0	
	国 籍																									
	小 計	18	7	4	1	1	2	2	4	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	42	
	11ヶ国																									
合 計	博士後期課程	17	6	6	7	1	8	2	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	52	
	博士前期課程	45	7	1	3	5	0	2	4	1	1	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1	75	
	学 部 生	20	1	5	0	2	0	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	32	
	内 訳	18	10	1	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	33	
	研究生/聴講生																									
	国内費用別	5	5	0	2	2	2	2	1	0	1	0	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0	1	1	28	
	費用別																									
合 計	本国政府派遣	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	
	私 費	95	16	8	8	6	6	3	4	3	1	1	1	0	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	155	
	内 訳																									
	JASSO	0	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	
	国 籍																									
	小 計	100	24	13	11	8	8	5	5	3	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	192	
	23ヶ国																									

※ JASSOは、独立行政法人日本学生支援機構による大交流計画奨学金または留学生交流支援制度(短期受入れ)によって在籍する者

※ 研究生/聴講生は、協定校等からの特別聴講(研究)学生を含む

表 5. 2. 2 外国人留学生（学科別・専攻別）在学状況一覧

【改組前入学者】

(平成 22 年 5 月 1 日現在) (単位：人)

所 属 区 分	機 械 知 能 工 学 科 機 械 知 能 工 学 専 攻			建 設 社 会 工 学 科 ・ 専 攻	電 気 電 子 工 学 科 電 気 電 子 工 学 専 攻		物 質 工 学 科 物 質 工 学 専 攻		機 能 シ ス テ ム 創 成 工 学 専 攻	合 計
	機 械 工 学 コ ー ス	宇 宙 工 学 コ ー ス	制 御 工 学 コ ー ス		電 気 電 子 工 学 コ ー ス	電 子 通 信 シ ス テ ム コ ー ス	応 用 化 学 コ ー ス	マ テ リ ア ル 創 成 加 工 工 学 コ ー		
博 士 後 期 課 程	1				2		1			4
博 士 前 期 課 程	-			-	-		-		-	-
学 部 生 2 年 生 以 上		1			1					2
学 部 生 1 年 生	-			-	-		-		-	-
研 究 生 ・ 聴 講 生	-			-	-		-		-	-
短 期 留 学 生	-			-	-		-		-	-
合 計	2			0	3		1		0	6

【改組後入学者】

(平成 22 年 5 月 1 日現在) (単位：人)

所 属 区 分	機 械 知 能 工 学 科 機 械 知 能 工 学 専 攻			建 設 社 会 工 学 科 建 設 社 会 工 学 専 攻			電 気 電 子 工 学 科 電 気 電 子 工 学 専 攻			物 質 工 学 専 攻		機 能 シ ス テ ム 工 学 科 機 能 シ ス テ ム 創 成 工 学 専 攻 先 端 機 能 シ ス テ ム 工 学 専 攻		合 計
	機 械 工 学 コ ー ス	宇 宙 工 学 コ ー ス	知 能 制 御 工 学 コ ー ス	建 築 学 コ ー ス	地 域 環 境 デ ザ イ ン コ ー ス	都 市 再 生 デ ザ イ ン コ ー ス	シ ス テ ム エ レ ク ト ロ ニ ク ス コ ー ス	電 気 エ ネ ル ギ ー 学 コ ー ス	電 子 デ バ イ ス コ ー ス	応 用 化 学 科	マ テ リ ア ル 工 学 科	機 能 シ ス テ ム 創 成 専 攻	先 端 機 能 シ ス テ ム 工 学 専 攻	
博 士 後 期 課 程	3		2				2	3	1	2			1	14
博 士 前 期 課 程	3		6		5		8	3	4	6			2	37
学 部 生 2 年 生 以 上		2	1		2									5
学 部 生 1 年 生	2			1								1		4
研 究 生 ・ 聴 講 生	11			2			3			2	3	1		22
短 期 留 学 生														0
合 計	30			10			24			10	3	5		82

表 5. 2. 3 学生の海外派遣

年度	国名	交流協定校	学 生 派 遣 数
18	アメリカ	オールド・ドミニオン大学	語学研修 8 名 (工学部 8 名)
	イギリス	サリー大学	交流協定による派遣 1 名 (情報工学研究科 1 名)
			短期留学 1 名 (工学部 1 名)
	オーストラリア	モナシュ大学	語学研修 1 2 名 (情報工学部 1 2 名)
		シドニー工科大学	交流協定による派遣 1 名 (工学研究科)
19	韓国	忠州大学校	相互交流 1 4 名 (工学部 1 4 名)
	イギリス	サリー大学	短期留学 1 名
	アメリカ	オールド・ドミニオン大学	語学研修 8 名 (工学部 8 名)
	オーストラリア	モナシュ大学	語学研修 1 2 名 (情報工学部 1 2 名)
		忠州大学校	相互交流 1 2 名 (工学部 1 2 名)
20	韓国	浦項工科大学	合同ワークショップ 2 4 名 (生命体工学研究科 2 4 名)
	イギリス	サリー大学	短期留学 2 名
	アメリカ	オールド・ドミニオン大学	語学研修 8 名 (工学部 8 名)
	オーストラリア	モナシュ大学	語学研修 1 2 名 (情報工学部 1 2 名)
	フランス	ロレーヌ工科大学	短期留学 1 名
21	韓国	忠州大学校	相互交流 1 2 名 (工学部 1 2 名)
	イギリス	サリー大学	短期留学 1 名 (工学府 1 名)
			短期留学 1 名 (工学府 1 名)
	アメリカ	オールド・ドミニオン大学	語学研修 8 名 (工学部 8 名)
	フランス	国際宇宙大学	短期留学 3 名 (工学府 3 名) 派遣先: アメリカ
	ニュージーランド	オークランド工科大学	語学研修 2 名 (情報工学部 2 名)
	オーストラリア	シドニー工科大学	短期留学 2 名 (工学部 1 名、工学府 1 名)
	インド	バナラスヒンドゥー大学	短期留学 1 名 (生命体工学研究科 1 名)
22	韓国	釜山大学	短期留学 1 名 (工学府 1 名)
		忠州大学校	相互交流 1 2 名 (工学部 1 2 名)
		浦項工科大学	合同ワークショップ 1 3 名 (生命体工学研究科 1 3 名)
	アメリカ	オールド・ドミニオン大学	語学研修 8 名 (工学部 8 名)
			語学研修 12 名 (工学府 8 名、情報工学府 2 名、生命体工学研究科 2 名)
	イギリス	サリー大学	短期留学 2 名 (工学府 1 名、生命体工学研究科 1 名)
			短期留学 3 名 (工学府 3 名)
22	フランス	国際宇宙大学	短期留学 3 名 (工学府 3 名)
	オーストラリア	シドニー工科大学	短期留学 1 名 (工学部 1 名)
			短期留学 1 名 (工学部 1 名)
22	韓国	忠州大学校	相互交流 1 4 名 (工学部 1 4 名)

6. おわりに

部局評価委員会の委員として活動するのは、今回が3回目で、計6年間行ったことになる。最初の委員の時に、工学部が分野別教育評価の試行対象校となり、評価に必要な試料が無く苦勞をしたのを覚えている。それから比べると、現在は、定期的に評価が行われるようになるに伴い、評価を受ける側の体勢もかなり整って来たと感じている。アンケートの結果を見ても、少しずつではあるが、改善が見られており、各教員の自覚と地道な努力が現れていると考えている。部局評価委員会では多くのアンケートを実施しているが、社会情勢は日々変化しており、その変化に応じたアンケートにすべきなのか、それとも経年変化の評価を重視して同じアンケートを実施すべきなのか、いつも迷う所である。多分、解は、その中間にあり、経年変化を見る項目と修正する項目を混在させたアンケート構成を考える必要があると考えている。(桑原伸夫)

今回の「現状と課題」では、アンケート結果に基づき、平成18年度(2006)から5年間における在学生・卒業生・修了生の意識・満足度等が分析されています。昨年度の「現状と課題」における解析結果同様、多くのアンケート項目において、良好な状態が保持されるか、あるいは、良い方向へと推移しているという解析結果が出ています。多くの教職員の皆様が持続的に努力されている成果が反映された結果だと考えております。一方、もう少し改善が必要であろうと思われるアンケート結果が少しのアンケート項目に対して出ています。これらの解析結果が学生にとってより良い大学となるために継続的に利用されることを期待しております。(大屋勝敬)

今回は2006年度(平成18)年度からの5年間における在学生・卒業生・修了生の調査結果をもとに作成されています。多くのアンケート項目において、良好な状態が保持され、よい方向に向かっていく傾向が見られます。印象に残った項目のひとつが卒業後進路の満足度です。「満足である」「やや満足である」が80%近くあり、一安心しました。もっとも、そうでない人がまだ約20%いますので、まだまだ改善の余地はあると思ってもいます。また、成績満足度の自由記述欄には自己反省的なものが多く、ある意味、たいへん好ましく思えました。(山口栄輝)

本年度より部局評価委員会委員として本報告書の一部を担当させて頂きました。私の担当した大学院生のアンケート結果からは、学位論文での取り組みが最も自己形成に効果的であると判断されており、本学での学位論文に対する教育・研究方針は、高く評価されていることが分かりました。一方で、英語力の習得や、コミュニケーション力を身に付けるため手法等、特に授業以外で習得されるような項目については、さらなる改善の必要性が分かりました。近年各専攻等でこれらの取組の改善が進められておりますが、その重要性が改めて認識されています。今回の解析結果が今後の教育研究の継続的な改善に有効に活用されることを期待しております。(清水 陽一)

今年度より部局評価委員を担当しています。初めてアンケートの集計と分析に関わりましたが、私が普段感じている通りの印象がそのままアンケートの回答となって返ってきている感があります。昨今の就職試験の可否の状況を見ている、学部卒で就職しようとする学生は面接で苦戦しておりますが、「表現力」や「コミュニケーション能力」に対する評価が院卒と学部卒では差がありました。就職してから企業でそれらを鍛えられるのかとも思いましたが、大学を出た時点で決まっているかのような感があります。「語学」に関しては、院卒・学部卒を問わずに評価が低く、これは長年の課題です。この調査は10年以上に亘って行なわれていますが、10年経っても「語学」が課題として残っているところにこそ、本学の問題解決能力の課題が現れているのではないかと感じます。「語学」に課題があるのは、調査をするまでもなく皆が日々感じていることであり、10年前とは比較にならないくらいに国際化が求められている時代において、解決に残された時間は少ないと思います。(趙孟佑)

本誌「現状と課題」の卒業生・修了生アンケートや企業アンケートをもとに、工学部・工学府・工学研究科の教育についての調査・分析を部局評価委員会が担っている。項目ごとの詳しい分析がなされていきます。しかし、多くのデータの中から、総合的な評価を行い、将来の九工大のより良い姿や方向性を読み取るころまでは、はなかなか難しいと感じました。また、学生と企業間のニーズに応えるためだけの部局評価委員会の在り方だけを追求し過ぎると、目的論的な考え方に陥ってしまいかねないと思います。学生にとっては、大学が単に将来の進路を見出す場所ということだけではなく、大人として成長し、主体的に社会行動を計画できるための社会性や倫理観を学ぶ場であり、またある程度それを実践できる所であればと願っているのではないのでしょうか。その意味で、学生の視点から、アンケート内容に、よい友人・先輩との交流や、自分と社会との関わりを広めてくれる環境の整備などにも関連した内容も網羅できれば、より良いアンケートになるのではないかと感じております。(鎌田裕之)

部局評価について昨今の傾向として改めて気が付くことは、数年前とは違い、学生や企業からの教育や研究についての評価が安定状態になってきたというのか、別の見方をすると飽和状態になってきた感がある。もちろん項目によっては低い位置での安定もあるが、評価する側が評価することに慣れてきたとも考えられるし、九工大の評価が安定してきたとも取れる。また客観的に数値化された評価を気にするあまり、本来の教育や研究に悪影響を与えるような本末転倒であろうが、5年、10年単位で評価の裏にある傾向を分析し、学生や企業の方々の一つ一つの意見を丹念に読んでいけば真実が見えて来るように思う。(田吹昌俊)

2012年（平成24年）2月

平成23年度 大学院工学研究院部局評価委員会委員

桑原	伸夫	工学研究院 教授【委員長】
趙	孟佑	工学研究院 教授【副委員長】
大屋	勝敬	工学研究院 教授
山口	栄輝	工学研究院 教授
清水	陽一	工学研究院 教授
鎌田	裕之	工学研究院 教授
田吹	昌俊	工学研究院 教授
葉石	研次	工学部事務長
